

まえ だ 前田・きょう づか きん せい ぼ ぐん 経塚近世墓群 8

前田西前田原 B 丘陵
前田西前田原 C 丘陵（1）

－浦添南第一土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告書－

2017（平成 29）年 2 月
沖縄県 うら そえ し 浦添市教育委員会

まえ だ きょう づか きん せい ぼ ぐん
前田・経塚近世墓群 8

前田西前田原 B 丘陵
前田西前田原 C 丘陵（1）

－ 浦添南第一土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告書 －

2017（平成 29）年 2 月
沖縄県 浦添市教育委員会



巻頭 1 前田西前田原B丘陵全景 北から



巻頭 2 前田西前田原B丘陵南側斜面の遺構検出状況 南西から



巻頭 3 前田西前田原C丘陵全景 北西から



巻頭 4 前田西前田原C丘陵東側斜面の遺構検出状況 北東から

序 文

本報告書は、浦添南第一土地区画整理事業に先立ち、平成 25 年度および平成 27 年度に浦添市教育委員会が実施した、埋蔵文化財「前田・経塚近世墓群」の前田西前田原 B 丘陵と前田西前田原 C 丘陵の発掘調査の成果をまとめたものです。

前田・経塚近世墓群は、浦添市字前田と経塚に分布する丘陵に横穴を掘り込んで造られた伝統的な掘込墓を主とする墓群です。これまでの発掘調査では 1,000 基を超える墓が発見されており、これらの多くは沖縄の近世の頃に造営された墓であることがわかっています。

これらの近世墓は、人骨や蔵骨器、それに記された銘書（ミガチ）、副葬品類を伴うことが多く、数世代にわたる情報がタイムカプセルのように残されています。このような情報は、当時の家族の歴史、浦添の歴史、ひいては沖縄全体の歴史を明らかにできる資料であり、文献資料が少ない沖縄において、貴重な歴史資料ともいえます。

今回の調査成果の中では「浦添間切」「前田村」の銘書が記された蔵骨器が確認されており、この丘陵一帯が近世期から前田集落の墓域として使われたことが明らかになりました。また、沖縄戦の一端がわかる遺構も確認されており、激戦地となった浦添前田地域の様子を垣間見ることができます。

本報告書が沖縄・浦添の近世から近代を通した葬制・墓制を知る上で、市民をはじめ多くの方々に活用されますとともに、文化財の保護と活用に一層の関心を持って頂けるものになれば幸いに存じます。

末尾になりますが、現地調査および資料整理にあたってご指導・ご協力を賜りました方々、並びに事業実施にあたりご協力を賜りました方々に深く感謝申し上げます。

平成 29 年 2 月

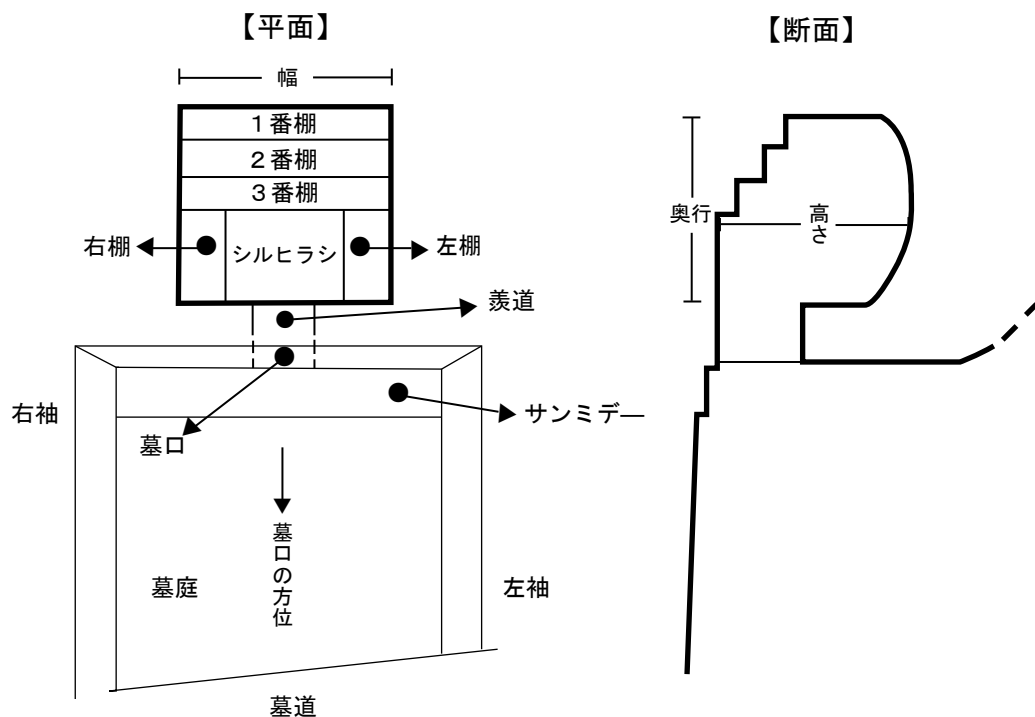
浦添市教育委員会
教育長 池原 寛安

例 言

1. 本報告書は、浦添南第一土地区画整理事業に先立ち、沖縄県浦添市前田に所在する埋蔵文化財「前田・経塚近世墓群」前田西前田原 B 丘陵および前田西前田原 C 丘陵の発掘調査の成果をまとめたものである。
2. 「前田・経塚近世墓群」は、沖縄県浦添市の字前田から経塚の丘陵一帯に所在する墓群である。なお、発掘調査地点の所在地は、前田西前田原 B 丘陵：沖縄県浦添市前田西前田原 720 他 28 筆及び里道、前田西前田原 C 丘陵：沖縄県浦添市前田西前田原 634 他 17 筆である。
3. 発掘調査は、浦添南第一土地区画整理事業に伴う発掘調査であり、浦添市都市建設部区画整理課の委託を受けて、浦添市教育委員会文化課が実施した。
4. 資料の整理にあたり、下記の方の指導・助言をいただいた。記して感謝申し上げる。
鈴木 悠（那覇市歴史博物館）
5. 発掘調査に係る現場作業は、平成 25 年度および平成 27 年度、平成 28 年度に実施した。調査期間は、前田西前田原 B 丘陵：平成 25（2013）年 10 月 28 日～平成 26（2014）年 2 月 20 日、平成 28 年（2016）年 11 月 11 日～11 月 14 日、前田西前田原 C 丘陵：平成 27（2015）年 8 月 13 日～12 月 28 日である。調査の実施にあたっては、有限会社 ティガネー、三興コンサルタント 株式会社、株式会社 シン技術コンサル 沖縄営業所の支援を受けた。
6. 報告書作成は、平成 26 年度～平成 28 年度の三ヶ年にわたって実施し、浦添市教育委員会文化課職員及び嘱託職員がこれにあたった。
7. 副葬品、戦争遺物、人骨の写真撮影については、菅原 広史が行った。なお、蔵骨器の実測及び写真撮影等については、株式会社 イビソク 沖縄支店、株式会社 パスコ 沖縄支店に委託した。
8. 本書の執筆を以下のように分担した。編集は、安斎 英介・瑞慶覧 長順が行った。
安斎 英介 第 1 章第 1 節・第 3 節（1）、第 3 章、第 7 章
瑞慶覧 長順 第 1 章第 2 節・第 3 節（2）、第 2 章、第 4 章
菅原 広史 第 3 章第 4 節（10）の 4、第 5 章、第 6 章
9. 本文中で使用した引用・参考文献は、各章末に記した。
10. 調査に関わる実測図や写真等の記録は、浦添市教育委員会文化課において保存している。

凡 例

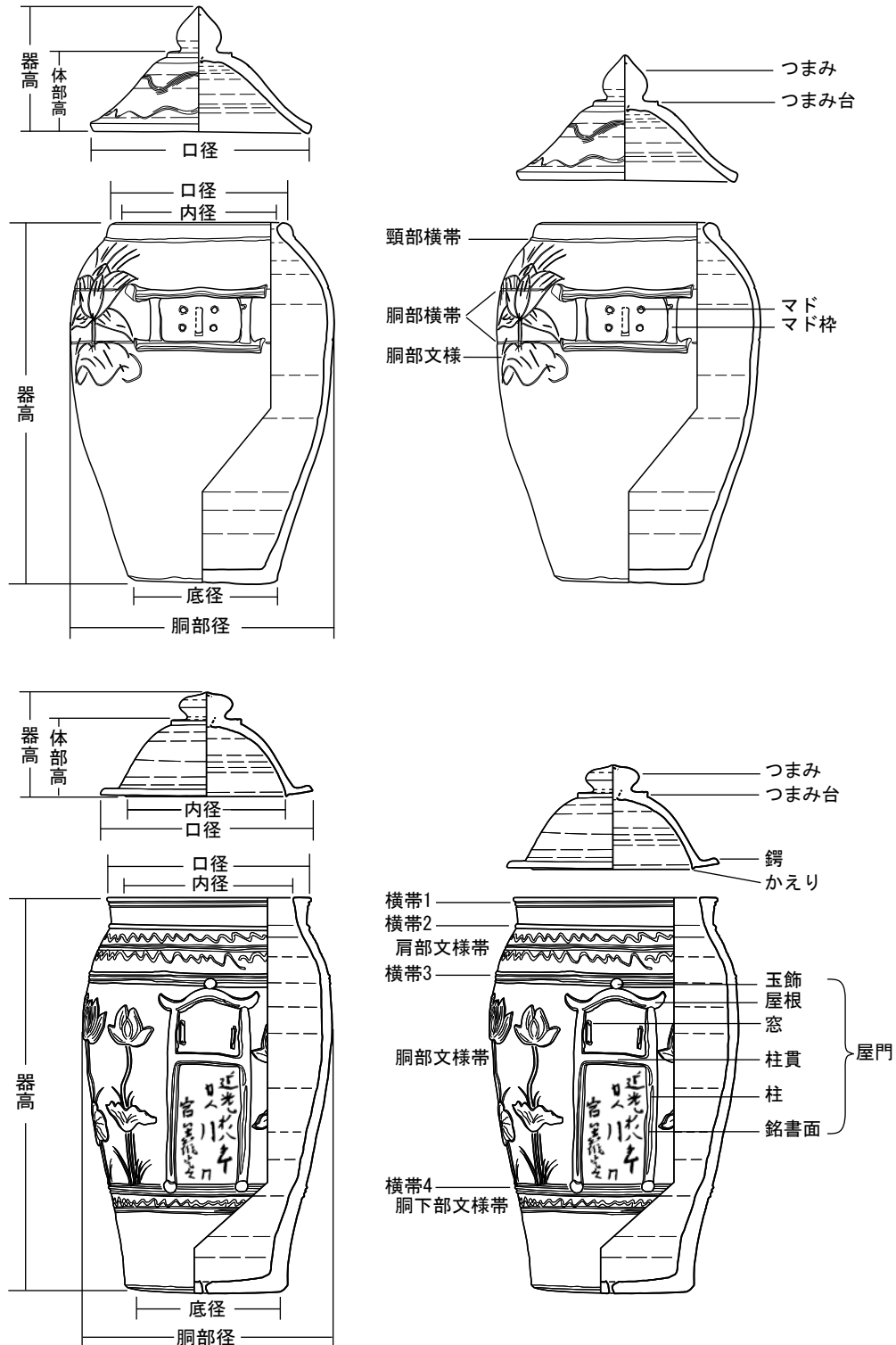
1. 本書に表示した基準高はすべて海拔高を用い、メートル単位で表した。
2. 地形測量図に記した座標は、世界測地系を用いた。
3. 平面図に記した方位は、基本的には座標北を示す。磁北を用いる場合は、その旨を明記した。
4. 遺構断面図を作成した位置は、遺構平面図に横断ラインを示し、方向は英字で表した。
5. 地形測量図については 1/200 を基本として作成し、1/400 から 1/600 の縮尺で掲載している。
6. 遺構図については、1/20 を基本として作成し、1/40 から 1/80 の縮尺で掲載している。
7. 一次葬人骨の出土状況図については、1/5 を基本として作成し、1/10 の縮尺で掲載している。
8. 遺物の実測図は、出土品のうち蔵骨器は 1/6、それ以外は、1/3 や 1/2、1/1 で掲載した。それらについては、掲載頁に明示している。
9. 掘込墓の各部名称と計測位置については以下のとおりである。



- ・ 墓口から墓室に至る通路の名称については、伝統的・一般的な呼称が確認されていないことから「羨道」と仮称した。
- ・ 墓口の方角は、磁北を表す。主軸方位は墓室奥壁を背にして墓口方向をみている。

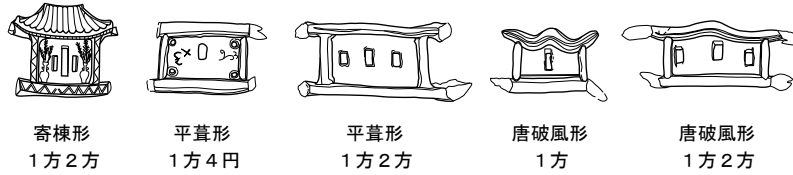
10. 蔵骨器の分類及び名称と、各部名称・計測位置については、浦添市教育委員会刊行の浦添市文化財調査研究報告書第25集『伊祖の入れ御拝領墓の厨子甕と被葬者』（1997年）および浦添市文化財調査研究報告書『比嘉門中墓の家族史—家族の数だけ歴史がある— 比嘉門中墓の調査概要』（2006年）を参考にしている。

- 蔵骨器の各部名称と計測位置（上段：ボージャー形、下段：マンガン釉甕形）

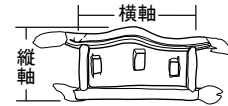


11. 窓・屋門の部位名称と計測位置

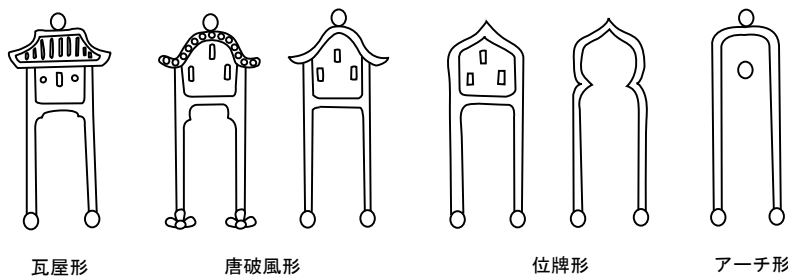
マド枠の分類（ボージャー）



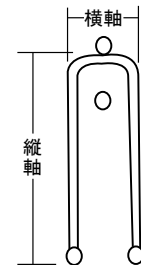
マド枠計測部位



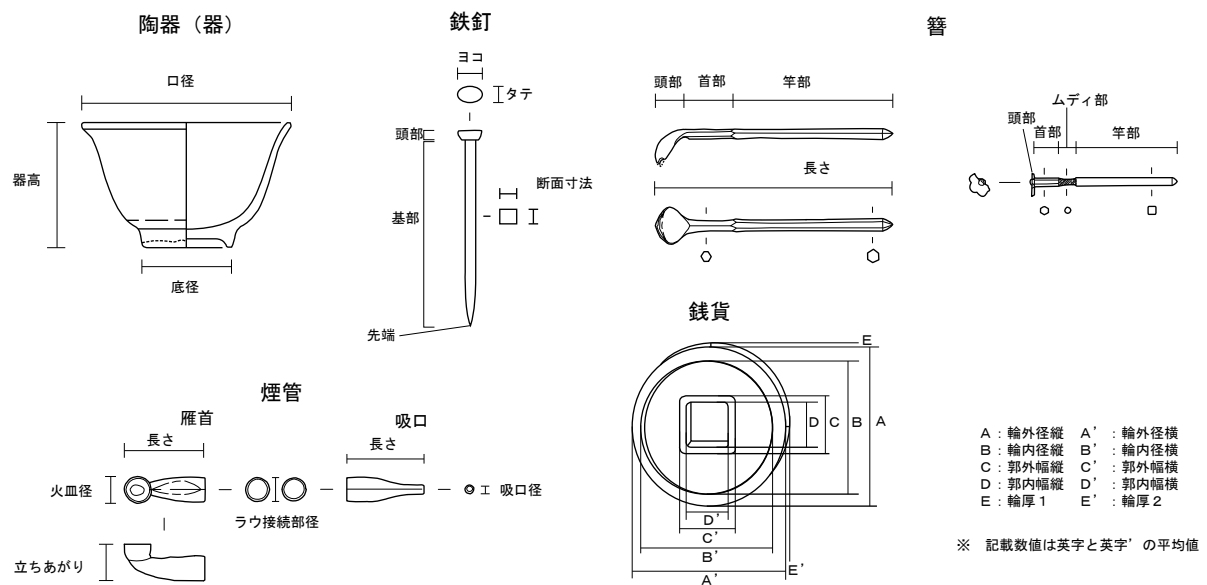
屋門の分類（マンガン釉薬形）



屋門計測部位



12. 下記の遺物の各部名称と計測位置は以下のとおりである。



目 次

巻頭図版

序文・例言・凡例・目次

第 1 章 はじめに

第 1 節	調査に至る経緯	1
第 2 節	調査体制	1
第 3 節	調査の経過	2

第 2 章 遺跡の位置と環境

第 1 節	浦添市の地理的環境	6
第 2 節	遺跡の地理的環境	6
第 3 節	遺跡周辺の歴史的環境	8

第 3 章 前田西前田原 B 丘陵の調査成果

第 1 節	調査の方法	11
第 2 節	層序と遺構	11
第 3 節	遺物	12
第 4 節	各墓の調査成果	23
第 5 節	小結	73

第 4 章 前田西前田原 C 丘陵の調査成果

第 1 節	調査の方法	76
第 2 節	層序と遺構	76
第 3 節	遺物	80
第 4 節	各墓の調査成果	82
第 5 節	小結	93

第 5 章 人骨の分析

第 1 節	資料について	96
第 2 節	前田西前田原 B 丘陵の人骨出土状況および分析結果	96
第 3 節	前田西前田原 C 丘陵の人骨出土状況および分析結果	101
第 4 節	まとめ	103

第 6 章 脊椎動物遺体

第 1 節	資料について	109
第 2 節	前田西前田原 B 丘陵 56 号墓から出土した脊椎動物遺体	110
第 3 節	まとめ	110

第 7 章 総括

写真図版・報告書抄録

巻頭写真

- 巻頭 1 前田西前田原 B 丘陵全景 北から
巻頭 2 前田西前田原 B 丘陵南側斜面の遺構検出状況
南西から
巻頭 3 前田西前田原 C 丘陵全景 北西から
巻頭 4 前田西前田原 C 丘陵東側斜面の遺構検出状況
北東から

図目次

第 1 図	遺跡の位置	7
第 2 図	前田・経塚の小字図	7
第 3 図	前田・経塚近世墓群調査地区の位置	10
第 4 図	前田西前田原 B 丘陵の地形と遺構分布図	14
第 5 図	4 号墓・5 号墓平面図	24
第 6 図	4 号墓・5 号墓断面図	25
第 7 図	4 号墓・5 号墓出土遺物	26
第 8 図	6 号墓平面図	27
第 9 図	6 号墓遺物出土状況図・断面図	28
第 10 図	6 号墓出土遺物 1	30
第 11 図	6 号墓出土遺物 2	31
第 12 図	31 号墓平面図・遺物出土状況図・断面図	33
第 13 図	31 号墓出土遺物	34
第 14 図	37 号墓平面図	36
第 15 図	37 号墓正面図・断面図	37
第 16 図	37 号墓遺物出土状況図	38
第 17 図	37 号墓出土遺物	39
第 18 図	38 号墓平面図・断面図	41
第 19 図	38 号墓出土遺物	42
第 20 図	41 号墓平面図	44
第 21 図	41 号墓正面図・断面図	45
第 22 図	41 号墓一次葬人骨出土状況図	46
第 23 図	41 号墓出土遺物 1	48
第 24 図	41 号墓出土遺物 2	49
第 25 図	42 号墓・52 号墓平面図	51
第 26 図	42 号墓正面図・断面図	52
第 27 図	42 号墓出土遺物 1	54
第 28 図	42 号墓出土遺物 2	55
第 29 図	51 号墓平面図・断面図	57
第 30 図	51 号墓出土遺物	58
第 31 図	55 号墓平面図・遺物出土状況図・断面図	60
第 32 図	55 号墓出土遺物	61
第 33 図	56 号墓平面図・見通し図・断面図	63
第 34 図	56 号墓遺物・人骨出土状況図・ 一次葬人骨平面図・断面図	64
第 35 図	56 号墓出土遺物 1	65
第 36 図	56 号墓出土遺物 2	66
第 37 図	56 号墓出土遺物 3	67
第 38 図	56 号墓蔵骨器 1 内人骨の納骨状況	68
第 39 図	2 号墓・19 号墓出土遺物	70
第 40 図	20 号墓・22 号墓・24 号墓・25 号墓・ 27 号墓・35 号墓出土遺物	72
第 41 図	前田西前田原 C 丘陵の地形と遺構分布図	77
第 42 図	13 号墓遺構図 1	83
第 43 図	13 号墓遺構図 2	84
第 44 図	13 号墓出土遺物 1	86
第 45 図	13 号墓出土遺物 2	88
第 46 図	26 号墓出土遺物	89
第 47 図	26 号墓遺構図	90
第 48 図	8 号墓、9-10 号墓間、12 号墓脇墓 2、 18 号墓、29 号墓出土遺物	92

第 49 図	12 号墓脇墓 2 蔵骨器内岩石計測値	94
--------	---------------------	----

表目次

第 1 表	墓室の平面形の類型	15
第 2 表	前田西前田原 B 丘陵の遺構一覧表	16 ~ 19
第 3 表	前田西前田原 B 丘陵の遺物一覧表	20 ~ 21
第 4 表	6 号墓出土蔵骨器観察一覧表	29
第 5 表	6 号墓出土蔵骨器の銘書一覧表	32
第 6 表	31 号墓出土蔵骨器観察一覧表	34
第 7 表	37 号墓出土蔵骨器観察一覧表	35
第 8 表	38 号墓出土蔵骨器観察一覧表	40
第 9 表	38 号墓出土蔵骨器の銘書一覧表	43
第 10 表	38 号墓出土銭貨一覧表	43
第 11 表	41 号墓出土蔵骨器観察一覧表	47
第 12 表	41 号墓出土蔵骨器の銘書一覧表	47
第 13 表	42 号墓出土蔵骨器観察一覧表	53
第 14 表	42 号墓出土蔵骨器の銘書一覧表	53
第 15 表	51 号墓出土蔵骨器観察一覧表	56
第 16 表	51 号墓出土蔵骨器の銘書一覧表	59
第 17 表	55 号墓出土蔵骨器観察一覧表	59
第 18 表	55 号墓出土蔵骨器の銘書一覧表	61
第 19 表	56 号墓出土蔵骨器観察一覧表	66
第 20 表	19 号墓出土陶磁器一覧表	69
第 21 表	20 号墓・22 号墓・24 号墓・35 号墓 出土銭貨一覧表	71
第 22 表	前田西前田原 C 丘陵の遺構一覧表	78 ~ 79
第 23 表	前田西前田原 C 丘陵の遺物一覧表	81
第 24 表	13 号墓出土蔵骨器観察一覧表	87
第 25 表	13 号墓出土蔵骨器の銘書一覧表	87
第 26 表	前田西前田原 B 丘陵・C 丘陵 出土人骨一覧表	105 ~ 106
第 27 表	最少個体数 集計表	106
第 28 表	上顎骨及び下顎骨の歯列残存状況	107
第 29 表	齶歯観察表	107
第 30 表	骨に見られる変異等の観察表	108
第 31 表	下顎犬歯に観察されるエナメル質減形成一覧表	108
第 32 表	西前田原 B 丘陵出土の脊椎動物遺体一覧 集計表	111 ~ 112
第 33 表	脊椎動物遺体集計表	113

図版目次

図版 1	前田西前田原 B 丘陵の南側斜面 (下段右端が 1 号墓)	119
	1 号墓正面	119
	1 号墓墓室完掘状況	119
	2 号墓墓室内骨出土状況	119
	3 号墓墓室完掘状況	119
図版 2	5 号墓 (左)・4 号墓 (右) 正面	120
	4 号墓・5 号墓連結部	120
	4 号墓・5 号墓連結部遺物出土状況	120
	4 号墓墓室完掘状況	120
	5 号墓墓室完掘状況	120
図版 3	6 号墓正面	121
	6 号墓墓室内遺物出土状況	121
	6 号墓墓室内遺物出土状況 (近景)	121
	7 号墓墓室完掘状況	121
	8 号墓墓室完掘状況	121
図版 4	9 号墓墓室完掘状況	122
	10 号墓墓室完掘状況	122

	11 号墓墓室完掘状況	122		53 号墓墓室完掘状況	131
	12 号墓墓室完掘状況	122		54 号墓完掘状況	131
	13 号墓（左奥）、14 号墓（右奥）	122		55 号墓墓室遺物検出状況	131
	13 号墓墓室内完掘状況	122	図版 14	56 号墓人骨・遺物検出状況	132
	14 号墓正面	122		56 号墓人骨検出状況	132
	14 号墓墓室右壁掘り抜き状況	122	図版 15	57 号墓・58 号墓周辺	133
図版 5	15 号墓完掘状況	123		57 号墓完掘状況	133
	16 号墓墓室完掘状況	123		58 号墓完掘状況	133
	17 号墓正面	123		59 号墓（左）、60 号墓（右）完掘状況	133
	17 号墓墓室奥壁	123		59 号墓・60 号墓（下段）周辺	133
	18 号墓墓室完掘状況	123		61 号墓墓室	133
	19 号墓完掘状況	123		62 号墓墓室	133
	20 号墓完掘状況	123		63 号墓遺物集積状況	133
	21 号墓（中央）、22 号墓（左）、20 号墓（右）	123	図版 16	4・5 号墓連結部遺物、6 号墓遺物	134
図版 6	22 号墓完掘状況	124	図版 17	31 号墓遺物、37 号墓遺物、38 号墓遺物 1	135
	23 号墓完掘状況	124	図版 18	38 号墓遺物 2、41 号墓遺物	136
	24 号墓完掘状況	124	図版 19	42 号墓遺物、52 号墓遺物	137
	25 号墓完掘状況	124	図版 20	51 号墓遺物、55 号墓遺物	138
	26 号墓墓室完掘状況	124	図版 21	56 号墓遺物	139
	27 号墓墓室完掘状況	124	図版 22	2 号墓遺物、19 号墓遺物	140
	28 号墓完掘状況	124	図版 23	20 号墓遺物、22 号墓遺物、24 号墓遺物、	
	29 号墓完掘状況	124		25 号墓遺物、27 号墓遺物、35 号墓遺物	141
図版 7	30 号墓完掘状況	125	図版 24	西前田原 C 丘陵西側斜面	142
	31 号墓遺物検出状況	125		3 号墓完掘状況	142
	31 号墓遺物検出状況（近景）	125		5 号墓完掘状況	142
	32 号墓完掘状況	125		7 号墓完掘状況	142
	33 号墓完掘状況	125		7 号墓左袖部通路検出状況	142
図版 8	34 号墓完掘状況	126	図版 25	8 号墓完掘状況	143
	35 号墓完掘状況	126		8 号墓墓室内完掘状況	143
	36 号墓（左）、53 号墓（右）	126		9 号墓完掘状況	143
	36 号墓墓室完掘状況	126		9 号墓墓室内完掘状況	143
	37 号墓正面	126		10 号墓完掘状況	143
	37 号墓墓室内遺物検出状況	126		11 号墓完掘状況	143
	37 号墓遺物検出状況（近景）	126		12 号墓完掘状況	143
	37 号墓墓庭入口周辺	126		12 号墓脇墓 1 完掘状況	143
図版 9	38 号墓完掘状況	127	図版 26	12 号墓脇墓 2 転用蔵骨器検出状況	144
	38 号墓墓室遺物検出状況	127		13 号墓完掘状況	144
	39 号墓正面	127		13 号墓蔵骨器検出状況	144
	39 号墓墓室完掘状況	127		13 号墓墓室内半裁状況	144
	40 号墓床面人骨出土状況	127		13 号一次葬人骨 -1 検出状況	144
	41 号墓正面	127	図版 27	13 号一次葬人骨 -2 検出状況	145
	41 号墓墓室遺物検出状況	127		14 号墓完掘状況	145
	41 号墓墓室人骨出土状況	127		15 号墓完掘状況	145
図版 10	41 号墓墓室内人骨出土状況（上層）	128		16 号墓完掘状況	145
	41 号墓墓室内人骨出土状況（下層）	128		17 号墓完掘状況	145
図版 11	42 号墓墓庭	129	図版 28	18 号墓完掘状況	146
	42 号墓墓室内奥壁完掘状況	129		19 号墓完掘状況	146
	42 号墓墓庭土坑遺物検出状況	129		20 号墓完掘状況	146
	42 号墓脇墓（52 号墓）	129		21 号墓完掘状況	146
	43 号墓完掘状況	129		22 号墓完掘状況	146
	44 号墓（左）、45 号墓（中央）、46 号墓（右）	129		23 号墓完掘状況	146
	44 号遺構完掘状況	129		24 号墓完掘状況	146
	45 号遺構完掘状況	129		25 号墓完掘状況	146
図版 12	44 号遺構・45 号遺構連結部	130	図版 29	26 号墓一次葬人骨検出状況	147
	44 号遺構・45 号遺構連結部壁面の灯り置き	130		26 号墓完掘状況	147
	46 号墓墓室完掘状況	130		27 号墓完掘状況	147
	47 号墓墓室完掘状況	130		29 号墓完掘状況	147
	48 号墓墓室完掘状況	130		30 号墓完掘状況	147
	49 号墓（中央）、左は 41 号墓	130	図版 30	13 号墓出土遺物 1	148
	49 号墓完掘状況	130	図版 31	13 号墓出土遺物 2、8 号墓、9-10 号墓間、	
	50 号墓完掘状況	130		12 号墓脇墓 2 出土遺物	149
図版 13	51 号墓正面	131	図版 32	前田西前田原 B 丘陵 56 号墓人骨	150
	51 号墓墓室遺物検出状況	131			

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

浦添南第一土地区画整理事業は、浦添市を事業主体とする字前田、経塚にまたがる総面積82.4ヘクタールの土地区画整理事業である。本事業は平成3年度に都市計画決定し、平成4年度より同事業が着手されている。

当該事業の実施に伴い浦添市教育委員会は現地踏査を実施し、更に平成6～9年度にかけて同事業地内の分布調査を実施した。その結果、地内の丘陵各所において方言名で「フィンチャー」と称する横穴式の古墓を多数確認した。その総数は事業地内に約1,000基の墓が所在するものと推定された（浦添市教育委員会1998）。その後、事業の進捗に従って随時範囲確認調査を実施し、実数の把握に努めるとともに（浦添市教育委員会2007a、2010、2013a）、開発スケジュールとの整合性をとりながら順次緊急発掘調査を実施し、その調査成果をまとめている（浦添市教育委員会2007b、2011、2012、2013b、2014、2015）。

同区画整理事業地の前田地区に位置する前田西前田原B丘陵及びC丘陵の遺構群については、道路・宅地造成工事が予定されていたため、記録保存のための緊急発掘調査を実施することになった。前田西前田原B丘陵については平成25年度（平成25年6月25日付）、C丘陵については平成27年度（平成27年6月17日付）に、市区画整理課と市教育委員会の間で、他の地区の埋蔵文化財の緊急発掘調査を含む業務委託契約が締結された。平成26年度から平成28年度については、新規現場とともに資料整理を含む形で市区画整理課と市教育委員会の間に業務委託契約を締結して行い、平成28年度に本報告書刊行のための業務委託契約を締結した。

第2節 調査体制

調査の体制は下記のとおりである。

調査主体	浦添市教育委員会	教育長	池原 寛安（平成25～28年度）
事業所管	浦添市教育委員会文化部	部長	下地 安広（平成25～28年度）
事業総括	同	文化課 課長	松川 章（平成25～28年度）
事業調整	同	文化財係長	渡久地 政嗣（平成25～28年度）
事業事務	同	文化財係主任	佐伯 信之（平成26～27年度）
	同	文化財係主事	安斎 英介（平成25年度）
	同	文化財係主事	菅原 広史（平成25～26年度）
	同	文化財係主任	菅原 広史（平成27～28年度）
	同	文化財係主事	瑞慶覧 長順（平成27～28年度）
	同	文化振興係主事	松田 奈津子（平成25～28年度）
	同	臨時職員	宮里 磨（平成25年度）

調 査 員	同	同	上原 仁美（平成 26 年度）
	同	同	外間 結衣（平成 28 年度）
	同	文化財係主事	安斎 英介（平成 25 年度）
	同	グスク整備係主事	安斎 英介（平成 26 年度）
	同	グスク整備係主任	安斎 英介（平成 27 ～ 28 年度）
	同	文化財係主事	菅原 広史（平成 25 ～ 26 年度）
	同	文化財係主任	菅原 広史（平成 27 ～ 28 年度）
	同	文化財係主事	瑞慶覧 長順（平成 27 ～ 28 年度）
	同	嘱託職員	宮城 明恵（平成 25 ～ 26 年度）
	同	同	鈴木 悠（平成 25 ～ 26 年度）
	同	同	上原 千明（平成 25 ～ 26 年度）
	同	同	栗野 慎一郎（平成 26 ～ 27 年度）

資料整理・嘱託職員

平成 25 年度 糸数 永子、金城 真由美、島袋 吏乃、白木 由子、新城 京美

平成 26 年度 池宮城 聡子、糸数 永子、浦崎 祐子、新城 京美、照屋 芳美、比嘉 美智子

平成 27 年度 糸数 永子、小橋川 里江、瑞慶覧 尚美、玉寄 智恵子、照屋 葉史、宮城 みさ子

平成 28 年度 石嶺 敏子、嘉数 さおり、新城 京美、玉寄 智恵子

調査協力 勝野 久美子、志良堂 恵、照屋 葉史

委託業務

平成 25 年度 発掘支援業務委託（前田西前田原 B 丘陵） 有限会社 ティガネー

平成 27 年度 発掘支援業務委託（前田西前田原 C 丘陵） 三興コンサルタント 株式会社

遺物実測等業務委託（前田西前田原 B 丘陵） 株式会社 イビソク 沖縄支店

平成 28 年度 発掘支援業務委託（前田西前田原 B 丘陵） 株式会社 シン技術コンサル 沖縄営業所

遺物実測等業務委託（前田西前田原 C 丘陵） 株式会社 パスコ 沖縄支店

第 3 節 調査の経過

（1）前田西前田原 B 丘陵

○平成 25 年 10 月 28 日～ 11 月 13 日

10 月 28 日にラジコンヘリで、調査区の着手前の状況の全景撮影を行った。その後、現場に防蛇網設置のための伐採作業を行った。また調査区の東側に接続する進入路の設置作業を行うなど、現場実施前の環境整備を行った。

○平成 25 年 11 月 14 日～ 12 月 13 日

本現場と同時に進めている西上原地区の現場に集中するため作業を一時中断し、12 月 2 日より作

業を再開した。作業としては、進入路の設置作業や、重機を使用した伐採作業、現場にみられた廃棄物の撤去作業等を実施した。

○平成 25 年 12 月 14 日～17 日

伐採作業と同時に、調査前の土量計測と磁気探査を実施した。また、墓の検出状況の写真撮影を行った。16 日からは重機で機械掘削を開始した。その過程で検出された墓について、検出順に通し番号を付与し、順次遺構の検出状況写真の撮影を行った。

○平成 25 年 12 月 18 日～12 月 27 日

機械掘削作業と並行して、10～25 号墓の人力掘削作業を実施した。遺構が検出された墓から、順次完掘状況の写真を撮影した。16 号墓については、崩落の危険があるため墓室内の調査を中止した。12 月 25 日には、1 号～5 号墓の機械掘削作業を実施した。

○平成 26 年 1 月 6 日～9 日

1 月 6 日には、3～4 号墓の間に墓が 3 基（26～28 号墓とした）検出され、検出状況の写真を撮影した。7 日以降は、1～5 号墓、26～30 号墓の人力掘削作業を行った。精査の結果、4 号墓と 5 号墓は連結されていることが判明した。9 日には新たに 31 号墓、32 号墓が発見された。また、区画整理課との協議に伴い、調査区の拡張を実施することになったため、丘陵西側の伐採作業を開始した。

○平成 26 年 1 月 10 日～1 月 18 日

引き続き 1 号墓、2 号墓、4～9 号墓、27 号墓、31、32 号墓の人力掘削作業を実施し、検出が終了した墓より順次写真撮影及び実測作業を行った。新たに 33～35 号墓、43～46 号墓が検出され、掘削作業を行った。また、追加分の土量検測と磁気探査、機械掘削作業を実施した。同地内よりその後 7 基の墓（36～42 号墓）が確認された。

○平成 26 年 1 月 20 日～1 月 28 日

6 号墓、9 号墓、10 号墓、36～42 号墓、46～49 号墓、51 号墓、53～55 号墓の人力掘削を実施し、終了したところから、写真撮影および実測作業を行った。新たに 48～53 号墓が検出され、掘削作業および写真撮影などを実施した。37 号墓は墓室内から蔵骨器が検出されたため、写真測量を実施した。38 号墓、40 号墓、41 号墓、51 号墓、55 号墓は遺物の検出作業を実施した。

○平成 26 年 1 月 29 日～2 月 6 日

6 号墓、11 号墓、12 号墓、37 号墓、38 号墓、40 号墓、41 号墓、49 号墓、51 号墓、55～57 号墓の人力掘削を実施し、終了したところから写真撮影および実測作業を行った。新たに 58～60 号墓が発見されたため、掘削作業および写真撮影を実施した。41 号墓、56 号墓はシルヒラシから一次葬人骨が検出されたため、精査及び写真撮影を実施した。全景撮影のための精査を行い、2 月 6 日に撮影を実施した。

○平成 26 年 2 月 7 日～2 月 20 日

56 号墓の撮影などの補足調査と遺物の洗浄作業を実施した。2 月 15 日には、市民向けの現場見学会を実施した。19 日に種子吹付を実施し、20 日で現場を終了した。

○平成 26 年度～平成 28 年度

平成 26 年度には、遺物の注記・接合・実測作業を実施した。平成 27 年度には、蔵骨器の実測を委託業務にて実施し、銘書の解説作業を実施した。平成 28 年度には、人骨の分析作業および副葬品などの遺物の図面作成を実施した上で、図版等の作成を行い、調査報告書を作成した。

(2) 前田西前田原 C 丘陵

○平成 27 年 8 月 13 日～9 月 10 日

ラジコンヘリを用いて着手前の全景撮影を行った。発掘調査機材の搬入、赤土流出防止申請、現場事務所設置、防蛇網設置、伐採作業、重機等による除根作業を行った。1～15 号墓を確認したが、5 号墓については調査区外のため欠番とした。

○平成 27 年 9 月 11 日～9 月 30 日

伐木等の場外搬出作業や磁気探査、地質調査、測量基準点の設置、調査区南側丘陵の沈砂池設営、機械掘削、重機および人力による遺構検出作業を行った。16～22 号墓を新たに検出した。1～22 号墓の検出状況の写真撮影を行った。21 号墓は、完掘状況の写真撮影を行った。

○平成 27 年 10 月 1 日～10 月 7 日

引き続き磁気探査、重機および人力による遺構検出作業、人力による遺構精査を行った。23～30 号墓を新たに検出し、検出状況の写真撮影を行った。また 13 号墓および 26 号墓より一次葬人骨を発見した。10・11・15・16・17・19・20・22・25・27 号墓は完掘状況の写真撮影を行った。6 号墓については戦時中の防空壕と判断した。

○平成 27 年 10 月 8 日～10 月 15 日

13 号墓内埋土の半裁をおこない、検出された蔵骨器と一次葬人骨、副葬品、墓口敷石、土層断面の状況を撮影した。また、26 号墓にて検出された一次葬人骨の写真撮影、および写真実測を行った。なお、調査区南側丘陵下段にて検出された 1～4 号墓については重機および人力による掘削を行ったところ新たに遺構が 1 基検出されたため、欠番となっていた 5 号墓を充てた。5・12・24・30 号墓は完掘状況の写真撮影を行った。1・2・4 号墓については戦時中の防空壕と判断した。

○平成 27 年 10 月 16 日～10 月 22 日

13 号墓内埋土の残り半分を掘削後、一次葬人骨検出状況の写真撮影、写真実測を行い、一次葬人骨を取り上げた。なお、26 号墓の一次葬人骨も取り上げた。並行して掘削が終了した墓の略測、地形測量作業を行った。

○平成 27 年 10 月 26 日～10 月 30 日

13 号墓内の一次葬人骨取り上げ後の掘削作業中、再び人骨や釘がばらけた状態で検出、写真撮影、実測後、人骨を取り上げた。その後、完掘状況の写真撮影、実測を行った。26 号墓についても完掘、写真撮影、実測を行った。なお、3・7・29 号墓の完掘状況の写真撮影を行った。並行して掘削が終了した墓の略測、地形測量作業を行った。28 号墓については戦時中の防空壕と判断した。

○平成 27 年 11 月 2 日～12 月 11 日

5・8・9・18・23 号墓の完掘状況の写真撮影を行った。調査区北側小丘陵の調査に移行するため、沈砂池を新たに設営した。その後機械掘削を行ったが、遺構および遺物は確認されなかった。その後地形測量を実施した。11 月 10 日から 12 日には出土遺物の洗浄・整理作業を実施した。

○平成 27 年 12 月 14 日～12 月 28 日

調査区全体を清掃後、21 日にはラジコンヘリを使って完掘状況の全景撮影を行った。調査区内の沈砂池埋戻し、25 日～26 日にかけて赤土流出防止のため、調査区内に種子散布を実施し、28 日で現場を終了した。

○平成 28 年度

遺物の注記・接合・集計作業の後、蔵骨器の実測作業を委託業務にて実施、あわせて銘書の解読作業を実施した。また人骨の分析作業および副葬品などの実測作業を実施した上で、図版等の作成を行い、調査報告書を作成した。

〈引用・参考文献〉

浦添市教育委員会 1998 『浦添間切前田村・沢岬村域の近世墓と水田跡分布調査』

浦添市教育委員会 2007a 『市内遺跡発掘調査報告書（1）—平成 13～18 年度調査報告—』

浦添市教育委員会 2007b 『前田・経塚近世墓群』

浦添市教育委員会 2010 『市内遺跡発掘調査報告書（2）—平成 14～20 年度調査報告—』

浦添市教育委員会 2011 『前田・経塚近世墓群 2 首里大名地区』

浦添市教育委員会 2012 『前田・経塚近世墓群 3 前田真知堂 B 丘陵（1）・前田真知堂 C 丘陵（1）』

浦添市教育委員会 2013a 『市内遺跡発掘調査報告書（3）—平成 18～23 年度調査報告—』

浦添市教育委員会 2013b 『前田・経塚近世墓群 4 経塚子の方原 A 丘陵（1）』

浦添市教育委員会 2014 『前田・経塚近世墓群 5 経塚南小島原 A 丘陵』

浦添市教育委員会 2015 『前田・経塚近世墓群 6 前田真知堂 A 丘陵（1）・前田西上原 A 丘陵・前田西前田原 A 丘陵』

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 浦添市の地理的環境

前田・経塚近世墓群が所在する浦添市は、沖縄本島中南部の西海岸に位置し、南側に県都である那覇市、東側に西原町、北側に宜野湾市が隣接する。西側は東シナ海に面しており、遠くには慶良間諸島を望むことができる。市域は東西 8.4km、南北 4.6km、面積は約 19.48km²で、人口は 113,580 人、47,384 世帯（平成 28 年 3 月末現在）を擁する市である。市の西部には国道 58 号線、市中央部には国道 330 号線と県道那覇宜野湾線、東部には沖縄自動車道がそれぞれ南北に走り、島の南北を結ぶ主要交通路が縦貫する。海浜部は、約 274 ヘクタールの地域を米軍牧港補給基地が占めている（第 1 図）。

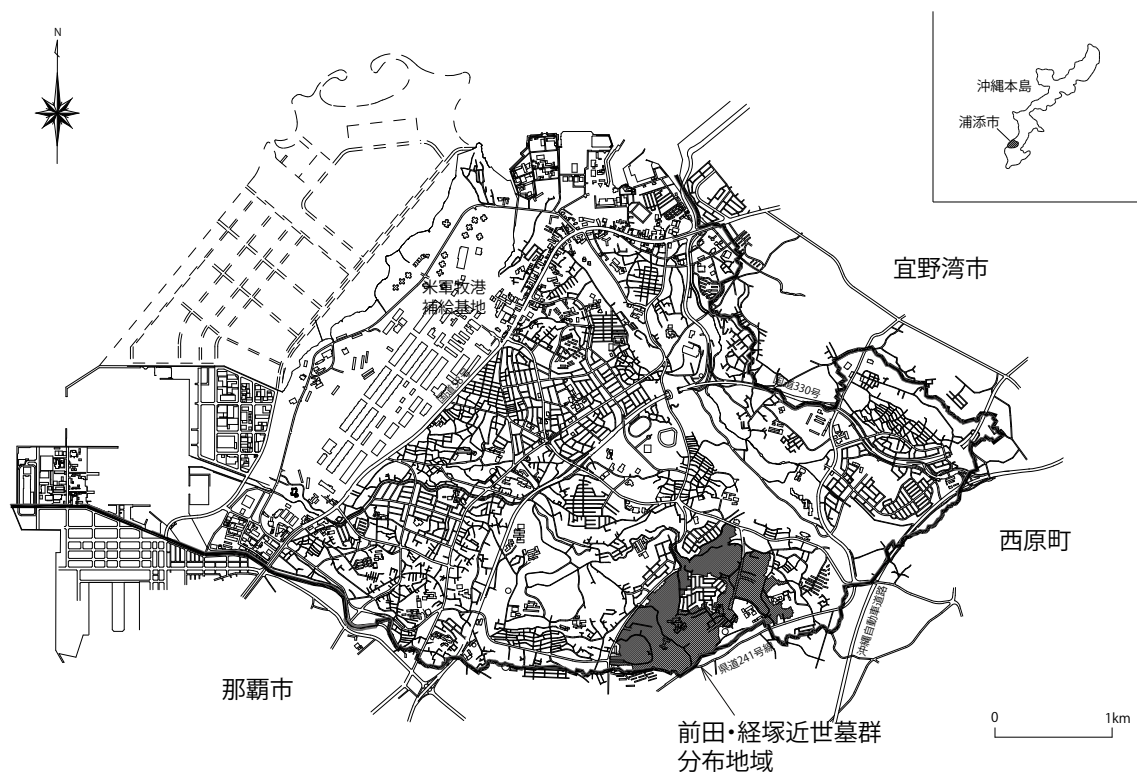
市の地形は、標高約 40m 前後でほぼ二分され、東部は起伏の小さな丘と浅い谷が連なる波浪状の丘陵地、西部は東シナ海に続く東高西低の地形である。北部には、北西－南東方向に標高 120 ～ 140m の浦添断層崖が形成されている。本市の最高点は、字仲間から字前田に所在する国指定史跡浦添城跡内の 138.4m である。それらの丘陵を分水嶺に北流する牧港川、シリン川、西流する小湾川、安謝川の四河川はいずれも東シナ海へ注いでいる。海岸線はほぼ全面で沖合にかけ豊かなサンゴ礁が発達している。

本市に分布する地層は、下位から上位に島尻層群、琉球層群、海浜堆積地及び沖積層に大別することができる。島尻層群は、本市の基盤を形成し市の中央部から南東部に広く露出するが、市西部や北部においては琉球層群が広く分布する。沖積層や海浜堆積物は四つの河川の河口付近や海岸沿いにみることができる。植生については、本市全域が去る大戦の激戦地であったために、ほとんど焼け野原の状態になり、現在残っている植被は二次林となっている。気象は隣接する那覇市において年平均気温 23.6 度、降水量 1425.0 ミリメートルで、冬は北東、夏は南東の季節風が卓越する。気候的には亜熱帯で、降水量は多く特に梅雨期や台風期に多い。風は東アジア季節風帯に属している。

第2節 遺跡の地理的環境

前田・経塚近世墓群は、浦添市の南東に位置する字前田と那覇市に隣接する字経塚一帯の丘陵地に分布する墓群の総称である。この地域は小湾川と安謝川の上流域で、その分水嶺にまたがる地域であり、一帯の地形はそれに由来する幾筋もの狭く浅い谷底低地と尾根から構成される。そのため、土地の起伏に富む丘陵地となっており、幾つもの舌状の小丘陵が入り組む複雑な地形が形成されている。これらの表層の地質は、豊見城層（小緑砂岩層）で構成されている。この砂岩は固結度が低い細粒の砂岩層であり、方言名で「ニービ」と呼ばれている。この地域の谷筋は、尾根の森を水源涵養林として古くから水田や畑として開発されてきたが、その斜面にはニービを掘り抜いた多くの掘込墓（方言名：フィンチャー）が形成されている。

現在、区画整理事業が進められている前田・経塚近世墓群が所在する丘陵地一帯は、地形上小湾川上流の安波茶川水系と安謝川上流の沢岬川水系に分かれ、現在の行政区域では字前田と字経塚に属している。この地区の小字は、安波茶水系に属する山川原、前田原、前原、東前田原、西前田原、黒島原、

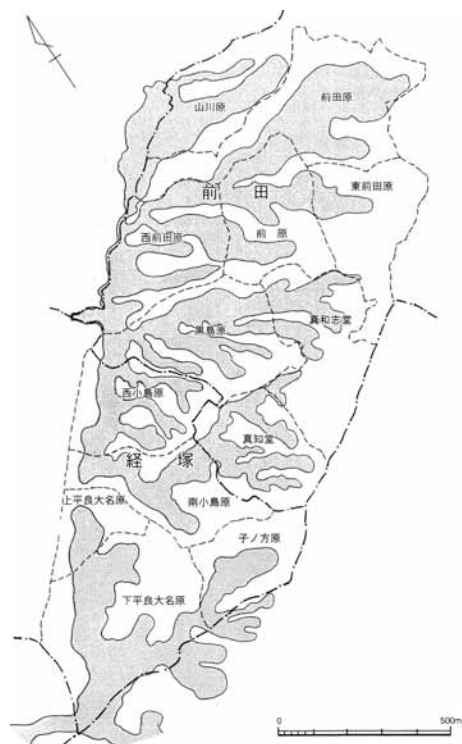


第 1 図 遺跡の位置

真和志堂原、真知堂、西小島原、南小島原と沢岷水系に属する子ノ方原、上平良大名原、下平良大名原の 13 小字からなる（第 2 図）。かつては、安波茶川水系の全ての小字と沢岷川水系の最上流域の子ノ方原が字前田に属し、沢岷川水系の上・下平良大名原が字沢岷に属していたが、大正五年の字経塚の新設にあたり、字沢岷・字前田・字安波茶の子字をそれぞれ割いて設立した時より、現在の帰属になっている。

この地域一帯は、平成 3 年に浦添市が実施する浦添南第一土地区画整理事業が都市計画決定され、その翌年から着手された。同事業が進行する過程で、上記の墓群が次々に発見され、現在までにその数が 1,000 基を超えている。墓は、西前田原、東前田原、真和志堂原、前原、真知堂、南小島原、下平良大名原、子ノ方原に主に分布し、特に真知堂に集中している。平成 21 年度調査では、前田・経塚近世墓群が市域をまたいで南側的那覇市大名区域まで広がることが明確になった（浦添市教育委員会 2011）。

今回報告を行う前田西前田原 B 丘陵および C 丘陵は、浦添市字前田の北西部に位置する（第 3 図）。



第 2 図 前田・経塚の小字図

前田西前田原 B 丘陵については砂岩（ニービ）の地山である。本調査地は標高約 80 ～ 92m で比高差約 12m 程であり、丘陵斜面や裾部に横穴を掘り込んだ墓が上下段にわたり 63 基確認された。調査面積は 5,330㎡である。

前田西前田原 C 丘陵は西前田原丘陵の中では最も高い場所に位置している。今回調査を行った南側丘陵の一部は砂岩（ニービ）の地山、北側小丘陵は泥岩（クチャ）の地山である。本調査地は北側丘陵が約 88 ～ 96m で比高差が約 8m、南側丘陵が約 94 ～ 103m で比高差が約 9m 程であり、丘陵斜面や裾部に横穴を掘り込んだ墓が 27 基確認された。調査面積は 1,405㎡である。

第 3 節 遺跡周辺の歴史的環境

浦添市が所在する沖縄本島中南部の遺跡分布の特徴として、貝塚時代後期には海浜部に遺跡群が形成され、比較的内陸部の遺跡は少ないことが挙げられる。グスク時代には、畑作や稲作が行われるようになり、遺跡も内陸部の石灰岩台地周辺に展開した。前田・経塚地区のように石灰岩台地がなく谷底低地が発達した地域は、グスク時代遺跡の分布が希薄な地域であると言われている。

古琉球期の状況については不明な点が多い。「浦添城の前の碑文」によると、1597（万暦 25）年に尚寧王が「宿道」と呼ばれる街道の整備を行い、首里から浦添に至る道を石畳にした。この時、木橋だった安波茶橋が石橋に替わり、経塚を通る「宿道」が石畳に改められたとされる。また、1609（万暦 37）年に島津軍が琉球に侵攻した際には、首里への侵攻路として利用された。

近世には地方統治制度として「間切・村制度」が採用され、1649（順治 3）年に作成された『琉球国絵図郷村帳』には、南第一地区一帯に「前田村」・「沢岬村」・「あはき村」（安波茶村）の 3ヶ村の名が見える。経塚は行政単位の「村」として成立していないため同図には登場しない。「経塚」の地名は 1524（嘉靖 3）年に日秀上人が、現在「経毛」と呼ばれる場所に経塚を建立したことに由来する。同集落は首里士族の屋取集落として成立、発展した。その成立年代は明らかではないが、1800 年代前半には屋取集落が成立していたとされる。その後、1879（明治 12）年のいわゆる「廃藩置県」によって職を失った士族が多く移り住んだことによって、現在の字経塚の基ができた。1916（大正 5）年には、沢岬から「洗江良原」「経塚原」「上平良大名原」「下平良大名原」、安波茶から「北経塚原」「南経塚原」、前田から「南小島原」「西小島原」「子の方原」が分割されて字経塚が成立した。

前田・経塚近世墓群では 1700 年頃の銘書がある蔵骨器もみられることから、この頃には墓地としての利用が始まったと考えられる。これまで確認されている同墓群の墓の所有者については、概ね北側の前田一帯の墓は前田の人のものが多く、南側の経塚一帯の墓は、首里の人のものが多いということが確認できる。経塚は首里の近郊に位置するため、首里の士族層を中心に多くの墓が建立された。そして、近世以降も現在に至るまで墓の造営は続けられ、墓域としての利用が続いている。

また、去る沖縄戦において前田・経塚地域は激戦地となった前田高地（浦添城跡）と首里の軍司令部との中間地点に位置したため、多くの部隊が戦闘の経過とともに入れ替わり駐留したようである。これまでの調査で丘陵斜面に構築された坑道式の壕が検出され、中には墓を転用する事例もみられるなど、戦争に関連する遺構が確認されている。また、墓は民間人の避難場所になっており、これらの墓については多くの証言が得られている。

〈引用・参考文献〉

浦添市教育委員会 1980 『うらそえの文化財』

浦添市史編集委員会 1981 『浦添市史 第二巻 資料編 1』 浦添市

浦添市史編集委員会 1984 『浦添市史 第五巻 資料編 4 戦争体験記録』 浦添市

浦添市史編集委員会 1987 『浦添市史 第六巻 資料編 5』 浦添市

浦添市史編集委員会 1987 『浦添市史 第七巻 資料編 6』 浦添市

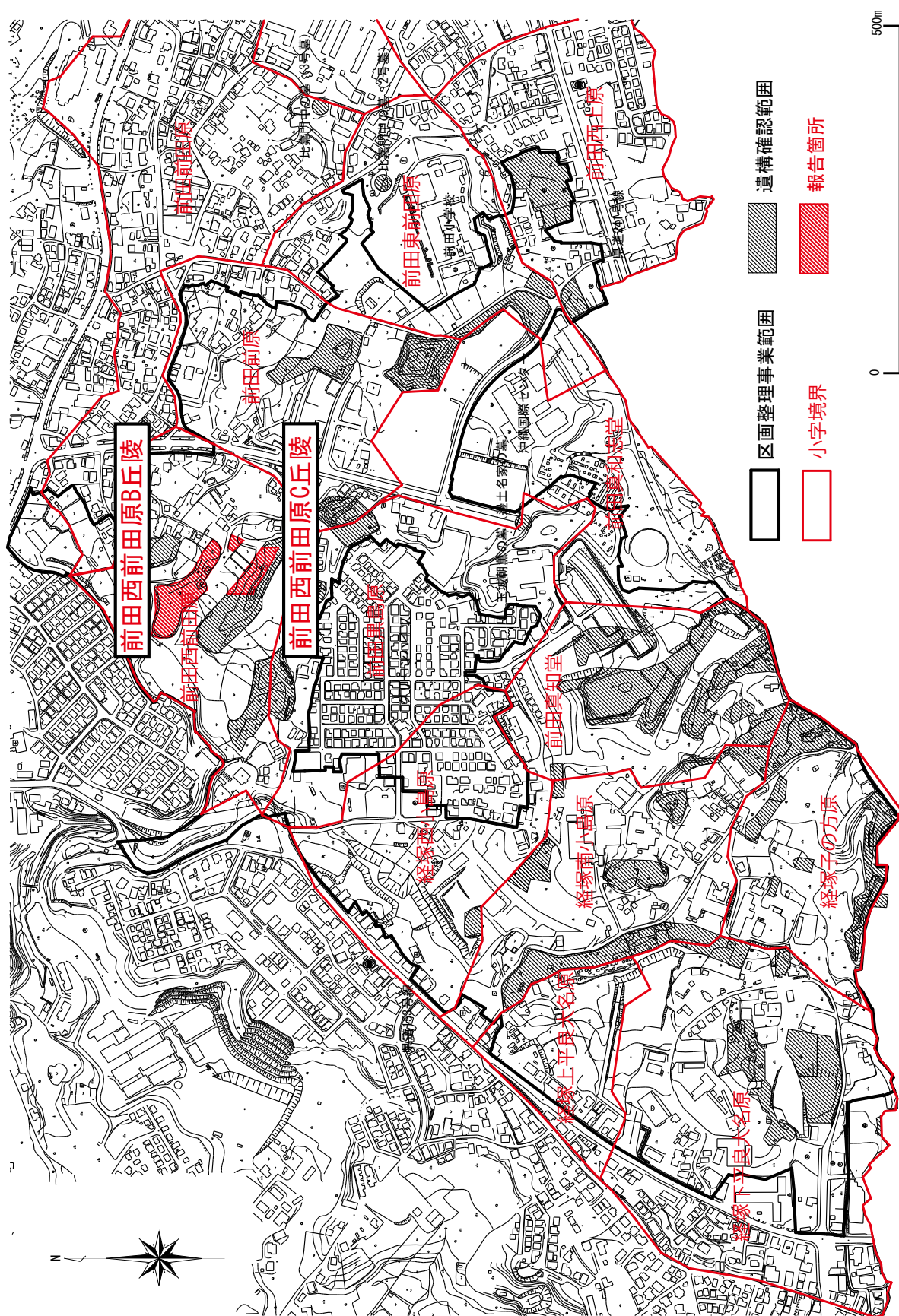
浦添市史編集委員会 1989 『浦添市史 第一巻 通史編』 浦添市

浦添市教育委員会 1998 『浦添間切前田村・沢岬村域の近世墓と水田跡分布調査』

経塚自治会 2006 『字経塚史』

浦添市教育委員会 2011 『前田・経塚近世墓群 2 首里大名地区』

浦添市教育委員会 2013 『市内遺跡発掘調査報告書（3）－平成 18～23 年度調査報告－』



第3図 前田・経塚近世墓群調査地区の位置

第3章 前田西前田原B丘陵の調査成果

第1節 調査の方法

本地区（第3図）の調査前は、丘陵全体が草木で生い茂り、地表に腐葉土・崩落土が堆積している状況であった。丘陵の頂部と南側の裾部に数基のコンクリートの墓が点在しており、それらの墓の間隙に、地山を直接掘り込んだ横穴式の掘込墓の墓口や、埋没墓であると思われるような地形の窪みも確認された。このことから、同丘陵には古墓が群をなして造られていることが想定された。このような状況から、まずは丘陵全体の伐採や除根作業を行い、その後バックホウで表土の機械掘削を行った。機械掘削を行う過程で沖縄戦時のものと思われる砲弾片や戦後のガラス瓶などが確認されたことから、調査区の多くの範囲では近現代に攪乱を受けていることが想定された。

調査区は、当初丘陵の東側半分の2,900㎡のうち、未補償墓が残る381㎡を除外した2,519㎡を予定していたが、調査期間中に区画整理課より追加の調査依頼を受け、丘陵の西側半分の2,500㎡についても発掘調査を実施することになった。そのため、この丘陵については一連の調査で全ての遺構を調査した。表土の除去については、作業効率上バックホウを用いた機械掘削で行った。掘削の過程で、墓正面や庭囲いが露出し出すと、順次人力掘削に切り替えて遺構細部の検出作業を行った。前田・経塚近世墓群の遺構は、そのほとんどが地山である細粒砂岩（ニービ）の丘陵に掘りこまれていることから、掘削作業で地山まで掘り下げることで、墓の造墓時および使用時の遺構面を検出することができる。41号墓については、墓室内の精査前に天井部に崩落の恐れがあると判断されたため、やむなく天井部を機械で除去し、露天にした状態で墓室内の調査を行った。

人力掘削の結果、前田西前田原B丘陵では上・下に段を形成しつつ、各段で墓が横並びする状況の合計63基の墓を確認した。遺構番号については、確認した順に付している。これらの遺構を検出した後、順次遺構内の掘削と記録の作成作業を進めた。その結果、遺構や遺物の残存状態から比較的情報量の多い12基の墓と、戦後の移転や攪乱などの影響から遺構や遺物の残存状態が悪い「空き墓」51基の墓の計63基の遺構群であることが判明した。前者の遺物を伴い、かつ遺物と遺構との関係性が明確な墓については、1/20の実測図の作成を行った。後者については、略測図の作成を行った。写真撮影は適宜、調査開始から完掘まで行った。

本地区は埋没墓が少なく、発掘調査時には移転補償により遺物が移された墓がほとんどであったことから、墓の使用時の状況に近い状態で確認された遺構は55号墓と56号墓のみである。なお、丘陵の南側斜面については、一部で未補償の墓が残っていたため、平成27年及び平成28年に移転後の補足調査で311㎡分の墓3基について対応した（61～63号墓）。

第2節 層序と遺構

前節に記したとおり、本調査地は広域にわたって戦時中もしくは近現代の攪乱が確認されたため、墓の上部や墓庭については、バックホウと人力による掘削により土層の除去作業を行い、遺構面の検出を行った。天井部分が崩壊して埋没している遺構については、墓室内に墓の天井部分を形成してい

た細粒砂岩のブロックと表土層（戦後の土層）が混在して厚く堆積している状態であり、これらについてはバックホウで除去作業を行った。また、墓の入り口のみが埋没した墓については、墓の内部にはほとんど埋土がない状態が確認された。このような状況であることから、本調査区では明確な層序関係を把握することはかなわなかった。

検出された遺構は 63 基で、そのほとんどは横穴状の掘込墓であった（第 4 図）。南側斜面に関しては、遺構の天井が崩落した墓が比較的多く、全体的に遺構の残存状態が良くない。一方、北側斜面に関しては遺構の天井が残っている残存状態が比較的良好な遺構もみられた。丘陵の西側斜面一帯については、表土を剥いだ後に人力で遺構の検出作業を行ったが、遺構の密度は低くまばらであった。これは、この周辺が丘陵の北側や南側斜面の一部にみられるような標高差がある斜面地ではなく、緩斜面であることから、墓を造る際に適地として選択されなかったためではないかと推測される。

確認された横穴式の掘込墓は、規模の大小や、柵の有無は様々ではあるが、砂岩（二一ビ）の斜面に横穴を掘り込んで造られたもので、羨道が造られることや、一次葬人骨が安置されるシルヒラシがあり、それを囲むように蔵骨器が安置される柵が造られるなどの構造は、これまでに行われた前田・経塚近世墓群の調査でみられる遺構と概ね同様である。そのなかには、11 号墓や 12 号墓、61 号墓、62 号墓などのように、墓の前面をコンクリートで改修しているが、墓室内はその他の掘込墓と変わらない遺構も確認された。それぞれの遺構の特徴については、第 2 表にその概要を記した。なお、墓室の類型については、浦添市教育委員会 2007『市内遺跡発掘調査報告書（1）』掲載の表を改訂して用いている（第 1 表）。

一部の遺構からは、一次葬人骨が安置された状態で天井が崩落したと思われる遺構が確認された（41 号墓、56 号墓など）。これらについては、第 4 節 各墓の調査成果のなかで出土状態などについて詳述する。その他に、4 号墓と 5 号墓とした遺構は、墓が戦時中に連結されて壕として利用されたものであると考えられる。その一方、44 号遺構と 45 号遺構のように墓としての痕跡がほとんど残っていないことから、もともと墓であったものを掘り広げて連結させたものなのか、最初から壕としてこのような形態に造られたものか判然としない遺構も確認された。

第 3 節 遺物

遺物は、総計で 536 点出土した。数量と内訳は、第 3 表のとおりである。主たるものとしては、陶製の蔵骨器、副葬品と思われる陶磁器類が出土している。また埋土中からは、戦時中の砲弾片などの戦争遺物も多く出土した。遺物については、基本的に墓毎に取り上げ作業を行った。以下に種類ごとにその概要を述べる。前述したようにほとんどが空き墓であることから、限定的な資料による所見であることを記しておく。

（1）蔵骨器

出土遺物中で最も多かったのが蔵骨器である。破片を含めた総点数では 190 点が検出された。そのうち、接合・復元できたものを含めて概ね形状が把握可能なものは蓋と身をあわせて 80 点である。その種類と数量は第 3 表に記したとおりである。資料の詳細については次節にて詳述し、ここでは全

体的な傾向のみ概観する。

蔵骨器は甕形のボージャー形とマンガン釉甕形、マンガン釉底付甕形が検出されている。その他には御殿形、現代の火葬骨用の蔵骨器などが検出された。一部は壺などの日常品を転用した蔵骨器も検出されている。なかでもマンガン釉甕形が多く、復元できた個体は蓋 27 点、身 20 点を数える。次いで、ボージャー形が多く、復元できた個体は蓋、身ともに 9 点で、マンガン釉甕形の数量と比較すると約三分の一ほどである。御殿形はすべて陶製のもので、復元できた個体は蓋 2 点、身 1 点で、その他破片資料が数点出土している。

蔵骨器の時期としては、ボージャー形は安里分類（安里・新里 2006）の蓋Ⅴ・Ⅶ型式、身Ⅱ～Ⅶ型式の資料が出土している。また、マンガン釉甕形は安里編年（安里 1997）のⅣ～Ⅵ期の資料が出土している。この他には、戦後の火葬用の蔵骨器も確認されていることなどから、本調査地区の資料の年代観は概ね 18 世紀中頃から 20 世紀（現代）の時間幅で捉えられる。

一つ特筆されるのが、37 号墓では金属製の缶二点が蔵骨器と並べて安置されているのが確認されたことである。金属製の缶の内部からわずかではあるものの人骨が確認されたため、これらは蔵骨器に転用されたものと考えられる。缶の表面にアルファベット文字の表記が確認できることから、アメリカで作られたものである可能性が高い。これらは戦後のものであると考えられるが、このような形で金属製の缶が蔵骨器に転用された事例が確認されたのは、同遺跡では初めてである。これらについては第 3 表において「転用蔵骨器」としてカウントしている。出土状況などの詳細は第 4 節（4）を参照頂きたい。

次節では、比較的状态が良い墓を取り上げた上で個別に報告を行うが、その中で蔵骨器については状態の良いものを中心に、その特徴について報告を行う。また、これらの蔵骨器には、墨書の銘書が記されたものもいくつか確認された。これらの銘書には、被葬者に関わる情報や洗骨や死亡に関わる年号などの記載があった。それらの内容は、次節に記すためここでは割愛する。

（2）蔵骨器以外の陶磁器

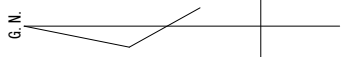
蔵骨器以外では、陶磁器の小物類が多く出土している。器種としては、水甕、瓶、碗、皿、小杯、アンダガーミと呼ばれる油壺、酒注、人形などがある。これらについては、遺物の出土状況などから判断して、遺構が墓として利用されていた際に副葬品などとして持ち込まれたものと、墓が戦時中に避難壕として転用された際に、避難の際の生活のための道具として持ち込まれたものがあると想定された。

墓が機能している際に持ち込まれたと思われるものには、瓶や小杯、人形などがある。全体としては破片資料が多く、復元できたものは少なかった。そのうち、図化を行った瓶（第 24 図 29）や小杯（第 24 図 30、第 37 図 56）、人形（第 37 図 57）については、遺構から出土した一次葬人骨に伴って出土したものであり、当時の葬送儀礼を考える際の一次資料となりうるものである。出土した陶磁器類は、沖縄産の陶器と日本本土産の磁器がみられ、これらは技法や彩色などから概ね近世から近代にかけて流通したものと考えられる。

墓が戦時中に避難壕として機能した際に持ち込まれたと考えられるものには、水甕や碗、皿、湯飲みなどがある。これらについては、4 号墓や 5 号墓、19 号墓などで比較的まとまって確認された。碗は、

X=26930.0
Y=22920.0

Y=22920.0
X=26830.0



X=26930.0
Y=22800.0

Y=22800.0
X=26830.0

第4図 前田西前田原B丘陵の地形と遺構分布図 (S=1/600)

第1表 墓室の平面形の類型（浦添市教育委員会 2007『市内遺跡発掘調査報告書（1）』を一部改変）

		墓室平面形と棚の形状		墓室及び棚の特徴や構築方法
1 類	a	棚無し		楕円またはいびつな形状。
	b			直線的な規格性をもって造る。
	c			蔵骨器が数点置けるくらいの広さで、墓口から奥壁まで直線的に造る。平面形は縦長の方形となる。1人（一次葬人骨）を安置する墓として造られる。棺箱は遺構形状と同様に縦置きとなる。 ※ 奥壁の片側または両側を拡張して蔵骨器を安置する場合もある。
	d			蔵骨器が数点置ける広さで平面形は楕円に近い。1c同様一次葬人骨を安置する墓として造られる。1cでは棺箱を縦置きするが、1dは横置きになる。
2 類	a	出窓状		正面の奥壁を凸状（＝出窓状）に成形。棚幅がシルヒラシ幅より短くなる。
	b			正面奥壁と左右側壁を凸状に成形。
	c			正面奥壁と、左右側壁のいずれか片側を凸状に成形。
3 類	a	「コ」字状		平面形が「コ」字を90度左に回転した形状。棚は平坦になる。 ※ 左右棚の片側いずれかと正面棚の接地部に段差ができることもある。 ※ 棚の高さで分類できる可能性あり。
	b			平面形は3類 a と同じだが、正面棚と左右棚の接地部に段差ができる。正面に比べて左右の棚が低くなる。
	c	「L」字状		奥壁（正面）と側壁のいずれか片側のみ棚を造る。 平面形は「L」字を90度または180度、右に回転した形状。
4 類	a	段状（階段状）		墓室内が楕円またはいびつな形状で、ほぼ平行するように正面1段の棚を造る。
	b			墓室内が直線的な規格で造られ、正面に1段の棚を造る。 ※ 棚の高さで細分類できる可能性あり。
	c			墓室内が直線的な規格で造られ、正面に2段の棚を造る。
5 類	a	「コ」字状＋階段状		3類 a＋4類 c
	b			3類 b＋4類 c
	c	「L」字状＋階段状		3類 c＋4類 c
6 類	a	「コ」字状＋段状		3類 a＋4類 b
	b			3類 b＋4類 b
	c	「L」字状＋段状		3類 c＋4類 b

第 2-1 表 前田西前田原 B 丘陵の遺構一覧表

遺構番号	外観形式	墓室類型	墓室 (m)	墓口方位	法量 (m)			蔵骨器の出土状況	一次葬人骨		所見
					高さ	幅	奥行		有無	頭位方向	
1号	掘込墓 (壕か?)	1b	(10. 5)	南西 N129° W	1. 84	2. 24	3. 00	-	-	-	遺構の平面形状は方形。棚は造られず平坦。遺構内からは磁器類やスコップの刃先が出土。遺構の規模や形状、遺物から壕として利用されたと考えられる。墓を改築したものか否かは不明。
2号	掘込墓	1d	2. 76	西南西 N122° W	1. 26	1. 64	1. 40	-	△	不明	墓室の平面形状は概ね楕円形。墓室内からは人骨が検出されているが残存状態が良くないため、詳細は不明である。簪などが出土しているため、副葬品の可能性がある。一次葬人骨か?
3号	掘込墓	3c?	(3. 39)	西南西 N117° W	1. 46	1. 80	1. 72	-	-	-	墓室の平面形状は方形。墓口付近が崩落し残存しない。墓室内に棚はないが、奥壁、左壁面周辺の床面が若干盛り上がることから、L 字状の棚があった可能性がある。遺物の出土はなし。
4号	掘込墓	6b	5. 56	南南西 N155° W	1. 86	2. 40	2. 30	破片のみ	-	-	墓室の平面形状は方形。墓口付近の天井部は崩落している。また、墓室右壁側は 5 号墓と連結している。連結部の床面直上からは火鉢や陶磁器類の戦争遺物が出土したことから、壕として二次利用されていた可能性がある。
5号	掘込墓	5a	5. 25	南南西 N165° W	1. 86	2. 66	2. 44	-	-	-	墓室の平面形状は方形。天井が残存する空き墓。墓室左壁の一部に穴があげられ、4 号墓と連結している。連結部から火鉢や陶磁器類が出土。また、墓室埋土からは少量の骨が出土した。
6号	掘込墓	2b	3. 93	北西 N47° W	1. 55	2. 76	1. 88	○	-	-	墓室の平面形状は方形。天井が残存する墓。奥と左右に出窓状の棚が一段造られる。奥棚及びシルヒランからは多数の蔵骨器片が出土。奥棚からは蔵骨器の底部片が多く出土。
7号	掘込墓	5b	6. 86	北北西 N19° W	1. 92	2. 46	2. 82	墓庭から破片のみ出土	-	-	墓室の平面形状は方形。天井が残存する空き墓。墓庭からは蔵骨器片が出土。墓の左袖付近には直径 30 cm 程度の穴があり、戦時中の砲撃によるものと思われる。
8号	掘込墓	5b	5. 90	北北西 N16° W	1. 84	2. 72	2. 50	-	-	-	墓室の平面形状は方形。左・右棚が掘り広げられ二段になるが、規格性を持つ掘り込みではないことから、墓に伴うものではなく戦時中に掘り広げられた可能性がある。
9号	掘込墓	1b	(1. 90)	東北東 N60° E	(1. 06)	1. 45	1. 50	-	-	-	遺構の平面形状はほぼ方形。遺構の残存状況が悪く、墓の前面、天井及び墓庭は残存していない。遺物も出土していないため、性格は不明の遺構である。
10号	掘込墓	1b	1. 22	東南東 N115° E	1. 72	1. 36	0. 91	破片のみ	-	-	墓室の平面形状は概ね方形。遺構の前面は崩落している。羨道部分は残存しており、墓室が羨道部より一段低く造られる。遺構内から蔵骨器の破片が出土。
11号	掘込墓	5b	6. 74	東北東 N57° E	1. 88	2. 50	2. 71	-	-	-	墓室の平面形状は方形。空き墓。墓室内の右壁は一部コンクリートにより修復されている。戦後に、戦時中に空けられた穴を補修して、墓としての利用が継続されたものと思われる。墓正面には複数の穴があり、戦時中の砲撃によるものと思われる。
12号	掘込墓	6b	(3. 87)	東 N82° E	1. 40	2. 18	2. 30	破片のみ	-	-	墓正面及び袖とコンクリートにより補修された墓。墓内部のコンクリートブロックを除去したところ、一部削平されているが、墓室の奥左右に一段の棚があったことが判明した。
13号	掘込墓	5a	5. 32	北北東 N24° E	1. 80	2. 15	2. 49	破片のみ	-	-	墓室の平面形状は方形。右袖部には戦時中の砲撃の跡とみられる穴があり、大きく攪乱を受けていると思われる。遺物は左・右棚に集積された状態の蔵骨器片が検出された。
14号	掘込墓	1a	(3. 05)	東北東 N63° E	1. 36	-	1. 68	-	-	-	墓室の平面形状は方形。墓室右壁は穴があげられ、隣接する墓へと続く。左壁もやや拡張された跡があり、墓室が全体的に攪乱を受けている。遺物は陶磁器類やガラス片、鉄片が出土している。戦時中に大きく攪乱されたと思われる。
15号	掘込墓	2a	3. 12	北 N4° E	(1. 29)	1. 86	2. 02	墓庭下方から破片出土	-	-	墓室の平面形状は不定形な方形。棚は奥壁と左壁にかけて L 字状に造られ、奥壁は出窓状に棚が掘り込まれる。L 字状の棚はほとんど残存しておらず、幅や高さは不明。墓庭や墓室から遺物は出土せず、墓庭下方から蔵骨器片が出土。
16号	掘込墓	3a	(7. 32)	北 N6° W	1. 44	2. 36	1. 40	-	-	-	墓室の平面形状は方形。天井は崩落の危険性が高いため、墓室内には立ち入らず、羨道部からできる範囲のみ掘削作業を実施。遺物は出土していないが、墓庭左袖からは獣骨が出土。

※括弧付きは残存部分の数値

第 2-2 表 前田西前田原 B 丘陵の遺構一覧表

遺構番号	外観形式	墓室類型	墓室 (m)	墓口方位	法量 (m)			蔵骨器の出土状況	一次葬人骨		所見
					高さ	幅	奥行		有無	頭位方向	
17号	掘込墓	3b	3.20	北北西 N22° W	1.58	2.16	1.66	破片のみ	-	-	墓室の平面形状は方形。墓室内の奥壁や棚の一部は石灰化している。棚は奥左右棚とも高さが異なるが、戦時中に攪乱に受けたためと思われる。墓室埋土から蔵骨器、骨、瓶が出土。
18号	掘込墓	5a	6.53	北東 N38° E	2.06	2.35	2.74	-	-	-	墓室の平面形状は方形。天井が残存する墓。墓室には棚がコの字状に造られ、奥に更に二段が造られる。墓庭埋土から陶磁器、鉄片などが出土した。
19号	掘込墓	1a	3.44	西北西 N61° W	1.30	1.56	2.80	-	-	-	墓室の平面形状は不定形。棚は造られていない。墓室埋土から水甕などの陶器や煉瓦が多数出土。墓室内には一部に煤が付着している。戦時中に二次的に使用された可能性が想定される。
20号	掘込墓	1a	(0.94)	北北西 N25° W	(1.06)	1.10	0.82	破片のみ	-	-	墓室の平面形状は方形。墓室前面は崩落して残っていない。墓庭は地形が一部改変されており、残っていない。墓室埋土から蔵骨器片や銭貨等が出土。
21号	掘込墓	1c	1.50	北北西 N30° W	1.06	0.73	1.96	破片のみ	-	-	墓室の平面形状は方形。墓室右壁の一部が掘り広げられており、幅約 50 cm、高さ約 20 ～ 30 cm の棚が造られる。墓庭は残存しない。墓室埋土から蔵骨器片、骨、陶磁器が出土。
22号	掘込墓	1d	(0.35)	北北西 N16° W	(1.21)	0.89	0.42	-	-	-	墓室の平面形状は角が丸い横長の長方形。墓庭からは右袖の一部のみ遺構を確認できたが、それ以外は残存しない。墓室埋土からは陶器、銭貨が出土している。
23号	掘込墓	1c	0.65	北東 N56° E	(0.88)	0.50	1.74	-	-	-	13号と14号の間に位置する墓。墓室の平面形状は縦長の長方形。墓室内に棚は造られていない。墓庭は地形が一部改変されており、残っていない。墓室埋土からは陶器片が出土。
24号	掘込墓	1c	(0.48)	北北西 N12° W	1.02	0.41	1.69	-	-	-	墓室の平面形状は縦長の長方形。墓庭部分のほとんどが残存していないが、右・左袖角が残存している。遺物は墓室埋土から陶器や銭貨が出土している。
25号	掘込墓	1c	(1.35)	北東 N41° E	-	0.84	1.94	-	-	-	墓室の平面形状は縦長の長方形。天井部分や墓庭は残存しない。14号墓の墓庭上に位置していることから、25号墓が埋没後に14号墓が造られたと考えられる。
26号	掘込墓	5a?	(6.47)	南西 N136° W	1.90	2.48	2.70	-	-	-	墓室の平面形状は方形。棚はコの字状に一段のみ確認できるが、奥棚が幅広く、一部不成形な部分があることから、更に1～2段の棚があった可能性がある。墓室内の壁面には釘が刺さっていることから、戦時中に攪乱を受けた可能性がある。
27号	掘込墓	1b	(7.48)	南西 N137° W	-	2.42	(4.30)	破片のみ	-	-	遺構の平面形状は方形。天井部分、墓前面、墓口は残存していない。墓室の床面からは防毒マスク、キセル、フォーク等が出土したことから、戦時中に利用されたと思われる。墓庭埋土からは蔵骨器片、骨等が出土。
28号	掘込墓	1c	0.67	南南西 N149° W	(1.06)	0.51	1.60	破片のみ	-	-	墓室の平面形状は縦長の長方形であるが、奥壁周辺は一部不成形。棚は造られていない。墓室・墓庭埋土から蔵骨器片と少量の骨が出土。
29号	掘込墓	1a	(1.30)	南西 N126° W	(0.90)	1.56	0.90	-	-	-	墓室の平面形状は不定形。天井や壁面が崩落により残存しておらず、遺構床面のみが確認された。墓庭部分も地形が改変されており、残存しない。遺物も出土していない。
30号	掘込墓	1a	(0.51)	北西 N34° W	-	0.92	0.57	-	-	-	墓室の平面形状は不定形。天井や壁面が崩落により残存しておらず、遺構床面のみが確認された。3号墓の左袖付近に位置していることから、袖墓の可能性はある。遺物は出土していない。
31号	掘込墓	1b	1.35	西南西 N113° W	-	1.40	1.00	○	-	-	墓室の平面形状は方形。天井部分は崩落しており、墓室は完全な埋没していた。墓室内の床面からは原位置を保っているとみられる蔵骨器1点を検出した。墓庭から遺物は出土していない。
32号	掘込墓	1d	0.63	南西 N138° W	(0.82)	0.94	0.86	-	-	-	墓室の平面形状は不定形な小規模な墓。天井部分と墓口の一部は崩落したとみられ、残存していない。遺構内から遺物は出土していない。

※括弧付きは残存部分の数値

第 2-3 表 前田西前田原 B 丘陵の遺構一覧表

遺構番号	外観形式	墓室類型	墓室 (m)	墓口方位	法量 (m)			蔵骨器の出土状況	一次葬人骨		所見
					高さ	幅	奥行		有無	頭位方向	
33号	掘込墓	1a	0.24	南南西 N148° W	-	0.72	0.90	-	-	-	平面形状は不定形な遺構。天井部分や壁面はほとんど残っておらず、わずかに床面を確認できるのみである。遺構内より遺物は出土していない。性格不明の遺構。
34号	掘込墓	4b	(1.63)	南南西 N146° W	(1.48)	1.52	1.26	破片のみ	-	-	墓室の平面形状は不定形。墓室は羨道部に対して左右対称ではなく、左壁方向に広く造られる。35号墓が隣接することによるためと考えられ、35号墓より後に造られた墓であるとみられる。墓室内埋土から蔵骨器片等が出土している。
35号	掘込墓	1a	(1.83)	南南西 N157° W	(0.74)	1.30	1.56	-	-	-	墓室の平面形状は不定形。天井部分壁面、墓庭等がほとんど残存しておらず、遺構の床面の一部が確認できるのみである。墓室内埋土から銭貨が出土。
36号	掘込墓	3c	(3.65)	南西 N136° W	1.30	2.53	1.75	-	-	-	墓室の平面形状は方形。墓前面と左壁が残存していない。調査前は、36号墓と53号墓の前面がコンクリートブロックで修復された状態であった。棚はL字状に奥、右棚に一段有し、奥壁側にわずかに出窓状になる。遺物の出土はない。
37号	掘込墓	5a	6.30	南西 N143° W	2.10	2.42	2.57	○	-	-	墓室の平面形状は方形。墓室内の奥棚からは金属製の缶2点、現代蔵骨器1点を検出した。金属製の缶内には少量の骨が入っており、蔵骨器として転用されていたと考えられる。現代蔵骨器内にはレンガ製の誌板が入っていた。
38号	掘込墓	4a	1.52	南 N176° W	1.24	1.14	1.20	破片のみ	-	-	墓室の平面形状は不定形。棚は奥壁側が一段造られる。墓室の前面の一部が崩落している。墓室内埋土からは蔵骨器片や銭貨等が出土。
39号	掘込墓	1b	1.80	西南西 N116° W	1.04	1.56	1.20	-	-	-	墓室の平面形状は方形。墓室内には棚は造られていない。墓庭は周辺の地形が一部改変されており、残存していない。遺構からは、遺物は出土していない。
40号	掘込墓	1b	1.44	北西 N49° W	1.06	1.22	1.22	破片のみ	-	-	墓室の平面形状は方形。小規模な墓。墓室内には棚が造られていない。墓室埋土から蔵骨器片が出土した。また、遺構床面から人骨と蔵骨器の蓋が出土した。
41号	掘込墓	5b	5.05	北西 N48° W	-	2.22	2.24	○	○	南南西	墓室の平面形状は方形。天井が崩落した墓で、棚などから蔵骨器が出土。墓室内には奥側に棚が三段、左右棚が一段造られている。シルヒラシからは一次葬人骨が検出された。
42号	掘込墓	2b 変形	3.77	北西 N37° W	1.44	2.26	2.00	△墓庭から多数出土	-	-	墓室の平面形状は方形。奥壁側に出窓状に二段、左右に一段の棚が造られる。奥棚には左右の角に小さな掘込みがみられるが性格は不明。墓室内から遺物は出土していないが、墓庭から多数の蔵骨器が検出。墓庭に52号墓(脇墓か)が造られている。
43号	掘込墓	1b	(2.16)	北北西 N12° W	(1.20)	1.64	1.10	-	-	-	墓室の平面形状は方形を呈すると思われるが、天井や壁面を含め遺構の半分は崩落しており、残存していない。遺構内に棚は造られていない。遺物の出土はなし。
44号	掘込墓	1c	(5.89)	北N9° W	1.60	0.88	5.00	-	-	-	外観は掘込墓の形式であるが、奥壁が掘りぬかれており、隣接する45号墓と連結している。古墓が転用されたのか、はじめから塚として造られたのかは判然としない。
45号	掘込墓	1c	(9.02)	北北西 N12° W	1.62	1.12	6.18	-	-	-	外観は掘込墓の形式であるが、奥壁が掘りぬかれており、隣接する44号墓と連結している。古墓が転用されたのか、はじめから塚として造られたのかは判然としない。
46号	掘込墓	1b	1.14	北北東 N18° E	(0.90)	1.34	0.86	-	-	-	墓室の平面形状は方形。墓の前面から左壁にかけて崩落している。墓室に棚は造られていない。墓庭は地形が改変されており、残存していない。遺物は出土していない。
47号	掘込墓	1c	(5.97)	北 N7° E	1.82	1.88	8.50	-	-	-	遺構の平面形状はL字状。外観は墓であるが、奥部分に掘り広げられたような形状であるため、戦時中に塚として使用されていたと思われる。遺構内から磁器や鉄片が出土している。
48号	掘込墓	1b	(1.80)	北 N2° W	(0.94)	1.76	1.10	-	-	-	遺構は比較的直線的に造られるが、遺構の前面の残存状況が悪いため、遺構形状は不明である。7号墓墓庭の下方に位置している。遺物も出土していない。塚の可能性あり。

※括弧付きは残存部分の数値

第 2-4 表 前田西前田原 B 丘陵の遺構一覧表

遺構番号	外観形式	墓室類型	墓室 (m)	墓口方位	法量 (m)			蔵骨器の出土状況	一次葬人骨		所見
					高さ	幅	奥行		有無	頭位方向	
49号	掘込墓	1c	(0.23)	北西 N49° W	(0.84)	0.38	1.36	破片のみ	-	-	41号墓に隣接する小規模な墓で、墓室の平面形状は縦長の長方形。蔵骨器一点が入る大きさの墓。墓室埋土からは蔵骨器片が出土した。
50号	掘込墓	4b	(0.57)	西北西 N64° W	(0.70)	0.52	1.23	-	-	-	墓室の平面形状は方形。墓正面のコンクリートを除去したところ、小規模な掘込墓を検出した。奥側が一段棚状に成形されているが、不明瞭である。遺物は出土していない。
51号	掘込墓	2a	2.03	南 N171° E	1.22	1.70	1.50	破片のみ	-	-	墓室の平面形状は横長の方形。奥壁側に出窓状の棚が一段造られる。墓口前面が崩落の影響で残存していない。墓室埋土からは蔵骨器片が出土した。
52号	掘込墓	1d	(0.22)	西南西 N109° W	(0.48)	0.54	0.50	-	-	-	42号墓の墓庭に位置する小規模な墓。墓室の平面形状は不成形である。遺構の前面と天井部分は崩落している。遺物は出土していない。42号墓の脇墓の可能性あり。
53号	掘込墓	1a	(2.08)	西 N88° W	1.30	2.00	1.24	破片のみ	-	-	36号墓に隣接する墓。墓室の平面形状は不定形。右袖から墓前面にかけて崩落しており、墓口の位置は不明。調査前は36号墓から53号墓にかけてコンクリートブロックで閉塞されていた。墓室埋土からは蔵骨器片が出土。
54号	掘込墓	1d	0.52	南西 N132° W	(0.70)	1.00	0.52	-	-	-	墓室の平面形状は横長の方形。墓庭は地形が改変されており、残存しない。墓口横の右袖部の角のみがわずかに遺構が残る。遺物の出土はなし。
55号	掘込墓	1a	0.39	南 N173° W	(0.94)	0.85	(0.50)	○	-	-	墓室の平面形状は不定形。前壁は崩落して残っていない。墓室は埋没しており、掘削を行ったところ、蔵骨器1点が検出された。墓室の中央部が蔵骨器を安置するために直径約40cm×深さ約20cm程の円形状に掘り下げられている。
56号	掘込墓	3c	0.92	南 N172° W	(1.14)	1.06	0.90	○	○	北 N4° E	墓室の平面形状は不定形。墓室からは蔵骨器3点と一次葬人骨1体を検出した。蔵骨器は奥壁側に1点、右壁側に2点が安置されていた。奥棚には獣骨が検出されている。一次葬人骨はシルヒラシから羨道にかけて検出された。
57号	掘込墓	2a	1.36	南南西 N159° W	(0.99)	1.34	1.20	-	-	-	墓室の平面形状は横長の方形で、奥壁側に出窓状の棚が確認された。シルヒラシから羨道にかけて傾斜して低く造られている。墓庭は地形が改変され残存していない。遺物の出土はなし。
58号	掘込墓	1d	(0.24)	南西 N124° W	(0.52)	(0.56)	(0.40)	-	-	-	墓室の平面形状は方形に近いが、やや不定形である。墓室の幅は60cm程しかない。遺構の残存状況が良くないが、57号墓と35号墓の間に位置し、遺構の高さが隣接するこれらの墓とほぼ同じであるため、一連の時期に造られた可能性がある。遺物の出土はなし。
59号	掘込墓	1a	(0.85)	北東 N36° E	(1.18)	-	(1.18)	破片のみ	-	-	12号墓の墓庭下方に位置している。遺構の天井部や前面部が崩落により残存していないため墓室の平面形状は不明。墓室埋土から蔵骨器片等が出土。
60号	掘込墓	1a	(2.91)	北東 N35° E	(1.20)	2.26	1.42	-	-	-	墓室の平面形状は概ね方形に近いが、奥に掘り広げられたような痕跡が認められる。墓室の前面部が崩落しており、遺構の形状が不明瞭である。遺物は出土していない。
61号	掘込墓	5a	5.67	北北東 N37° E	1.90	2.27	2.50	-	-	-	62号墓と墓庭を共有。全面はコンクリートで補強されているが、内部は二ーピの掘込墓。コの字状の棚の奥に二段の棚が造られる。H25年度時には未補償のため、H27年度に追加調査を実施。
62号	掘込墓	5b	6.88	北北東 N36° E	1.95	2.55	2.70	-	-	-	61号墓と墓庭を共有。全面はコンクリートで補強されているが、内部は二ーピの掘込墓。コの字状の棚の奥に二段の棚が造られる。H25年度時には未補償のため、H27年度に追加調査を実施。
63号	掘込墓	5b	6.75	東北東 N77° E	1.82	2.50	2.70	破片のみ	-	-	墓室奥側の右壁が一部拡張されている。拡張部は幅1.0m、奥行0.7m、高さ1.0m。蔵骨器の破片はマンガン釉やコバルト釉が掛けられたもので、明治・大正・昭和の銘書がみられた。補償移転後のH28年度に追加調査を実施。

※括弧付きは残存部分の数値

第3-1表 前田西前田原B丘陵の遺物一覧表

種類			墓	1号墓	2号墓	4号墓	連4・5号墓	6号墓	7号墓	10号墓	12号墓	13号墓	14号墓	15号墓	17号墓	18号墓	19号墓	20号墓	21号墓	22号墓	23号墓	24号墓	25号墓	小計1		
			墓室	墓口	墓室	墓庭	直床上面	墓室	墓庭	埋土	左袖	表探	墓室	墓室	墓室	墓室	墓室	墓室	墓室	墓室	墓室	墓室	墓室		墓室	
蔵骨器	ボージャー形	蓋身					3	4																7		
		破片				2	2	3	2															5		
	マンガン釉甕形	蓋身						1	1	2	1		2				1	1						9		
		破片			2	1	8		3	1	3				5	2		2	1	2				30		
	マンガン釉底付甕形	蓋身																						0		
		破片				1																		0		
	御殿形(陶製)	蓋身										1												1		
		破片			1	1						1												2		
	現代蔵骨器	蓋身										1													1	
		破片										1													1	
	転用蔵骨器	蓋身																							0	
		破片																							0	
	不明	蓋身																							0	
		破片																							0	
陶磁器	水甕	完形																						0		
		破片				5		1																6		
	瓶	完形										2					1						1	1		
		破片																						3		
	碗	完形	1			1							1			1	15							19		
		破片	3		1			2					4	4				3						17		
	皿	完形															10							10		
		破片						1																1		
	小杯	完形														1	4						1	6		
		破片																						0		
	湯のみ	完形									2						10							12		
		破片																						0		
	壺	完形									1						10							11		
		破片				1		1					1				8					1		12		
	アンダガーマ	完形																1						1		
		破片					1																	1		
	水(酒)注・急須	完形																						0		
		破片																						0		
	蓋	完形											1				2							3		
		破片					1																	1		
火鉢	完形																						0			
	破片					1																	1			
火炉	完形																			1			0			
	破片																						1			
人形	完形																						0			
	破片																						0			
その他・不明	完形		1	2				1									1		1		1			7		
	破片																						1			
煙管	陶質土器																					1	1			
	完形																						0			
	雁首																						0			
	吸口																						0			
簪		1																				1	2			
櫛																							0			
指輪																							0			
銭貨																	2		1		2		5			
瓦																							0			
煉瓦																	4						4			
歯ブラシ					1																		1			
石(サンゴ)製品																							0			
鉄製品(破片含)		1			2	3							多数			多数	12					1	19			
缶詰						1																	1			
釘																							0			
ボタン																							0			
ガラス製品(破片含)					1						2		2		1	1							7			
鏡																							0			
木炭																1	1						2			
スコップ	1																						1			
石					1																		1			
その他・不明													1										1			
合計		1	7	5	14	17	10	19	2	6	1	7	8	8	6	5	3	4	85	4	3	2	1	4	4	226

※「多数」は小破片のため数量にはカウントしていない

第3-2表 前田西前田原B丘陵の遺物一覧表

種類			墓		27号墓		28号墓		31号墓	34号墓	35号墓	37号墓	38号墓	40号墓	41号墓	42号墓	44号墓	45号墓	47号墓	49号墓	51号墓	53号墓	55号墓		56号墓	59号墓	表採	小計2	合計		
					埋土室	直床上面	墓庭	墓室	墓庭	直床上面	墓室	墓室	墓室	墓室	埋土室	直床上面	墓室	墓庭	墓室	墓室	墓室	墓室	墓室	墓室	埋土室	墓室				直床上面	墓室
			蓋身	破片					1	1							1	2													
蔵骨器	ボージャー形	蓋身						1							1													2	9		
		破片						1							1	2												4	9		
	マンガン釉甕形	蓋身				1						1		1	2	5				1	1	1		1	2	2		18	27		
		破片			19	3	3		1		3	3	1	4	10	1				1	1		2	1	3	2	4		57	87	
	マンガン釉底付甕形	蓋身												1							1							2	2		
		破片												1							1							2	2		
	御殿形(陶製)	蓋身																									1	1	2		
		破片			3					2																			0	1	
	現代蔵骨器	蓋身										1																	1	2	
		破片										1																	0	0	
	転用蔵骨器	蓋身										2																	2	2	
		破片										2	1																3	3	
	不明	破片											1																1	1	
	陶磁器	水甕	完形														1													1	1
破片																	1												1	7	
瓶		完形			3				1						1	1													6	7	
		破片							1							2													3	6	
碗		完形															2	1								1		4	23		
		破片	14						5								1									2		22	39		
皿		完形																										0	10		
		破片											1				2											3	4		
小杯		完形			1								1		1										1			4	10		
		破片																										0	0		
湯のみ		完形															1	1											2	14	
		破片											1						1										2	2	
壺		完形																											0	11	
		破片															4	4											8	20	
アンダーガーミ		完形																											0	1	
		破片															1												1	2	
水(酒)注・急須		完形			1																									1	1
		破片																											0	0	
蓋		完形																1												1	4
		破片	1																										1	2	
火鉢	完形			3																									3	3	
	破片																											0	1		
火炉	完形																											0	0		
	破片																1											1	2		
人形																								1			1	1			
その他・不明											8				3	1		1						1			18	25			
煙管	陶質土器										8					2													2	3	
	完形	1	1																										2	2	
	雁首							1																					1	1	
	吸口																												0	0	
	簪																												0	2	
	櫛	1																											1	1	
	指輪															1								2				3	3		
	銭貨								1		2																		3	8	
	瓦																				1								1	1	
	煉瓦											1										1							2	6	
	歯ブラシ																												0	1	
	石(サンゴ)製品											1																	1	1	
	鉄製品(破片含)	2	2					1		多数	1			1		多数	1	1							1				9	28	
	缶詰																												0	1	
釘												1	4	9	20										16			50	50		
ボタン															1													1	1		
ガラス製品(破片含)	多数						1		多数		1				8		3	2	3						1			19	26		
鏡								1																					1	1	
木炭																													0	2	
スコップ																													0	1	
石																													0	1	
その他・不明	2	1														1	1	2			1				1			9	10		
合計	25	4	31	4	3	2	14	1	18	14	7	10	51	34	19	12	6	2	8	1	2	4	27	10	1	310	536				

※「多数」は小破片のため数量にはカウントしていない

沖縄の壺屋産のもの（第 39 図 60）、と沖縄で「スンカンマカイ」と呼ばれる愛媛県砥部産のもの（第 7 図 1、第 39 図 61）が確認された。また、「国民食器」と呼ばれる白地に緑色のラインが入った磁器の碗や湯飲みも確認された（第 39 図 62、第 39 図 63）。上記の 2 点については、底部に「岐〇〇」の統制番号が入っていることから、近代の統制経済下に岐阜県で生産され、広く流通した製品である（安斎・上原 2015）。他には、瀬戸・美濃産の小杯（第 39 図 64）や皿（第 39 図 65）なども多数確認されている。これらと同様のものは、隣接する前田・経塚近世墓群前田西前田原 A 丘陵などの他の地区でも確認されている（浦添市教育委員会 2015）。

（3）金属製品

金属製品は、銅製の煙管（キセル）、簪、銭貨、指輪、釘などが出土した。

煙管（キセル）は 27 号墓と 34 号墓から計 3 点が出土している。雁首と吸口が一体になったタイプのものが 2 点と、分離できるタイプの雁首 1 点が確認された。うち、一体になったタイプのもののうち 1 点（第 40 図 76）を図化した。

簪については、2 号墓と 25 号墓の 2 点が出土している（第 39 図 59、第 40 図 73）。いずれも男性用の髪簪であり、頭部に花形の模様が施されたものである。

銭貨は 8 点が出土しており、全て拓本と写真を掲載した。38 号墓が 2 点（第 19 図 23・24）、20 号墓が 2 点（第 40 図 66・67）、22 号墓が 1 点（第 40 図 68）、24 号墓が 2 点（第 40 図 69・70）、35 号墓が 1 点（第 40 図 77）である。銭種は寛永通宝 6 枚、景興通宝 1 枚、半銭銅貨 1 枚の三種類が出土している。

指輪は、3 点が出土しており、全て図化した。42 号墓が 1 点（第 28 図 40）、55 号墓が 2 点（第 32 図 48・49）の計 3 点である。全て銅製で幅 5mm 程度である。これらは一次葬時の副葬品である可能性がある。

釘は、いずれも状態が悪く全形が伺えないため本報告では数量のみの報告にとどめた。41 号墓では、一次葬人骨の出土範囲の周辺部からまとまって出土していることから、人骨を安置した木棺に伴うものであると考えられる。

（4）その他の製品

その他のものとして、歯ブラシ（第 7 図 2）、ボタン（第 24 図 31）、ガラス製の薬瓶（第 37 図 55）などが出土している。ガラス製の薬瓶については、56 号墓の墓室から出土した一次葬人骨に伴って出土していることから副葬品であると考えられる。小杯とセットで出土していることから、酒を入れる徳利を意識して置かれたものである可能性がある。これと同様の出土は、前田・経塚近世墓群の大名地区 22 号墓や、経塚子の方原地区 A 丘陵の 27 号墓などでもみられた（浦添市教育委員会 2011、2013）。

以上が今回の発掘調査の出土遺物の概要である。次節では、遺構と遺物の残存状態が比較的良好な墓について、実測図などを図示しつつその詳細について報告を行う。

第4節 各墓の調査成果

前田西前田原 B 丘陵の調査では、合計 63 基の遺構が確認され、墓に関連する蔵骨器や副葬品などの遺物が得られている。これらの遺構と遺物の概要については、第2表と第3表に示したとおりである。本節では、これらの墓の中から比較的遺構と遺物の残存状況が良い 12 基の報告を行う。なお、本節で報告を行う以外の墓は、第4図と第2・3表、第39図・第40図及び巻末の図版をもって報告とする。

(1) 4・5号墓

1) 遺構 (第5図、第6図)

4号墓と5号墓は横穴式の掘込墓で、同丘陵の南側斜面の中央部付近に位置する(第4図)。4号墓の墓室右側と5号墓の墓室左側の壁面を掘り抜き連結しているため、あわせて報告を行う。墓の立地する標高は約 85～89m である。遺構の周辺はほぼ埋没していたが、表土を除去したところ墓口が検出された。墓庭は4号墓と5号墓で個別に造られず、共有した状態であった。

4号墓の墓室は平面形が方形であり、墓口から奥に向けて直線的に横穴が掘り込まれ、奥に二段の棚が造られる。二番棚は L 字状になり、左棚は二番棚からわずかに段差がある。ただし、5号墓と連結されるなど、墓室の一部に後世の改変がみられることから、二番棚についても一部改変されている可能性もある。墓室の奥行きは 2.30m で、幅は 2.40m、墓室内の高さは 1.86m である。墓口方位は、南南西 (N155° W) である。

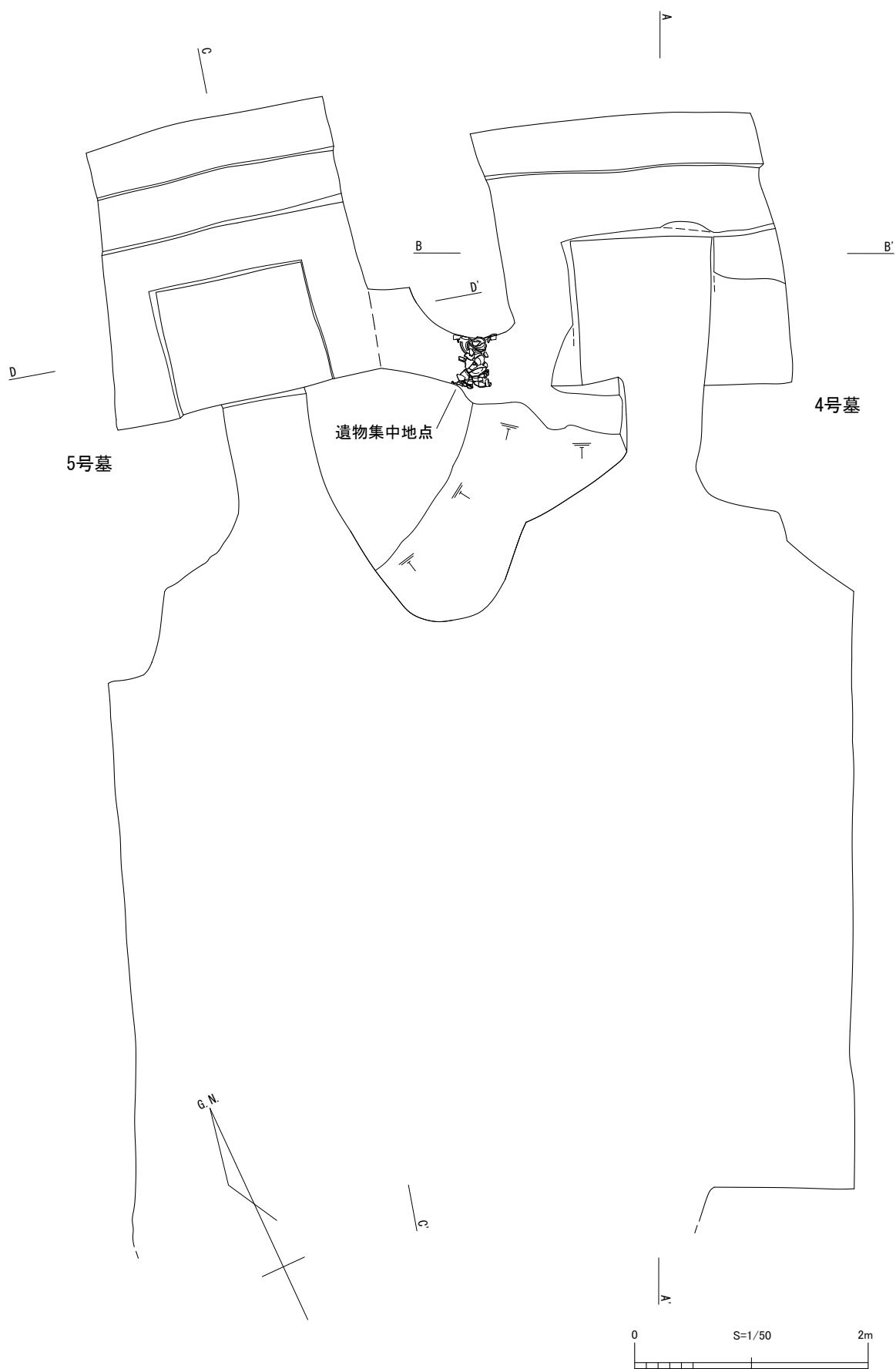
5号墓の墓室は平面形が方形であり、墓口から奥に向けて直線的に横穴が掘り込まれ、奥に三段の棚が造られる。奥側から一番棚と二番棚が造られ、三番棚はコの字状に造られる。墓室の奥行きは 2.44m で、幅は 2.66m、墓室内の高さは 1.86m である。墓口方位は、南南西 (N165° W) である。

これらの遺構は、墓室内に蔵骨器がみられないことや、遺構の連結部から陶製の火鉢などの近代の遺物がまとまって出土したことなどから、沖縄戦の際に墓を転用して壕として利用されたものと考えられる。同丘陵や隣接する前田西前田原 A 丘陵にもこれと同様に、墓が連結され壕として利用された事例が確認されている(浦添市教育委員会 2015)。蔵骨器がほとんど残っていないため、墓としての使用年代などは不明である。また埋没時期の詳細も不明であるが、壕として利用された形跡があることや、周辺の状況からおそらく戦時中に砲撃などを受けて埋没したものと推測される。

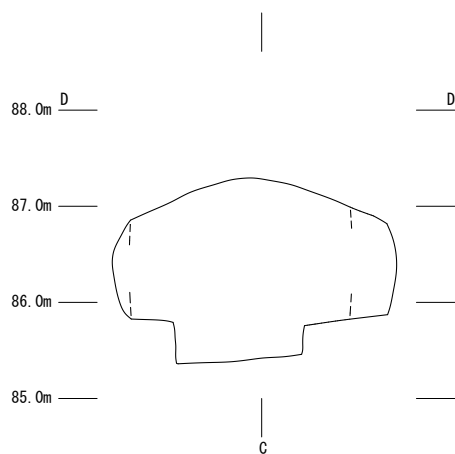
2) 遺物 (第7図)

4号墓と5号墓から出土した遺物の種類と数量については、第3表を参照頂きたい。このうち比較的残存状況の良好な陶器の碗1点と歯ブラシ1点について報告する。歯ブラシは写真のみ掲載した。

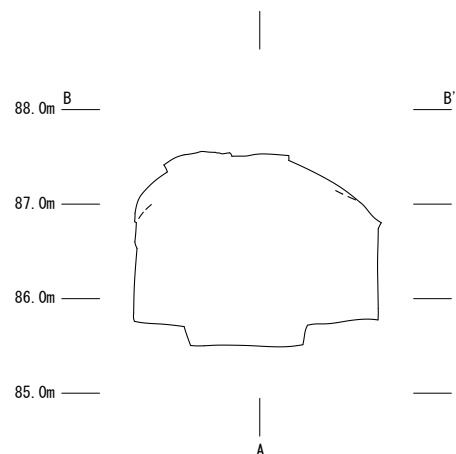
第7図1は、愛媛県砥部産の陶器の碗である。沖縄では「スンカンマカイ」と呼称されるものである。口縁部が半分ほど欠損している。コバルトでの型絵染付後、全体に透明釉がかけられる。色調は全面的に青みがかった白色で、文様はコバルトの鮮やかな発色である。外面全体と口縁内側、見込み部分に花文が表現される。見込みに重ね焼きの際のハマ痕が残る。復元口径は 13.4cm、器高は 5.6cm、底径は 4.8cm。4号墓と5号墓の連結部の床面直上から出土。出土状況から、墓で使用されたものではなく、壕に避難した際に持ち込まれたものであると考えられる。



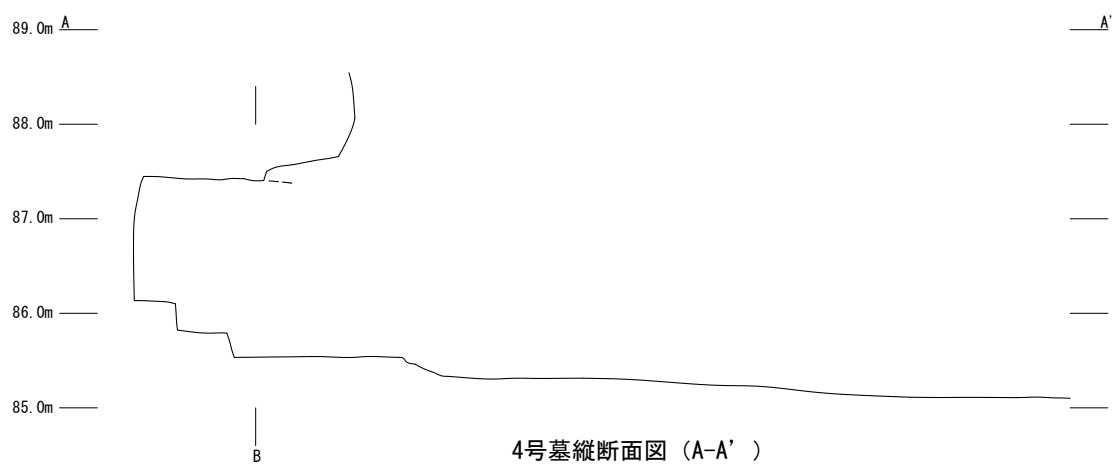
第5図 4号墓・5号墓平面図



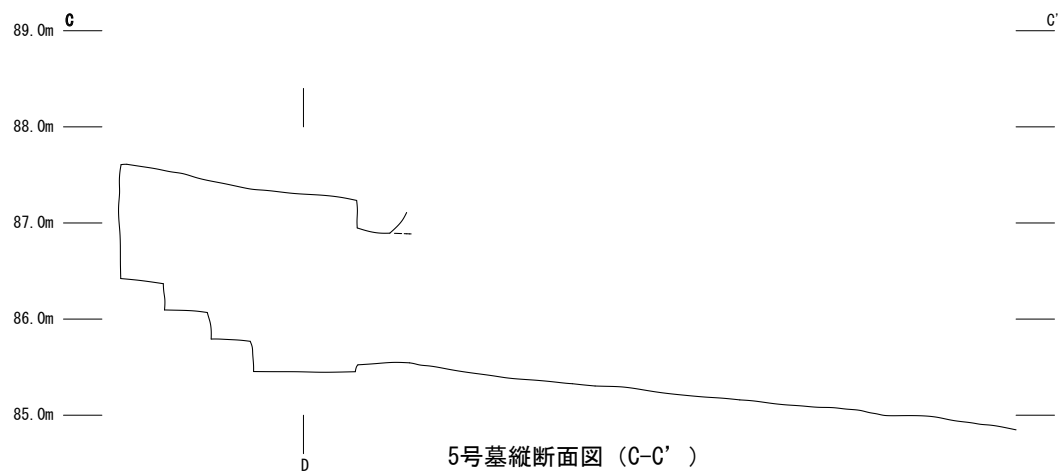
5号墓墓室横断面图 (D-D')



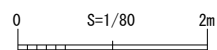
4号墓墓室横断面图 (B-B')



4号墓纵断面图 (A-A')



5号墓纵断面图 (C-C')



第 6 图 4 号墓 · 5 号墓断面图



第7図 4号墓・5号墓出土遺物

第7図2は、セルロイド製の歯ブラシの柄である。毛は残存していない。柄の下端付近に0.4cmの孔がけられる。柄の中央部に縦書きで「クミアイ歯刷子」の文字が刻印されている。文字の下には○の中に「公」の文字がみられる。これは近代の統制経済下における公定価格の示すものであると思われる。文字の上部にもマークが見受けられるが、不明瞭で判然としない。全長14.7cm、重量7.47g。4号墓の墓庭埋土より出土。

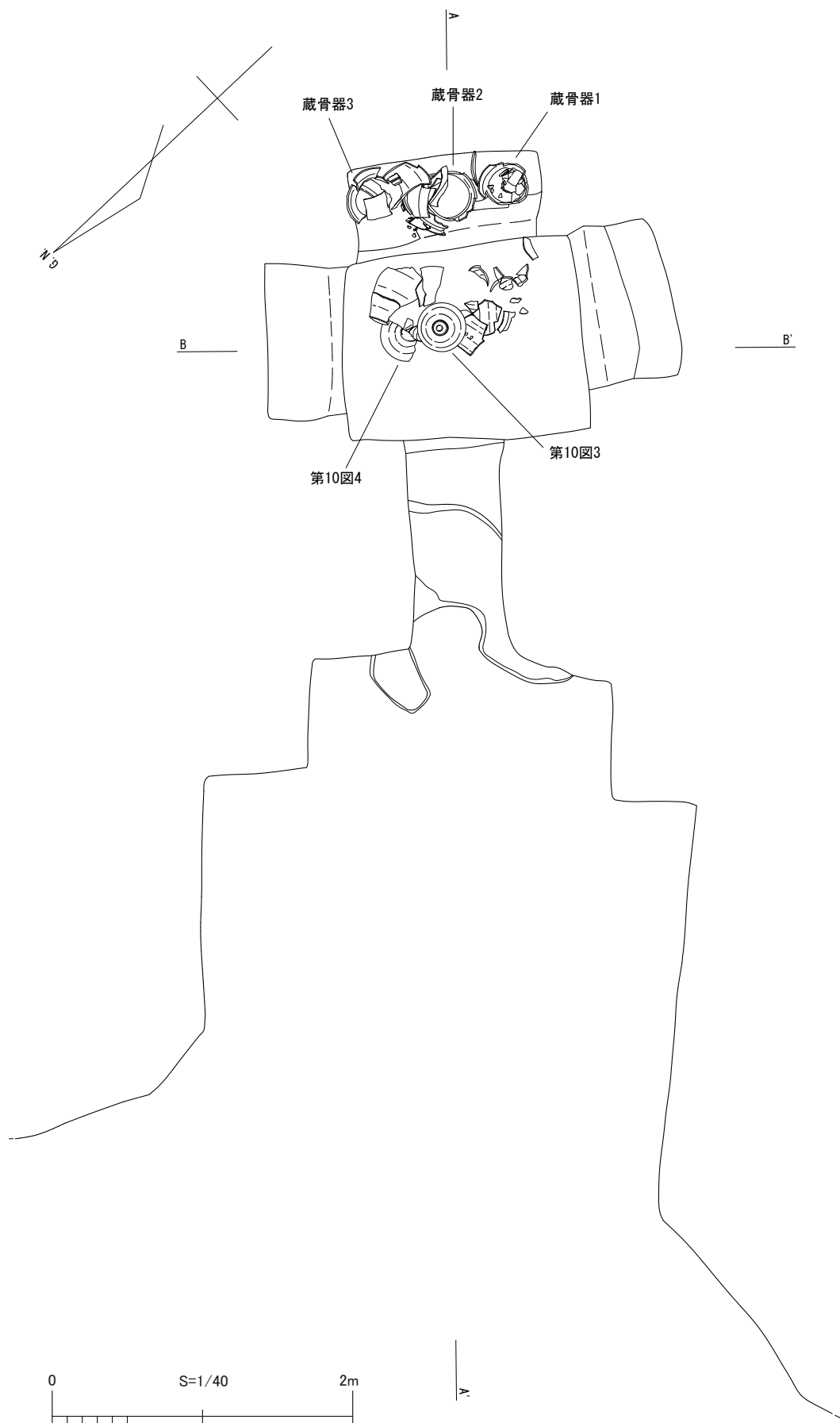
(2) 6号墓

1) 遺構(第8図、第9図)

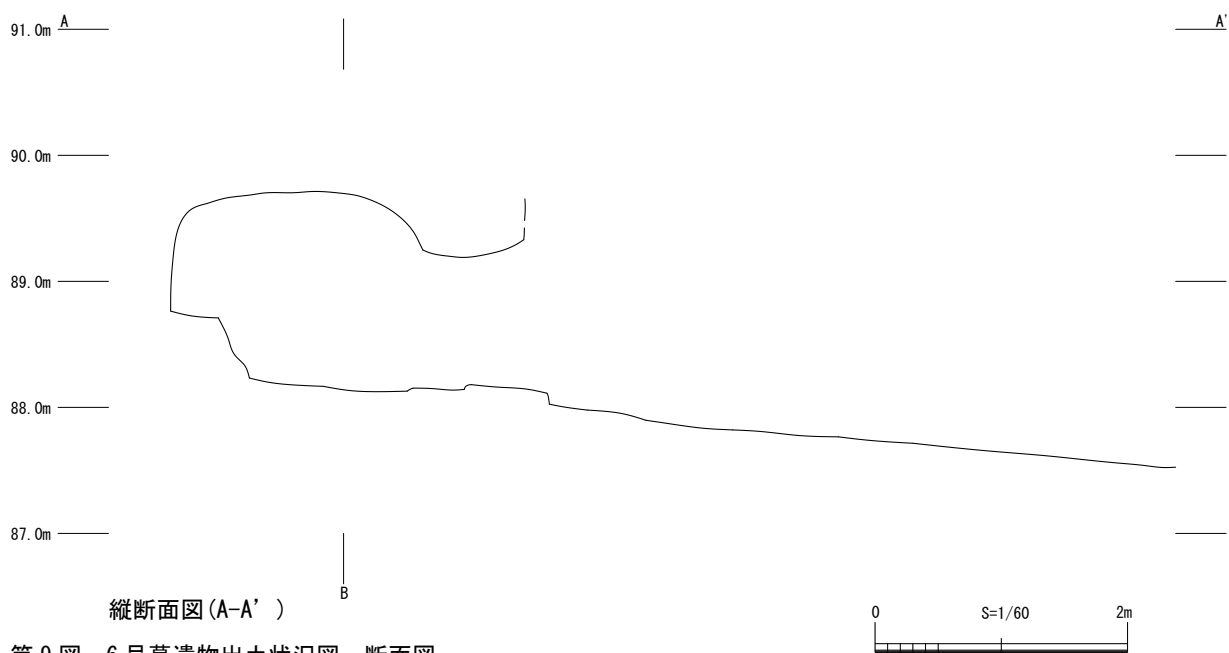
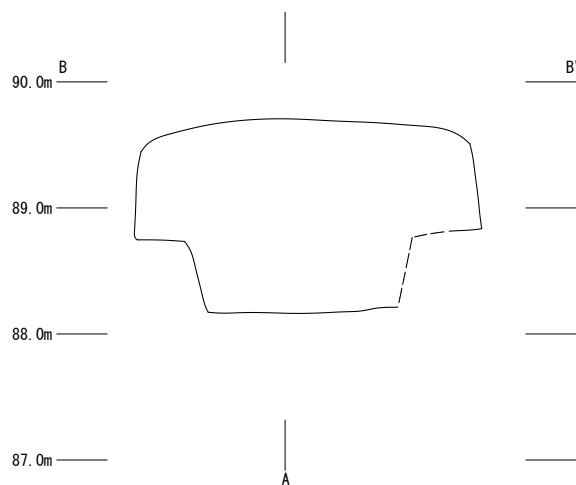
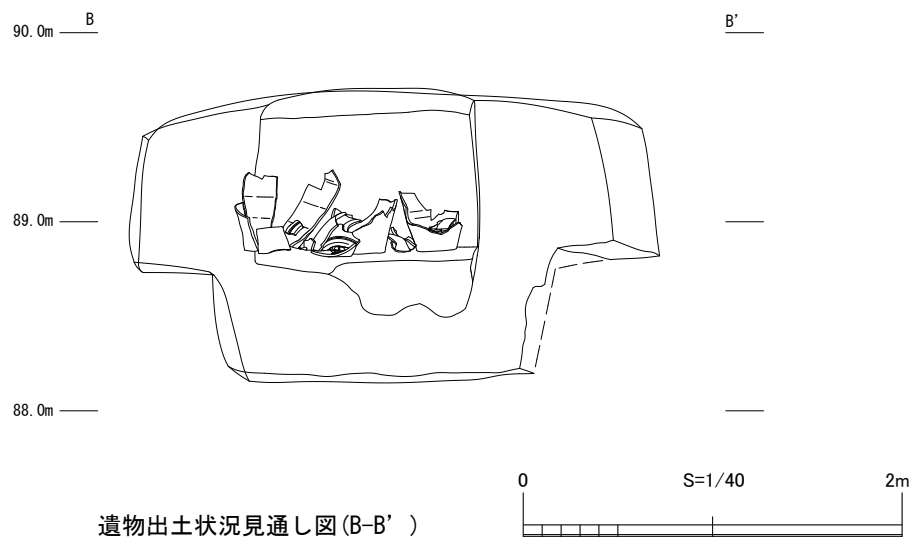
6号墓は横穴式の掘込墓で、同丘陵の頂上付近の北側斜面に位置する。墓の立地する標高は約88～91mである。この周辺はほぼ埋没していたが、表土を除去したところ墓口が検出された。墓室内はそれほど崩落土などが堆積しておらず、奥棚の上やシルヒラシから蔵骨器が数点検出された。

6号墓は墓口から直線的に幅0.6mの羨道が掘り込まれ、方形のシルヒラシの奥と左右に一段の棚が造られている。このような墓室の形状は、第1表の2類bに該当するいわゆる出窓状の棚を有する墓である。墓室の奥行きは1.88mで、幅は2.76m、墓室内の高さは1.55mである。棚の高さは約0.6mほどである。墓口方位は、北西(N47°W)。

奥棚から検出された蔵骨器は、甕形の蔵骨器の底部から胴部にかけての破片であり、概ね三点分の分量が検出された。シルヒラシや墓庭からも蔵骨器片が出土している。蔵骨器に書かれた墨書の銘書からは断片的ではあるものの、「前田村」の「石川」家の墓であることが判明した(第5表)。屋号が記載されることなどから、この石川家は百姓身分であると考えられる。



第8图 6号墓平面图

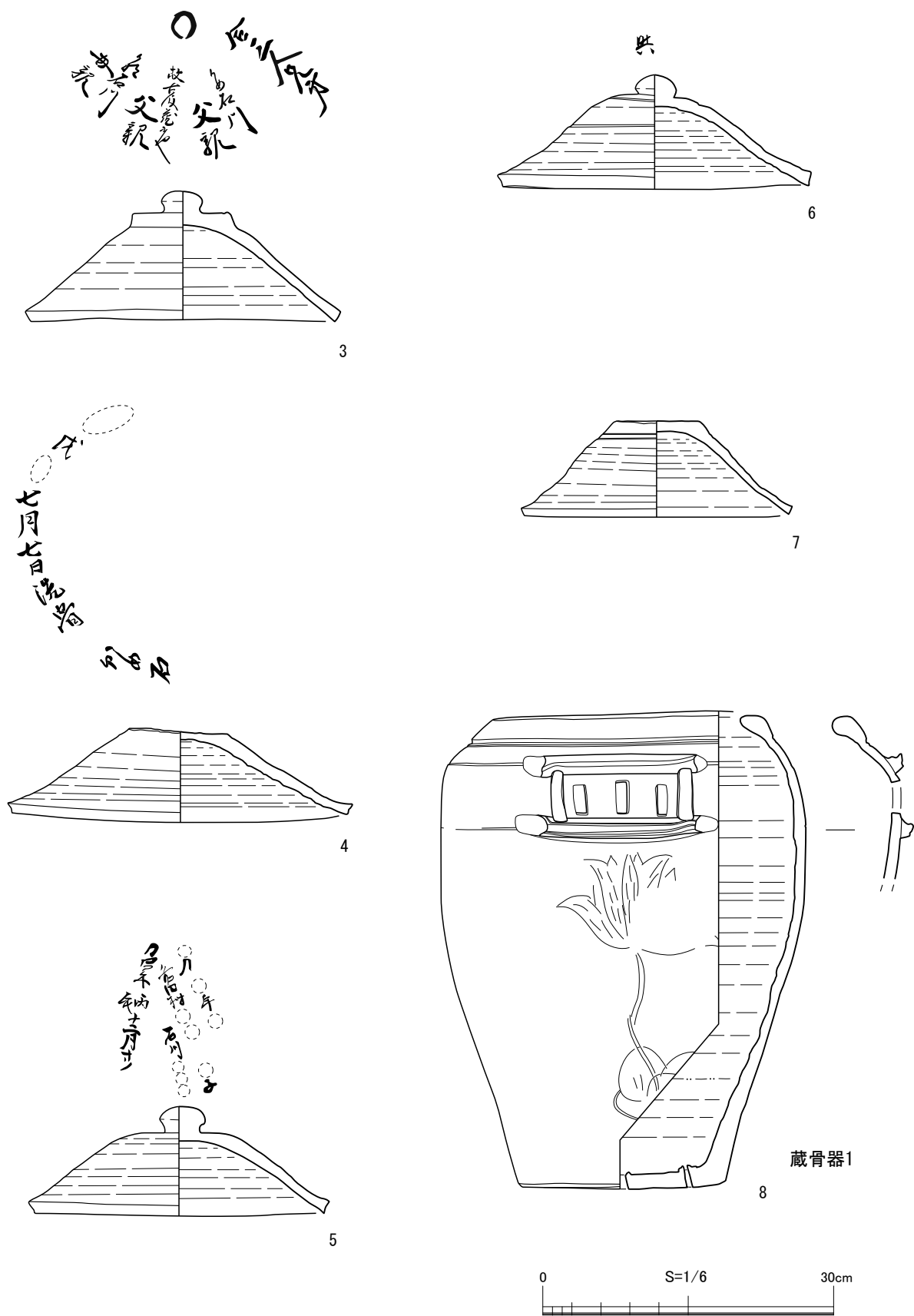


第9図 6号墓遺物出土状況図・断面図

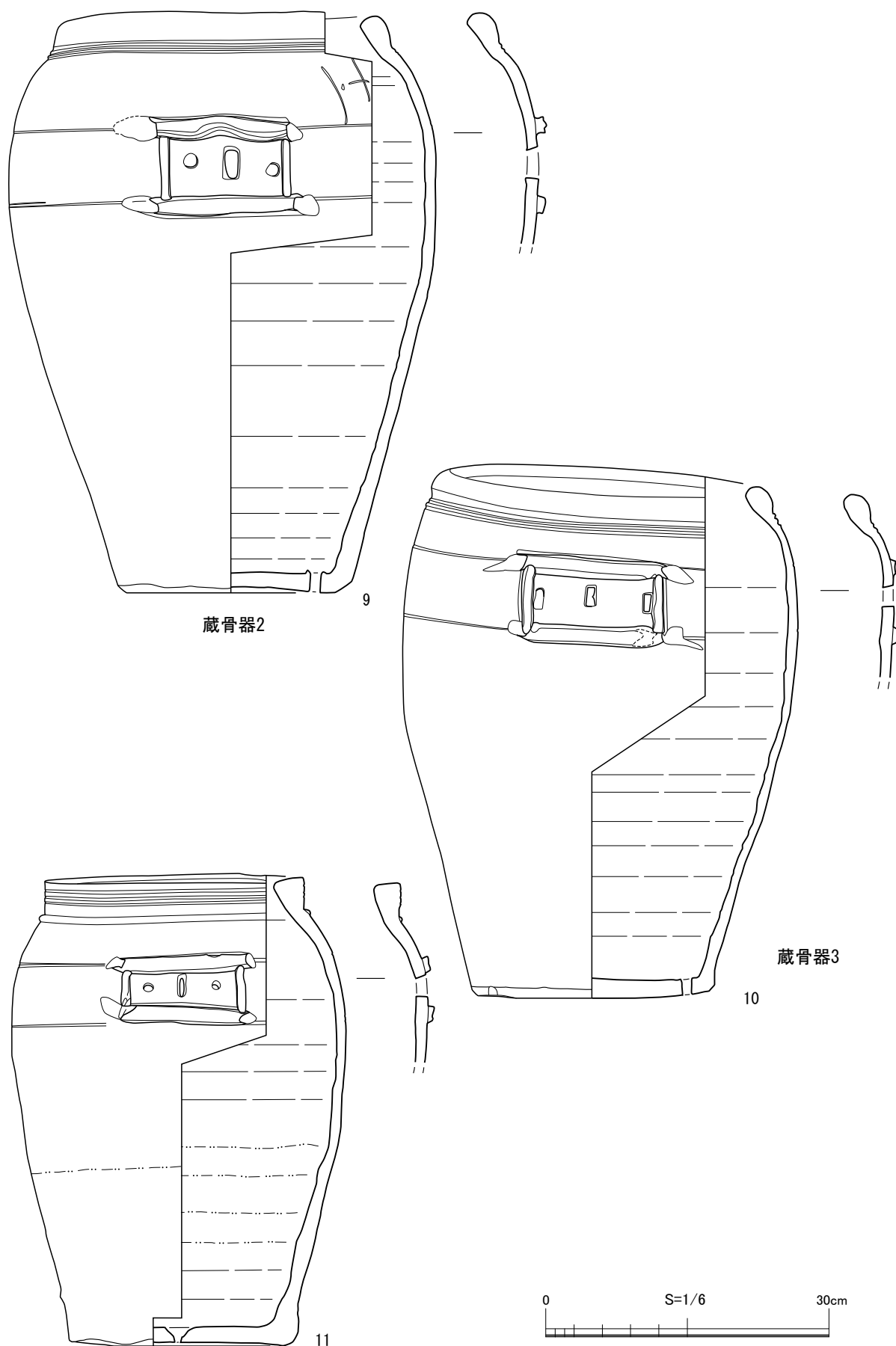
第4表 6号墓出土蔵骨器観察一覧表

図版番号	出土地点	種類	蓋	つまみ/屋根形状	接合部孔	つまみ台・圈線	鐳 (cm)	かえり (cm)	大きさ (cm) ※	文様	成形/調整	釉薬	窯印	銘書	備考
			身	マド枠 (底部cm)/屋門形	縦長軸×横長軸 (cm)	窓数/形	横帯	底面孔							
第10図3 図版16-3	墓室シルヒラシ直上	ボージャー形	蓋	饅頭形	なし	1段 (圈線1条)	なし	なし	10.0 32.6 31.4 13.5 11.2	なし	ロクロ成形。回転ヘラ削りの後、回転ナデ調整。つまみ台は削り出し、端部は平坦に成形。	なし	なし	あり	
第10図4 図版16-4	墓室シルヒラシ直上	ボージャー形	蓋	なし	—	—	なし	なし	10.2 35.5 34.4 9.8 —	なし	ロクロ成形。回転ヘラ削りの後、回転ナデ調整。頂部は調整されず。内面に水挽痕が残る。	なし	なし	あり	
第10図5 図版16-5	墓室シルヒラシ直上	ボージャー形	蓋	饅頭形	なし	なし (圈線1条)	なし	なし	7.9 31.0 29.8 11.3 8.5	なし	ロクロ成形。回転ヘラ削りの後、回転ナデ調整。端部は平坦に成形。内面に水挽痕が残る。	なし	なし	あり	
第10図6 図版16-6	墓庭表探	ボージャー形	蓋	饅頭形	なし	—	なし	なし	8.8 32.4 31.4 11.8 9.8	なし	ロクロ成形。回転ヘラ削りの後、回転ナデ調整。端部は平坦に成形。内面に水挽痕が残る。	なし	なし	あり	
第10図7 図版16-7	墓庭表探	ボージャー形	蓋	なし	—	—	なし	なし	8.4 28.0 27.2 9.9 —	なし	ロクロ成形。回転ヘラ削りの後、回転ナデ調整。頂部は調整されず。内面に水挽痕が残る。	なし	なし	なし	
第10図8 図版16-8	墓室奥棚直上 (蔵骨器1)	ボージャー形	身	平葎形 (1.7)	8.8×17.0	3個 方形	凹2 凹1	4個 円形	27.3 37.7 21.4 49.4	胴部正面に線彫りの蓮華文	口縁は玉縁で内傾する。ロクロ成形後、ヘラ削りとナデにより丁寧に調整される。	なし	なし	なし	
第11図9 図版16-9	墓室奥棚直上 (蔵骨器2)	ボージャー形	身	唐破風形 (1.3)	10.7×21.0	3個 (方形1・円形2)	凹3 凹1 凹1	6個 円形	33.8 45.2 24.8 61.7	なし	口縁はやや直立してつくられ、口唇は丸くつくられる。ロクロ成形後、回転ヘラ削り、ナデにより調整。	なし	あり	なし	
第11図10 図版16-10	墓室奥棚直上 (蔵骨器3)	ボージャー形	身	平葎形 (1.3)	10.1×16.1	3個 方形	凹3 凹1 凹1	7個 円形	31.9 41.8 25.7 56.6	なし	口縁はやや直立してつくられ、口唇は丸くつくられる。ロクロ成形後、回転ヘラ削り、ナデにより調整。	なし	なし	なし	
第11図11 図版16-11	墓庭表探	ボージャー形	身	平葎形 (0.6)	7.5×14.8	3個 (方形1・円形2)	凹3 凸1 凹1	4個 くさび形	27.3 35.4 22.6 50.2	なし	頸部が直立し、口唇が平坦でわずかに内傾する。ロクロ成形後、回転ヘラ削りとナデにより調整。	なし	なし	なし	

※大きさ (cm) は、蓋が上から上部径 / 口径 / 内径 / 器高 / 体部高、身が上から口径 / 胴径 / 底径 / 器高である。



第 10 图 6 号墓出土遺物 1



第 11 图 6 号墓出土遗物 2

墓の明確な造営年代や使用年代は不明であるが、蔵骨器のほとんどがボージャー形であることや、ボージャーの蓋Ⅴ・Ⅶ型式、身のⅡ～Ⅶ型式のものであること、ほかにマンガン釉甕形の蔵骨器も検出されていることなどから、主に 18 世紀中頃～ 19 世紀にかけて使用されていた可能性がある。遺構の埋没時期については、周辺の地形の崩落状況などから沖縄戦時か戦後に埋没したものと思われる。

2) 遺物 (第 10 図、第 11 図)

6 号墓から出土した遺物の種類と数量については、第 3 表を参照頂きたい。このうち墓室から検出された比較的残存状況の良好な蔵骨器を蓋と身あわせて 9 点について図化した。これらについては、第 4 表および第 5 表を参照頂きたい。人骨の詳細については第 5 章を参照頂きたい。

第 5 表 6 号墓出土蔵骨器の銘書一覧表

図版番号	銘書
第10図3 図版16-3	○/合三人兄弟/かめ石川/父親/故古波蔵にや/父親/かな石川/母親
第10図4 図版16-4	(判読不能)戌■七月七日洗骨かめ石<欠損>
第10図5 図版16-5	(判読不能)年■/(判読不能)■/前田村■男<欠損>■子/石川女房/同四年丙辰十二月十六日
第10図6 図版16-6	與<欠損>

(3) 31 号墓

1) 遺構 (第 12 図)

31 号墓は横穴式の掘込墓で、同丘陵の南側斜面下段の東側に位置する。墓の立地する標高は約 84～86m である。この周辺は段状の地形で二段にわたり墓が形成されている。本墓が位置する下段については、調査前はほぼ埋没していたが、表土を除去したところ墓口が横並びに検出された。31 号墓は天井部が崩落して埋没していたが、表土を除去したところ遺構内に蔵骨器が安置された状態で確認された。

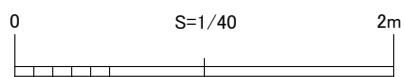
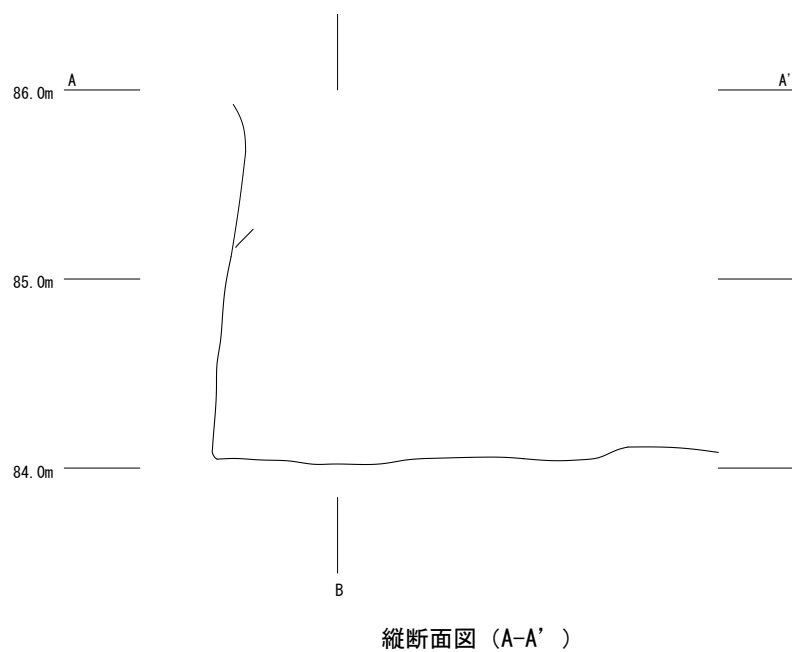
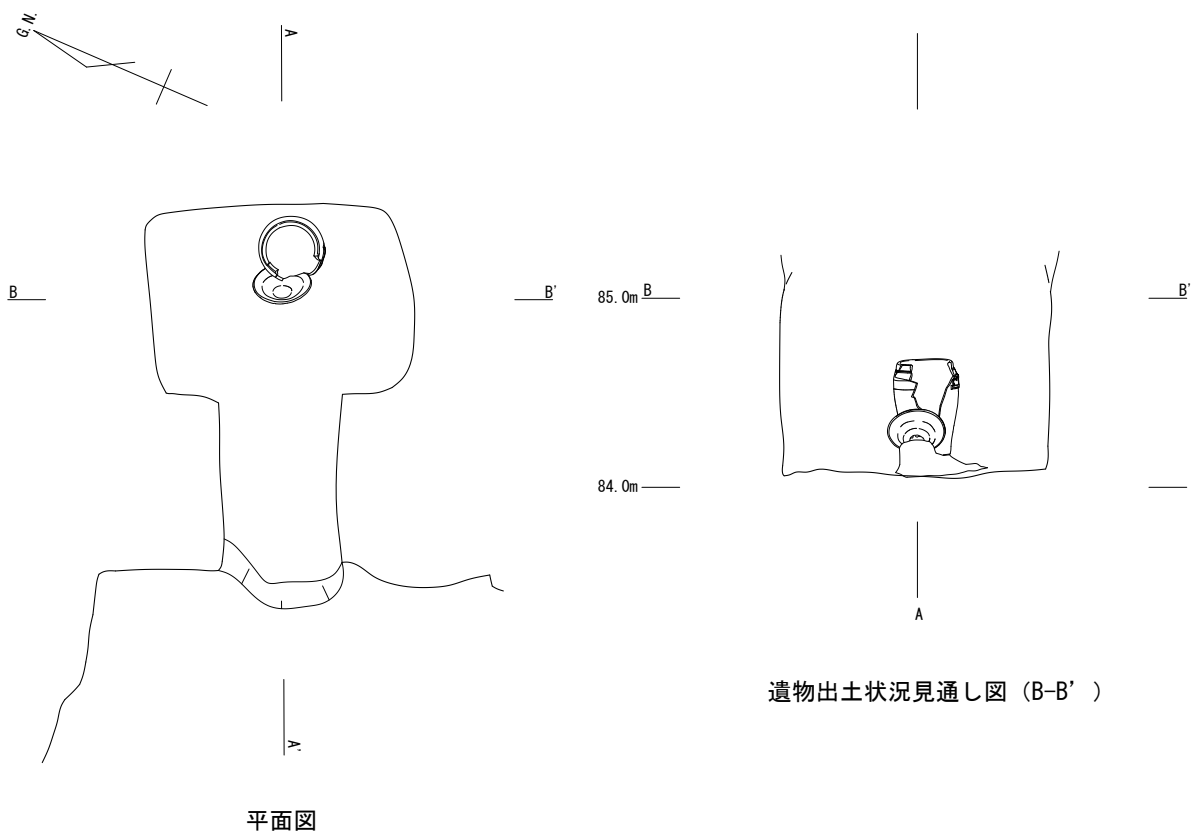
31 号墓は、墓口から直線的に幅 0.66m の羨道が掘り込まれ、奥にほぼ方形の墓室が造られている。墓室内に柵は造られていない。墓室の奥行きは 1.00m で、幅は 1.40m、天井が崩落により残存していないため、墓室内の高さは不明である。墓口方位は、西南西 (N113° W) である。

蔵骨器の身が墓室のほぼ中央の奥壁付近に直立した状態で検出されており、蓋は身の前面に滑り落ちた状態で出土した。蔵骨器内には人骨が残存していた。

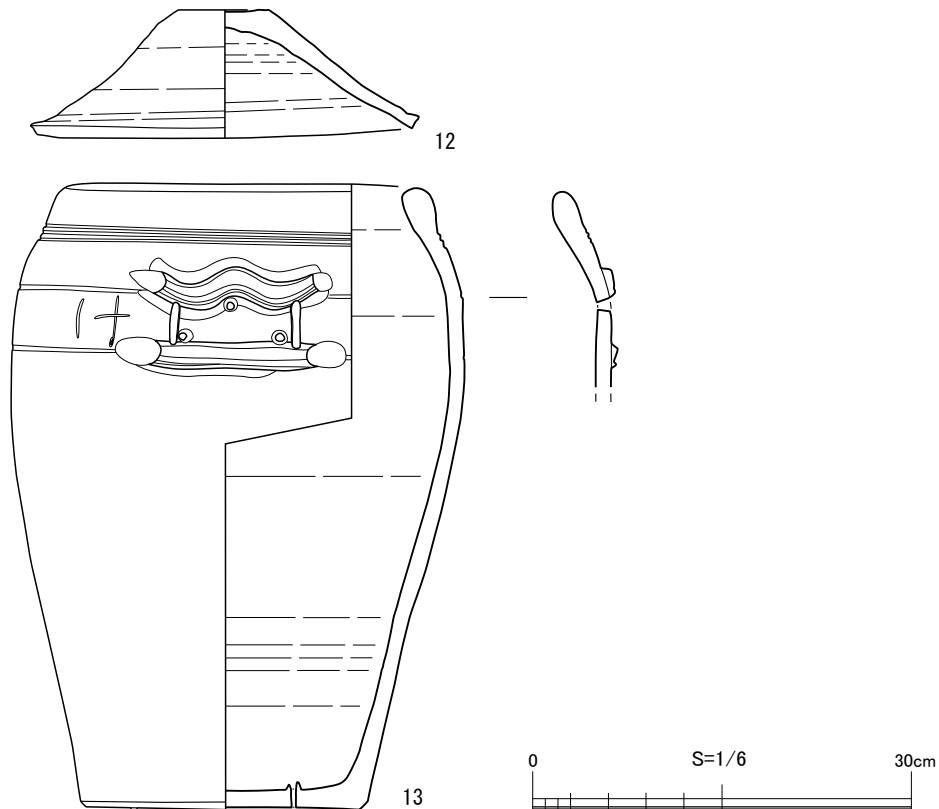
墓の明確な造営年代は不明であるが、検出された蔵骨器がボージャー形であり、かつ蓋はⅦ型式・身はⅢ型式のものであることから、1750 年代～ 90 年代にかけて使用された可能性がある。遺構の埋没時期は周辺の地形の崩落状況などから、沖縄戦時か戦後に埋没したものと思われる。

2) 遺物 (第 13 図)

31 号墓から出土した遺物の種類と数量については、第 3 表を参照頂きたい。このうち墓室から検出された比較的残存状況の良好な蔵骨器 1 点について図化した。この蔵骨器については、第 6 表の観察表を参照頂きたい。人骨の詳細については、第 5 章を参照頂きたい。



第 12 図 31 号墓平面図・遺物出土状況図・断面図



第 13 図 31 号墓出土遺物

第 6 表 31 号墓出土蔵骨器観察一覧表

図版番号	出土 地点	種類	蓋	つまみ/屋 根形状	接合部孔	つまみ 台・圈線	鐫 (cm)	かえり (cm)	大きさ (cm) ※	文様	成形/調整	釉薬	窯印	銘書	備考
			身	マド枠(底部 cm)/屋門形	縦長軸× 横長軸 (cm)	窓数/形	横帯	底面 孔							
第13図12 図版17-12	墓室	ポー ジャー 形	蓋	なし	—	—	なし	なし	7.7 30.8 29.6 10.2 —	なし	ロクロ成形。回転ヘラ 削りの後、回転ナデ調 整。頂部は調整されず。 内面は丁寧なナデ調 整。	なし	なし	なし	
第13図13 図版17-13	墓室	ポー ジャー 形	身	唐破風形 (0.7)	8.3× 13.4	3個 (円形)	凹3 凹1 凹1	7個 くさび 形	28.6 36.0 22.8 49.8	なし	口縁はやや直口し、口 唇は丸くつくられる。 ロクロ成形後、回転ヘ ラ削り回転ナデが施さ れる。	なし	あり	なし	

※大きさ (cm) は、蓋が上から上部径 / 口径 / 内径 / 器高 / 体部高、身が上から口径 / 胴径 / 底径 / 器高である。

(4) 37 号墓

1) 遺構 (第 14 ~ 16 図)

37 号墓は横穴式の掘込墓で、同丘陵の南側斜面中段やや西よりに位置する (第 4 図)。墓の立地する標高は約 85 ~ 89m である。周辺は上下二段に墓が形成されている。本墓の周辺は伐採後に地形が窪んでいたことから重機で掘削を行ったところ、墓口が検出された。墓口及び羨道の埋土を除去したところ墓室が検出され、1 番柵の上から蔵骨器 3 点が安置された状態で検出された。羨道部分に円形の窪みが確認されたが、この周辺から不発弾が発見されたことから、戦時中の攪乱であると考えられる。

37 号墓の墓室は、墓口から幅 0.64m の羨道が掘り込まれ、墓室部分はほぼ方形に造られている。墓室内には、柵が三段あり、三番柵はコの字状に造られている。天井部は、円弧状に造られる。墓室の奥行きは 2.57m で、幅は 2.42m、墓室内の高さは 2.10m である。墓口方位は、南西 (N143° W)

である。

墓室の一番棚に蓋がつく金属製の缶が2点と陶製の蔵骨器が1点の計3点が検出された。金属製の缶からは人骨が検出されたことから、蔵骨器として転用されたものと考えられる。また、陶製の蔵骨器は小型の火葬用のものであり、中には人骨はなくレンガに文字が墨書きされた誌板が検出された。

墓の明確な造営年代は不明であるが、検出された金属製の缶には英語の記載があることから、戦後の米軍統治下のものである可能性が高い。また、同じく一番棚から検出された火葬用の蔵骨器からは一九八五年の銘が確認されたことから、同墓は近年まで機能し使用されていたと考えられる。

墓庭の左袖側の延長部に溝が検出された。この墓は前述したように戦後まで使用されたと考えられるが、ここが墓への通路になっていたと考えられる。

2) 遺物 (第17図)

37号墓から出土した遺物の種類と数量については、第3表を参照頂きたい。このうち墓室から検出された金属製の缶2点と陶製の蔵骨器1点を掲載した。人骨の詳細は、第5章を参照頂きたい。

第17図14・15と16・17は、金属製の缶である。第17図14は、缶の蓋で平面形は隅が丸い四角である。蓋には取手がつき、取手の下部がねじ式である。サイズは22.4×22.4cm。厚さ2.3cm。第17図15は、缶の身で形状は蓋と同様に平面形は隅が丸い四角である。缶内部の中央上部にはまる仕切り板にネジ穴があり、蓋と取手のネジ部がはまるようになっている。缶の底は平底である。缶の表面にはアルファベットと数字の表記が読み取れるが、全体に錆がひどく不明瞭である。サイズは21.6×21.6cm、高さ38.8cm、厚さは約2mmである。第17図14・15は、組み合わさった状態で出土した(第16図蔵骨器2)。

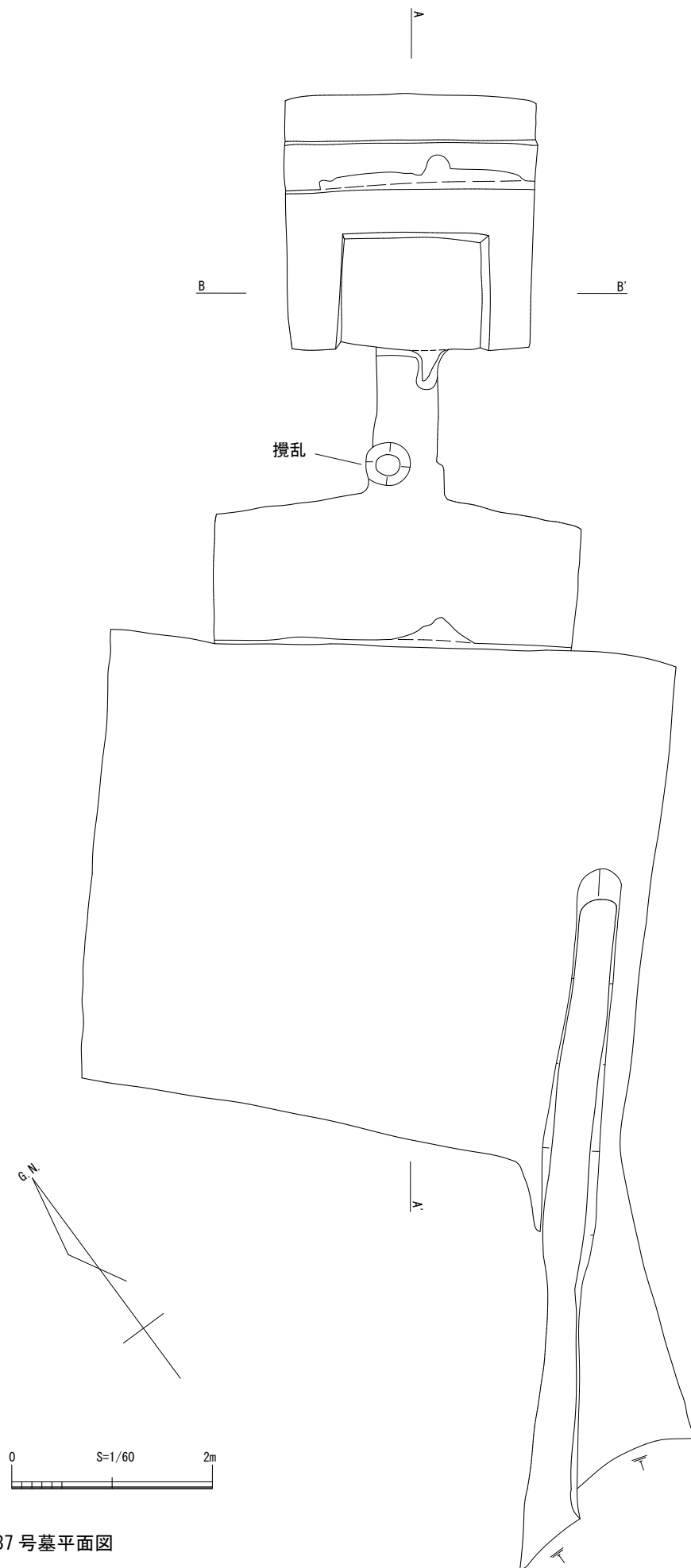
第17図16・17は、第17図14・15と同型品で、サイズや状態は同様である(第16図蔵骨器3)。

第17図18・19は、陶製の蔵骨器である。大きさ等から火葬用の蔵骨器であると思われる(第16図蔵骨器1)。詳細は第7表に記した。蔵骨器内に骨はなく、陶製の誌板が一点入れられていた(巻末図版17の19-a)。誌板は長方形のレンガで、縦21.5×横5.0cm、厚さは2.3cm、重量は432gである。墨書きで表裏面に「前兼久孫／次男高門夫婦(高門の子)」、側面に「昭和六十年(西暦一九八五)記入する」と記載されている。誌板は、前田真知堂B丘陵からも出土例がある(浦添市教育委員会2012)。

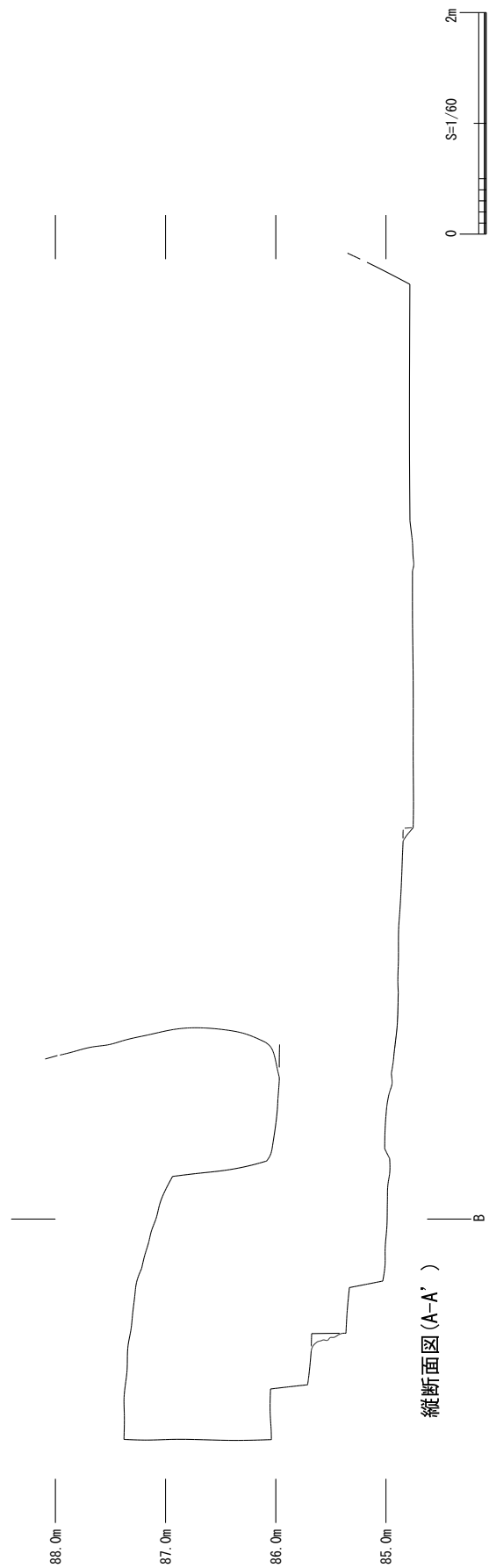
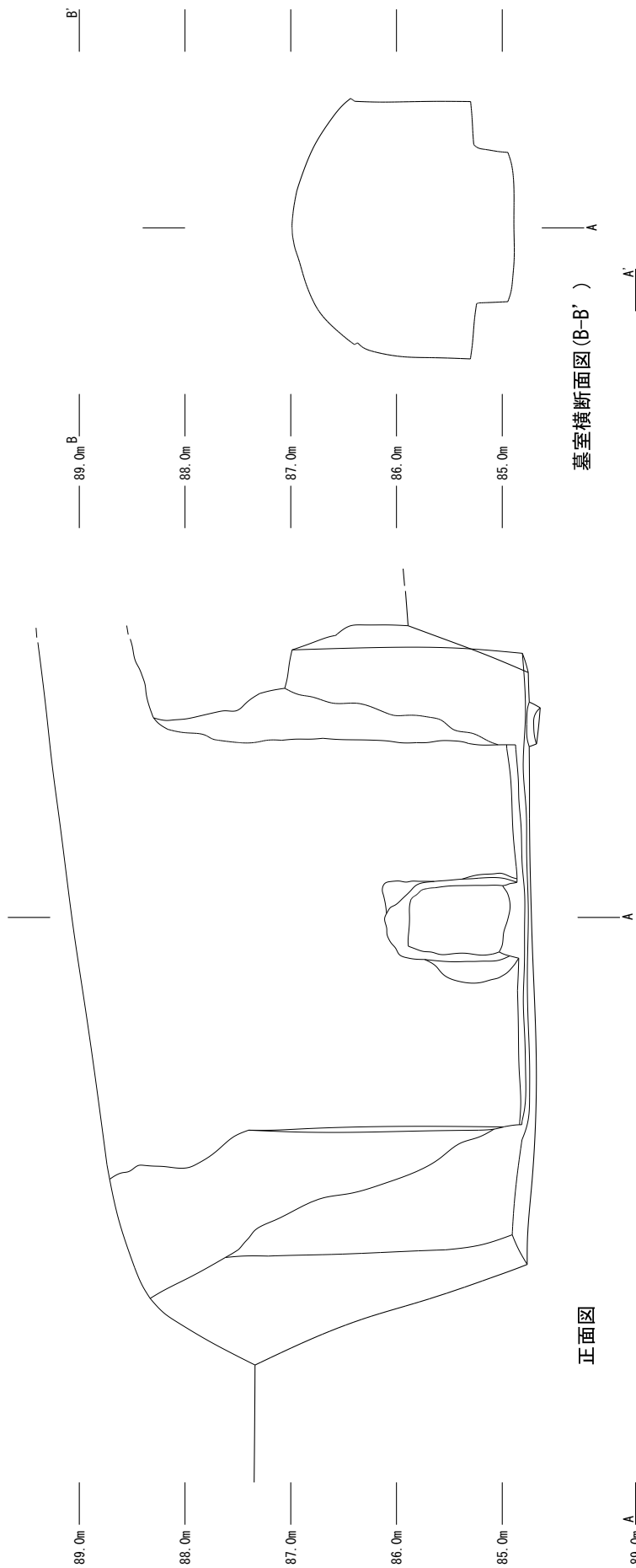
第7表 37号墓出土蔵骨器観察一覧表

図版番号	出土地点	種類	蓋	つまみ/屋根形状	接合部孔	つまみ台・圏線	罫(cm)	かえり(cm)	大きさ(cm)※	文様	成形/調整	釉薬	窯印	銘書	備考
			身	マド枠(底部cm)/屋門形	縦長軸×横長軸(cm)	窓数/形	横帯	底面孔							
第17図18 図版17-18	墓室内一番棚(蔵骨器1)	火葬用	蓋	なし	—	—	1.3	1.1	— 17.5 12.4 4.0 —	なし	ロクロ成形後、全体を回転ナデにより丁寧に調整。	緑釉	なし	なし	
第17図19 図版17-19	墓室内一番棚(蔵骨器1)	火葬用	身	唐破風形(0.6)	21.9×12.4	なし	— 縄状1凹1	なし	17.9 20.7 16.1 30.9	肩部:玉飾り(8ヶ) 胴部:蓮華文(沈線) 胴下部:なし	口縁はわずかに外反し、口唇は平坦につくられる。ロクロ成形後、全体をナデ調整。	緑釉	なし	なし	屋門内は露胎

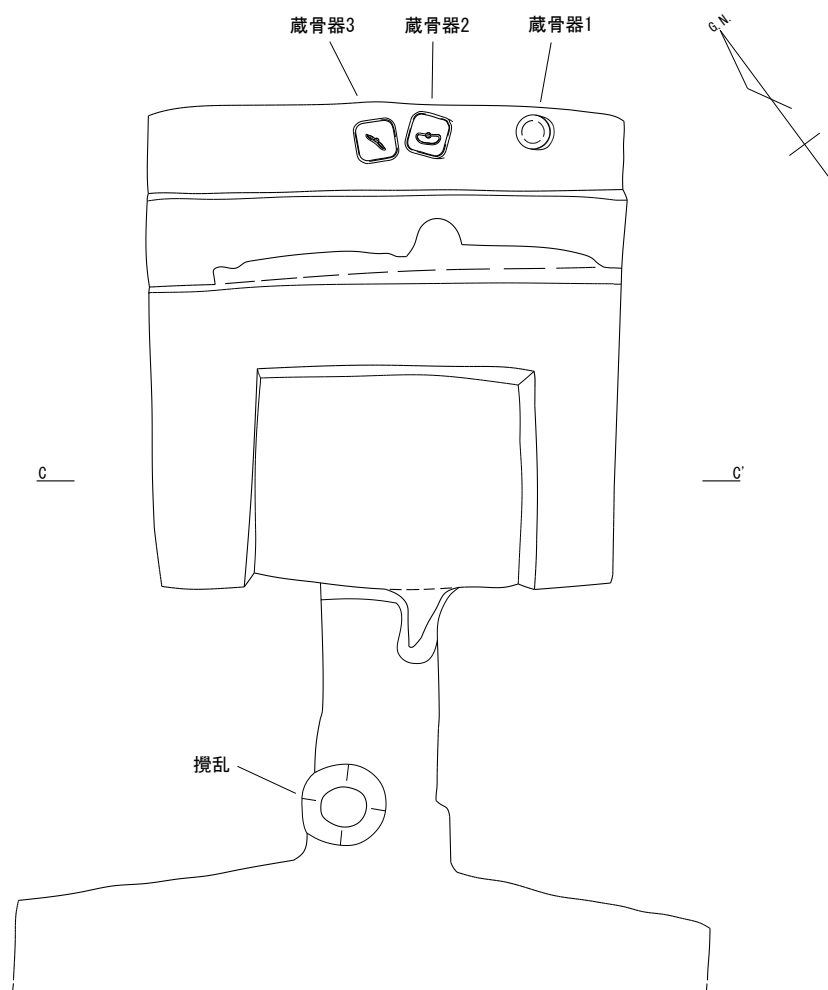
※大きさ (cm) は、蓋が上から上部径 / 口径 / 内径 / 器高 / 体部高、身が上から口径 / 口径 / 底径 / 器高である。



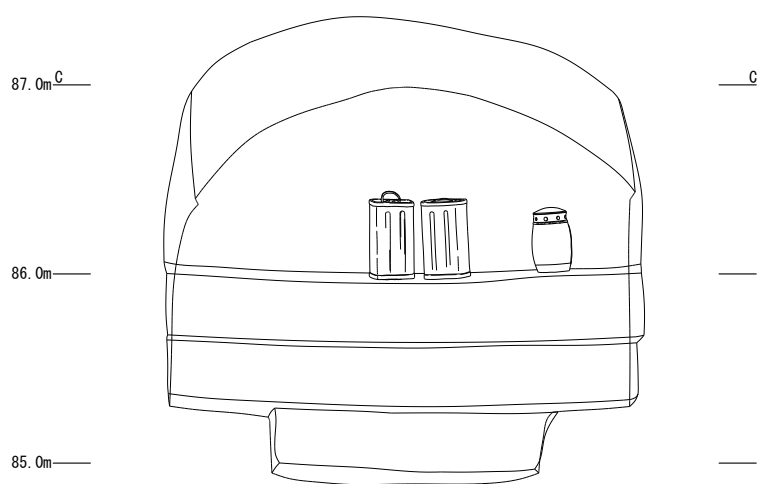
第 14 图 37 号墓平面图



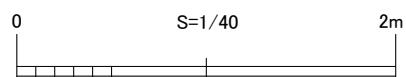
第15図 37号墓正面図・断面図



遺物出土状況平面図



遺物出土状況見通し図 (C-C')



第 16 図 37 号墓遺物出土状況図



14



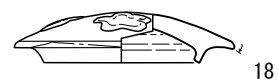
16



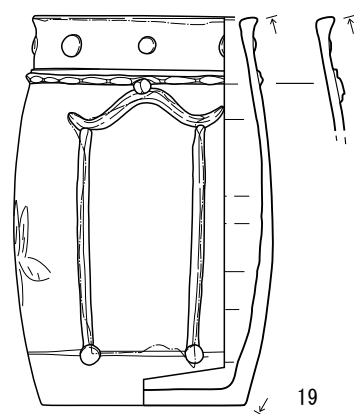
藏骨器2 15



藏骨器3 17

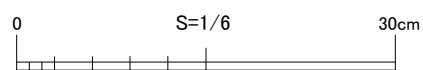


18



19

藏骨器1



第 17 图 37 号墓出土遺物

(5) 38号墓

1) 遺構 (第 18 図)

38号墓は横穴式の掘込墓で、同丘陵の南側斜面下段の西側に位置する(第4図)。墓の立地する標高は約82～83.5mである。この周辺は丘陵の裾部に小規模な墓が横並びに造られている。本墓の周辺は伐採後に、地形が窪んでいたことから重機で掘削及び人力で掘削を行ったところ、墓室入口が検出された。墓の前面部は崩落により残存していなかったが、遺構の残存部より蔵骨器が数点検出された。

墓室は、おおむね方形を呈するが不定形である。遺構の奥壁側がわずかに段になっていることから棚が一段造られていたと考えられるが、遺構の残存状態が良くないため判然としない。墓室の天井は残存しており、中央が高く屋根状に成形されている。墓室の奥行きは1.20m、幅は1.14m、墓室内の高さは1.24mである。墓口方位は、南(N176°W)である。

墓室内からは、マンガン釉甕形の蔵骨器片や陶器の壺などが検出された。陶器の壺は墨書きの銘書が確認されたことから蔵骨器として転用されたものであると考えられる。第9表に記したように蔵骨器の銘書からは断片的ではあるものの、「四男石川」「松石川」「筑登之親雲上」の文字が確認できることから、百姓層・石川家の分家の家族墓であると考えられる。

墓の明確な造営年代や使用年代は不明であるが、検出されたマンガン釉甕形の蔵骨器が検出されており、概ねIV期に属する資料であることから1850～1890年代には使用されていた可能性がある。埋没時期については、周辺の地形の崩落状況などから沖縄戦時か戦後まもなくには埋没したものと考えられる。

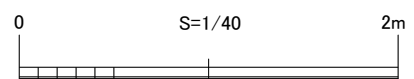
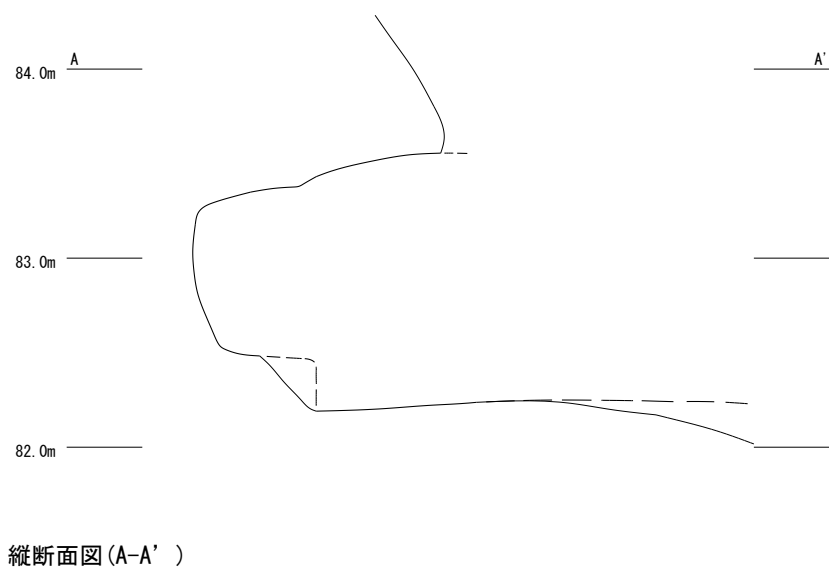
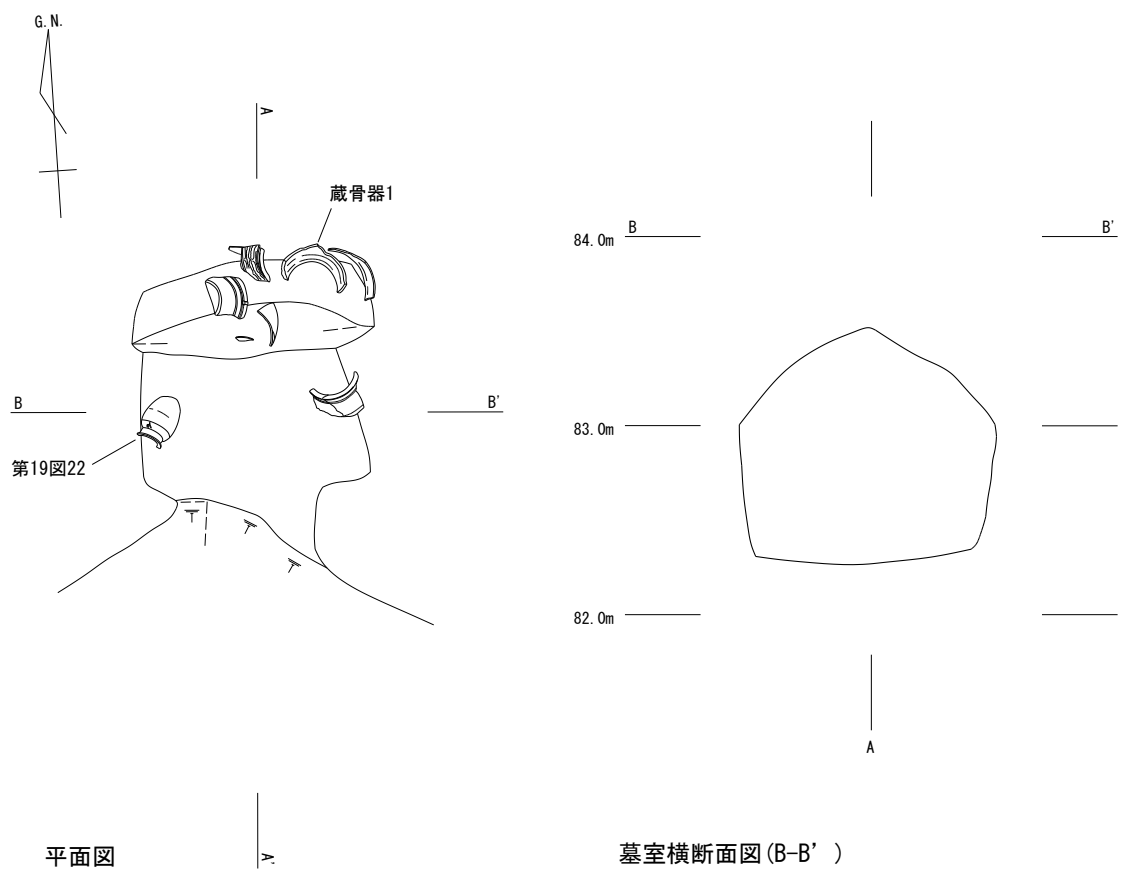
2) 遺物 (第 19 図)

38号墓から出土した遺物の種類と数量については、第3表を参照頂きたい。このうち墓室から検出されたマンガン釉甕形の蔵骨器1点と蔵骨器に転用された陶器の壺1点、墓室埋土より検出された銭貨2点について図化した。蔵骨器の詳細については、第8表および第9表の観察表を、人骨の詳細については、第5章を参照頂きたい。また銭貨については、第10表のとおりである。

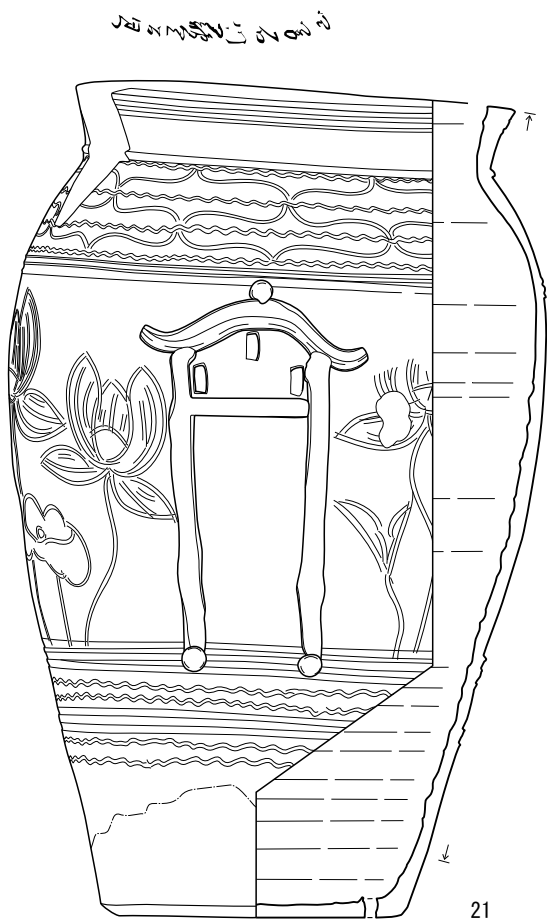
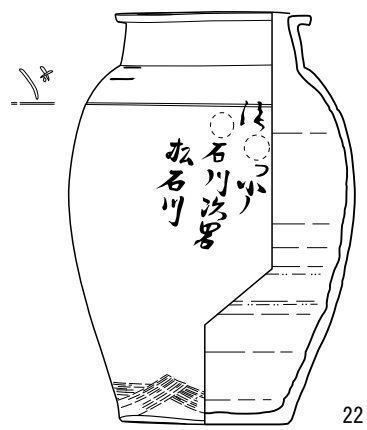
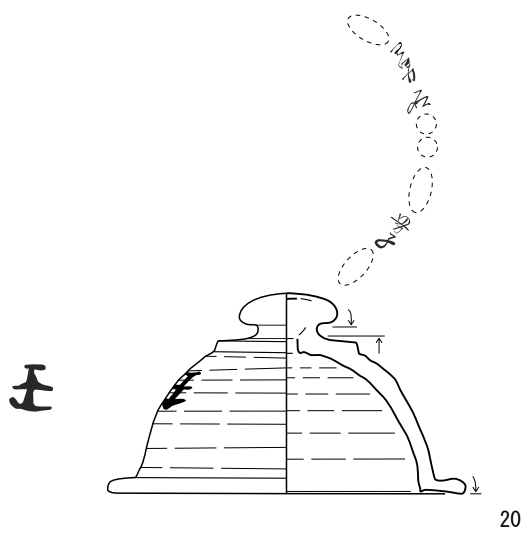
第8表 38号墓出土蔵骨器観察一覧表

図版番号	出土地点	種類	蓋	つまみ/屋根形状	接合部孔	つまみ台・圏線	鐫(cm)	かえり(cm)	大きさ(cm)※	文様	成形/調整	釉薬	窯印	銘書	備考
			身	マド枠(庇部cm)/屋門形	縦長軸×横長軸(cm)	窓数/形	横帯	底面孔							
第19図20 図版17-20	墓室	マンガン釉甕形	蓋	饅頭形	有孔	1段	3.3	0.2	10.8 28.4 21.0 15.9 12.1	なし	ロクロ成形後、つまみ台は削り出し。回転ヘラ削りとナデにより調整される。	マンガン釉	なし	あり	
第19図21 図版17-21	墓室(蔵骨器1)	マンガン釉甕形	身	唐破風形	30.1×18.1	3個(方形)	凹2 凸1 凸3 凸3凹2	12個(三日月形)	34.8 42.7 24.1 66.5	肩部:波状文+不明文(沈線) 胴部:蓮華文(沈線) 胴下部:波状文(沈線)	口縁は外反し、口唇は平坦に成形。ロクロ成形後、全体を丁寧なナデ調整。	マンガン釉	なし	あり	
第19図22 図版17-22	墓室	転用壺	身	なし	-	なし	一 一 凹1	なし	15.7 22.8 13.2 32.8	なし	口縁が直角に開き、口唇が平坦につくられる。ロクロ成形後、ヘラ削りとナデ調整。	なし	あり	あり	

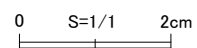
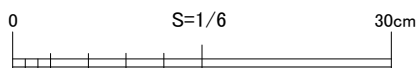
※大きさ (cm) は、蓋が上から上部径 / 口径 / 内径 / 器高 / 体部高、身が上から口径 / 胴径 / 底径 / 器高である。



第 18 図 38 号墓平面図・断面図



蔵骨器1



第 19 図 38 号墓出土遺物

第 9 表 38 号墓出土蔵骨器の銘書一覧表

図版番号	銘書	備考
第19図20 図版17-20	四男石川筑登之親雲上男子牛	表面にも記号が書かれる
第19図21 図版17-21	四男石川筑登之親雲上井同人(欠損)	
第19図22 図版17-22	後(カ)(判読不能)小ノ/■石川次男/松石川	

第 10 表 38 号墓出土銭貨一覧表

図版番号	出土地点	銭種	寸法(mm)・重量(g)						備考
			輪外径	輪内径	郭外径	郭内径	厚さ	重量	
第19図23 図版18-23	墓室埋土	景興通宝	24.47	19.22	8.33	6.18	0.85	1.96	
第19図24 図版18-24	墓室埋土	寛永通宝	23.30	17.25	8.20	6.34	1.09	2.27	

(6) 41 号墓

1) 遺構 (第 20 図、第 21 図)

41 号墓は横穴式の掘込墓で、同丘陵の西端の下段に位置する(第 4 図)。墓の立地する標高は約 80～83m である。この周辺は舌状に伸びる緩斜面で、丘陵の裾部に 4 基の墓が位置する。本墓はそのうちの 1 基である。遺構の周辺は伐採後に、墓の正面上部の一部が確認できる状況で、墓庭は完全に埋没していた。重機で埋土の掘削を行ったところ墓口を検出した。墓室内の調査をするにあたり、天井に崩落がみられたため天井部を落とした上で調査を行った。墓室内を調査した結果、蔵骨器数点とシルヒラシから一次葬人骨を検出した。

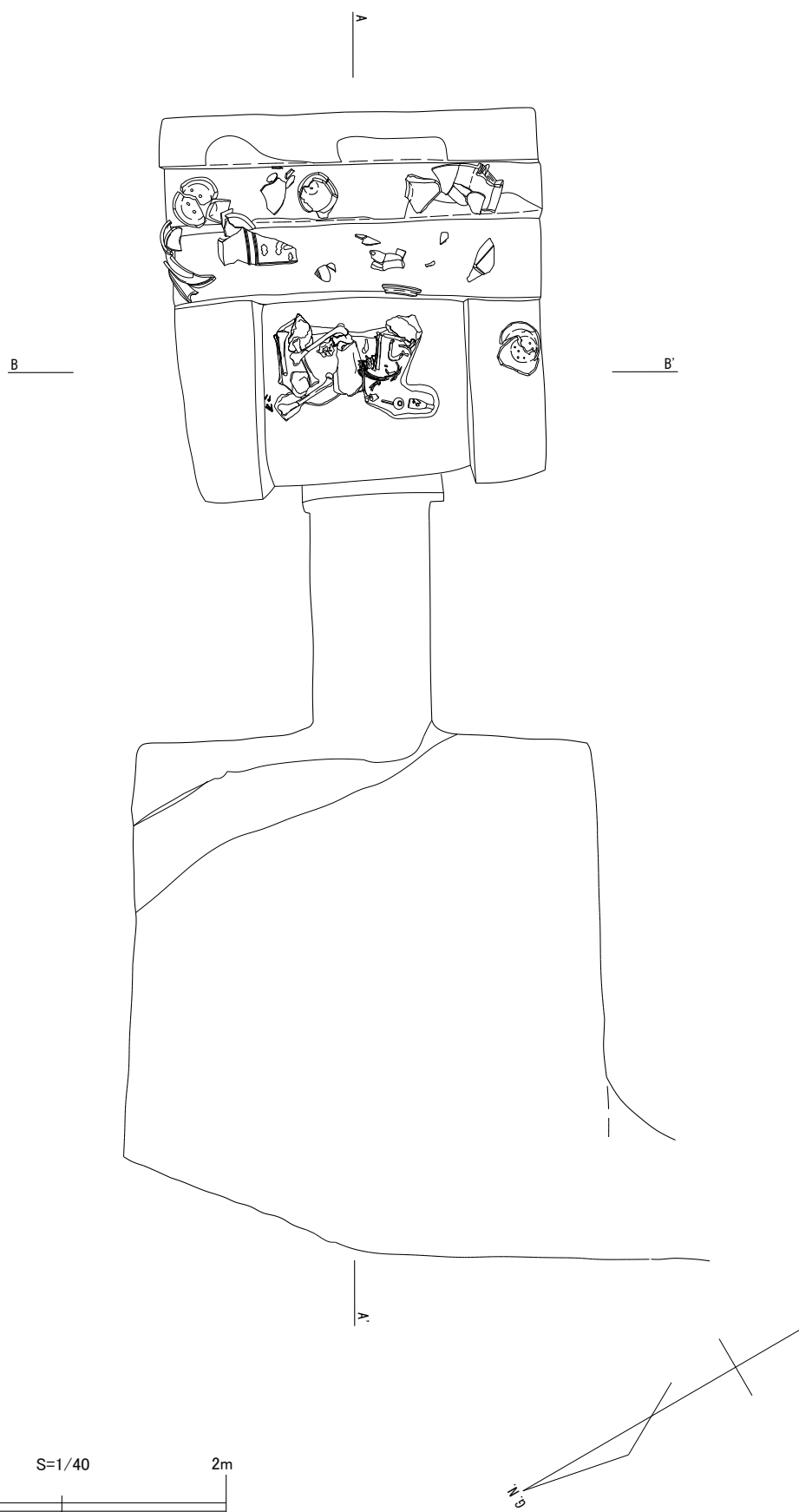
墓室は、墓口から直線的に幅 0.72m の羨道が掘り込まれ、墓室は概ね方形に造られる。遺構の奥壁側に三段の棚が造られ、左右棚が一段造られる。墓室の奥行きは 2.24m で、幅は 2.22m、墓室内の高さは不明である。墓口方位は、北西 (N48° W) である。

墓室内からは、複数の蔵骨器が破片になった状態で検出された。蔵骨器の銘書からは、「初代嶋袋筑登之親雲上」「かめ嶋袋」「浦添村字前田」などの文字が確認できることから、前田村の百姓層である嶋袋家の墓であると考えられる。また、儀保村や中城村といった村の名前もみられ、嶋袋家の者が他の村から妻を迎えたことなどが把握できる資料も出土している。

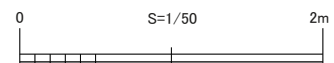
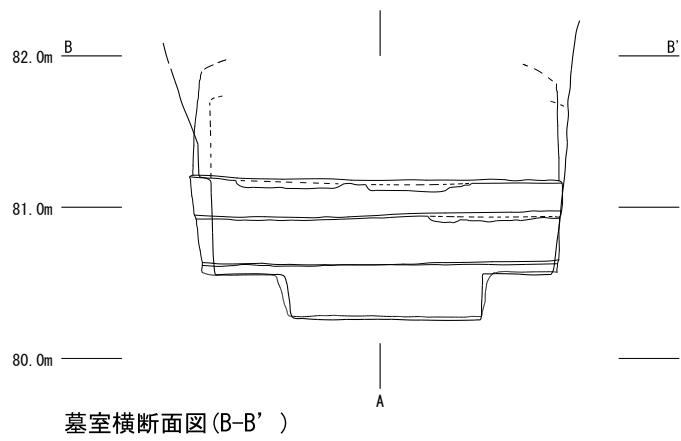
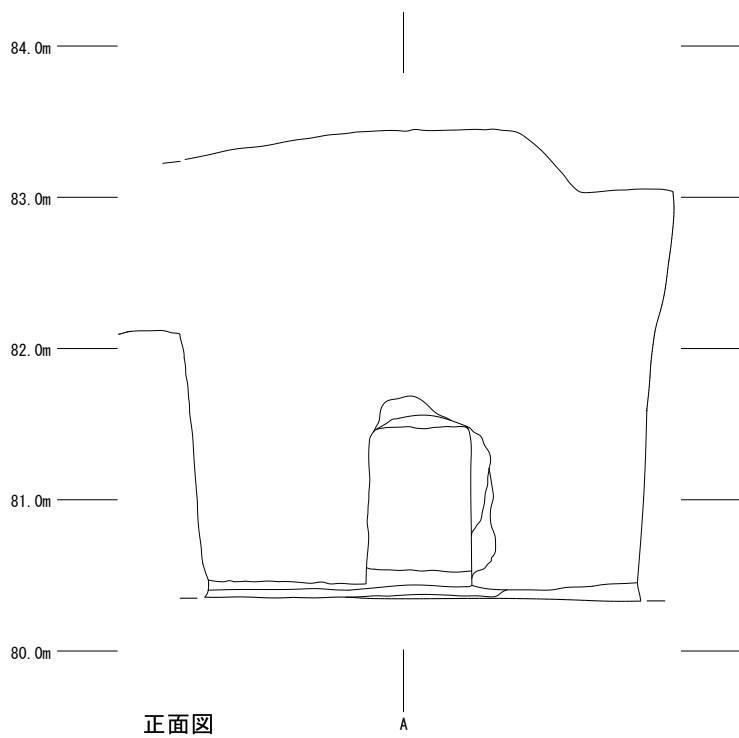
墓の明確な造営年代や使用年代は不明であるが、蔵骨器の中で年代的に比較的古手のものがボージャー形の蔵骨器の身で V 期 (1720～1770 年代) に相当する資料である。また、マンガン釉底付甕形の資料が概ね III 期から IV 期 (1810～1890 年代) に相当することや、マンガン釉甕形の蓋の銘書に「明治四十四年」(1911 年) の銘があることなどから、おおよそ 18 世紀中頃～20 世紀初めにかけて使用された墓であると考えられる。周辺の地形の状況から考えて戦時中もしくは戦後に埋没した可能性が考えられる。

2) 一次葬人骨 (第 22 図)

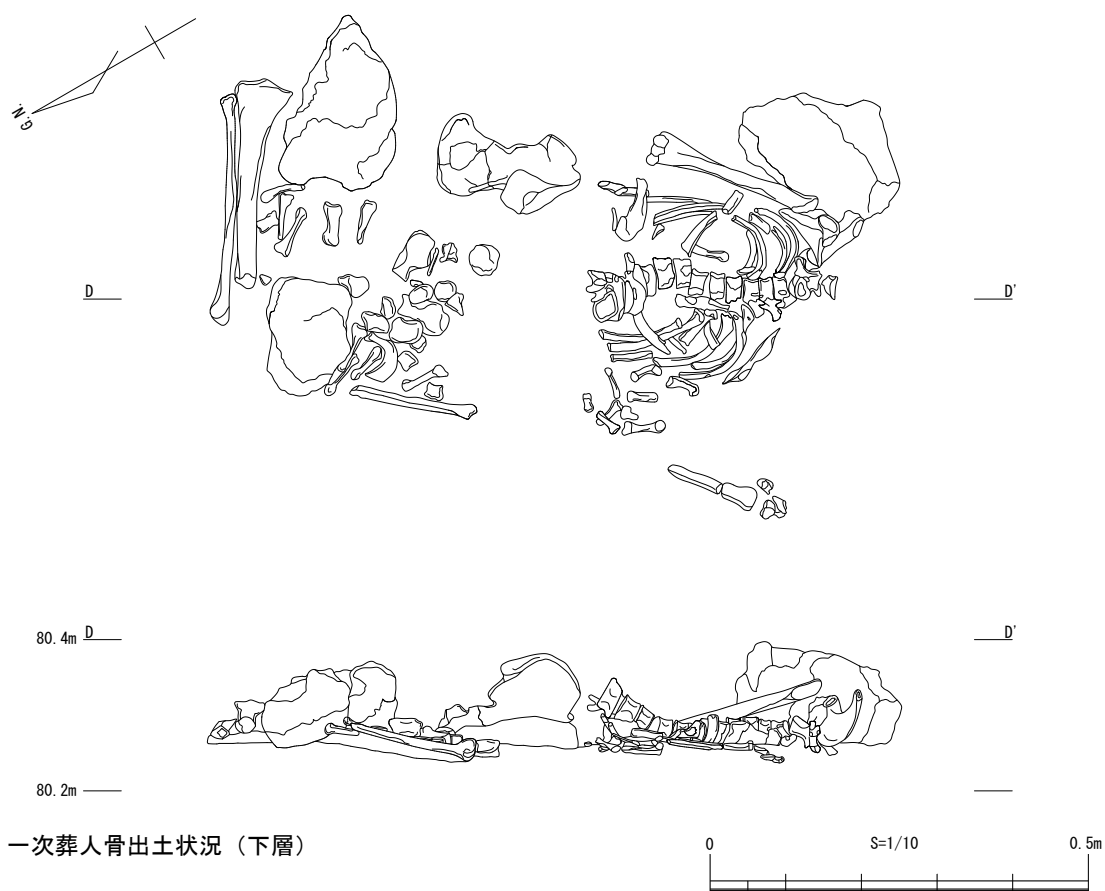
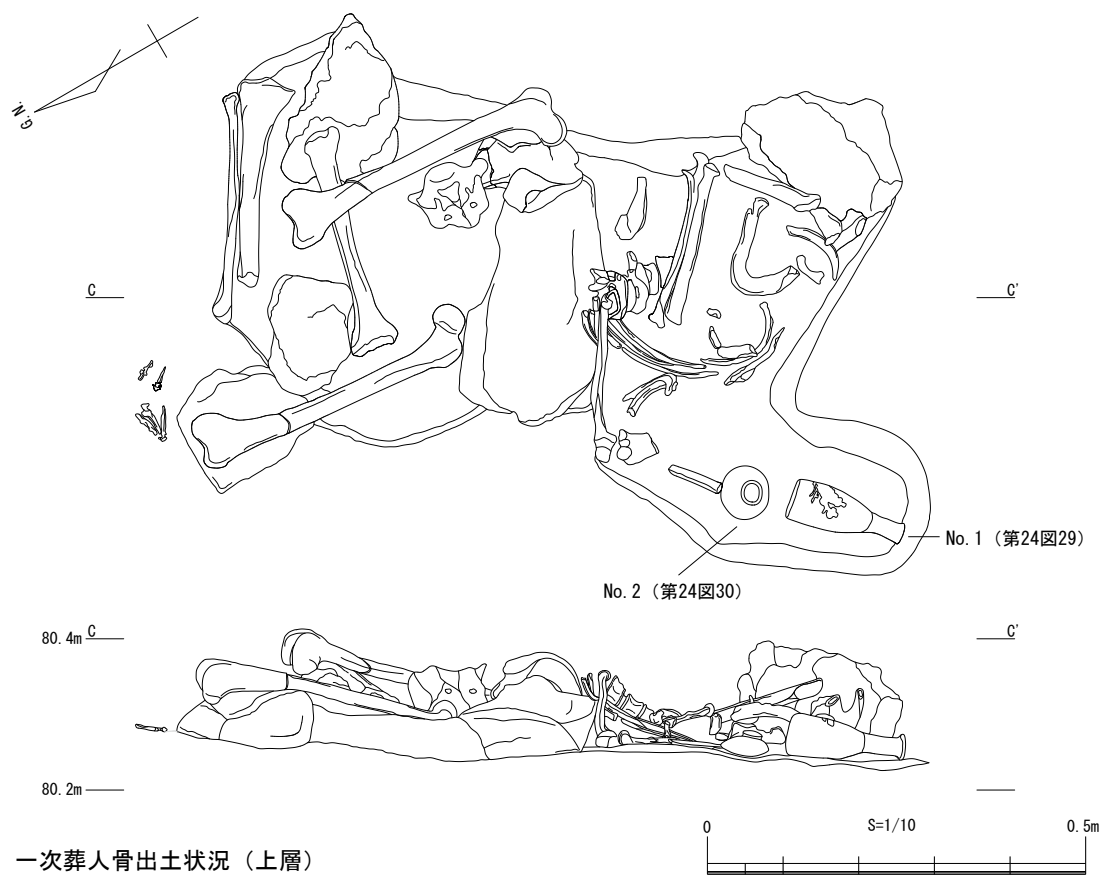
墓室のシルヒラシからは一次葬人骨が出土した。頭部から背骨、大腿骨にかけて位置関係がおおむね保たれていることから、葬られた状態が残存していると考えられる。頭部は南側に安置され、手足



第 20 图 41 号墓平面图



第 21 図 41 号墓正面図・断面図



第 22 図 41 号墓一次葬人骨出土状況図

が折り曲げられた状態であると考えられる。骨の分布の縁辺部に鉄釘が多数出土しており、これは木製の棺箱に伴うものであると考えられ、骨の出土状況などから棺箱のサイズは約55cm×90cmであったと想定される。骨の四隅付近からは棺箱を安置する台石と思われる石が出土している。また、人骨の頭部付近からは、磁器の徳利と小杯が出土しているが、これらは一次葬時に副葬品として納められたものであると考えられる。人骨の詳細については、第5章を参照されたい。

3) 遺物 (第23図、第24図)

41号墓から出土した遺物の種類と数量については、第3表を参照頂きたい。このうち墓室から検出された蔵骨器の蓋と身あわせて4点と、一次葬人骨に伴って出土した磁器製の瓶1点、小杯1点、シルヒラシから出土したボタン1点について図化及び写真を掲載した。蔵骨器の詳細については、第11表および第12表の観察表を、蔵骨器内の人骨の詳細については、第5章を参照頂きたい。

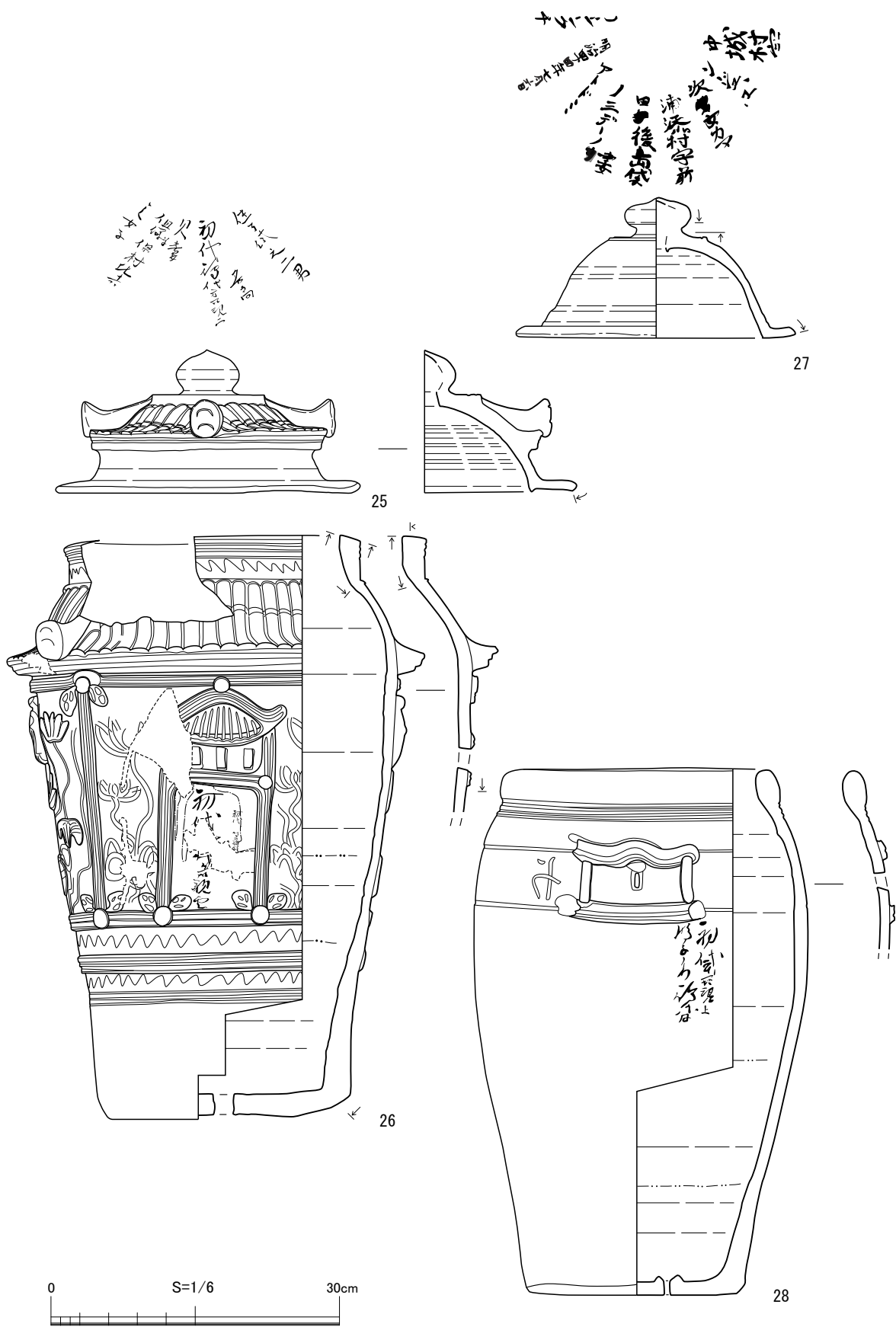
第11表 41号墓出土蔵骨器観察一覧表

図版番号	出土地点	種類	蓋	つまみ/屋根形状	接合部孔	つまみ台・圏線	鐫 (cm)	かえり (cm)	大きさ (cm) ※	文様	成形/調整	釉薬	窯印	銘書	備考
			身	マド枠 (底部cm)/屋門形	縦長軸×横長軸 (cm)	窓数/形	横帯	底面孔							
第23図25 図版18-25	墓室	マンガン釉底付蓋形	蓋	宝珠形	有孔	1段 (圏線2条)	4.2	0.4	11.6 31.7 22.0 14.9 10.2	屋根状に成形された上面に沈線で瓦が描かれる。降棟の四隅に隅瓦状の貼付	ロクロ成形の後、貼付等により屋根を表現。内面は丁寧なナデ調整。	マンガン釉	なし	あり	
第23図26 図版18-26	墓室	マンガン釉底付蓋形	身	瓦屋形	24.8×13.9	3個 (方形)	凹3 — 凸2 凸3凸3凹3	7個 (円形)	30.9 43.6 24.8 60.9	肩部：貼付+沈線で瓦を表現 胴部：蓮華文+法師像 (貼付+沈線) 胴下部：波状文	口縁直口、口唇は平坦につくられる。ロクロ成形、全体にナデ調整。	マンガン釉	なし	あり	
第23図27 図版18-27	墓室	マンガン釉蓋形	蓋	宝珠形	有孔	1段 (圏線1条)	3.4	なし	10.0 29.1 22.1 14.6 10.5	なし	ロクロ成形後、つまみ台は削り出し。回転ヘラ削りとナデ調整。	マンガン釉	なし	あり	
第23図28 図版18-28	墓室	ボージャー形	身	唐破風形 (0.6)	8.7×13.6	1個 (方形)	凹4 凹1 凹1	5個 (三日月形)	25.4 34.8 21.6 55.0	なし	口縁はやや直立、口唇は丸くつくられる。全体を回転ヘラ削りとナデ調整。	なし	あり	あり	

※大きさ (cm) は、蓋が上から上部径 / 口径 / 内径 / 器高 / 体部高、身が上から口径 / 胴径 / 底径 / 器高である。

第12表 41号墓出土蔵骨器の銘書一覧表

図版番号	銘書	備考
第23図25 図版18-25	■■袋<カ>之二男/名<カ>■/初代嶋袋筑登之親雲上/同人妻/但儀保村比嘉/之女子	
第23図26 図版18-26	初代<欠損>■筑登之親雲上	
第23図27 図版18-27	中城村字<カ><欠損>/ンジュ、ユ<欠損>/次 男 女カマ/浦添村字前/田■後島袋/ノミデーノ 女 妻/アトDMI/明治四十四年七月六日/ノシンクチ	複数か所に訂正した痕あり
第23図28 図版18-28	初袋筑登之親雲上/嫡子かめ嶋袋	



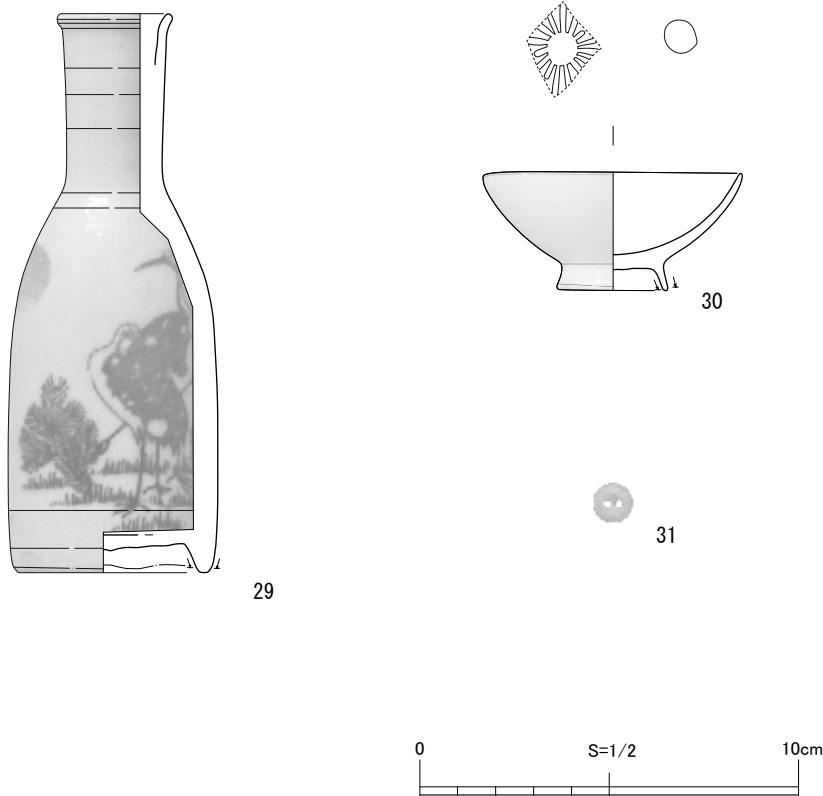
第 23 図 41 号墓出土遺物 1

第 24 図 29 と 30 は、墓室のシルヒラシから出土した一次葬人骨に伴うもので、人骨の頭部付近より出土したものである（第 22 図上層）。これらは出土状況から一次葬の際の副葬品であると考えられる。以下に詳細を記す。

第 24 図 29 は、日本本土産（瀬戸美濃産）磁器の瓶である。口縁がわずかに外反し、頸部から肩部にかけてなだらかにふくらむ。素地は少し黄色味があった白色で、外面から頸部内側まで透明釉が掛けられる。底部の畳付は露胎する。文様は、素地の白地に銅版転写により黒色の二羽の鶴と松の葉とともに、赤色の太陽の文様が描かれる。法量は、口径 3.0cm、器高 14.9cm、底径 5.3cm。第 22 図上層の No.1。

第 24 図 30 は、日本本土産（瀬戸美濃）磁器の小杯である。薄手の直口碗で口唇部が尖る。高台はわずかにひらく器形である。青みがかった白地の素地の全面に透明釉が掛けられ、畳付のみ露胎する。内面に文様があったと思われるが消えて不明瞭である。わずかに日章旗と旭日旗がデザイン化された文様を確認できる。法量は、口径 6.85cm、器高 3.15cm、底径 2.9cm。第 22 図上層の No.2。

第 24 図 31 は、プラスチック製のボタンである。表裏とも中央部が窪むもので、中央に 2 つの孔があけられる。直径 1.0cm、重量は 0.25g である。シルヒラシ直上からの出土。一次葬人骨に伴うものである可能性がある。



第 24 図 41 号墓出土遺物 2

(7) 42・52号墓

1) 遺構 (第 25 図、第 26 図)

42 号墓は、同丘陵の北側斜面の上段部西側に位置する (第 4 図)。墓の立地する標高は約 85 ～ 89m である。遺構の周辺はほぼ埋没していたが、地形の窪みが確認されたため、周辺の表土を除去したところ墓口が検出された。墓庭部分を精査したところ、墓庭の右袖部に小規模な掘り込み遺構が検出された。同遺構については 52 号墓と呼称した。これらの遺構をあわせて報告を行う。

42 号墓は、墓口から幅 0.66m の羨道が掘り込まれ、奥に墓室部分が造られている。墓室の構造は、中央に方形のシルヒラシが造られ、その左右と奥に出窓状の棚が造られる。左右の棚は一段で、奥の棚は二段である。一番棚の左右奥には円形の小規模な窪みが確認されたが、その機能は不明である。墓室の奥行きは 2.00m、幅は 2.26m、高さは 1.44m で、墓口方位は、北西 (N37° W) である。墓庭には、墓口から左袖に沿って溝が検出された。墓室から墓庭の方向へ水などを流す役割をもつものであると考えられる。また、墓庭より土坑が一基検出されており、遺構内より陶器の瓶や金属製の指輪が出土した。これらは、一次葬の際に副葬され納骨の際に廃棄されたものであると考えられる。

墓室内からは蔵骨器などの遺物は検出されておらず、墓庭からのみ遺物が検出された。墓庭から検出された蔵骨器の銘書に「浦添間切前田村」「親富祖」などの記載が複数みられることから、同墓は前田村の親富祖家の墓であると考えられる。遺構の造営時期についての詳細は不明であるが、墓庭から検出されたボージャー形の蔵骨器の身がⅣ型式とⅤ型式、蓋がⅦ型式であることから、18 世紀中頃まで遡る可能性がある。マンガン釉甕形の資料は、Ⅳ期からⅥ期 (1850 年代～ 1930 年代以降) の資料もあることから、20 世紀まで継続的に使用されたと考えられる。蔵骨器が墓室ではなく、墓庭から検出されたことから、ある時期に廃棄されたものであると考えられるが、その時期の詳細については不明である。

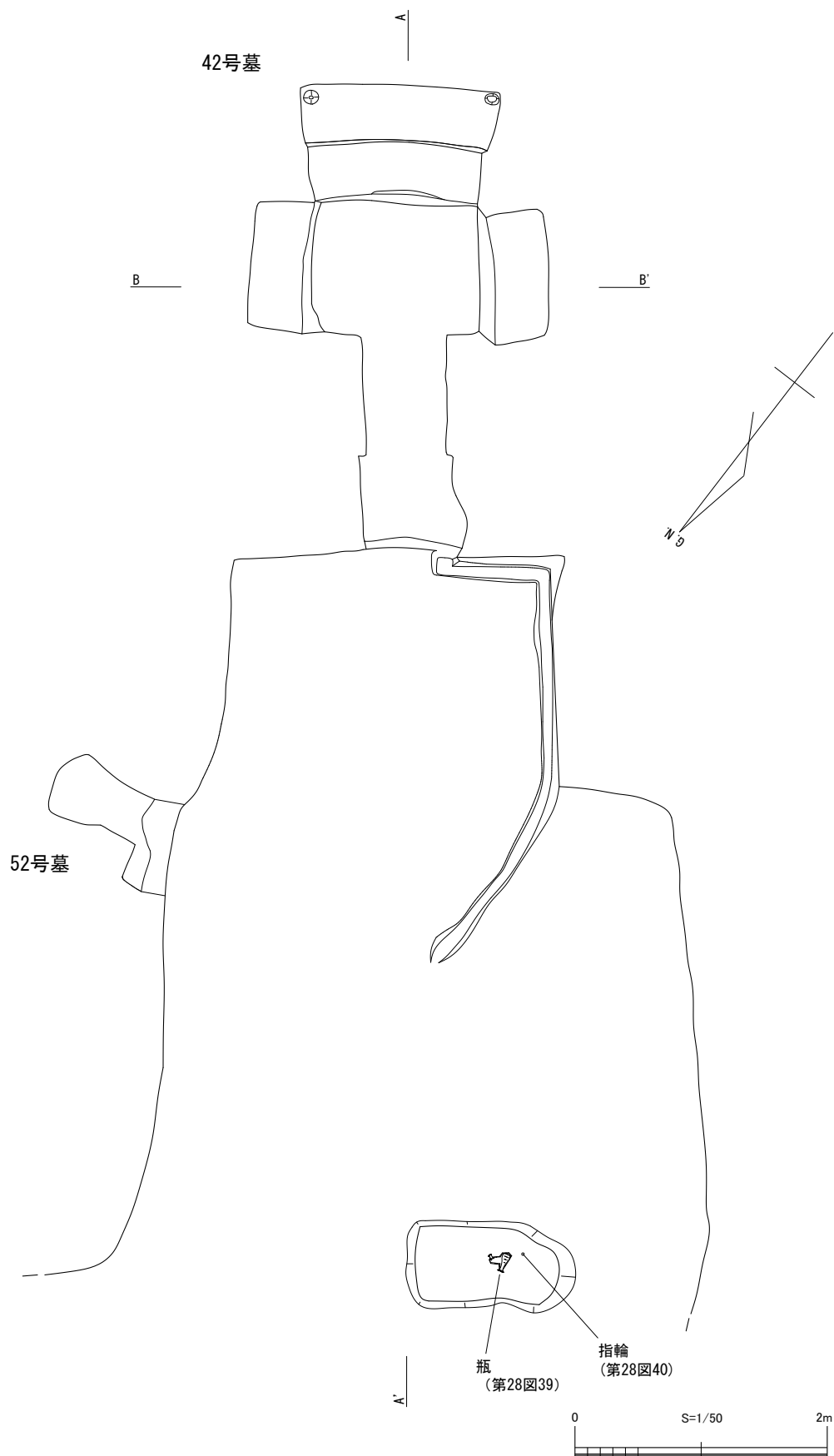
52 号墓は、42 号墓の墓庭の右袖から確認された小規模な掘り込み遺構である。遺構は崩落により残存状態が悪く、床面と奥壁、側壁の一部のみが確認された。遺構の形状は、直線的に掘り込まれ奥側が若干ふくらむ。遺構の奥行き 0.50m、幅 0.54m、高さは不明である。墓口方位は、西南西 (N109° W)。遺構内より遺物は出土していない。この遺構は、42 号墓の墓庭の袖部につくられていることや、小規模であることから 42 号墓の脇墓である可能性がある。

2) 遺物 (第 27 図、第 28 図)

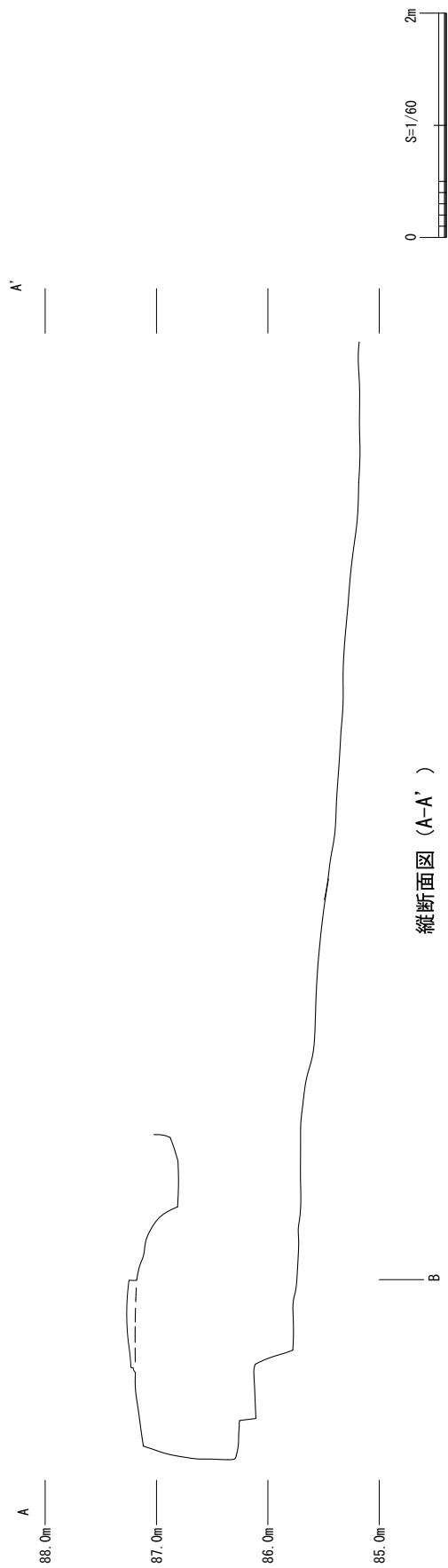
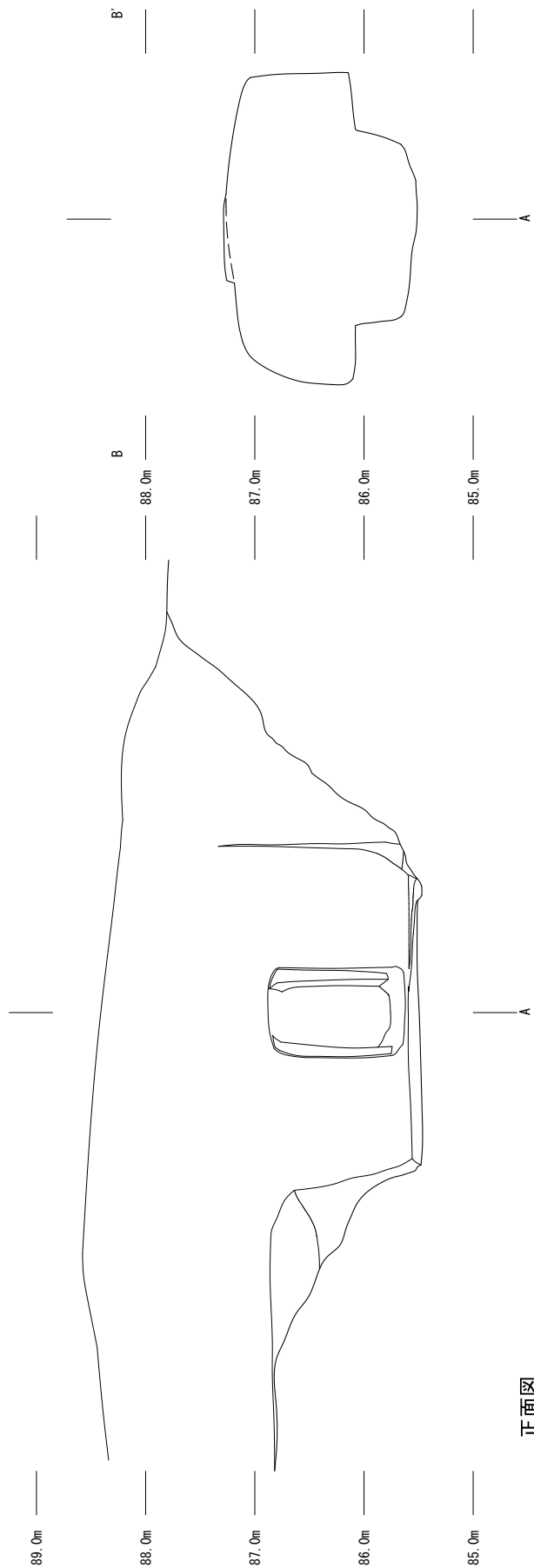
42 号墓から出土した遺物の種類と数量については、第 3 表を参照頂きたい。蔵骨器の詳細は、第 13 表および第 14 表の観察表を参照頂きたい。他に比較的残存状況の良好な陶器の瓶 1 点、金属製の指輪 1 点、金具 1 点について図化した。これらは全て 42 号墓の墓庭土坑から出土したものである。

第 28 図 39 は、沖縄産陶器の瓶のほぼ完形品である。口縁が開く器形で、頸部はわずかに傾く。胴部はゆるやかに下膨れする。脚部は高い上げ底でハの字状に開く。外面全体に黒色釉が掛けられ、底部付近は露胎する。粗く赤みがかった胎土である。口径 5.2cm、器高 18.9cm、底径 8.2cm。

第 28 図 40 は、銅製の指輪である。中央に円形とその両側に雲文と思われる文様が描かれる。文様部分の反対側に接合部があり、帯状のものを円形に折り曲げて作られたことがわかる。直径は 2.0cm で、幅は 0.5cm である。重量は 1.59g。



第 25 図 42 号墓・52 号墓平面图



第26图 42号墓正面图・断面图

第 28 図 41 は、銅製の金具である。帯状の部分と細い円弧状の部分からなる。帯状の部分には両端に直径 1mm ほどの穴が二つあけられている。横幅は 1.3cm、上下幅は 1.1cm、重量は 0.15g である。穴があけられていることから、留め具の類であると思われる。

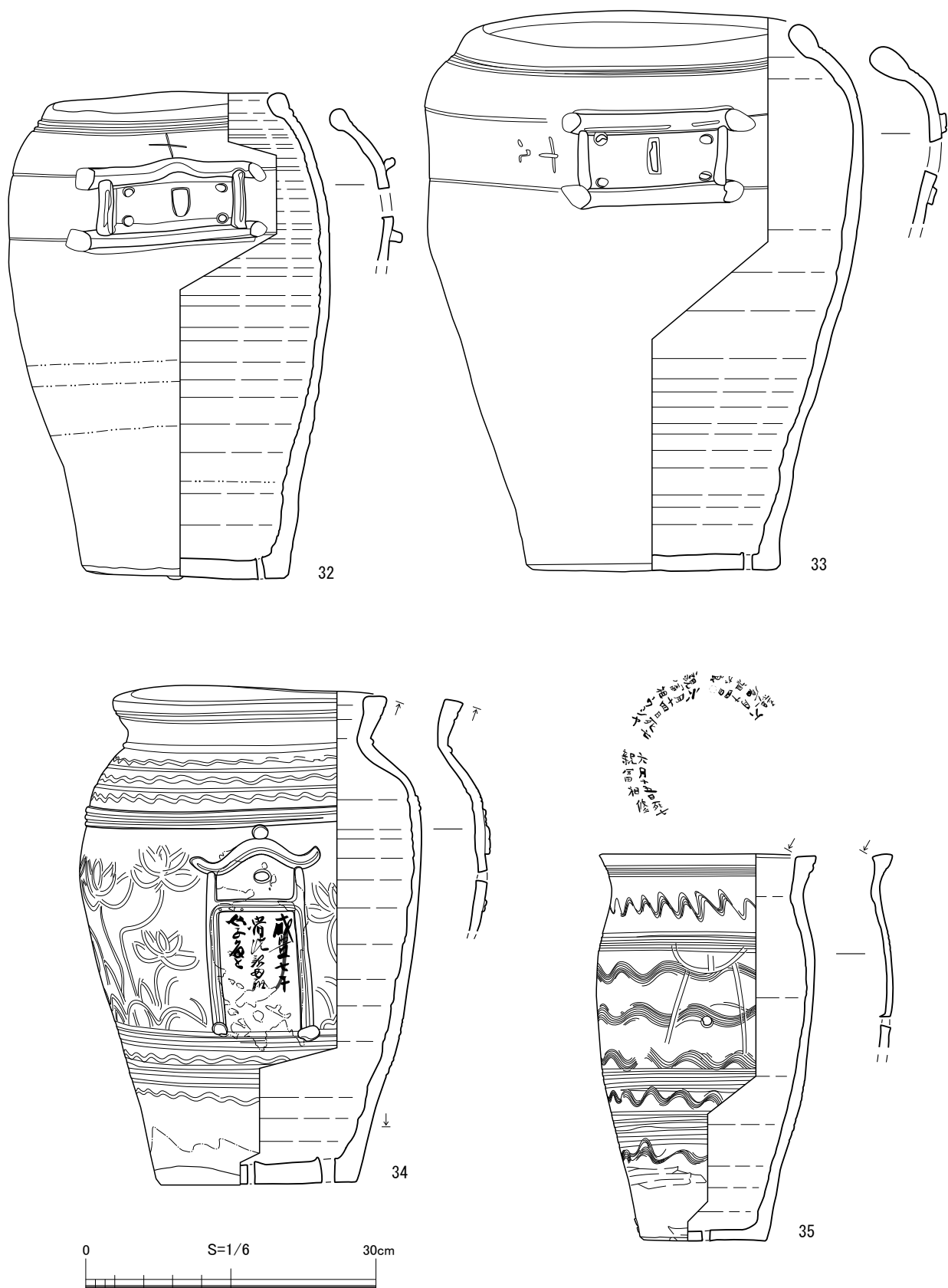
第 13 表 42 号墓出土蔵骨器観察一覧表

図版番号	出土地点	種類	蓋	つまみ/屋根形状	接合部孔	つまみ台・圏線	鏝 (cm)	かえり (cm)	大きさ (cm) ※	文様	成形/調整	釉薬	窯印	銘書	備考
			身	マド枠(底部cm)/屋門形	縦長軸×横長軸 (cm)	窓数/形	横帯	底面孔							
第27図32 図版19-32	墓庭表探	ボージャー形	身	唐破風形 (0.6)	8.8×16.8	方形1円形4	凹3凹1凹1	5個 (円形)	24.5 33.2 22.4 50.5	なし	口縁が短く内傾し、口唇が丸くつくられる。ロクロ成形後、ヘラ削りとナデで調整。	なし	あり	なし	
第27図33 図版19-33	墓庭表探	ボージャー形	身	平葺形 (0.6)	10.4×16.9	方形1円形4	凹3凹1凹1	6個 (円形)	32.5 45.3 26.2 58.1	なし	口縁が短く内傾し、口唇が丸くつくられる。ロクロ成形後、ヘラ削りとナデで調整。	なし	あり	なし	焼き膨れでゆがむ
第27図34 図版19-34	墓庭表探	マンガン釉甕形	身	唐破風形	21.0×13.6	1個 (円形)	凹2凸1凸3凹3凹3	6個 (三日月形)	28.4 35.5 20.2 51.7	肩部：波状文 (沈線) 胴部：蓮華文 (沈線) 胴下部：波状文 (沈線)	口縁が外反し、口唇が平坦でわずかに外傾する。ロクロ成形後、全体を丁寧なナデ調整。	マンガン釉	なし	あり	側面に孔5個あり
第27図35 図版19-35	墓庭表探	マンガン釉甕形	身	その他 (線彫り)	11.6×8.5	なし	凹3凹5凹4凹5	6個 (三日月形)	22.4 22.6 13.0 40.1	肩部：波状文 (沈線) 胴部：蓮華文 (沈線) 胴下部：波状文 (沈線)	口縁が外反し、口唇が平坦につくられる。ロクロ成形後、ヘラ削りとナデで調整。	マンガン釉	なし	あり	
第28図36 図版19-36	墓庭表探	ボージャー形	蓋	なし	-	-	なし	なし	9.2 34.8 33.9 12.1 -	なし	ロクロ成形後、回転ヘラ削り、ナデ調整。頂部は調整されず。内面は丁寧にナデ調整。	なし	なし	あり	
第28図37 図版19-37	墓庭表探	マンガン釉甕形	蓋	欠損のため不明	有孔	1段 (圏線2条)	3.2	0.5	11.0 28.2 20.8 - 11.6	なし	ロクロ成形後、つまみ台はヘラで削り出し。全体を回転ヘラ削り、ナデ調整。	マンガン釉	なし	あり	
第28図38 図版19-38	墓庭表探	マンガン釉甕形	蓋	宝珠形	有孔	なし (圏線3条)	3.2	0.3	- - 15.8 12.0	なし	ロクロ成形後、つまみ台はヘラで削り出し。全体を回転ヘラ削り、ナデ調整。	マンガン釉	なし	あり	

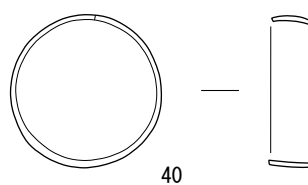
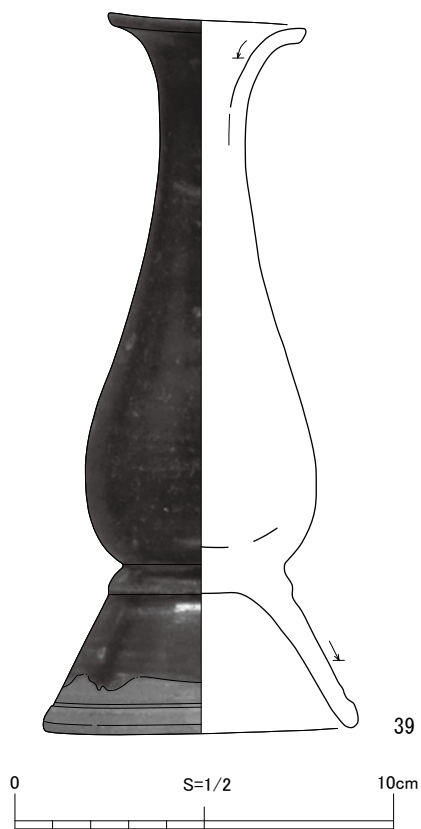
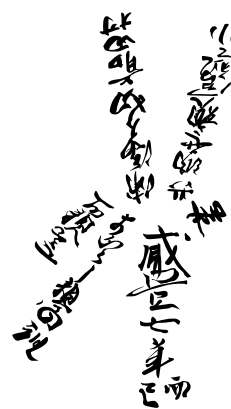
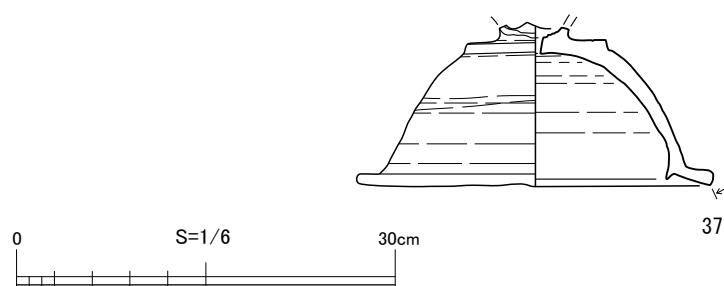
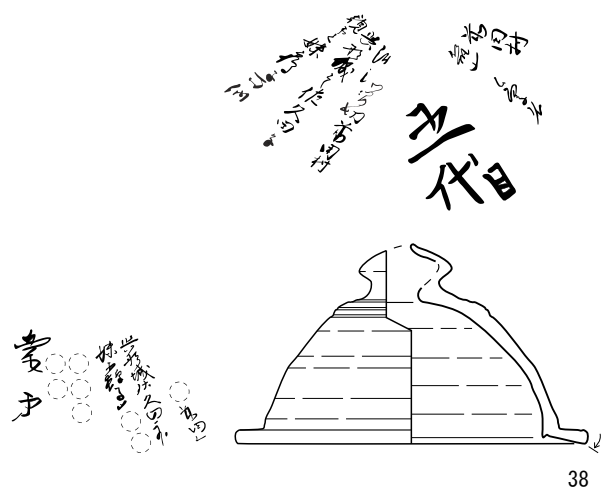
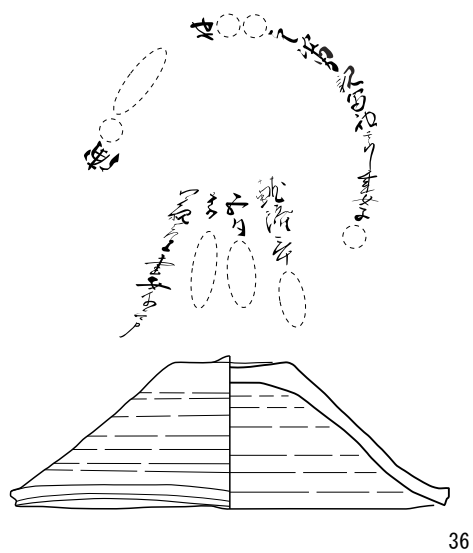
※大きさ (cm) は、蓋が上から上部径 / 口径 / 内径 / 器高 / 体部高、身が上から口径 / 胴径 / 底径 / 器高である。

第 14 表 42 号墓出土蔵骨器の銘書一覧表

図版番号	銘書	備考
第27図34 図版19-34	咸豊七年丙巳/骨洗親富祖/女子かまと	
第27図35 図版19-35	六月十四日亡/親富祖太良/六月十四日死亡/親富祖ウシヤ/六月十五日死亡/親富祖修	
第28図36 図版19-36	浦(判読不能)田村■うし次男乾隆親富祖筑登之親雲上妻お戸/乾隆三十(判読不能)/三月(判読不能)/(判読不能)/筑登之親雲上妻/お戸	一部に取り消し線あり
第28図37 図版19-37	咸豊七年丙巳/よならノ親富祖/筑登之親雲上/浦添間切前田村/與納世親富祖筑登之親雲上/妻	
第28図38 図版19-38	(内側)前田村(欠損)/筑登之■子名(欠損)/浦添(カ)間切前田村/與那城之佐久田男(カ)子/親雲上妹霧子與納(欠損)/五代目 (外側)■前田■/與那城佐久田■/妹霧子與那(欠損)/(判読不能)/■/妻霧	



第 27 图 42 号墓出土遺物 1



第 28 図 42 号墓出土遺物 2

(8) 51号墓

1) 遺構 (第29図)

51号墓は横穴式の掘込墓で、同丘陵の南側斜面裾部の西側に位置する(第4図)。38号墓と39号墓の検出作業中に、その間から掘り込みが確認されたため精査を行ったところ墓室検出された。墓の立地する標高は約81.5～83.0mである。墓の前面部は墓口をふくめて崩落により残存していない。

51号墓の墓室はシルヒラシが横長の長方形で、奥壁側に出窓状の棚が一段造られる。墓室の奥行きは約1.50mで、幅は1.70m、墓室内の高さは1.22m、墓口方位は、南(N171°E)である。墓庭は地形が削平されており、その形状などの詳細は不明である。

墓室のシルヒラシから、陶製の蔵骨器の破片がまとまった状態で検出された。これらの破片を復元したところ概ね二個体分であることが判明した。蔵骨器の銘書から「字前田」「石川」、屋号などの銘書が確認されたことから、字前田の百姓層である石川家の墓であることが判明した。

墓の明確な造営年代は不明であるが、蔵骨器の蓋に「洗骨昭和拾六年」の文字があることや、マンガン釉甕形蔵骨器が、V期(1900～1920年代)に該当するものであることから、主に大正期から昭和期にかけて比較的短い期間使用された墓であると考えられる。また埋没時期の詳細も不明であるが、周辺の状況からおそらく戦時中に砲撃などを受けて崩落し、埋没したものと推測される。

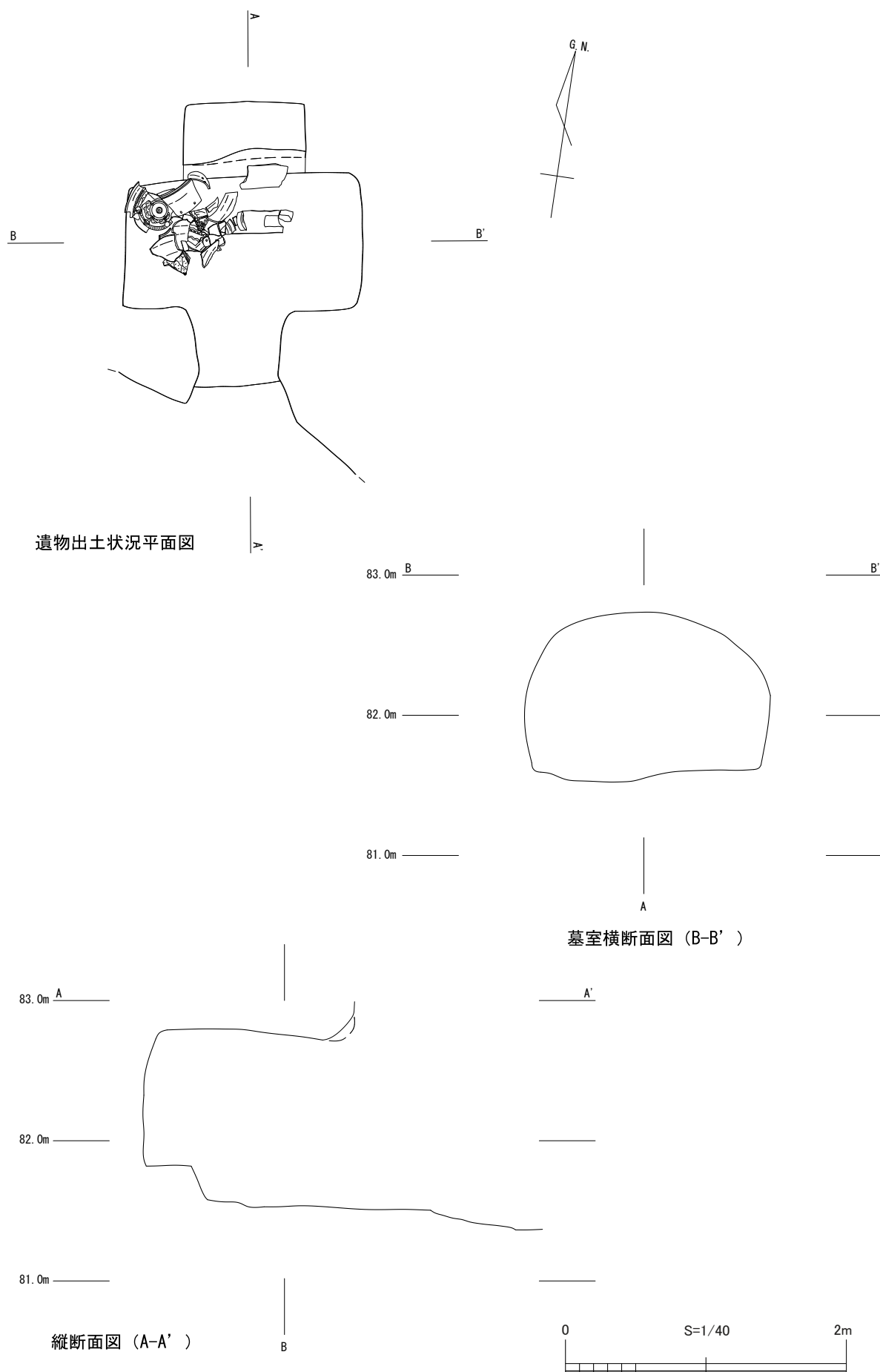
2) 遺物 (第30図)

51号墓から出土した遺物の種類と数量については、第3表を参照頂きたい。検出された遺物の中から、復元できた蔵骨器二点について図化した。これらの蔵骨器の詳細については、第15表および第16表の観察表を参照頂きたい。また、人骨の詳細については第5章を参照頂きたい。

第15表 51号墓出土蔵骨器観察一覧表

図版番号	出土地点	種類	蓋	つまみ/屋根形状	接合部孔	つまみ台・圈線	鐫(cm)	かえり(cm)	大きさ(cm)※	文様	成形/調整	釉薬	窯印	銘書	備考
			身	マド枠(底部cm)/屋門形	縦長軸×横長軸(cm)	窓数/形	横帯	底面孔							
第30図42 図版20-42	墓室	マンガン釉底付甕形	蓋	扁平形	有孔	2段 (圈線各段1条)	3.1	なし	10.6 33.0 26.4 14.4 11.6	外面は屋根を模し四隅に降棟が表現、先端に獅子頭を貼付。	ロクロ成形後、つまみ台は削り出し、貼付等で屋根の形に成形。	マンガン釉	なし	あり	
第30図43 図版20-43	墓室	マンガン釉底付甕形	身	アーチ形変形	20.7×10.4	12個 (円形)	凹2 — 凸1凸1 凸1凹3	7個 (円形)	32.4 36.4 22.8 69.2	肩部：龍・獅子頭・花文(貼付) 胴部：蓮華文(貼付)、葉文・波状文(沈線) 胴下部：波状文(沈線) + 玉飾	口縁は外反し、口唇は平坦に成形される。ロクロ成形後、全体を丁寧にナデ調整される。	マンガン釉	なし	なし	側面に7個の円孔あり
第30図44 図版20-44	墓室	マンガン釉甕形	蓋	扁平形	有孔	2段	3.2	なし	9.4 26.8 20.5 10.2 7.8	なし	ロクロ成形後、つまみ台をヘラで削り出し。ヘラとナデで調整。	マンガン釉	なし	あり	
第30図45 図版20-45	墓室	マンガン釉甕形	身	アーチ形	13.8×7.8	2個 (円形)	— 凹2 凹4 凹1凹1凹4	12個 (円形)	27.7 29.4 20.6 58.9	肩部：波状文(沈線) 胴部：なし 胴下部：波状文(沈線)	口縁は外反し、口唇は平坦でわずかに外傾する。ロクロ成形後ナデ調整。	マンガン釉	なし	なし	側面に6個の円孔あり

※大きさ (cm) は、蓋が上から上部径 / 口径 / 内径 / 器高 / 体部高、身が上から口径 / 胴径 / 底径 / 器高である。



第 29 図 51 号墓平面図・断面図



— 58 —

第 16 表 51 号墓出土蔵骨器の銘書一覧表

図版番号	銘書
第30図42 図版20-42	字前田新上門乃/分家三男/三男新上門一代/石川登佳/大正拾年旧/拾壹月八日死亡/洗骨昭和拾六年/旧七月廿五日
第30図44 図版20-44	■男■■■■/(判読不能)女カマ/一九四■(判読不能)死/三十■

(9) 55 号墓

1) 遺構 (第 31 図)

55 号墓は横穴式の掘込墓で、同丘陵の南側斜面裾部の西側に位置する (第 4 図)。墓の立地する標高は約 83 ～ 84m である。この周辺はほぼ埋没していたが、表土を除去したところ墓室に安置された蔵骨器 1 点が検出された。遺構は、墓室の天井と墓前面が崩落により埋没した状況であった。

55 号墓の墓室は、奥壁については直線的であるが両壁面は不定形である。墓室の大きさは蔵骨器一基分の大きさで、棚は造られていない。墓室内から検出された蔵骨器の底部付近は円形 (直径約 0.4m、深さ 0.2m) に窪められており、窪みに蔵骨器が据えられていた。これは安置した蔵骨器が倒れないように掘り窪められたものであると考えられる。墓室の奥行きは残存部で 0.50m、幅は 0.85m、墓室内の高さは崩落で残存していないため不明である。墓口方位は、南 (N173° W) である。

墓室からは、蔵骨器が 1 点のみ検出された。蔵骨器の銘書からは、明治 26 年に洗骨された「カマ」という女性が葬られていたことが分かるが、詳細は不明である。墓の明確な造営年代は不明であるが、検出された蔵骨器の身がⅣ期 (1850 ～ 1890 年代) に該当することや、蔵骨器の蓋に「洗滑ノ時明治参拾六年」の銘書があることなどから、明治期に使用された墓であると考えられる。また、この遺構は蔵骨器が 1 点入る程度の大きさであることから個人墓であると考えられる。埋没時期については、周辺の地形の崩落状況などから沖縄戦時か戦後に埋没したものと思われる。

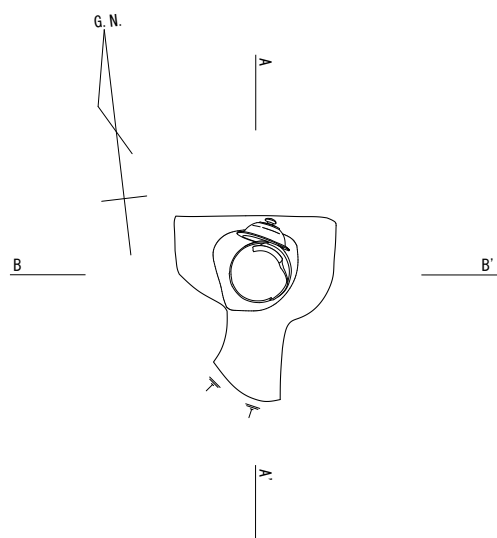
2) 遺物 (第 32 図)

55 号墓から出土した遺物の種類と数量は、第 3 表を参照頂きたい。ここでは蔵骨器一点と金属製の指輪二点を図化した。蔵骨器の詳細は第 17 表および第 18 表の観察表を、人骨の詳細は第 5 表を参照頂きたい。

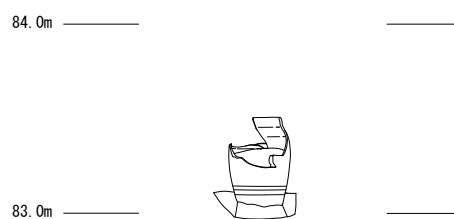
第 17 表 55 号墓出土蔵骨器観察一覧表

図版番号	出土 地点	種類	蓋	つまみ/ 屋根形状	接合部孔	つまみ 台・圏線	鏝 (cm)	かえり (cm)	大き さ (cm) ※	文様	成形/調整	釉 薬	窯 印	銘 書	備 考
			身	マド枠 (底 部 cm) / 屋 門形	縦長軸 × 横長軸 (cm)	窓数/ 形	横帯	底面 孔							
第32図46 図版20-46	墓室	マン ガン 釉蓋 形	蓋	宝珠形	有孔	2段	3.0	0.1	8.4 28.4 22.0 14.2 10.3	なし	ロクロ成形後、 つまみ台をへう で削り出し。全 体をへう削り、 ナデ調整。	マン ガン 釉	なし	あり	
第32図47 図版20-47	墓室	マン ガン 釉甕 形	身	アーチ形	22.2 × 8.6	3個 (方形)	凹2 凸1 凸3 凹5凹7凹5	14個 (三 日月 形)	28.0 32.2 20.2 56.2	肩部: 葉文 (沈線) 胴部: 蓮華文 (沈線) 胴下部: 波状文 (沈線)	口縁は外反、口 唇を平坦にし、 わずかに外傾す る。ロクロ成形 後、ナデ調整。	マン ガン 釉	なし	なし	

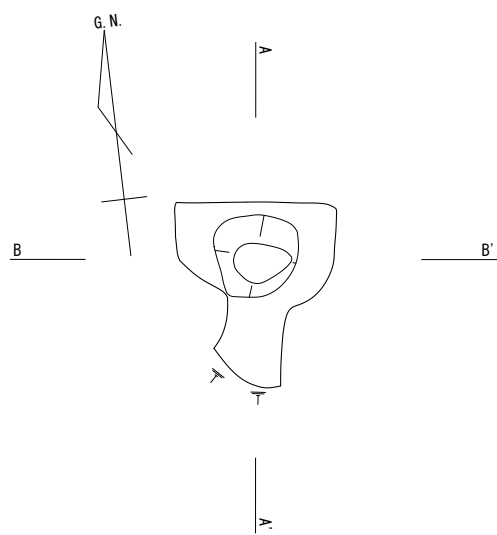
※大きさ (cm) は、蓋が上から上部径 / 口径 / 内径 / 器高 / 体部高、身が上から口径 / 胴径 / 底径 / 器高である。



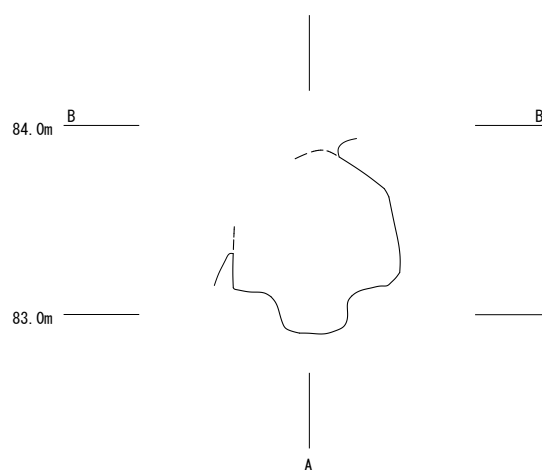
遺物出土状況平面図



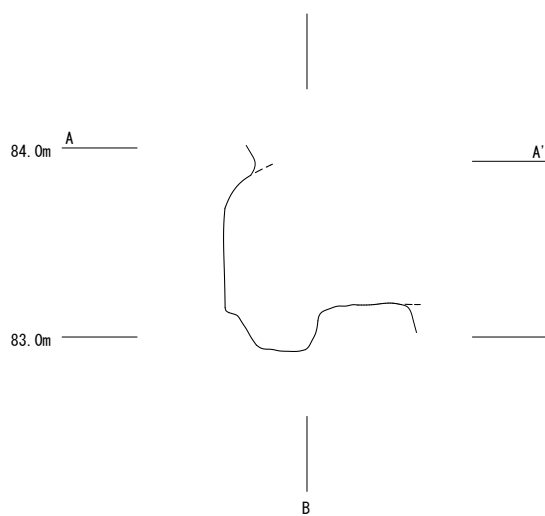
遺物出土状況立面図



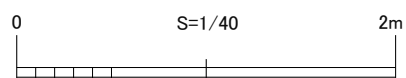
完掘状況平面図



墓室横断面図 (B-B')



縦断面図 (A-A')

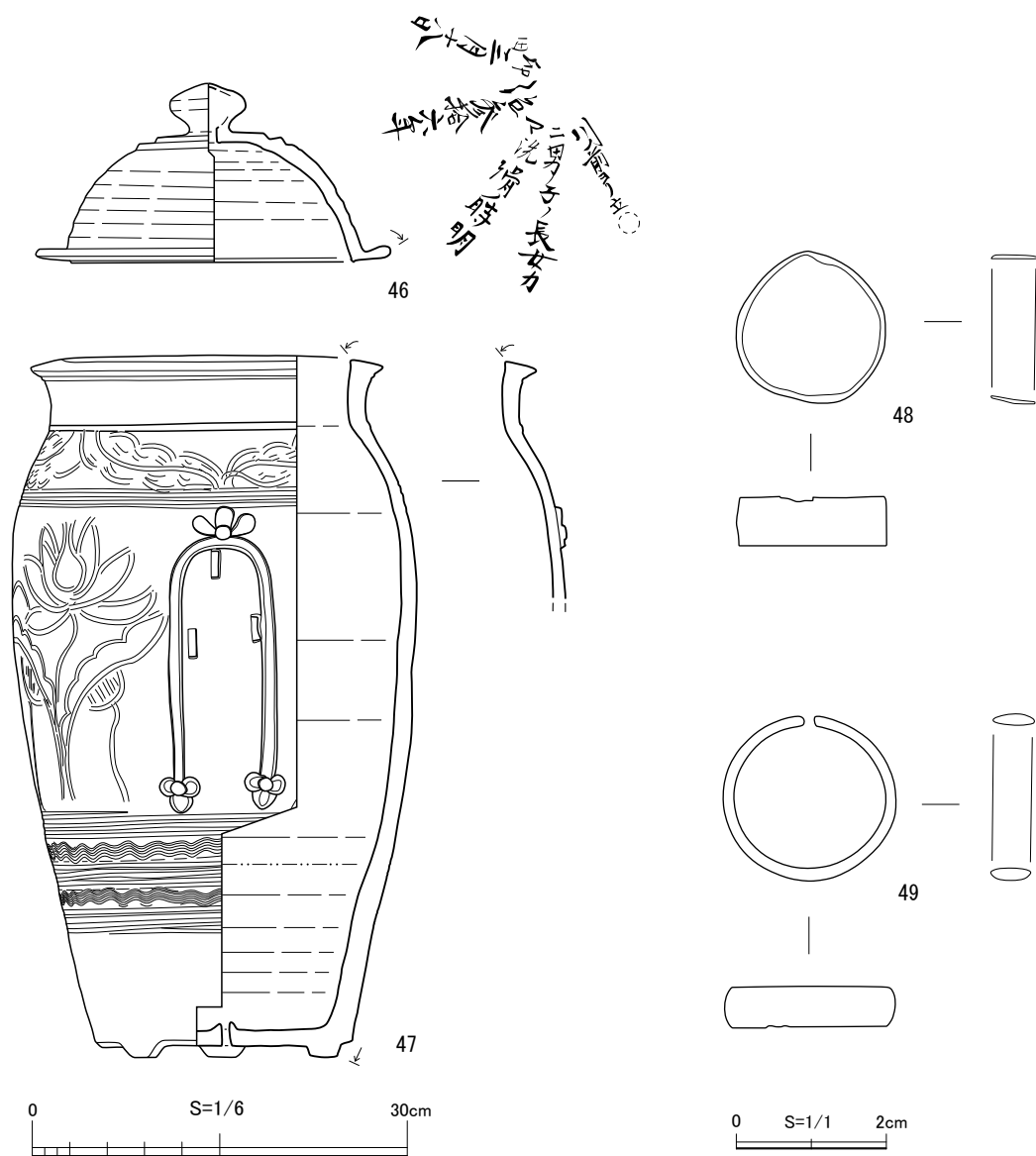


第 31 図 55 号墓平面図・遺物出土状況図・断面図

第 18 表 55 号墓出土蔵骨器の銘書一覧表

図版番号	銘書
第32図46 図版20-46	川ノ前ヨリ(判読不能)/ニ男子ノ長女カ/マ洗滑ノ時明/治参拾六年/卯旧三月十八日

第 32 図 48 と 49 は、銅製の指輪である。第 32 図 48 は、薄い帯状の銅片を円形に折り曲げて造られている。全体に錆がみられ、正面の表面に一部破損がみられる。文様などはみられない。直径は約 2.0cm、幅は約 0.65cm、重量は 1.00g である。第 32 図 49 は、帯状の銅片を円形に折り曲げて造られるが、若干表面が丸みをおびる。折り曲げられた端部は接合されず、わずかに間隙がある。全体に錆がみられる。表面に文様はみられない。直径は約 2.3cm、幅は約 0.55cm、重量は 3.15g である。48 と 49 とともに墓室の床面直上からの出土である。



第 32 図 55 号墓出土遺物

(10) 56号墓

1) 遺構 (第 33 図、第 34 図)

56号墓は横穴式の掘込墓で、同丘陵の南斜面裾部に位置する(第4図)。南側斜面中段には37号墓などの中～大型の掘込墓が横並びに造られるが、裾部には小規模な遺構が多い。56号墓もそのうちの一つで、37号墓の墓庭入口の下層に埋没していた。墓の立地する標高は約83～84.5mである。遺構内の掘削を進めたところ蔵骨器3点と一次葬人骨1体が出土した。

56号墓は、墓口から幅0.4mの羨道が掘り込まれ、その奥に墓室が造られる。墓室は、奥壁と右壁側にL字状の棚が一段造られているが、棚の形状は不定形である。棚とともにシルヒラシも不定形であり、左右非対称に造られている。墓室内の壁面には、墓室を成形した際のノミ痕がほとんど調整されずに明瞭に残っている。墓室の奥行きは0.90m、幅は1.06m、天井部は崩落しているため墓室の高さは不明。墓口方位は、南(N172°W)である。

墓室内からは、棚上に安置された3点の蔵骨器とシルヒラシから洗骨前の一次葬人骨が出土した。蔵骨器は中に骨が残存している状態であった。また、棚の上から獣骨がまとまった状態で検出された。確認された人骨と獣骨の詳細については、第5章および第6章で報告する。検出された蔵骨器には銘書がほとんど確認できなかったことから、墓の被葬者に関する詳細については不明である。

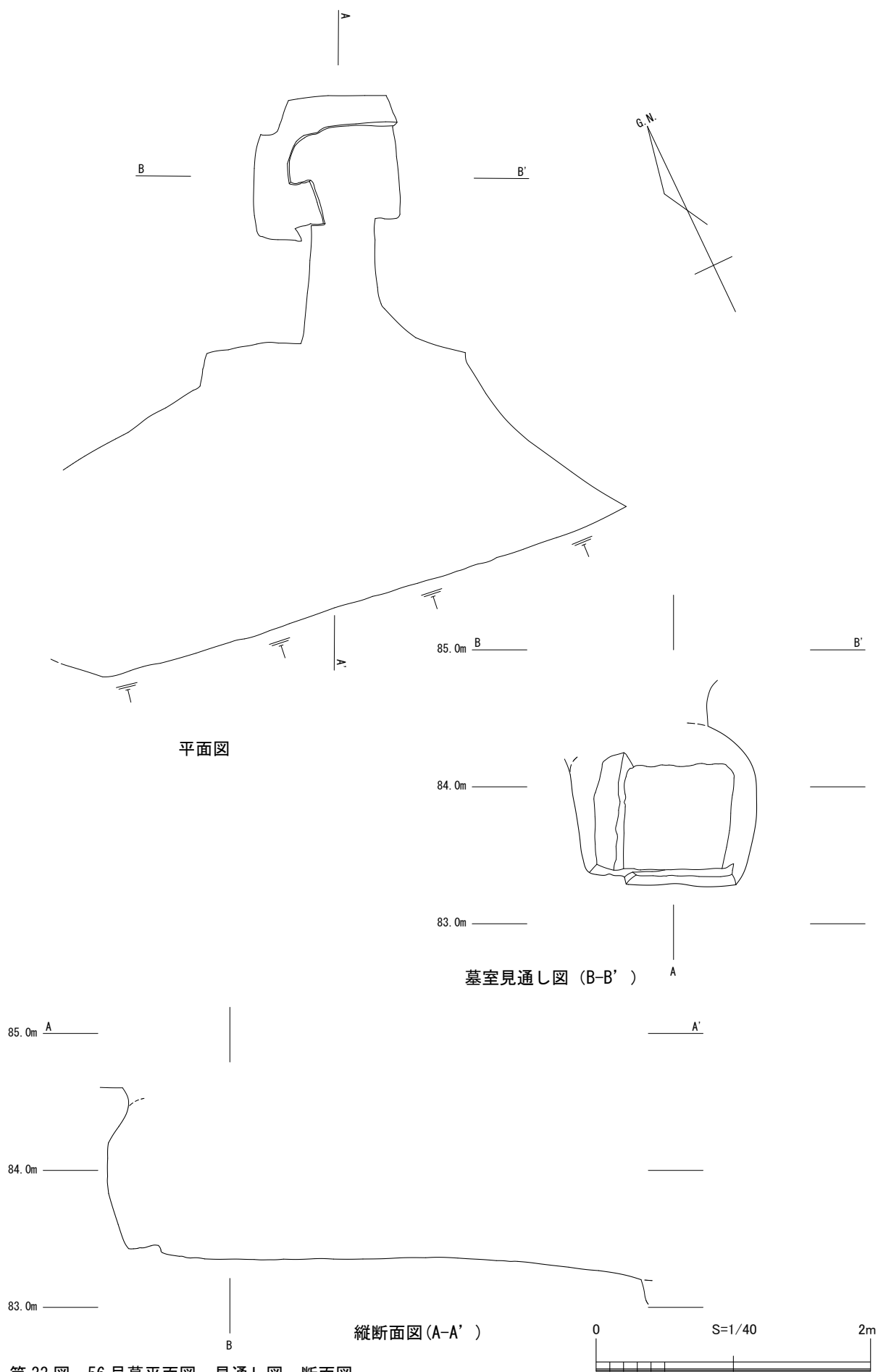
墓の明確な造営年代や使用年代は不明であるが、マンガン釉甕形の資料は概ねV期(1900～1920年代)に該当する資料であることから、主に明治末期から昭和初期に使用された墓であると考えられる。一次葬人骨が洗骨されずにほぼそのまま残存していることなどから、戦時中に砲撃などを受けて周辺の地形とともに埋没した可能性がある。上方に位置する37号墓の通路の下方に位置しているため、戦後には使われていないものと考えられる。

2) 一次葬人骨 (第 34 図)

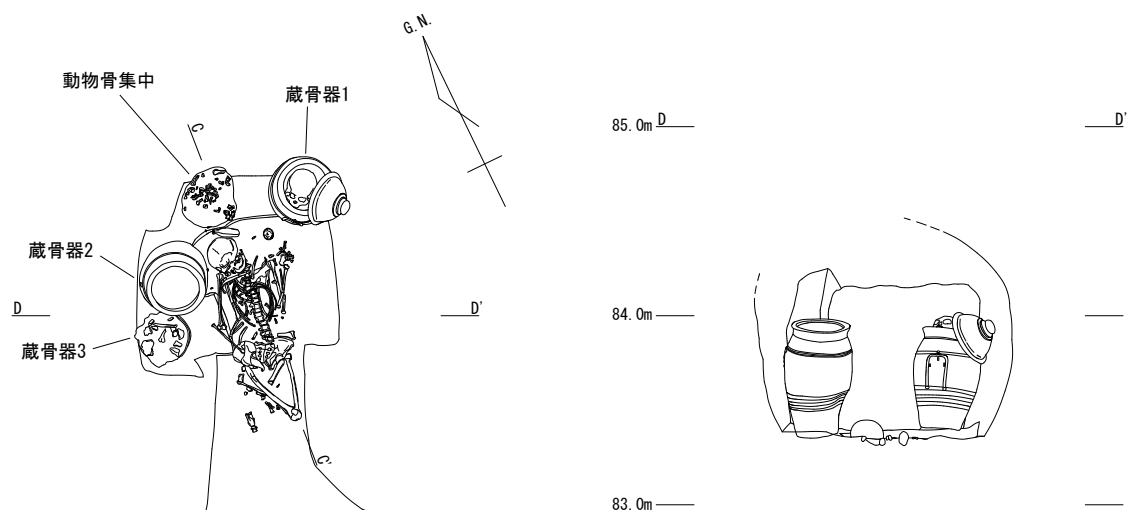
墓室のシルヒラシからは一次葬人骨が出土した。頭部から背骨、大腿骨にかけて概ねの位置が保たれていることなどから、おおそ一次葬時の状態に近い状態で残存しているものと考えられる。頭部は北側に安置され、南北方向に安置されている。人骨の周囲からは鉄製の釘が出土していることから、木製の棺箱の中に安置されていたと考えられる。シルヒラシが狭いため、棺箱の一部が羨道にはみ出した状態で安置されていたと考えられる。また、人骨の周囲にはガラス製の薬瓶、磁器の小杯、磁器の人形が出土している。ガラス製の薬瓶と磁器の小杯については、一次葬人骨の頭部の隣から出土しており、このような出土状況は前田・経塚近世墓群の他の地区でも同様の出土例が数例確認されている(浦添市教育委員会2011、2013)。その他の蔵骨器の状況などから考えて、一次葬人骨は戦前に葬られ、洗骨される前に戦時中の崩落により埋没したものと考えられる。

3) 遺物 (第 35 ～ 37 図)

56号墓から出土した遺物の種類と数量については、第3表を参照頂きたい。このうち墓室から検出された蔵骨器の蓋と身あわせて5点と、一次葬人骨に伴って出土したガラス製の瓶1点、磁器の小杯1点、人形1点について図化及び写真を掲載した。蔵骨器の詳細については、第19表の観察表を、蔵骨器内の人骨の詳細については、第5章を参照頂きたい。

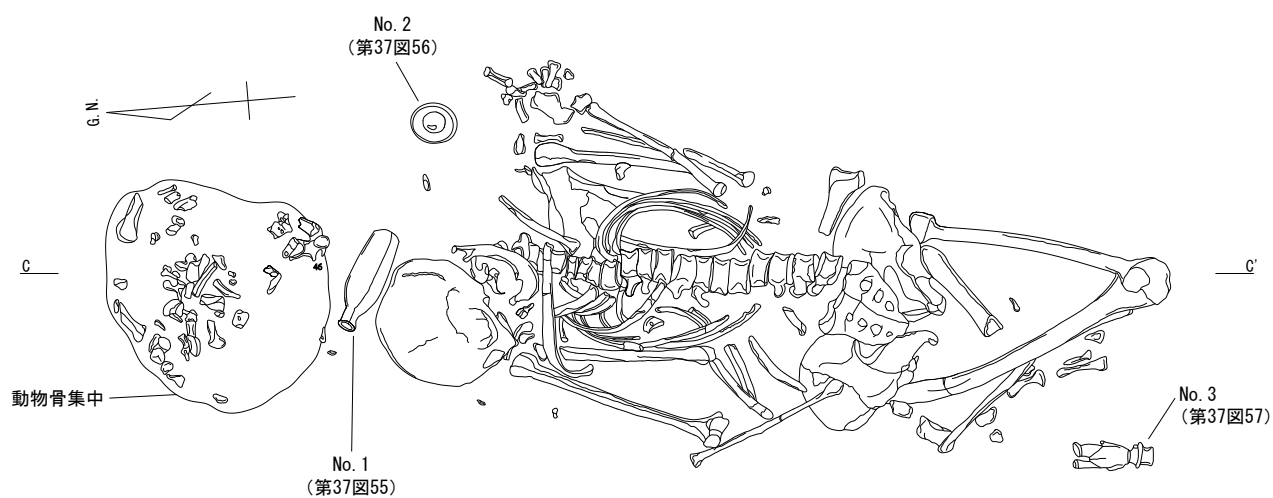
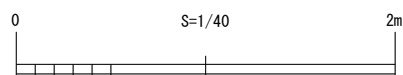


第 33 図 56 号墓平面図・見通し図・断面図

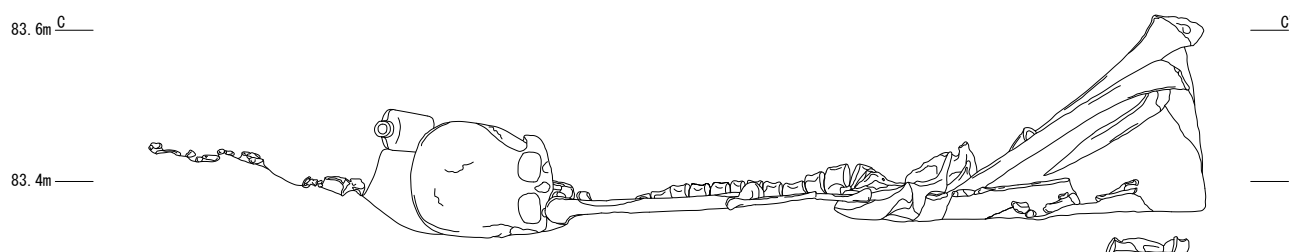


遺物・人骨出土状況平面図

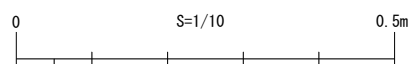
遺物・人骨出土状況見通し図 (D-D')



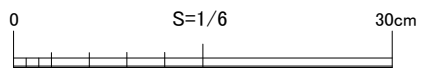
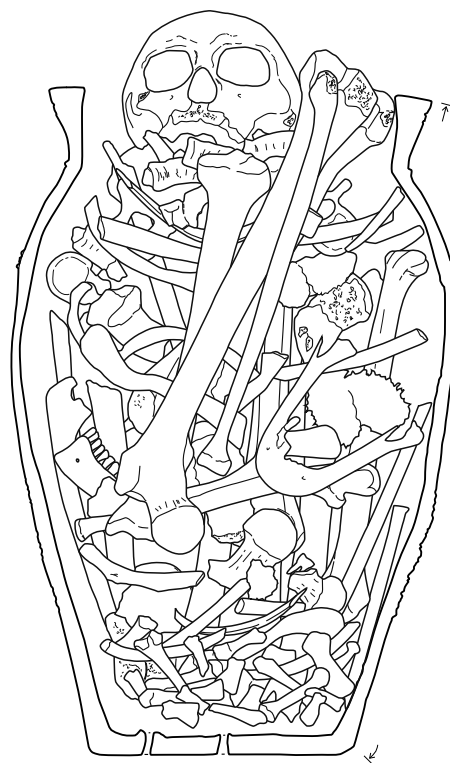
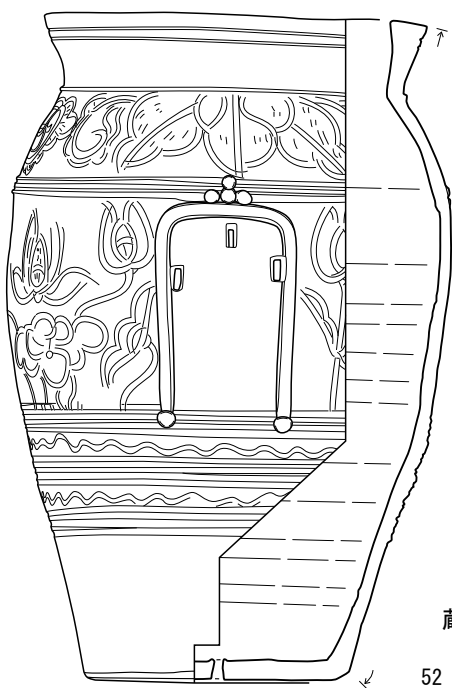
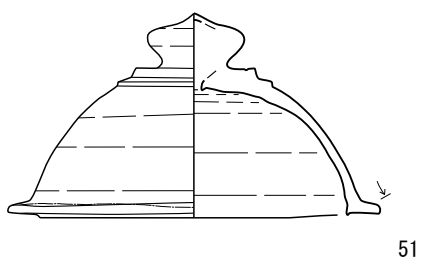
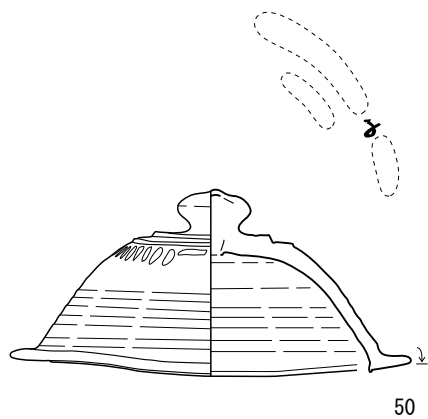
一次葬人骨出土状況平面図



一次葬人骨出土状況断面見通し図 (C-C')



第 34 図 56 号墓遺物・人骨出土状況図・一次葬人骨平面図・断面図



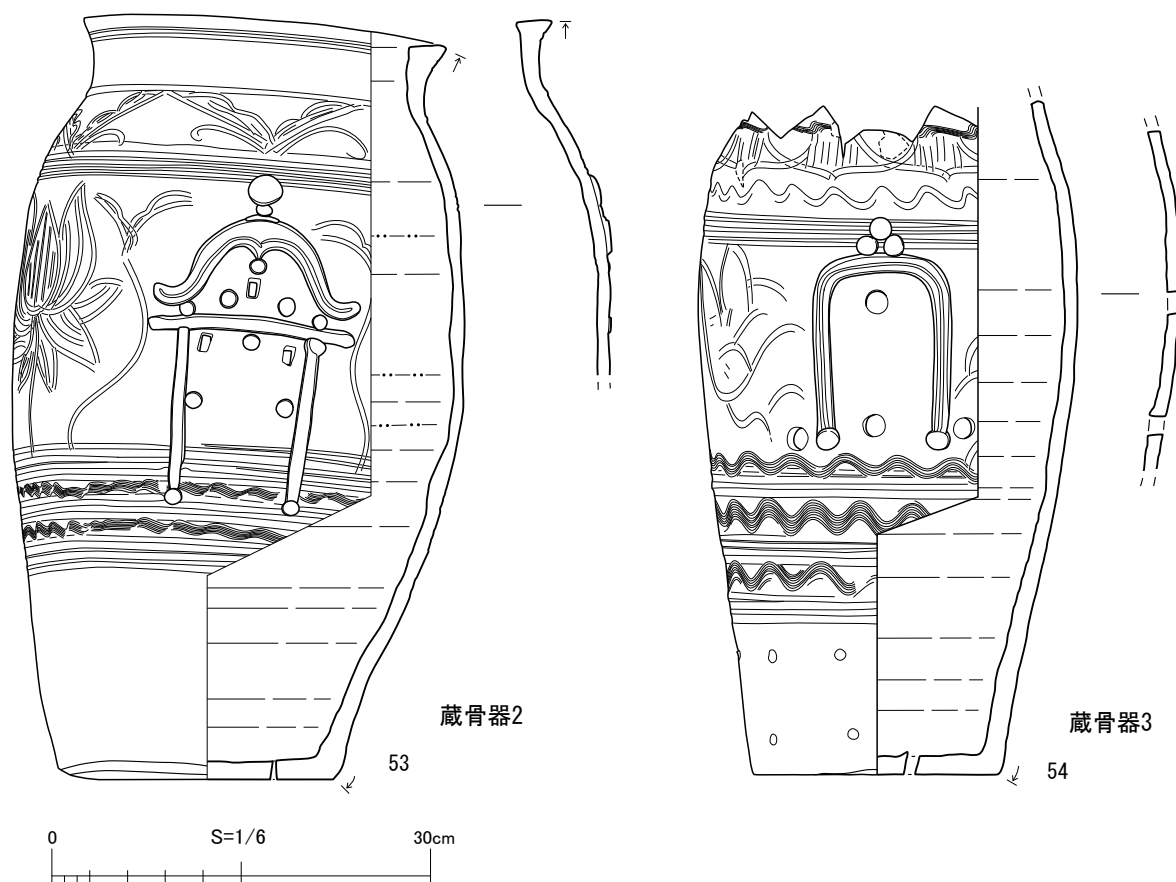
藏骨器1内人骨納骨状況

第 35 図 56 号墓出土遺物 1

第 19 表 56 号墓出土蔵骨器観察一覧表

図版番号	出土地点	種類	蓋	つまみ/屋根形状	接合部孔	つまみ台・圏線	鐳 (cm)	かえり (cm)	大きさ (cm) ※	文様	成形/調整	釉薬	窯印	銘書	備考
			身	マド枠(庇部cm)/屋門形	縦長軸×横長軸 (cm)	窓数/形	横帯	底面孔							
第35図50 図版21-50	墓室	マンガン釉甕形	蓋	宝珠形	有孔	2段	3.3	0.2	9.3 31.8 25.3 14.8 11.5	つまみ台下に指頭文が一周する	ロクロ成形後、つまみ台は削り出し。全体をヘラとナデ調整。	マンガン釉	なし	あり	銘書はほぼ判読不能
第35図51 図版21-51	墓室(蔵骨器1)	マンガン釉甕形	蓋	宝珠形	有孔	2段(圏線上段のみ1条)	2.7	0.2	9.4 29.6 24.2 16.2 11.9	なし	ロクロ成形後、つまみ台は削り出し。全体をヘラとナデ調整。	マンガン釉	なし	なし	
第35図52 図版21-52	墓室(蔵骨器1)	マンガン釉甕形	身	アーチ形	18.6×11.1cm	3個(方形)	凹2 凸1 凸3 凹4凹4凹3	8個(三日月形)	30.3 35.3 20.0 53.3	肩部:葉文(沈線) 胴部:蓮華文(沈線) 胴下部:波状文(沈線)	口縁が外反、口唇は平坦につくられる。ロクロ成形後、全体をナデ調整。	マンガン釉	なし	なし	
第36図53 図版21-53	墓室(蔵骨器2)	マンガン釉甕形	身	唐破風形	23.8×16.9	3個(方形)	凹2 凸1 凸4 凹4凹3凹4	7個(三日月形)	28.7 35.9 21.8 60.7	肩部:葉文(沈線) 胴部:蓮華文(沈線) 胴下部:波状文(沈線)	口縁が外反、口唇は平坦につくられる。ロクロ成形後、全体をナデ調整。	マンガン釉	なし	なし	
第36図54 図版21-54	墓室(蔵骨器3)	マンガン釉甕形	身	アーチ形	15.6×11.0	4個(円形)	— 凹3 凹3凹4凹4	12個(円形)	— 30.1 19.4 —	肩部:葉文(沈線) 胴部:抽象化された蓮華文(沈線) 胴下部:波状文(沈線)	口縁・口唇形状不明。胴体は縦に細長い器形。ロクロ成形後、全体ナデ調整。	マンガン釉	なし	なし	側面に22個の円孔有

※大きさ (cm) は、蓋が上から上部径 / 口径 / 内径 / 器高 / 体部高、身が上から口径 / 胴径 / 底径 / 器高である。



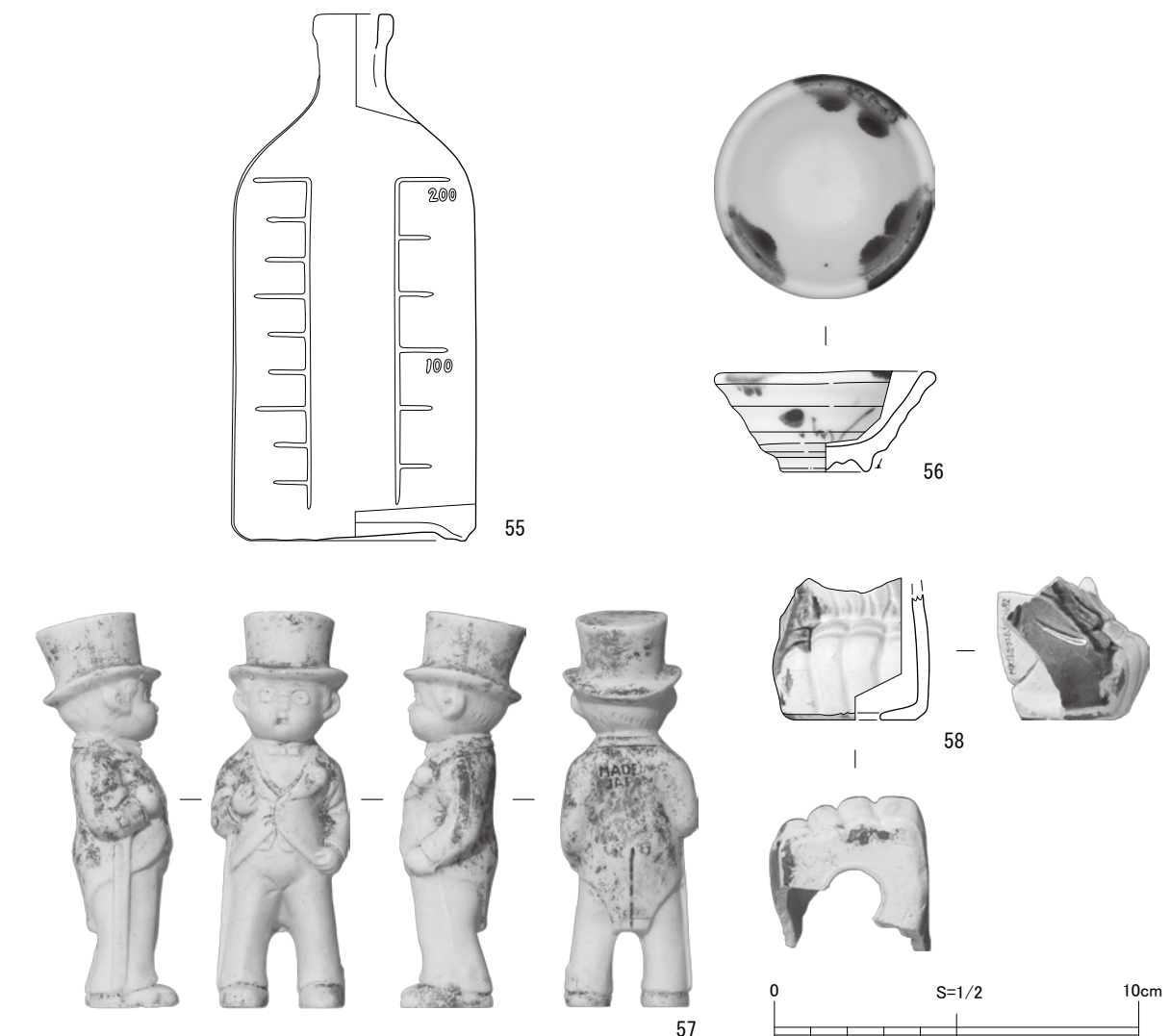
第 36 図 56 号墓出土遺物 2

第 37 図 55 は、ガラス製の瓶である。透明の薬瓶で、胴部正面に目盛りがある。目盛りの右上部には「200」という数字が確認できる。口径 2.2cm、器高 14.5cm、底径 5.9cm。一次葬人骨の頭部付近から出土（第 34 図の No.1）。

第 37 図 56 は、日本本土産磁器の小杯である。厚手の直口碗で胴部に轆轤痕が明瞭に残る。白地で全面に透明釉が掛けられ、畳付と高台内側が露胎する。口縁内面には、三か所に褐釉が垂らし掛けられ、胴部にコバルトで記号のような文様がかかれる。口径 6.0cm、器高 2.75cm、底径 2.5cm。一次葬人骨の頭部付近から出土（第 34 図の No.2）。

第 37 図 57 は、磁器の人形である。燕尾服をまとった男性の人形で、シルクハットと眼鏡を身につけ、右腕には杖を持っている。彩色はほとんど落ちてまだらであるが、燕尾服とシルクハットに黒色、顔の口元に赤色がわずかに残っている。人形の背中には「MADE IN JAPAN」の刻印がみられる。人形の全長は 10.8cm。一次葬人骨の足元付近から出土（第 34 図の No.3）。

第 37 図 58 は、沖縄産陶器の動物の足をかたどったものの破片資料である。本資料は右足の足先であるが、四本爪が表現されている。表面にはコバルトと緑釉で彩色されている。足の裏には直径 1.5cm の孔があげられている。厚さは 0.3cm ～ 0.4cm 程である。墓室の埋土からの出土。



第 37 図 56 号墓出土遺物 3

4) 蔵骨器 1 内人骨の納骨状況について (第 38 図)

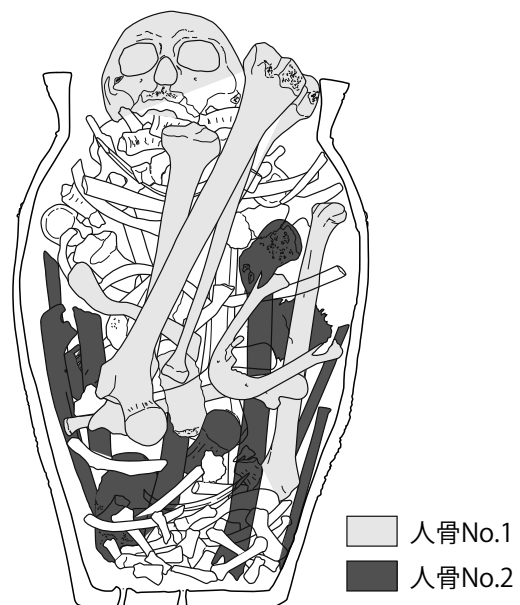
墓室内の床面直上から検出された蔵骨器 1 は、蓋が身からずれた位置にあったものの、身の内部への埋没土の流入はそれほどない状態であった。納められた人骨も良好な状態で残存しており、蔵骨器内部において人骨が納骨時の原位置を概ね維持しているものと判断されたことから、内部の状況について詳細な観察と記録を行った。

まず、検出時において頭蓋骨及び大腿骨の一部が蔵骨器の身の口縁から飛び出す状態であったことが着目される。これまでの前田・経塚近世墓群の調査事例などからみると、特異的な事例であると考えられる。

次に蔵骨器内部の人骨の位置関係を観察すると、最も上位に頭蓋骨が置かれており、頭頂部を上に向け、顔面が正面（窓）の方向へと向けられている。その直下には頸部から肩部にかけての位置に椎骨・肋骨がまとまっている様子が窺える。次いでその下、胴部の最も径の大きくなる空間に、頭蓋骨破片・下顎骨・鎖骨・胸骨・踵骨などが中央付近に寄せられながら位置する。下顎骨が 2 点確認されたことから、2 体分が含まれることが分かり、うち 1 体は最上位の頭蓋骨と同一人のものと思われるが、両者の間に多数の骨が挟まれていることから、上下の顎骨を咬合させた状態で納骨したものではないことが窺われる。次いで、これらを取り囲むように四肢骨が配される。四肢骨は上肢の上腕骨・橈骨・尺骨と下肢の大腿骨・脛骨・腓骨でそれぞれまとめられており、上腕骨・大腿骨・腓骨は遠位端を上、脛骨は近位端を下に向けた状態で納められる。尺骨は横倒しの状態で位置していることが窺える。また、これらの四肢骨は胴下部 1/3 程の高さに置かれており、最上部に置かれている頭蓋骨と同一個体のものと思われる。これら四肢骨の下には指骨や肋骨などの部位が底部との間に配置される。更に底部直上には前述のものとは別個体の四肢骨・寛骨などが置かれている状態がみてとれる。なお、底部に接する位置にある四肢骨は上位に位置していた人骨に比べて残存状況が不良である傾向が窺える。

上記の観察所見に基づき、本蔵骨器における納骨状況をまとめると、まず、先に一体分の人骨が納められたのち、それらの四肢骨の骨端などが風化する程度の時間が経過した後、その上に 2 体目の人骨が納められた経過を表しているものと考えられる。

一つの蔵骨器に 2 体分の人骨が納められる事例は珍しいものではないが、その場合は、先に納められた人骨を一旦取り出し、追納する人骨と長管骨・扁平骨・椎骨などある程度形状が近い部位同士をまとめたうえで改めて納骨することが多いように思われる。しかしながら本蔵骨器は、四肢骨下端の納骨位置が 2 つのレベルに分かれていることが見て取れることから、先に納められた人骨を取り出すことなく、新たな人骨を追納した様子が明らかである。そのため、頭蓋骨および大腿骨の一部が口縁から飛び出し、納まりきらない状態になったものと推測される。



第 38 図 56 号墓蔵骨器 1 内人骨の納骨状況

(11) その他の墓の遺物

前項まで、比較的遺物の残存状況が良く特徴的な様相を示す墓について遺構と遺物の詳細の報告を行った。それ以外の墓について特徴的な遺物について抽出して報告を行う。以下、墓ごとに報告する。

1) 2号墓

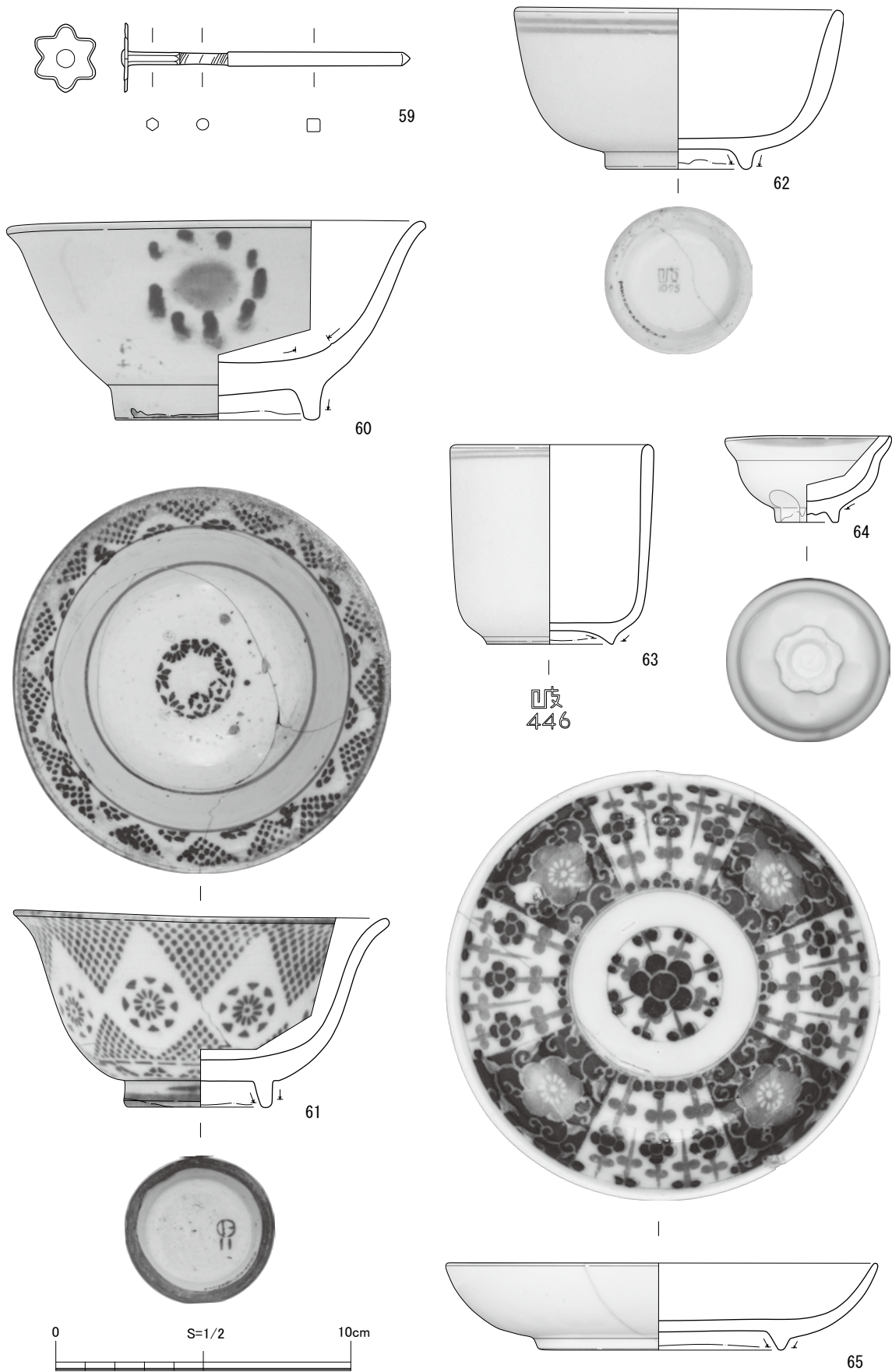
2号墓では、金属製の簪を1点図化した。第39図59は、銅製の簪である。頭部に花形の飾りがつくられるが、飾り部分の表面が剥離している。首部は断面形状が六角形になる。断面が丸くなるムディ部を挟み、竿部については断面形状が方形である。長さ9.7cm。断面幅は首部で4.3mm、竿部で4.5mm。重量は16.2gである。墓口の埋土からの出土。

2) 19号墓

19号墓では、陶磁器製の碗を三点、磁器製の湯飲み1点、小杯1点、皿1点を図化した。詳細については、第39図と第20表に記した。

第20表 19号墓出土陶磁器一覧表

図版番号	出土地点	種類	器種	法量 (cm)			成形・調整	素地	文様	釉色・色調	備考
				口径	器高	底径					
第39図60 図版22-60	墓室埋土	沖縄産施釉陶器	碗	14.15	6.75	7.0	口縁がわずかに外反する器形。胴下部にはへら削りの痕が残る。見込みには蛇の目釉剥ぎを施す。畳付は露胎。	黄灰色	中央の丸文をにぶい黄褐色で描き、周囲の点をコバルトで描く。	白化粧の後、文様を描き、その上から全体に透明釉をかける。	
第39図61 図版22-61	墓室埋土	日本本土産磁器	碗	12.7	6.6	5.0	口縁が外反し、腰部が深めにつくられる。低い高台がつく。見込みにハマ痕が残る。畳付は露胎する。	白色	外面に点描で菱形の窓をつくり、中に花文。内面には口縁部に点描で逆三角形と花文。見込みに花文を配置。	コバルトでの型絵染付後、全体に透明釉が掛けられる。	愛媛県砥部産。沖縄ではスカンマカイと呼称。底部に「O11」の記号あり。
第39図62 図版22-62	墓室埋土	日本本土産磁器	碗	11.35	5.35	5.1	口縁が直口する厚手の碗で、腰部が深い器形である。低い高台がつく。畳付は露胎する。	白色	口縁部の外面に緑色の二本のラインが書かれる。	白色の素地に緑色のラインが書かれ、全体に透明釉が掛けられる。	瀬戸美濃産。国民食器といわれるもの。底部に「岐1075」の統制番号あり。
第39図63 図版22-63	墓室埋土	日本本土産磁器	湯飲み	6.95	6.8	4.45	口縁が直口する厚手の湯飲みで、胴部がほぼ垂直に下に落ち、低い高台がつく。畳付は露胎する。	白色	口縁部の外面に緑色の二本のラインが書かれる。	白色の素地に緑色のラインが書かれ、全体に透明釉が掛けられる。	瀬戸美濃産。国民食器といわれるもの。底部に「岐446」の統制番号あり。
第39図64 図版22-64	墓室埋土	日本本土産磁器	小杯	5.7	2.8	2.35	口縁が「くの字」状に外反する器形で、胴下部に花卉状の面取りが施される。高台は花形に成形される。高台内と畳付は露胎する。	白色	なし	口縁内外面の二箇所に緑と赤の呉須で彩色した後、全体に透明釉が掛けられる。	瀬戸美濃産
第39図65 図版22-65	墓室埋土	日本本土産磁器	皿	14.7	2.4	8.45	口縁が直口するやや深めの器形。低い高台がつく。畳付は露胎する。	白色	内面に銅版転写により、桜花文や草文を配置する。	白色の素地に濃淡のコバルトで色をつけ文様を表現し、全体に透明釉が掛けられる。	



第 39 图 2 号墓・19 号墓出土遺物

3) 20 号墓・22 号墓・24 号墓・35 号墓

20 号墓・22 号墓・24 号墓・35 号墓から出土した銭貨 6 点について図化した。詳細については、第 40 図と第 21 表に記した。

第 21 表 20 号墓・22 号墓・24 号墓・35 号墓出土銭貨一覧表

図版番号	遺構名	出土地点	銭種	寸法(mm)・法量(g)						備考
				輪外径	輪内径	郭外径	郭内径	厚さ	重量	
第40図66 図版23-66	20号墓	墓室埋土	寛永通宝 (古寛永)	23.7	19.38	7.57	5.93	1.25	3.54	
第40図67 図版23-67	20号墓	墓室埋土	寛永通宝 (古寛永)	25.05	20.29	7.97	6.32	1.1	3.29	
第40図68 図版23-68	22号墓	墓室埋土	半銭銅貨	21.99	-	-	-	-	3.25	
第40図69 図版23-69	24号墓	墓室埋土	寛永通宝 (古寛永)	24.5	19.57	7.26	5.34	1.14	2.58	
第40図70 図版23-70	24号墓	墓室埋土	寛永通宝 (新寛永)	25.1	19.95	7.56	6.06	1.22	3.57	背文に「文」
第40図77 図版23-77	35号墓	墓室埋土	寛永通宝 (新寛永)	23.09	19.02	7.97	6.5	1.05	2.63	

4) 25 号墓

25 号墓から出土した陶製の瓶一点、小杯一点、金属製の簪一点について図化した。詳細については、第 40 図と下記に記した。

第 40 図 71 は、沖縄産陶器の瓶である。口縁は玉縁でラッパ状にひらき口唇は尖る器形である。高台は浅いハの字状につくられ、畳付は露胎する。内面は口縁内側まで施釉される。胴部には白化粧のあと飴釉と緑釉を線状に廻らし色付される。内外面ともに貫入がみられる。素地は灰褐色で、白化粧の後に彩色し全体に黄味がかかった透明釉がかけられる。口径 4.0cm、器高 12.7cm、底径 5.6cm。墓室埋土からの出土。

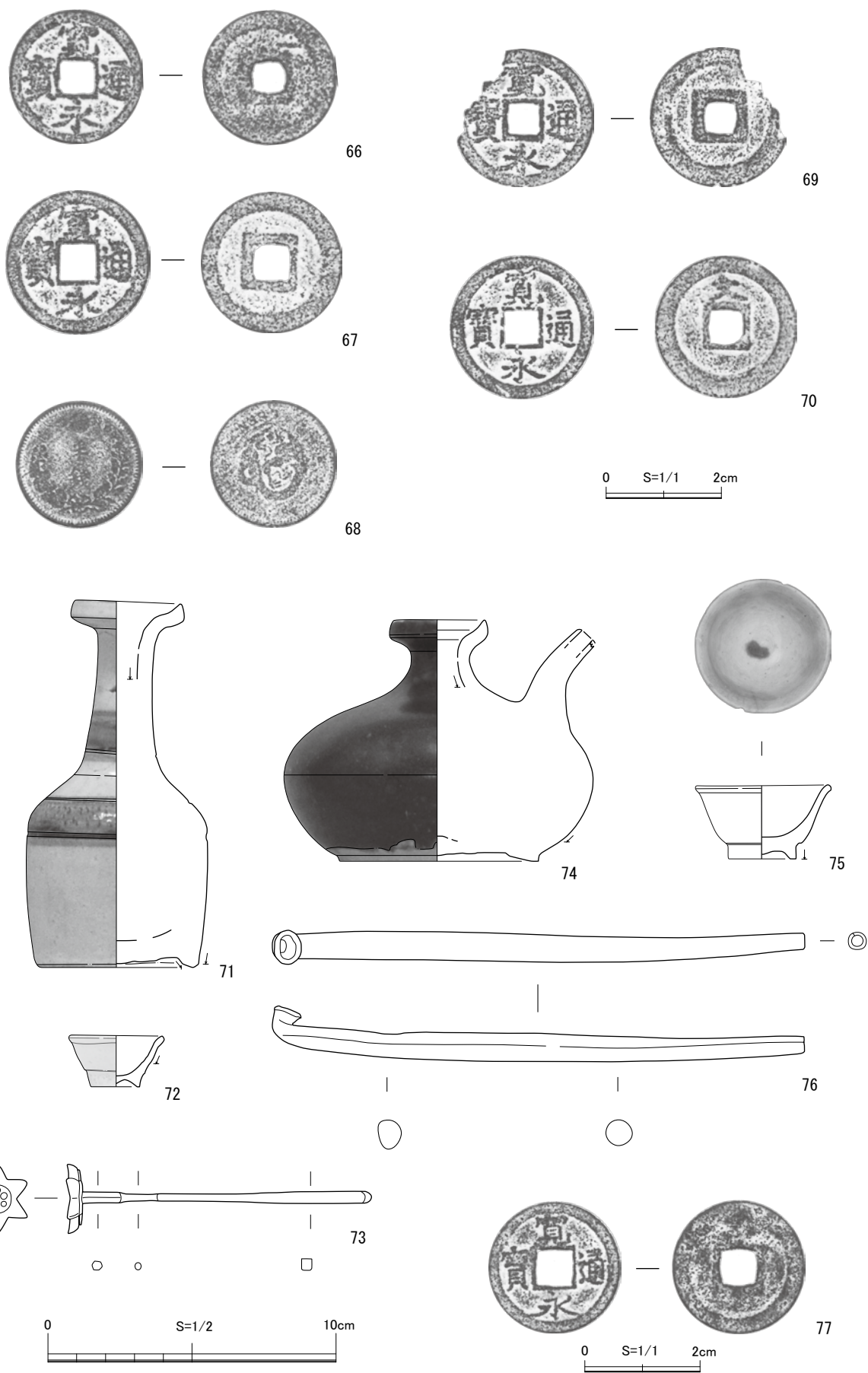
第 40 図 72 は、沖縄産陶器の小杯である。口縁は玉縁で、高台は削り出しにより成形され、ハの字状にひらく器形である。灰白色の素地で、内外面に灰色の釉薬が施釉される。外面の胴下部から外底面は露胎する。口径 3.3cm、器高 1.75cm、底径 1.8cm である。墓室埋土からの出土。

第 40 図 73 は、銅製の簪である。頭部に花形の飾りがつくられる。首部は断面形状が六角形になる。断面が丸くなるムディ部を挟み、竿部については断面形状が方形である。長さ 10.5cm。断面幅は首部で 3.5mm、竿部で 4.2mm。重量は 15.1g である。墓室埋土からの出土。

5) 27 号墓

27 号墓から出土した陶製の酒注一点、小杯一点、金属製のキセル一点について図化した。詳細については、第 40 図と下記に記した。

第 40 図 74 は、沖縄産陶器の酒注である。口縁は玉縁で口唇が上に尖るように成形される。胴部がふくらむ器形である。外面全体に黒釉が掛けられ、胴下部から外底面は露胎する。素地は橙灰色である。口径は 3.5cm、器高 8.4cm、底径 7.1cm。墓庭埋土からの出土。



第 40 图 20 号墓 · 22 号墓 · 24 号墓 · 25 号墓 · 27 号墓 · 35 号墓出土遗物

第 40 図 75 は、沖縄産陶器の小杯である。口縁は外反し、高台は削り出しにより成形され浅くハの字状にひらく器形である。灰白色の素地で、見込みにコバルトで点状の文様が施された上で内外面に灰色の釉薬が施釉される。畳付から外底面は露胎する。口径 4.65cm、器高 2.55cm、底径 2.4cm である。墓庭埋土からの出土。

第 40 図 76 は、銅製のキセルである。雁首と吸口が一体になったタイプのものである。完形品で、首部周辺の上面がわずかにつぶれる。全体長 18.5cm、火皿径 1.05cm、立ちあがり 1.65cm、吸口径 0.6cm、重量は 37.2g。墓室埋土からの出土。

第 5 節 小結

前田西前田原 B 丘陵では、平成 25 年度に実施した発掘調査によって計 63 基の遺構を確認することができた。それらの調査成果の詳細について報告を行ってきたが、あらためて下記の項目ごとに総括し、本調査地区のまとめとしたい。

1. 遺構の特徴と墓域の形成について

前田西前田原地区には 4 つの丘陵があり、その中で今回報告した前田西前田原 B 丘陵はほぼ中央部に位置する丘陵である。丘陵の土質は細粒砂岩（ニービ）が主体ではあるが、一部は第三期泥岩層（クチャ）を挟んだ互層であった。本丘陵に所在する墓はすべて、このような地質の丘陵に横穴を掘り込んで造られた掘込墓（フィンチャー）である。

遺構の形態については、丘陵の中央に近い上段から中段については比較的定型的で中型～大型の墓が多く、丘陵の周辺部や裾部については不定形で小規模である傾向をみてとることができた。これは、丘陵の頂部から中段にかけては急斜面があるため、高低差を利用した造墓が比較的し易いといった地形的な要因があると推測される。墓室形状による類型の内訳をみると、1 類が最も多く 36 基（1a：11 基、1b：10 基、1c：9 基、1d：6 基）、2 類が 5 基（2a：3 基、2b：2 基）、3 類が 5 基（3a：1 基、3b：1 基、3c：3 基）、4 類が 3 基（4a：1 基、4b：2 基）、5 類が 12 基（5a：6 基、5b：6 基）、6 類が 2 基（6b：2 基）である。このことから、棚が造られないかもしくは一段のみ造られる比較的単純な造りの墓が約 8 割を占め、棚が複数段造られる比較的定型化した中規模から大規模な墓は 2 割程度であった。

上記のなかで、2 類 b のタイプに属する遺構として、遺物を伴うかたちで検出された 6 号墓と 42 号墓について取り上げる。この 2 基は、墓室の形状だけではなくいずれも丘陵の頂部近くに造墓される点や、ボージャー形の蔵骨器が検出されている点で共通する。遺物の出土状況からは蓋と身のセット関係が明確な資料ではないものの、ボージャー形の蔵骨器は型的には 18 世紀中頃から後半の資料である。これらの資料が本丘陵から確認された遺物の中では、比較的古手の資料になるため、本丘陵における墓の造営年代の上限を考える上では一つの指標になる。これらと年代的に近いと考えられるボージャー形の蔵骨器の資料は 31 号墓や 41 号墓でも確認されている。これらのことから、本丘陵においては 18 世紀中頃から後半頃には複数の墓が機能する墓域として機能していたと考えられる。

丘陵の中段に並ぶ比較的大・中規模の遺構は、遺構や遺物の残存状態が良くないため年代的な位置

づけが難しいが、丘陵裾部の下段に位置する 38 号墓、51 号墓、56 号墓などの小規模で不定形な墓室を有する遺構は、いずれも 19 世紀後半から 20 世紀初めにかけての遺物が検出されている。このことから、19 世紀以降に徐々に丘陵の中段や下段に墓が造られ続け、20 世紀の初めころには、墓が横並びに展開するような景観になっていったと考えられる。

その後、戦争により遺構の大部分は改変や崩落により大きな影響を受けるものの、一部の墓は戦後も引き続き墓として機能したと考えられる。実際に、現在の前田集落により近い 11 号墓、12 号墓、61 号墓、62 号墓では、比較的大きな墓が、墓の前面をコンクリートで改修して近年まで使用されていた。また、南側斜面については大部分で地形が崩落していたが、一部では 37 号墓のように戦後の火葬骨壺や金属製の缶を使用した蔵骨器が確認されるなど、墓として使用した痕跡が確認されている。

2. 遺物の年代観と墓の被葬者について

遺物のなかでも最も多く検出された蔵骨器の年代観について触れる。蔵骨器は、ボージャー形が年代的に最も古く、6 号墓や 31 号墓、41 号墓、42 号墓において年代が比定できる資料が検出されている。型式的には安里分類（安里・新里 2006）の蓋 V・Ⅶ型式、身Ⅱ～Ⅶ型式の資料が出土していること、その中でも 6 号墓で第 11 図 11 に示したようなボージャー形の終末期（身のⅦ型式）の資料があることから、おおむね 18 世紀中頃～19 世紀初め頃にかけての資料であると考えられる。それ以外の墓では、ほとんどがマンガン釉甕形の資料であり、一部にマンガン釉底付甕形の資料も得られている。これらは、安里編年（安里 1997）のⅣ～Ⅵ期の資料であり、19 世紀から 20 世紀にかけて流通したものと考えられている。これらの資料が、本調査地区で最も出土量が多いが、この傾向は前田・経塚近世墓群の他の地区においても同様である。石製や陶製御殿形の蔵骨器があまり検出されていない点は、本地区の特徴的な様相を示すものである可能性もあるが、遺物の大部分は墓の移転の際などに持ち出されていると考えられるため、積極的な評価は控えたい。

また、37 号墓では戦後に使用された陶製の火葬骨壺とともに、金属製の缶を蔵骨器に使用した事例が確認された。こういった事例は、この墓域が戦争をはさんで戦後まで機能していたことを示しているだけではなく、戦後のモノがない時代に「代用品」として蔵骨器を調達した庶民の暮らしぶりを示す事例であろう。

今回の調査では蔵骨器の銘書から「前田村」「石川」（6 号墓）、「石川」（38 号墓）、「嶋袋」（41 号墓）、「浦添間切前田村」「親富祖」（42 号墓）、「字前田」「石川」（51 号墓）などといった村名（字名）や姓が確認されたことから、同丘陵は近世から近代にかけて前田の墓域として機能していたことが確認された。これらの銘書では、姓名だけではなく、屋号が書かれるなどの特徴から概ね百姓層のものであることが判明した。また、41 号墓の蔵骨器には、儀保村や中城村出身の女性が被葬者であると資料もみられることから、往時の前田の人々の家族形成をみることができる点が特筆される。

3. 戦争遺跡としての前田西前田原 B 丘陵

前田西前田原 B 丘陵では、戦跡としての様相も強くみられた。4・5 号墓のように墓が連結され避難壕として転用された事例や、44 号・45 号遺構のようにそもそも墓として造られたものなのか当初から壕として造られたのか判然としない遺構も確認された。また 4・5 号墓や 19 号墓では、遺物と

して統制経済下に流通した碗や皿などの日用品が持ち込まれて実際に避難壕などとして利用された痕跡が確認できたことから（第 7 図、第 39 図）、戦時中に本丘陵の遺構の幾つかが避難壕として使用されたことは明らかである。

41 号墓や 56 号墓では、一次葬人骨が洗骨される前に天井が崩落等により埋没している。いずれも周辺の地形の崩落状況などから、戦時中の砲撃などの影響により埋没したものと考えられ、これらの遺構は戦争を境に墓として機能しなくなったと考えられる。また、37 号墓の墓口付近に砲弾による攪乱がある点や、南側斜面中段の遺構の残存状況が悪く地形ごと大きく崩落している点などから考えて、特に南側斜面一帯においては戦時中に大きく砲撃を受け崩落している可能性が高い。

戦時中に墓が避難壕として利用される様相は、同丘陵に隣接する前田西前田原 A 丘陵でも同様に確認されている（浦添市教育委員会 2015）。これらの遺構や遺物は、浦添の前田地域で行われた戦争の激しさを物語るモノであり、前田・経塚近世墓群における戦争遺跡としての側面をみることができる。

〈引用・参考文献〉

- 安里進 1997 「伊祖の入め御拝領墓の厨子甕と被葬者―近世墓の考古学的調査による家族復元―」『伊祖の入め御拝領墓の厨子甕と被葬者』浦添市文化財調査研究報告書第 25 集
- 安里進・新里まゆみ 2006 「比嘉門中墓の家族史―家族の数だけ歴史がある―」『比嘉門中墓の家族史―家族の数だけ歴史がある―比嘉門中墓の調査概要』浦添市文化財調査研究報告書
- 安斎英介・上原千明 2015 「沖縄の遺跡から出土する近代の本土産磁器について―スンカンマカイと統制番号を有する資料を中心に―」『南島考古』第 35 号、沖縄考古学会
- 浦添市教育委員会 2007 『市内遺跡発掘調査報告書（1）―平成 13～18 年度調査報告―』
- 浦添市教育委員会 2011 『前田・経塚近世墓群 2―首里大名地区―』
- 浦添市教育委員会 2012 『前田・経塚近世墓群 3―前田真知堂 B 丘陵（1）・前田真知堂 C 丘陵（1）』
- 浦添市教育委員会 2013 『前田・経塚近世墓群 4―経塚子の方原 A 丘陵（1）―』
- 浦添市教育委員会 2015 『前田・経塚近世墓群 6―前田真知堂 A 丘陵（1）・前田西上原 A 丘陵・前田西前田原 A 丘陵』
- 鈴木悠 2014 「近世琉球における百姓身分の銘書の変遷について（試論）―浦添市内出土資料の検討を中心に―」『浦添市文化部紀要 よのつち』第 10 号、浦添市教育委員会文化部

第4章 前田西前田原C丘陵の調査成果

第1節 調査の方法

本地区（第3図）の調査前は、地表に腐葉土・崩落土などが大量に堆積しており、その一部で地山を直接掘り込んだ横穴式の掘込墓の墓口上部が僅かに4基確認できただけで、大部分は墓室の内部が崩落したと想定される地形上のくぼみが散見される状況であった。伐採や除根作業は、バックホウを用いた機械掘削で行い、その過程で沖縄戦時のものと思われる砲弾片や戦後のガラス瓶などが多数確認されたことから、調査区では近現代の攪乱が著しいことが想定された。

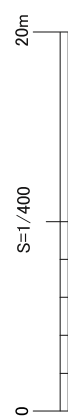
表土の除去については作業効率上、バックホウを用いた機械掘削で行った。掘削の過程で墓正面や庭囲いが検出されると、順次人力掘削に切り替えて遺構細部の検出作業を行った。前田・経塚近世墓群の遺構は、そのほとんどが地山である細粒砂岩（ニービ）の丘陵に掘りこまれていることから、地山を検出することで墓築造時および使用時の遺構面を検出することができる。人力掘削の結果、調査地の丘陵からは複数段にわたって合計32基の遺構を検出した。遺構番号は原則、確認した順に付した。

32基の遺構は、戦争中に造られたと考えられる5基の防空壕を除くと、遺構や遺物の残存状態が良好で比較的情報量の多い2基の墓と、戦後まで使われた上で移転が済んだ墓や、後世の攪乱などの影響から遺構や遺物の残存状態が悪い「空き墓」とそれに近い状態の25基の墓の計27基の墓が確認された。比較的情報量の多い2基の墓については、1/20の実測図の作成を行い、その内一次葬人骨については、1/5で実測図の作成を行った。「空き墓」とそれに近い状態の25基の墓については、略測図の作成を行った。写真撮影は適宜、調査開始から完掘まで行った。

第2節 層序と遺構

前節に記したとおり、本地区は戦時中もしくは近現代の攪乱が著しいことが想定されたため、墓の上部や墓前については、重機と人力による掘削によってこれらの土層の除去作業を行い、遺構面の検出を行った。天井部分が崩壊している遺構は、墓室内に墓の天井部分を形成していた細粒砂岩のブロックと表土層（戦後の土層）が混在して厚く堆積している状態であり、墓の入り口のみが埋没した墓については、墓の内部にはほとんど埋土がない状態が確認された。このような状況であることから、本地区では明確な層序関係を把握することはかなわなかった。

検出された遺構のうち、27基が横穴状の掘込墓であり（第41図）、そのほとんどは天井が崩落した埋没墓であったが、「空き墓」とそれに近い状態の墓が多かった。墓群は複数段により構成されており、それぞれの段で墓が横並びに位置する。墓の並び方として、調査区西側では大型の掘込墓が上段に、小型の掘込墓が下段に並んでおり、東側では小型の墓が複数段に並列していた。いずれの墓も丘陵の形状に沿い墓口の向きが定められているようである。各々の墓の特徴については、第22表にその概要を記した。なお墓室の類型については、浦添市教育委員会2007『市内遺跡発掘調査報告書（1）』掲載の表を改訂して用いている（第1表）。



— 77 —

第 22-1 表 前田西前田原 C 丘陵の遺構一覧表

遺構 番号	外観 形式	墓室 類型	墓室 (㎡)	墓口 方位	法量 (m)			蔵骨器 の出土 状況	一次葬人骨		所見
					高さ	幅	奥行		有無	頭位 方角	
3号	掘込墓	1c	2.43	北東 (N41° E)	(1.38)	(1.2)	(2.03)	—	—	—	墓口部分が崩落しており、全形は不明。墓室中央部に溝状のくぼみを有する。元来あった墓を拡張した可能性が考えられる。
5号	掘込墓	1b	1.2	北北西 (N16° W)	(1.48)	(1.0)	(1.2)	—	—	—	残存部の様相から隅丸長方形あるいは歪な楕円形の墓室だったと推定される。西側に隣接する4号(壕)との間に通路状の掘り込みが確認できる。
7号	掘込墓	5a	5.58	北 (N8° W)	1.67	2.12	2.63	—	—	—	墓室の軸に対して墓庭の軸が東側に傾く。墓庭表面に蔵骨器片が散乱。庭囲い左側は隣接する6号(壕)と繋がる通路状の掘り込みがセメントで塞がれている状態で確認できた。
8号	掘込墓	5a	6.02	北東 (N36° E)	1.87	2.28	2.64	—	—	—	墓口やサンミデーは、セメントやコンクリートブロックで覆われていた。墓庭表面にはマンガン釉甕形、上焼御殿形の蔵骨器片が散乱。墓庭中央部のピットが検出され爆弾穴と考えられる。
9号	掘込墓	5a	6.50	北東 (N49° E)	1.79	2.51	2.59	—	—	—	三番棚と左棚の接点付近の岩盤が出っ張って残っている。左棚はくぼんだ箇所ならなら石材を補って平坦に成形している。墓口の両脇に袖石状の壁の張り出しがある。
10号	掘込墓	3c	2.65	北東 (N3° E)	(1.34)	1.78	1.49	—	—	—	棚はL字状を呈する。墓口が墓室の西側に寄ってつくられている。墓庭の形状は残存状況が悪いため不明。
11号	掘込墓	4a 変形	1.70	北東 (N44° E)	(1.26)	1.0	1.70	—	—	—	墓口は幅約0.3mと狭い。棚の平面形は台形を呈し、墓室床面から0.48m高い位置にある。独立していた小規模な墓2基を改修・接続して造営された可能性がある。
12号	掘込墓	1a	3.61	北北東 (N16° E)	(1.33)	1.90	1.90	—	—	—	墓室はいびつな形状を呈する。墓庭の北端に幅約1.2m、長さ約1.9mの長方形のくぼみが設けられ、埋土から戦争遺物が出土していることから、戦時中の遺構と考えられる。
12号 脇1	掘込墓	1c	0.34	東南東 (N113° E)	(1.10)	0.56	0.60	—	—	—	12号墓の墓庭より低い位置に墓室が造営されている。埋土から12号墓との関係性の検証を試みたが、判然としなかった。
12号 脇2	掘込墓	1b	0.07	東 (N89° E)	(0.24)	0.26	0.26	○	—	—	約26cm四方の隅丸長方形で、植木鉢と蔵骨器蓋がセットの状態で見られる。
13号	掘込墓	4a 変形	3.24	北 (N3° E)	(1.47)	1.66	1.95	○	○	北 (N3° E)	奥壁側が出窓状の棚1段を形成し、墓室右側に小さな拡張部を形成。一番棚の蔵骨器1点の屋門が奥壁側を向く。シルヒラシで一次葬人骨が上位・下位2体検出されている。
14号	掘込墓	1b	0.72	北北東 (N20° E)	(0.89)	0.96	0.75	—	—	—	墓口が墓室の西側に寄ってつくられている。墓口と墓室との間に砂岩塊が2つ置かれていたが、閉塞石である可能性がある。
15号	掘込墓	4b	0.91	北北東 (N29° E)	(1.06)	0.68	1.34	—	—	—	平面形が長方形を呈し、墓口と墓室の区画は曖昧である。一次葬用の墓である可能性がある。奥壁に1段棚が確認できるが、形状が不明瞭である。
16号	掘込墓	1a	1.17	北北東 (N24° E)	(1.15)	1.30	0.90	—	—	—	墓室平面形はいびつな楕円形である。墓庭と墓室の軸はほぼ平行である。

※括弧付きは残存部分の数値

第 22-2 表 前田西前田原 C 丘陵の遺構一覧表

遺構 番号	外観 形式	墓室 類型	墓室 (㎡)	墓口 方位	法量 (m)			蔵骨器 の出土 状況	一次葬人骨		所見
					高さ	幅	奥行		有無	頭位 方角	
17号	掘込墓	1a	0.24	北北東 (N31° E)	(0.42)	(0.40)	(0.60)	—	—	—	非常に小さく、墓口や墓庭などの遺構は確認できない。 小型の蔵骨器あるいは一次葬を安置するための遺構と 考えられる。
18号	掘込墓	1b	1.66	北 (N11° E)	(1.06)	1.66	1.00	—	—	—	墓室奥側に隅丸方形で約 0.4m 四方の土坑が 1 基ある。 比較的天井が低い奥壁の近い位置に大型の蔵骨器を安 置する目的があったと考えられる。
19号	掘込墓	4a 変形	0.68	北北西 (N22° W)	(0.88)	0.90	0.75	—	—	—	奥壁に出窓状の棚を 1 段形成し、シルヒラシ中央部には 床面の高さを揃えるためと思われる平たい形の砂岩塊が 置かれていた。
20号	掘込墓	1c	0.50	北東 (N48° E)	(0.80)	0.35	1.45	—	—	—	平面形は長方形を呈し、墓口と墓室の区別ははっきりし ない。一次葬用の墓であった可能性が考えられる。
21号	掘込墓	1c	0.89	北北東 (N31° E)	(0.86)	0.74	(1.20)	—	—	—	平面形は長方形を呈していることから、一次葬用の墓と 考えられえ。埋土より薬莢や弾倉、レーシヨンの袋が 出土し、戦時中に壕として転用された可能性がある。
22号	掘込墓	1c	1.46	北東 (N39° E)	(0.83)	0.95	(1.54)	—	—	—	平面形は長方形を呈することから、一次葬用の墓だった 可能性がある。埋土より薬莢などが出土し、戦時中に壕 として転用された可能性がある。
23号	掘込墓	4c	2.01	北北東 (N30° E)	(0.92)	1.21	1.66	—	—	—	平面形は楕円形を呈し、2 番棚まで造られている。シル ヒラシの面積は棚の面積とほぼ同じである。墓口および 墓庭の有無は判然としない。
24号	掘込墓	1a	1.69	北北西 (N19° W)	(0.76)	1.28	1.32	—	—	—	墓口は墓室の西側に寄せてつくられる。墓室中央部には 墓口側と奥壁側を仕切るように不定形の砂岩塊が複数 積まれていた。
25号	掘込墓	1b	0.66	北北東 (N29° E)	0.68	1.05	0.63	—	—	—	平面形は隅丸長方形で、墓口はわずかに確認できるが 墓庭などは確認できない。小型の蔵骨器あるいは一次 葬を安置するための遺構と考えられる。
26号	掘込墓	1c	0.38	北北東 (N15° E)	(0.75)	0.42	0.90	—	○	南南 東 (N160 ° E)	幅 0.4m 程、奥行き 0.9m 程の平面形が長方形を呈する 墓室に、ひざを折り曲げた状態で一次葬人骨が 1 体検出 された。
27号	掘込墓	1a	0.6	東北東 (N65° E)	(0.90)	0.86	0.70	—	—	—	平面形は歪な楕円形で奥壁・側壁の残存部には天井へ と繋がるアーチが認められない。
29号	掘込墓	4a	2.41	北北東 (N17° E)	1.10	1.44	1.68	—	—	—	墓口は墓室の西側に寄せてつくられ、墓室内はごくわず かな棚が 1 段つくられている。墓室・墓口の軸に対して 墓庭の軸は東側に約 10° 傾く。床面から小杯と酒注が各 1 点出土。
30号	掘込墓	4a	0.64	北北東 (N12° E)	(0.55)	0.8	0.8	—	—	—	墓室平面形は奥壁側が広い三角形を呈する。墓室の規 模に対して棚が広い。墓口および墓庭は残存していない。

※括弧付きは残存部分の数値

第3節 遺物

遺物は、総計で 243 点が出土した。出土遺物の数量と内訳は、第 23 表のとおりである。主たるものとしては、蔵骨器、副葬品と思われる陶磁器類などが出土している。また表土層からは、戦時中の砲弾片などが多く出土した。遺物については、基本的に遺構毎に取り上げ作業を行った。以下に種類ごとにその概要を述べる。

(1) 蔵骨器

出土遺物中、最も多かったのが蔵骨器である。接合・復元できたものを含めて概ね形状が把握可能なものは蓋と身あわせて 33 点出土し、そのほとんどが壺屋産のものであると考えられる。蔵骨器の種類として、家形・甕形・転用品に大別できる。内訳として、甕形蔵骨器のマンガン釉甕形が最も多数（23 点）で、次に御殿形（4 点）、転用品（3 点）、マンガン釉底付甕形（2 点）、上焼甕形（1 点）となっている。

(2) 蔵骨器以外の陶磁器

蔵骨器以外では、小杯や酒注など陶磁器の小物類が出土している。これらの多くは、一次葬の副葬品や墓が機能していた際に墓前などに供えられたものであると考えられる。これらは近世末～近代に流通したものであると考えられる。

(3) 金属製品

金属製品は、簪、指輪、銭貨、釘、S 鍔などが出土した。銭貨は計 3 点出土しており、寛永通宝が 1 点確認できた。表土掘削中に出土した蔵骨器の内底面に銅製指輪が 1 点付着していた。この遺物に共伴して男性用と女性用の銅製の簪が各 1 点ずつ計 2 点出土している。釘については、一次葬人骨を納めた棺箱に伴うものと考えられるが、いずれも状態が悪く全形が窺えないため本報告では数量のみの報告にとどめた。なお、S 鍔は 13 号墓墓室内の一次葬人骨胸部付近から出土している。

(4) その他の製品

一次葬人骨の棺箱に伴う遺物として、木片も少数出土している。状態が悪く全形が窺えないため本報告では数量のみの報告にとどめた。他にガラス製の薬瓶、ねじ付きのガラス瓶などがみられる。

(5) 戦争遺物

本調査区では、12 号墓の墓庭北端にあった長形状の土坑よりコッヘルとガラス瓶が出土している。また、防空壕 5 基より戦争関連遺物が多く出土している。

以上が今回発掘調査の出土遺物の概要である。次節では、遺構と遺物の残存状況が比較的良好な墓について、実測図などを用いてその詳細について報告を行う。

第 23 表 前田西前田原 C 丘陵の遺物一覧表

遺構 種類			1号	2号	4号	5号 墓室	6号	7号 表探	8号			9号 表探	9号 10間	11号 墓室	12号 前土坑	12号 墓室	12号 脇2墓室	13号			14号 前	15号 墓室	18号		20号 墓室	26号 墓室	28号 29号前	28号	29号		小計
									墓庭	墓室	表探							墓庭	墓室	表探			墓庭	墓室					墓庭	墓室	
蔵骨器	マンガン 釉甕形	蓋					1					1						3										1			6
		身					1				3	1	1					3										3			12
		破片						3																		2					5
	マンガン 釉底付甕形	身									1																				1
		破片																								1					1
	御殿形 (陶製)	蓋						1			1																				2
		身						1			1																				2
	上焼 甕形	身						1																							1
	転用蔵骨器	蓋														1	1														2
		身															1														1
陶磁器	酒注	完形																											1		1
	瓶	完形			1					2									1				1								5
		破片																									1				1
	碗	破片			36																	1									37
	小碗	完形	1			1				2										2											6
		破片																		1							1				2
	皿	破片																		1	1										2
	小皿	完形	4																												4
	小杯	完形												2					2									1	1		6
	植木鉢	破片									1																				1
	小鉢	完形	3																												3
	小壺	完形	1																												1
		破片																									1				1
	アンダ ガーミ	完形	1																												1
		破片									1																1				2
	播鉢	破片									1																	1			2
	鍋	破片																									1				1
	火炉	破片																									1				1
	陶製ボタン				1																										1
	不明																	1		1	1	4					3				10
金属製品	指輪							1																							1
	簪											2																			2
	釘																	41							1						42
	銭貨																1	1						1							3
	S 銀																	1													1
	金属片																	2								44					46
	コッヘル														1																1
注射針			2																												2
ガラス瓶		2	2												1			1							1						7
硯		1																													1
木片																		15													15
獣骨			1																												1
合計		13	5	38	1	2	6	1	4	9	1	4	2	2	1	2	1	70	1	5	2	5	1	1	46	4	14	1	1		243

第4節 各墓の調査成果

今回の前田西前田原C丘陵の調査では、合計27基の墓が確認され、墓に関係する蔵骨器や副葬品等の遺物も得られている。これらの遺構と遺物の概要については、第22表、第23表に既示したとおりである。本節では、これらの墓の中から、当時の葬法を考える手がかりとなる遺構や遺物が確認できた2基の報告を行う。なお、本節で報告を行う以外の墓については、第41図、第48図、第22表、第23表、第4節(4)及び巻末の図版をもって報告する。

(1) 13号墓

1) 遺構(第42図、第43図)

13号墓は、丘陵上段の東側に位置する横穴式の堀込墓である(第41図)。13号墓は本地区の東端に立地している。着手前は墓室天井部からの崩落土などで覆われていたため、墓室奥壁の一部以外は埋没していた。墓の立地する標高は約99.0～101.0m。墓口の方位は北(N3°E)である。

墓庭は、墓口に近い部分のみが残存している。サンミデーは形成されていない。幅3.26m、残存部の奥行が1.50mである。墓口については幅0.55m、奥行が1.19mとなり、残存部の高さが0.84mであるが、天井部が残存していないため、明確な墓口形状ははっきりとしない。墓室について、墓室平面形は隅丸方形を呈し、奥壁は出窓状に、床面は平坦ではない棚を1段形成し、墓室の右側に小さな拡張部が形成された墓となっている。法量は奥行1.95m、幅1.66m、残存部高さ1.47m、墓室面積は3.24㎡である。墓庭から墓室まで軸が通っている。

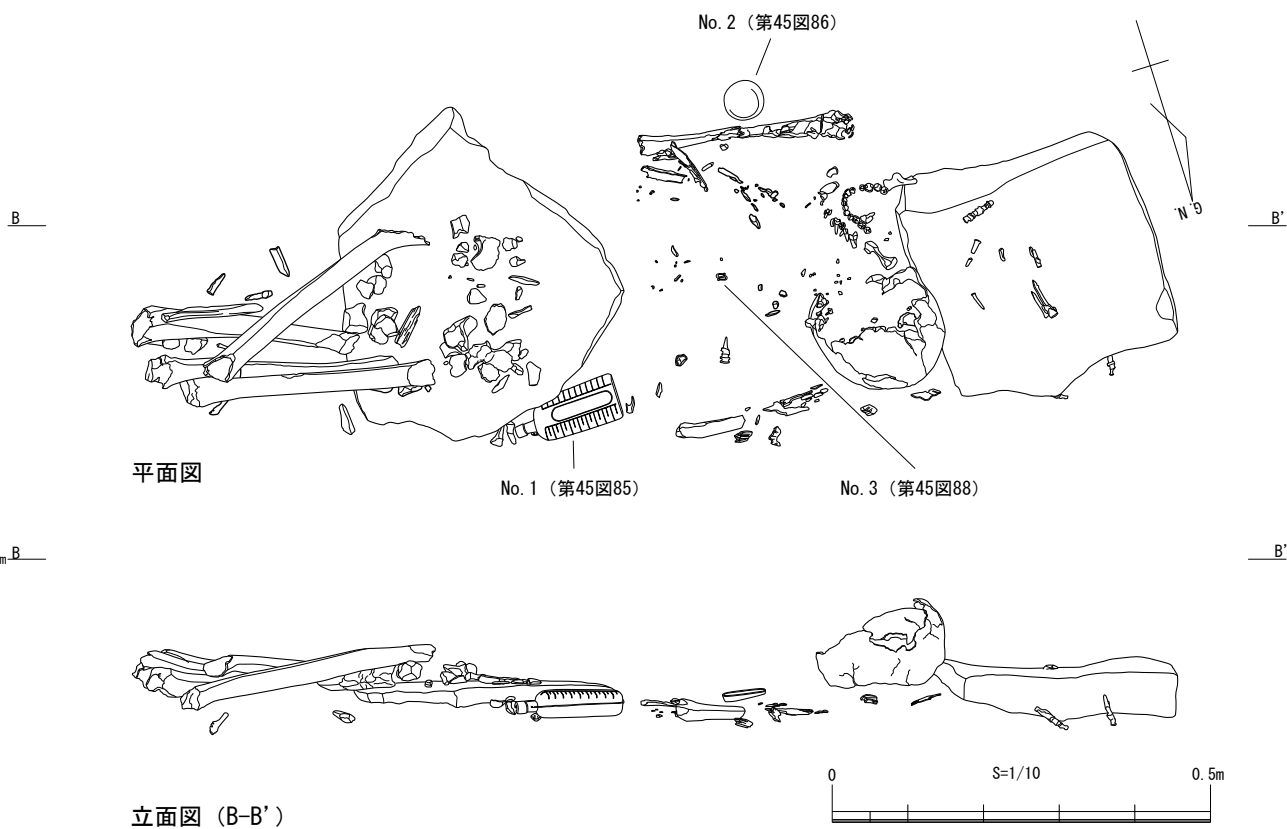
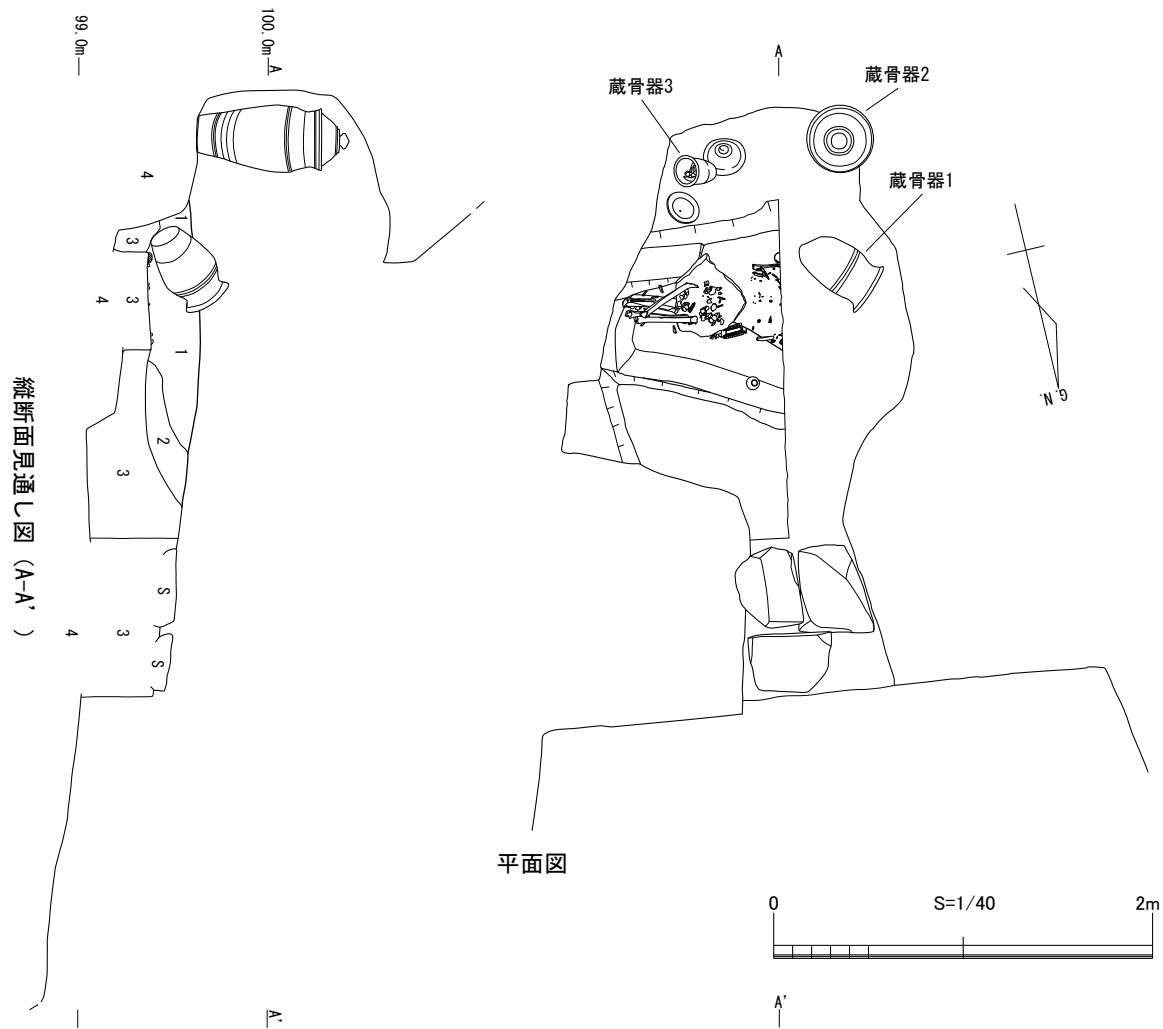
当該墓に堆積した土は4枚に分層できる(第42図上)。各層の所見は以下のとおりである。

- 1層・・・明黄褐色砂質シルト(7.5Y 6/6)。上部は締まりがあるブロック状のニービで墓室天井の崩落土と考えられる。下部は風化が進み締まりがなく、植物根が多く混じる土である。
- 2層・・・暗褐色粘土(2.5Y 4/2)。締まりなし。明黄褐色砂質シルト(7.5Y 6/6)のニービブロック(最大5cm程度)が多く混じる。
- 3層・・・黄褐色砂質シルト(10YR 5/6)。締まりがある。一次葬人骨が安置された床面(以下、一次葬-1)。明黄褐色シルト(2.5YR 6/6)のブロック(最大8cm程度)、暗灰黄色粘土(2.5Y 4/2)の粒(0.2～1cm程度)が混じり、炭化物(3cm大)が少量混じる。
- 4層・・・地山(ニービ)。直上より一次葬人骨が検出されている(以下、一次葬-2)。

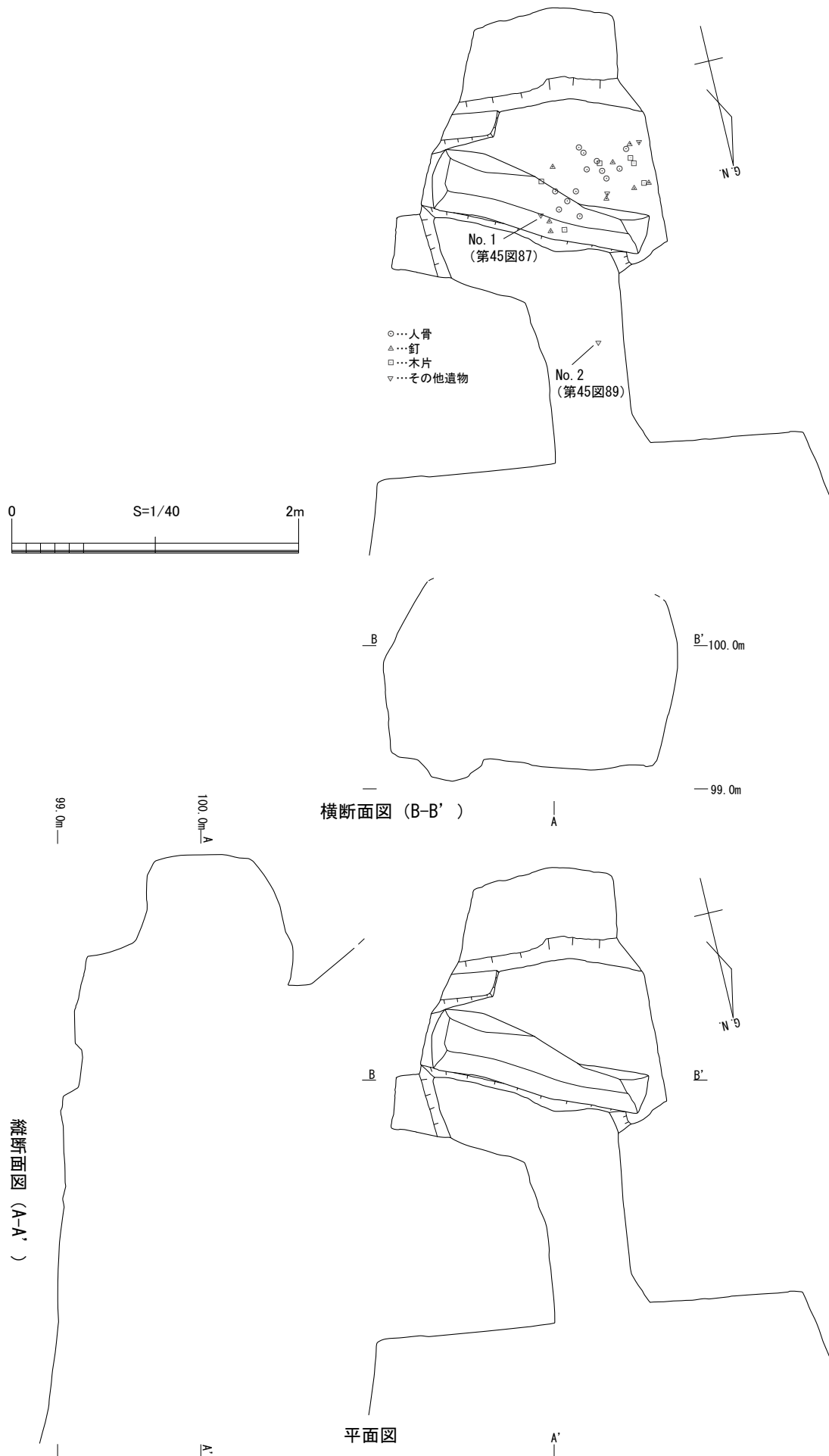
蔵骨器は身と蓋セットで安置された状態のものが1点、壁に寄りかかって傾いている身と棚の端に裏返して置かれている蓋がセットと認識できる状態のものが1点、蓋のみで置かれている1点が棚の上で確認された。また身1点が1層より出土している。

2) 一次葬人骨

一次葬-1は3層直上のシルヒラシに相当する箇所より出土した(第42図下)。人骨全体は墓室の軸に対して横向き、頭部は北側(N3°E)、手足は折り曲げられた状態で仰向けに安置されている。人骨の頭部と骨盤の下よりそれぞれ板状の砂岩の岩塊(ニービヌフニ)が検出されている。また木片や釘、薬瓶、小杯、S環が共伴し、木片や釘が人骨の周囲に散在していることから、台石の上に人骨が納まっ



第42図 13号墓遺構図1 (上：蔵骨器検出状況 下：一次葬-1検出状況)



第43図 13号墓遺構図2 (上：一次葬-2検出状況 下：完掘状況)

た棺箱を安置した一次葬人骨と考えられる。なお薬瓶や小杯は、副葬品として納められたものであろう。またS 鍔が胸部に相当する箇所より出土している。S 鍔は羽織と羽織紐とをつなぐ道具として現在も使用されており、出土したS 鍔も同様に使用されていた可能性がある。これは被葬者が死装束（グソージン）に羽織を着用していた事を示唆する事例と考えられる。

一次葬-2について、人骨と釘、木片、小杯がまばらに出土し、釘や木片が人骨の周囲を取り巻くようにシルヒラシに相当する箇所の4層直上より出土した（第43図上）。一次葬-1は一次葬-2のほぼ真上に位置していることから、一次葬-1が安置された際、一次葬-2は地表面に露出してなかったと考えられる。

安置された状態の蔵骨器1点について、屋門の向きは墓口とほぼ逆を向いていたが、直立した状態で出土したことから原位置を保持していると考えられる。この蔵骨器は昭和七年に死亡した旨の銘書が確認されていること、型式上は安里編年のV期（1900年～1920年頃）に分類されるため、銘書年代と製作年代とが整合する状況である。

3) 遺物（第44図、第45図）

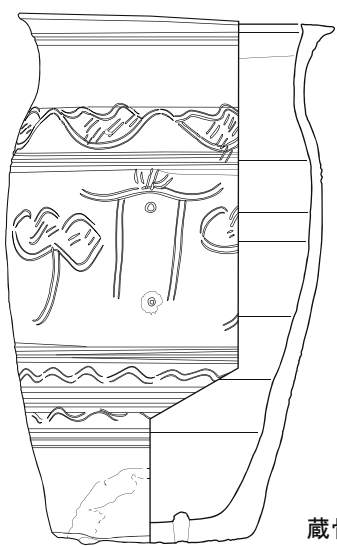
13号墓から出土した遺物の種類と数量については、第23表を参照頂きたい。このうち墓室から検出された比較的残存状況の良好な蔵骨器4点について図化した。なお残存状況のよい副葬品等の遺物6点も併せて図化した。蔵骨器については、第24表の観察表および下記所見を参照頂きたい。検出された一次葬人骨の詳細については、第5章を参照頂きたい。

第44図78はマンガン釉甕形蔵骨器の身の完形である。口縁部が外反し、口唇部は平坦に成形される。マンガン釉は全面に掛けられるが、外面底部と内面のほとんどは露胎する。横帯2のみ不明瞭な凸帯で、横帯1と3・4は凹帯である。外面はナデ調整、底面はロクロ成形痕が残る。内面はナデ調整で下部にヘラナデ痕が見られる。文様帯にある屋門および蓮華文等はすべて線彫であることから、安里編年VI期（1930年～）の資料と考えられる（第42図上 蔵骨器1）。

第44図79と80はマンガン釉甕形の蔵骨器である。第44図79の蓋は完形資料で、つまみは宝珠形、つまみ台は2段形成される。かえりは1mmと短く、先端は丸みを帯びている。内面にはナデ調整が施される。マンガン釉は外面のみ施釉され、内面は露胎している。内面に「佐久本■／初代／妻／ウタ／昭和七年／七月二七日／死亡」という銘書がみられる。西暦に換算すると1932年に死亡したことになる。

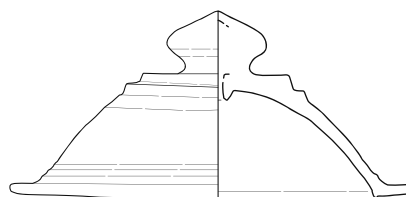
第44図80の身は完形資料で、口縁部はやや外反しており、口唇部は平坦に成形される。マンガン釉は全面に掛けられるが、外面底部と内面のほとんどは露胎する。横帯2のみ凸帯で横帯1と3・4まで凹帯である。外面はナデ調整、底面はヘラナデ調整、底部の際はヘラ削り調整を施す。内面は全体に横位のナデ調整を施す。屋門が唐破風形の貼り付けであるが、蓮華文や横帯等の文様帯はほぼ線刻であることから、安里編年IV期（1850年～1890年）の資料と考えられる（第42図上 蔵骨器2）。

第44図81と82はマンガン釉甕形蔵骨器である。第44図81の蓋は完形資料で、つまみは扁平形、不明瞭なつまみ台が1段形成されている。かえりはない。外面のつまみ側面にヘラ削りが明瞭で、胴部に櫛状痕が残っている。内面は全体的にナデ調整を施す。マンガン釉は表面をハケで雑に塗布しているのみで、橙色の素地が見える。内面は露胎している。内面に「明治四拾／老年申年／旧拾月廿日／長女ウシヤ／二才」という銘書がみられる。

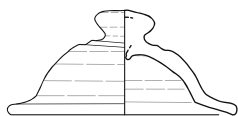
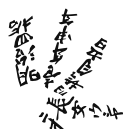


藏骨器1

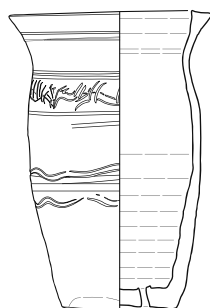
78



79

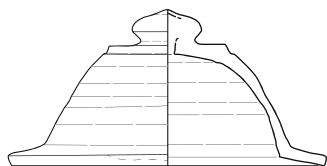
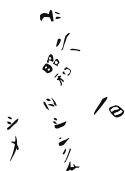


81

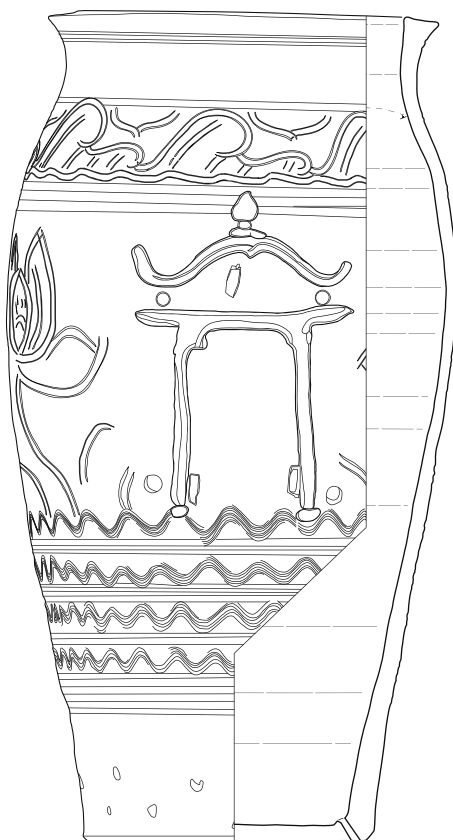


藏骨器3

82

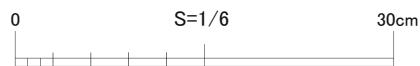


83



藏骨器2

80



第44图 13号墓出土遺物1

第 24 表 13 号墓出土蔵骨器観察一覧表

図版番号	出土地点	種類	蓋	つまみ/ 屋根形状	接合部孔	つまみ 台・圏線	鐔 (cm)	かえり (cm)	大きさ (cm) ※	文様	成形/調整	釉薬	窯 印	銘 書	備考
			身	マド枠(底 部cm)/屋 門形	縦長軸 × 横長 軸 (cm)	窓数/ 形	横帯	底面 孔							
第44図78 図版30-78	墓室 シルヒラ シ(蔵骨器 No. 1)	マン ガン 釉甕 形	身	唐破風形 (線彫)	10.2 × 5.4cm	2個 (円形)	凹2 凸(1) 凹3 凹3凹3凹3	14個 (円 孔)	25.1 25.1 15.9 42.2	肩部：連弁文 胴部：蓮華文 胴下部：波状文	ロクロ成形の 後、外面ナデ調 整、底部未調 整、内面はナデ 調整、下部ヘラ ナデ痕残る。	マン ガン 釉	なし	なし	屋門 内下 方孔 縁に 石灰 付着
第44図79 図版30-79	墓室 1番棚	マン ガン 釉甕 形	蓋	宝珠形	有孔	2段	3	0.1	11.6 31.8 26.0 14.8 9.8	なし	ロクロ成形の 後、外面ヘラ削 り調整、内面ナ デ調整。	マン ガン 釉	なし	あり	
第44図80 図版30-80	墓室 1番棚 (蔵骨器 No. 2)	マン ガン 釉甕 形	身	唐破風形	22.7 × 10.7cm	3個 (方形) 2個 (円形)	凹2 凸1 凹3 凹2凹2凹2凹3	19個 (円 孔)	31.0 35.8 23.1 66.0	肩部：連弁文・ 雲文・波状文 胴部：蓮華文 胴下部：波状文	ロクロ成形の 後、外面ナデ調 整、底部ヘラナ デ調整、内面ナ デ調整。	マン ガン 釉	なし	なし	側面 に22 個(円 形)の 孔有
第44図81 図版30-81	墓室 1番棚	マン ガン 釉甕 形	蓋	扁平形	有孔	1段	3.3	なし	5.3 18.0 11.8 8.3 5.9	なし	ロクロ成形。外 面つまみ側面へ ラ削り明瞭、胴 部に櫛状痕顕著、 内面ナデ調整。	マン ガン 釉	なし	あり	
第44図82 図版30-82	墓室 1番棚 (蔵骨器 No. 3)	有頸 小型 甕形	身	なし	—	—	凹2 凹3 凹2	10個 (方 形)	16.1 13.8 9.0 23.7	肩部：波状文・ 2条沈線 胴部：波状文 胴下部：波状文	ロクロ成形。外 面ナデ調整、底 部ヘラ調整、内 面ナデ調整。	なし	なし	なし	
第44図83 図版30-83	墓室 1番棚	マン ガン 釉甕 形	蓋	宝珠形	有孔	1段	凸3 凹3 凹2 凹2	なし	9.3 25.2 17.9 12.4 9.6	なし	ロクロ成形。外 面つまみ下部に ヘラ削り痕、体 部はナデ調整。 内面はナデ調 整。	マン ガン 釉	なし	あり	

※大きさ (cm) は、蓋が上から上口径 / 口径 / 内径 / 器高 / 体部高、身が上から口径 / 口径 / 底径 / 器高である。

第 25 表 13 号墓出土蔵骨器の銘書一覧表

図版番号	銘書	備考
第44図79 図版30-79	佐久本■<小カ>/初代/妻/ウタ/昭和七年/七月二七日/死亡	
第44図81 図版30-81	明治四拾/壹年申年/旧拾月廿日/長女ウシヤ/ニオ	
第44図83 図版30-83	■■/ニ■/昭和■■/■■シンクチノシメ	

第 44 図 82 の身も完形資料で、口縁部は外反しており、口唇部は平坦に成形する。横帯 1 ～ 3 ま
で凹線であるが、横帯 1 の凹線は不明瞭である。文様帯の施文も波状文および縦の沈線を施すのみで
ある。外面はナデ調整、底部際はヘラ削り調整を施し、底面はヘラ調整痕が残る。内面は横位ヘラ調整、
底部際はヘラ調整痕が明瞭に残る。安里編年Ⅵ期（1930 年～）の資料と考えられる（第 42 図上 蔵
骨器 3）。

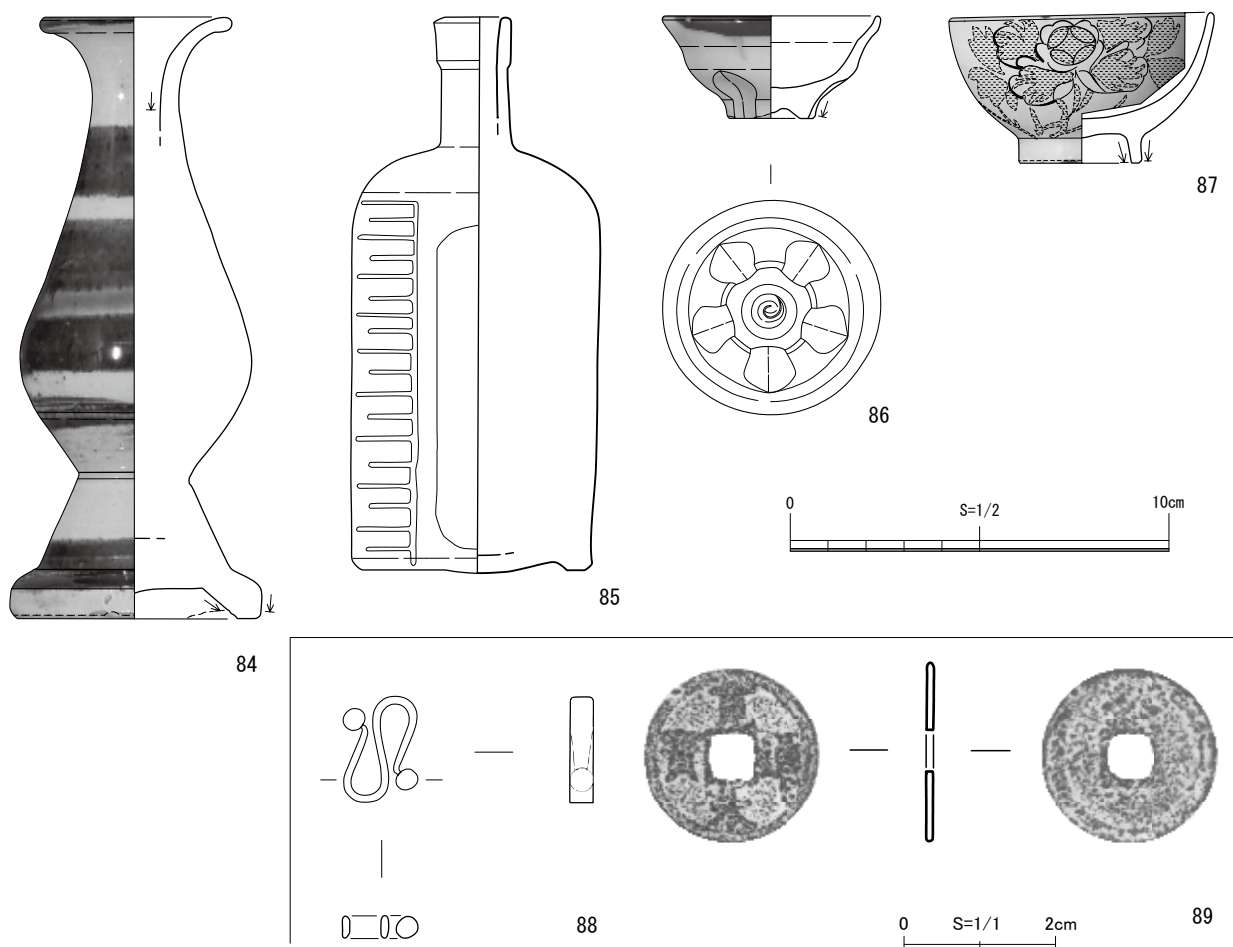
第 44 図 83 はマンガン釉甕形の蓋の完形である。つまみは宝珠形で、つまみ台は 1 段成形されて

いる。かえりはない。外面つまみの下部にへら削り痕がみられ、体部から底にかけてナデ調整を施す。内面は横位にナデ調整を施し、上部は平坦に仕上げられている。マンガン釉は外面が口縁際まで施釉、内面は露胎する。内面に「■■■／二■■／昭和■■■／■■シンクチ／シメ」の銘書が確認できる。

第 45 図 84 は沖縄産施釉陶器の瓶の完形品である。13 号墓墓庭の表土より出土した。ラッパ状に開いた口縁部から頸部ですぼまり、胴部下半で膨らむ。脚台状の底部を有する。外面全体および内面一部に白化粧が施されており、畳付は露胎する。口縁部、胴部、脚台の下半部に呉須、胴部中央に褐色の釉薬を施し縞状を呈する。外面全体に細かな貫入がみられる。口径 5.0cm、器高 15.9cm、底径 6.7cm、重量 3293g。

第 45 図 85 はガラス製の瓶である。13 号墓一次葬 - 1 の骨盤辺りより出土した。口唇部が平坦に成形され、口縁部が肥厚し、頸部ですぼまる。肩部を形成し、底部にかけて直線状になる。外底面は盛り上がり、中央部が飛び出ているため、据え置いた際には若干不安定になる。底面観は楕円形である。正面の左右に違う基準で表示された目盛りが振られ、うち右側には「100」「200」との表示があるが単位は不明である。肩部から底部にかけての両側縁に浅い突起が明瞭に残る。口径 2.2cm、器高 14.8cm、底径の長辺 6.2cm、短辺 4.1cm、重量 1092g（第 42 図下 No. 1）。

第 45 図 86 は本土産磁器の小杯の完形品である。13 号墓一次葬 - 1 の上腕部近くより出土した。全面に灰白色を施釉、口縁部に緑色、桃色の釉薬を施釉、畳付は露胎している。鋳込み成型を用いて桜の花が窪んだ形が高台に形成され、高台内は渦状の巴形を呈する。口径 5.8cm、器高 2.7cm、底径 2.3cm、重量 336g（第 42 図下 No. 2）。



第 45 図 13 号墓出土遺物 2

第 45 図 87 は本土産磁器の小杯の完形品である。13 号墓一次葬 - 2 近くで天地逆の状態出土した。全面に透明釉が施釉されている。銅板転写による花文が施されているが、色が抜けてしまっている。口径 7.0cm、器高 4.0cm、底径 3.3cm、重量 660g（第 43 図上 No. 1）。

第 45 図 88 は平面形が S 字を呈し、両端に小型の球のある青銅製の環(かん)で S 環と称されている。13 号墓一次葬 - 1 の胸部辺りより出土した。羽織と羽織紐とをつなぐ道具として使用されたと考えられる。全長 4.7cm、幅 0.1cm、厚さ 0.3cm、重量 0.75g（第 42 図下 No. 3）。

第 45 図 89 は寛永通宝である。13 号墓一次葬 - 2 検出面と同一レベルの 3 層中墓口付近から出土した。面背は緑青の影響が見られ、面の文字が浸食されている。輪外径 2.3cm、輪内径 2cm、郭外幅 0.7cm、郭内幅 0.6cm、輪厚 0.1cm、重量 2.0g（第 43 図上 No. 2）。

（2）26 号墓

1）遺構（第 47 図）

26 号墓は、丘陵上段の東側に位置する横穴式の掘込墓である（第 41 図）。着手前は墓全体が埋没していた。18 号墓の上部に位置しており、切り合い関係が認められるが前後関係ははっきりしない。墓の立地する標高は約 100.0 ～ 100.8m である。墓口の方位は北北東（N15° E）である。墓室の形状は隅丸長方形で柵は形成されていない。一次葬のための墓であったと考えられる。法量は奥行 0.90m、幅 0.42m、高さ 0.75m。

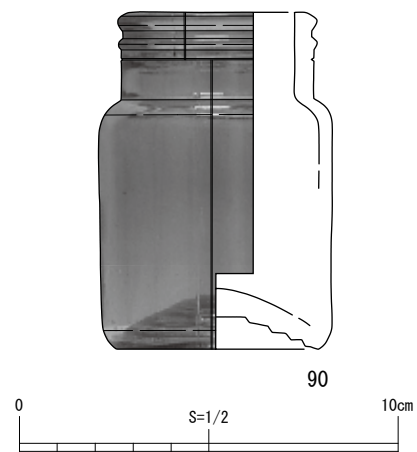
2）一次葬人骨

床面に人骨が検出されている。人骨は墓室の長軸に対して平行に安置される。また、頭位は南南東を向き（N160° E）、足を折り曲げられた状態で、東側に体を向けた状態で安置されている。ガラス瓶、箱状と想定される金属片、釘が共伴していることから、金属製の容器に人骨と副葬品のガラス瓶が納められた一次葬人骨であったと考えられる。一次葬人骨が墓の床面全体を占めている状況から、金属製の容器の法量は長さ約 0.90m、幅約 0.40m と想定される。人骨の詳細については、第 5 章を参照頂きたい。

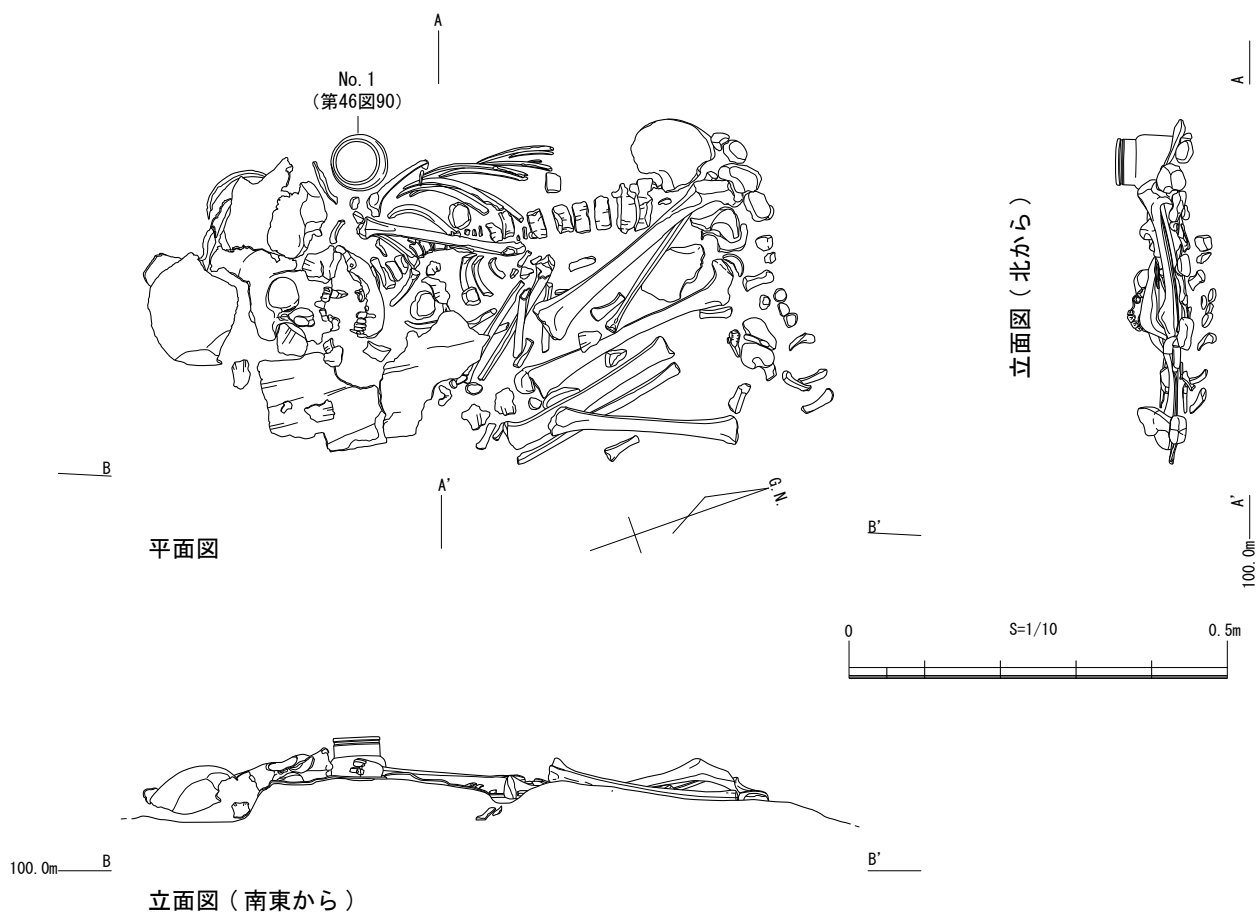
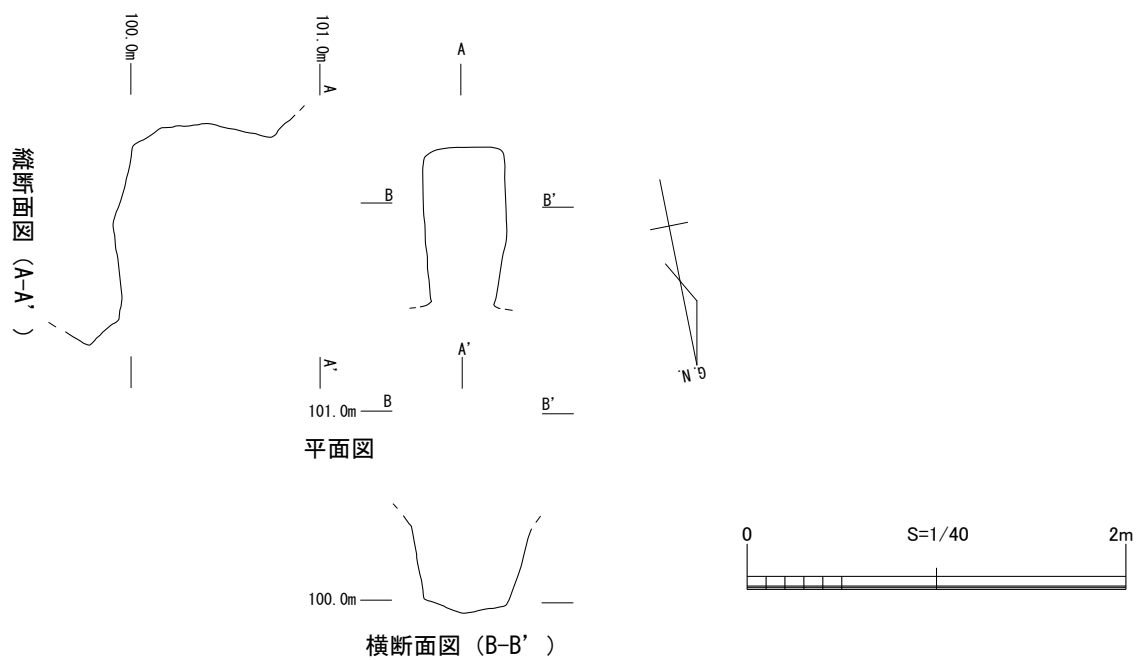
3）遺物（第 46 図）

26 号墓から出土した遺物の種類と数量については、第 23 表を参照頂きたい。

第 46 図 90 は、ガラス瓶である。緑色を呈する。口縁部に 2 条の凸帯がめぐり、肩部を形成し、寸胴形となる。底部は外底面が 5 段の円錐状となる。口縁部の接合部と頸部以下の接合部の位置が 7mm 程度ずれていることから、口縁部と胴部とがそれぞれ別工程で製作され、これを溶着させたものと考えられる。口径 5.3cm、器高 8.9cm、底部 5.2cm、重量 1770g（第 47 図下 No. 1）。



第 46 図 26 号墓出土遺物



第 47 図 26 号墓遺構図

(3) その他の墓 (第 48 図)

ここまで状態の良い墓を中心に、それぞれの墓毎にその詳細の報告を行った。それ以外の墓で出土した遺物のうち、8 号墓、9 - 10 号墓間および 12 号墓脇墓 2、18 号墓、29 号墓より出土した遺物について以下に図示し報告を行う。各遺構の詳細については第 22 表を参照頂きたい。

第 48 図 91 と 92 は転用蔵骨器で、12 号墓脇墓 2 より出土した資料である。第 48 図 91 はマンガン釉甕形の蓋で、つまみはなく、つまみ台は 1 段有し、ヘラ削りで成形される。かえりはなく、鐳の端部は丸い。マンガン釉を外面のみに施し、内面は露胎する。口径 16.5cm、内径 12.4cm、器高 5.7cm。

第 48 図 92 は、植木鉢を転用した蔵骨器の身である。出土時点では身の中に多数の岩塊が詰まっている状況が確認された (第 5 節 3 参照)。口唇部は平坦で、口縁部は断面が「ワ」字形を呈している。表面は褐色の釉薬が施され、裏面は露胎し回転轆轤痕がみられる。底部は三脚を形成している。口径 18.6cm、器高 19.4cm、底径 11.9cm。

第 48 図 93 は沖縄産無釉陶器の瓶である。18 号墓の埋土中より出土。口縁部がラッパ状に開き、頸部ですぼまり、胴部下半で膨らむ。胴部下半から底部にかけてはすぼまる。外底面は平坦となるが、中心に向けてわずかにすぼむ。素地は灰黄色を呈しているが、胴部下半の一部と底部は橙色を呈し、焼成が十分されていない様子が見える。混入物としての石灰粒がまばらに散見できる。胴部上半に横位の沈線が 1 条施されているが、線の始点と終点の交わる場所がずれている。轆轤成形痕がみられるが、胴部下半から底部にかけては指頭痕が残っている。口径 4.85cm、器高 11.45cm、底径 6.9cm、重量 548.0g。

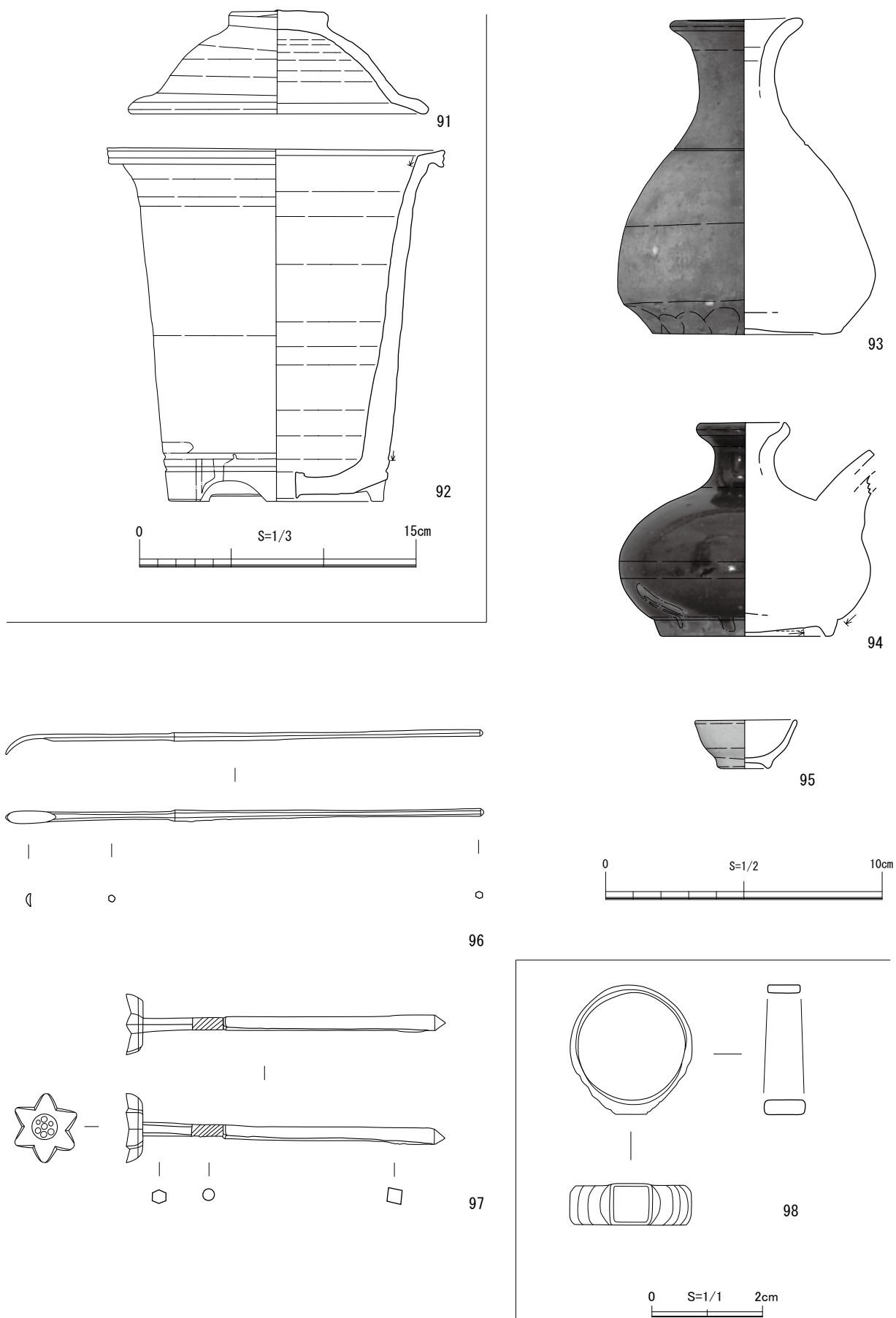
第 48 図 94 は沖縄産施釉陶器の酒注である。29 号墓の墓庭床面より出土。注口部が破損している。高台の一部を除く全面が褐色で施釉されており、施釉範囲全面に細かな貫入が認められる。口径 3.4cm、器高 7.75cm、底径 6.3cm、重量 182.2g。

第 48 図 95 は本土産磁器の小杯である。29 号墓の墓庭床面より出土。全面に灰白色の釉薬を施している。灰白色の釉薬は一部あばた状を呈している。口径 3.7cm、器高 1.75cm、底径 1.9cm、重量 8.2g。

第 48 図 96 は 9 - 10 号墓間の表土より出土した青銅製の簪である。全体に青錆が付着している。平面は頭部が匙形、首部と竿部の境界で若干太くなる。断面は頭部が三日月形、首部が円形、竿部が六角形を呈している。全長 17.3cm、うち頭部 1.8cm、首部 4.3cm、竿部 11.2cm、重量 7.0g。

第 48 図 97 は同様に 9 - 10 号墓間の表土より出土した青銅製の簪である。全体に青錆が付着している。平面は頭部が花形、ムディ部が左上から右下にかけてねじれる螺旋状を呈し、ムディ部と竿部との境界で若干太くなる。花部の花卉は 6 枚で、首部断面は六角形、ムディ部は円形、竿部は平行四辺形を呈している。全長 11.55cm、うち頭部 0.6cm、首部 1.8cm、ムディ部 1.1cm、竿部 8.05cm、重量 2.2g。

第 48 図 98 は青銅製の指輪である。8 号墓の墓庭表土より出土した蔵骨器の内底面に付着していた。一部に金メッキの付着、全体に青錆の付着が確認できる。中央部は肥厚し 2 条の正方形によって区画されており、内面は無文である。左右側面は型成形によると考えられる凹凸がみられる。直径 2.2cm、内径 1.95cm、厚さ 0.35cm、重量 5.5g。



第 48 図 8 号墓、9-10 号墓間、12 号墓脇墓 2、18 号墓、29 号墓出土遺物

第5節 小結

1. 遺構の特徴と墓域の形成について

前田西前田原地区は4つの丘陵に分かれ、その中で今回報告した前田西前田原C丘陵は南側に位置する丘陵の一部である。丘陵の土質は細粒砂岩（ニービ）が主体であるが、当該丘陵の北側の一部は第三期泥岩層であった。本地区に所在する墓はすべて、細粒砂岩（ニービ）の丘陵に横穴を掘り込んだ掘込墓（フィンチャー）である。

本地区の特徴として、丘陵の東側と西側で様相が異なることが挙げられる。

丘陵東側の墓のほとんどが埋没墓であり、墓の機能が途絶えた後、年月を経ていくうちに緑の中に取り込まれ、墓の存在が忘れられた区域と考えられる。一方、丘陵西側の7号墓から9号墓については、墓室内は空墓であるが墓庭にマンガン釉甕形等の蔵骨器が表採されたこと、埋没した形跡が見られないことを踏まえると戦後を通して近年まで使用されていた墓と考えられる。

墓の形状についても、丘陵西側の7号墓から9号墓まで墓室が6㎡前後のものが多く、墓室内は概ね棚や天井など、墓庭も使用時の状態を保っていた。一方、丘陵東側の墓群は、墓室の平面形状が不定形で1㎡前後の小規模の墓が多い。12号墓、13号墓については墓室が3㎡前後で例外的である。

墓室類型で見ると、丘陵西側の7号墓から9号墓は5a類（「コ」字状+階段状）に位置づけられ、本地区ではここでのみに分布する。10号墓が3c類（「コ」字状）、11号墓、13号墓、19号墓、29号墓、30号墓が4a類（段状）、その他はほとんどが1類（不定形）の墓であった。

遺構の年代観について、まず13号墓の造営時期は、出土した蔵骨器から19世紀後半が妥当と考えられる。他の墓の造営時期についても、13号墓のような不定形な形状が多くを占めていることから、19世紀～20世紀前半に造営された可能性が考えられる。

また7号墓～9号墓のように規模の大きな定形的な墓については、マンガン釉甕形・御殿形等が表採されていること、上記した不定形の墓群との関連性から、造営年代についても同様に19世紀後半が妥当と考える。

丘陵東側の下段を中心に防空壕が分布している。検出状況より、5号墓を除き沖縄戦時にはじめから壕として掘り込まれた遺構である可能性が考えられる。墓を壕に改築して使用された事例がよく見られる前田・経塚近世墓群の中で、本地区にはそれを確認できる墓がみられない。

2. 遺物の特徴と年代観について

前田西前田原C丘陵の特徴として挙げられるのは、蔵骨器や簪、瓶といったいわゆる副葬品など遺物の出土が少ないことである。

蔵骨器について、墓室内に安置されている状況が確認された墓は12号墓脇墓2と13号墓のみで、他はほとんど表採品である。出土内訳を見ていくと、マンガン釉甕形の蓋6点、身12点、破片5点、マンガン釉底付甕形の身1点、破片1点、陶製御殿形の蓋2点、身2点、上焼甕形の身1点、転用蔵骨器の蓋2点、身1点となっている。ボージャー形の出土はなかった。

マンガン釉甕形の身について安里編年Ⅵ期（1930年～）が下限と考えられる。銘書については13号墓から出土した蔵骨器のみから確認される。死去年が記されているのは「…昭和七年七月二七日死

亡」したとするもののみで、ほかは「明治四拾壹年申年」や「昭和」の年代のみの銘書が確認される。蔵骨器の型式と銘書に記述された死去年とは整合性が取れている。銘書に位階等の記述がないことから、前田の百姓層の墓域であったと考えられる。

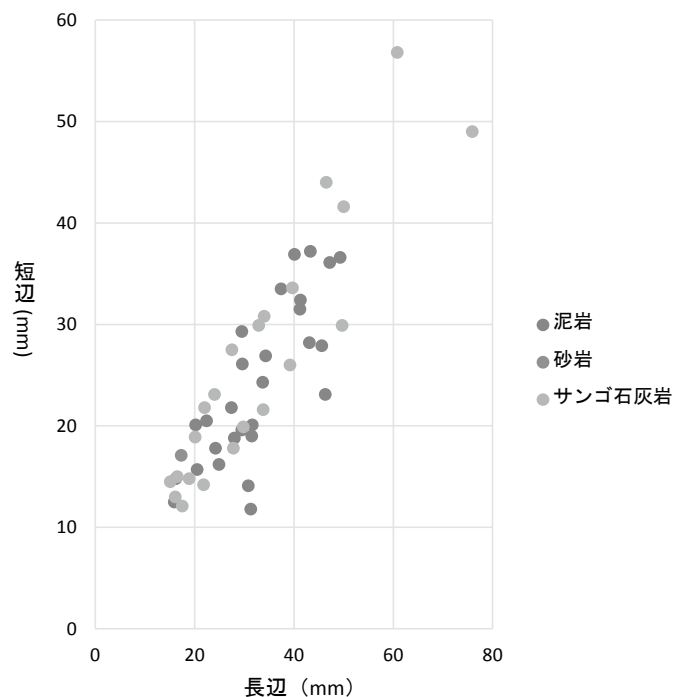
よって、13号墓の使用年代の上限は19世紀中頃以降に位置づけられると考えられる。シルヒランに安置された一次葬-1の人骨から出土した薬瓶や羽織を着用していた事を示唆するS鍔がそれを補強する。

3. 12号墓脇墓2内転用蔵骨器に納められた岩石について

12号墓脇墓2に安置されていた転用蔵骨器の中に納められた岩石について、若干の所見を述べる。転用蔵骨器の中の岩石は51個入っており、内訳としては、泥岩28個、サンゴ石灰岩22個、砂岩1個となる。いずれの礫も、大きさが長辺約2cmから5cm、短辺1cmから4cmの範囲で分布しており(第49図)、大きさに厳格な選択性がないことがわかる。

では、骨の代わりに岩石を納めたのはなぜだろうか。海で亡くなり遺骨が拾えない人は、その方向の浜へ行き、魂の依代とされる砂利(ウル)を49個拾って小甕に納めたという事例がある。それは、49個拾う理由としては人間の遺骨が49個で成り立っているからといわれている(浦添市1983)。また、戦争で亡くなって遺骨が拾えない人については、亡くなった場所を調べて、その石を拾いに行ったという事例(名護市2001)が聞き取り調査で確認されている。今回出土した岩石について、納める岩石の個数および納める容器が上記聞き取り調査とほぼ整合している。このことから、海あるいは戦争でなくなった人を葬った物証になると考えられる。

また納められた岩石が、泥岩とサンゴ石灰岩の2種類入っており、各個数の割合は約4:3である。また、泥岩は本丘陵内にて採集可能であるが、サンゴ石灰岩は採集できない岩石である。これらについてどのような意味があるか今後の課題としたい。



第49図 12号墓脇墓2蔵骨器内岩石計測値

〈引用・参考文献〉

- 安里進 1997「伊祖の入め御拝領墓の厨子甕と被葬者—近世墓の考古学的調査による家族復元—」『伊祖の入め御拝領墓の厨子甕と被葬者』浦添市文化財調査研究報告書第25集
- 安里進・新里まゆみ 2006「比嘉門中墓の家族史—家族の数だけ歴史がある—」『比嘉門中墓の家族史』

－家族の数だけ歴史がある－ 比嘉門中墓の調査概要』浦添市文化財調査研究報告書
浦添市 1983『浦添市史』第四巻資料編3 民俗
浦添市教育委員会 2007a『市内遺跡発掘調査報告書（1）－平成13～18年度調査報告－』
浦添市教育委員会 2010『市内遺跡発掘調査報告書（2）－平成14～20年度調査報告－』
浦添市教育委員会 2011『前田・経塚近世墓群（2） 首里大名地区』
浦添市教育委員会 2012『前田・経塚近世墓群（3） 前田真知堂B丘陵（1） 前田真知堂C丘陵（2）』
浦添市教育委員会 2013『前田・経塚近世墓群（4） 経塚子の方原A丘陵（1）』
浦添市教育委員会 2014『前田・経塚近世墓群（5） 経塚南小島原A丘陵』
浦添市教育委員会 2014『前田・経塚近世墓群（6） 前田真知堂A丘陵（1） 前田西上原丘陵 前
田西前田原A丘陵』
名護市 2001『名護市史』本編9 民俗Ⅰ 民俗誌

第5章 人骨の分析

本章では各墓遺構及び蔵骨器中から出土した人骨について、形質人類学的視点に基づく観察および分析を行い、その所見について記載する。出土人骨の基礎的なデータを提示するとともに、出土状況などのデータと合わせて、人骨資料の有する意義について言及する。

第1節 資料について

西前田原 B 丘陵の調査区からは、17 基の墓遺構から出土した 12 基の蔵骨器中から人骨の出土が確認されたほか、3 基の墓遺構のシルヒラシから一次葬人骨の残存を検出した。その他、墓室堆積土または墓庭堆積土からも一程度の人骨が出土している。本調査区の人骨の残存状況を俯瞰すると、蔵骨器が原位置を保っていない遺構の覆土あるいは、一部ないし大部分が壊れた状態の蔵骨器と共に出土した人骨が比較的多く、これらの遺存状態はそれほど良くないものが目立つ。一方で、一次葬人骨や一部の原位置を保ちながら全身骨がほぼ完存する状態で遺存するものなど、破片・微細片状態のものまで様々な状況が窺われた。

西前田原 C 丘陵では調査区全体的に墓室内の蔵骨器などが移転された空墓が多かったこともあり、人骨が残存する墓も少数で、検出された 27 基の墓遺構のうち 4 基から人骨が出土している。そのうちの 2 基からは一次層人骨が検出され、更にその内の 1 基では蔵骨器内からも人骨の出土を確認した。

本章では出土した人骨について基礎的なデータを主体とした報告を記載する。

人骨の分析は、部位同定とそれに基づく個体識別および最小個体数の計数・性別および年齢推定・病変等の異常形態の観察と記載・頭蓋及び四肢骨の計測作業を基本として行い、それぞれ一覧表に記載した（第 26 表～第 31 表）。個体識別と個体数の計数は蔵骨器単位で行い、識別した個体ごとに No. を付した。一次葬を除く墓室埋土や床面出土の人骨については、同定と記載には含めたものの、計数・性別・年齢判定等の対象からは除外している。性別判定は、頭蓋および寛骨形態によることを基本とした。しかし、判別に必要な残存状態を保っていない資料も多いことから、明瞭な判断ができないものについては不明とした。年齢については乳歯・永久歯の萌出・咬耗状況、四肢骨骨端等の癒合状況などを鑑みた上で推定している。

第2節 前田西前田原 B 丘陵の人骨出土状況および分析結果

本節では部位同定・個体識別・観察等について墓遺構・蔵骨器ごとに所見を記載する。なお、紙幅の都合上、ある程度残存状態の良好な資料に絞って記載する。

（1）2号墓

墓室の入口側右隅の床面直上から一定の範囲にまとまった状態で人骨が検出された。頭蓋骨の破片や主要な四肢骨が残存しており、部位重複が無いことから 1 体分の人骨のまとまりであることが窺われる。側頭骨乳様突起部分が残存しているものの、周辺が残存していないことから明瞭な性別判定には難しい。完存する資料はないため、詳細については不明であるが、遊離歯から成人であることが推

定できる。

（2）6号墓

墓室奥棚やシルヒラシから破損した状態の蔵骨器が複数出土しているが、そのうちの3つの蔵骨器に伴い人骨が検出されている。全体的には残存状況はそれほど良くないが、以下に内容を記載する。

○蔵骨器1

大腿骨・手根骨・足根骨・指骨などが同定されるが、形態的な観察は困難であり、成人であろうことをうかがわせるのみである。ただし、遊離歯が一定程度咬耗を呈することおよび未萌出とみられる乳歯が混在していたことから成人と未成人が少なくとも1体ずつ納められていたと推測できる。成人をNo. 1、未成人をNo. 2として個体識別し、未成人については乳幼児段階に分類した。

○蔵骨器2

いくつかの部位同定は可能であったが、蔵骨器1と同様にいずれの骨も断片的であることから、詳細な言及は難しい。上腕骨遠位端・概ね全体形を残す距骨などから成人であることを推測している。

○蔵骨器3

破片が大半を占めることから部位同定を含め分析は困難であった。わずかに同定できた上腕骨も骨幹であることから年齢性別等は不明である。ただし、未萌出とみられる遊離歯が含まれており、一定程度発達しているとみられる上腕骨とは明らかに異なる個体であることがうかがわれることから、最小個体数は2と算定した。

（3）31号墓

墓室床面に原位置を保った状態で出土した蔵骨器内に人骨が確認され、残存状況はそれほど良くないものの、成人と未成人骨が混在している状況を窺うことができる。成人をNo. 1、未成人をNo. 2として以下に記載する。

No. 1は椎骨・肋骨破片と上肢骨の一部などが同定された。ただし、いずれも破片であることから詳細を窺うことは難しいが、橈骨近位端が癒合済みである点、遊離歯の大臼歯が萌出済みであると思われる点から、成人であろうと推測した。

一方、遊離歯の中に歯根が未形成の永久歯が混在しており、一部の歯種もNo. 1と重複するものが見られ、未成人が含まれることがわかることからNo. 2として識別したものである。

（4）37号墓

奥棚上に設置状態とみられる蔵骨器3基が検出され、うち2基から人骨の出土が確認された。ただし、この2基は金属製の缶であり転用ないし代用されたものであるとみられる。いずれからも同定可能部位が断片的に出土しており、蔵骨器2からは2体分、蔵骨器3からは1体分が少なくとも含まれることが窺われる。

（5）38号墓

墓室内から出土した1基の蔵骨器中から人骨の出土が確認できたほか、棚上の埋土にも散乱状態で

検出されている。いずれも断片的に部位同定が可能である状況である。

○蔵骨器 1

左右の寛骨が残存しており、恥骨はいずれも欠損しているものの、大坐骨切痕角から女性のもので推定できる。また、左の腸骨に前耳状溝が観察される。詳細な段階は不明であるが、成人であろうと推測している。

(6) 40 号墓

本遺構からは蔵骨器に伴う人骨は出土していないが、一次葬が床面から検出されている。全身の部位が完存する状況ではないものの、各部位の位置関係などから一次葬であろうと判断された。

人骨は、顔面が欠損する頭蓋と一部の椎骨、主要四肢骨が同定される残存状況である。眉弓・外後頭隆起の発達をみると、それほど強く隆起しているわけではないが、乳様突起の形状とも合わせ男性ではないかと推定される。縫合をみると、冠状縫合は全体に癒合が進行している様子がうかがえ、矢状縫合では前後がより進行している。ラムダ縫合では中心近くの一部が他に比べて、やや進行している様子がわかる。また、下顎骨および左上顎骨では小臼歯・大臼歯の一部の歯槽が閉鎖済みである。これらのことから、一次葬の個体は老年段階にあたると考えられる。

そのほか、下顎骨の関節突起にわずかな変形がみられる点が特記される。

(7) 41 号墓

41 号墓からはシルヒラシ中央から一次葬人骨が検出された。また、そのほか奥と左右の棚上からそれぞれ蔵骨器片と混在しながら人骨が散乱状態で出土した。元来、蔵骨器に納められた状態で棚上に設置されていたものが転倒・破損したことによる状況であると考えられる。そのため、これらの出土状況を踏まえ、一次葬人骨については個体識別の対象とし、それ以外は一括して個体数の集計からは除いた。

○一次葬

シルヒラシ中央に頭位を左棚に向けた状態で検出されており、全身の部位が比較的良好に残存している。ただし、下顎骨を除く頭蓋骨のみ破片も含め出土がみられなかった。

右の寛骨が完存しており、恥骨形状および大坐骨切痕角から男性の特徴を有することがわかる。また、下顎骨では大半の歯槽が閉鎖済みであることから、本個体は老年男性であると考えられる。その他、腰椎の一部にごくわずかに骨棘が形成される様子をみることができる。

同定された各部位のいずれも骨質を含め良好な残存状態にあるにも関わらず、脳頭蓋および顔面頭蓋が検出されていない点については留意する必要があるだろう。

(8) 55 号墓

墓室中央に原位置で出土した蔵骨器中から出土した人骨は、完形の資料はないものの、本調査区の中では比較的形態を保っているものであるといえるが、詳細な分析を行うにはやや破損が大きいと思われる。たとえば脳頭蓋が残存しているが、前頭骨の眉弓や側頭骨の乳様突起が部分的に欠損していること、寛骨が残存しているが腸骨耳状面が中心であるなどしているため性別判定には及ばなかった。

そのため性別不明の成人として集計している。なお、脳頭蓋の縫合を見ると、ブレグマ周辺の冠状縫合と矢状縫合で癒合が進み始めているものの、40号墓や56号墓の一次葬人骨などでみられる癒合の進捗などと比較すると、それらと比べると若い個体であることが窺える。

(9) 56号墓

56号墓は、人骨の出土状況の点からは本調査区の中で最も良好に残存している遺構の一つである。原位置を保った3基の蔵骨器中からそれぞれ人骨が出土したことに加え、一次葬の人骨も検出された。遺構は柵を持たない小型の掘込墓で、壁際に設置された蔵骨器の隙間を縫うかのように頭位を墓室奥に向けた状態で遺体が置かれた様子を窺うことができる。また、一次葬人骨の頭骨と奥壁の間からはブタとヤギの骨がまとまった状態で出土している。遺構や動物骨の詳細については別章で述べているが、人骨を含めた多彩な情報を本遺構は有しているものとして重要な資料である。

○一次葬

前述のとおり、一次葬は墓室中央に頭を奥へ向け、膝を曲げられた状態で木棺に納められたうえで安置されたと考えられる状況が検出された。基本的に全身の部位が残存しており、検出状況の図面を作成したうえで、各個に取上Noを付して、取り上げている。基本的に全身の部位が残存しているが、一部部位重複が見られる。これは周辺の蔵骨器からこぼれたものが混じっているものと考えられる。

各部位を観察すると、左右の寛骨の大坐骨切痕角および右恥骨の形状から、本個体が男性であることが窺える。頭蓋骨をみると眉弓および乳様突起が一定程度発達しており、大後頭隆起は比較的隆起が低いとみられる。上顎骨には歯が残存せず、歯槽は全て閉鎖しており、下顎骨でも右の小白歯が残存するもののそれ以外は、歯槽が閉鎖済みないし閉鎖中である。このことから年齢段階は老年であると判断される。表面をみるとブレグマを起点に冠状縫合が約半分程度、矢状縫合が僅かに、完全に消滅はしていないものの癒合が進行している様子が分かる。

また、胸椎および腰椎の数点の椎体に骨増殖が観察される。おそらく隣接している椎体の隣接する関節面同士に骨棘が形成されていることから、関節症による影響であることが推測される。

○蔵骨器 1

本蔵骨器は墓室内で検出された際に、蓋がされておらず、人骨は身の口縁から頭蓋骨が飛び出した状態で納められていた(図版21の52-納骨状況)。これまで調査された浦添市内の近世墓の出土事例には、同様の事例は記録されていないことから、珍しい事例であると思われる。(納骨状況については第3章第4節(10)の4参照)人骨を観察してみると、成人2体分および未成人1体分が含まれていることが窺われる。成人骨は頭蓋骨・四肢骨などの主要な部位が2点ずつ部位同定され、同じ部位同士を比較してみるといずれも大小のサイズ差を認めることができる。また、残存状態をみても、サイズの大きなもので非常に良好な状態のものとサイズの小さなもので骨端などの表面が破損している、といった傾向を窺うことができる。これらの事項から個体を識別できると判断し、大きなサイズの一群をNo.1、小さなサイズのそれらをNo.2として分類した。ただし、椎骨・手根骨・足根骨・指骨など上記の観点から判別しがたい部位については個体識別せず、一括として一覧表には記載した。また、未成人骨はNo.3とした。

No.1は大坐骨切痕および眉弓・乳様突起の形状から男性であると判断される個体である。また、上

下の顎骨で小白歯・大白歯の歯槽が閉鎖済みないし閉鎖中であること及び冠状縫合・矢状縫合に進行が見られることなどから、年齢段階は老年と推測される。残存状態の良好な骨で、同定される部位の多くが完存している。

No. 2 は、No. 1 同様におおむね全身の主要な部位が同定されるものの、残存状態はやや不良で、四肢骨骨端などに破損が見られるほか、下顎骨および側頭骨・後頭骨・頬骨などの一部の部位を除き頭蓋は破片・細片となっている。大坐骨切痕角および大腿骨頭径・上腕骨遠位端幅などから男性、臼歯の咬耗がそれほど進行していない点・四肢骨骨端の癒合は全て完了している点などから成年程度の段階であろうと推測される。またNo. 2 では各部位に形態異常が観察され、特に破片を含む頭蓋骨および右大腿骨で顕著にみられる。大腿骨では全体で表面の骨繊維が粗くなり、楕円状あるいは溝状の陥没が生じている。後頭骨及び脳頭蓋の破片においても楕円状の小孔が頻出する。これほど顕著ではないものの、寛骨臼周辺や四肢骨の骨端付近にも同様の現象が認められる。これらが出現している部分では緻密質が薄くなっており、前述の四肢骨の欠損傾向はこれに由来するものであるとみられ、中手・中足骨の状況も同様であると思われる。総じて頭蓋・右大腿骨に加え全身の関節に出現しているとまとめられることから、これらの異常が疾病に起因する変形であると考えることができよう。

No. 3 は未発達の形状を呈することから未成人であることは明瞭であるが、椎骨の関節突起や四肢骨を断片的に残すのみであることから詳細については窺うことは困難である。ただし、そのサイズから幼児以下の段階であるとみることができる。

○蔵骨器 2

頭蓋骨破片および額骨と一部の四肢骨が残存しており、サイズ・発達の違いから成人および未成人が混在する状況を窺うことができる。部位重複は見られないことから、それぞれ 1 個体ずつが存在するものとして成人をNo. 1、未成人をNo. 2 として個体識別をした。

No. 1 は側頭骨・上顎骨・下顎骨・椎骨・大腿骨・脛骨などが同定されており、完存する部位はないものの、顎骨に残存する大白歯の咬耗が一定程度進行していることから、成人であることは確認できる。しかし、それ以外の年齢・性別判断をすることのできる箇所が残存していないことから、詳細な言及を行うことは難しいため、性別不明の成人として集計した。

その他、特記事項として左の上顎小白歯に萌出異常が認められた。2 本の小白歯がそれぞれ 90 度回転したうえ、頬舌方向に並列して生えている状況である。右上顎および下顎歯に異常は観察されない。また、複数の歯の表面に細い溝状の痕跡を視認しており、エナメル質減形成にあたるものとみて、第 31 表にまとめている。

No. 2 も完存する部位は残存していないものの、サイズなどから明らかに成人まで至っていない未成人であることがうかがえる。加えて、下顎骨が残存しており、歯の萌出状況をみると、乳歯が萌出を完了しており、第 1 大白歯および切歯などの永久歯が歯冠形成中であることから、小児段階の年齢であると推定できる。

○蔵骨器 3

本蔵骨器からも成人骨と未成人骨が混在して出土していることが確認された。さらに、未成人骨には重複する部位が同定でき、サイズなどの点で明瞭な発達差があると認められることから、年齢段階の異なる 2 体分が含まれていると考えられる。成人をNo. 1、未成人をNo. 2・No. 3 として個体識別し、

以下に観察所見について述べる。

No. 1 は顔面頭蓋こそ残存していないものの、それ以外の椎骨や四肢骨などの大半の部位が完形かそれに近い状態で残存しているため、様々な観察所見が得られる。左右の寛骨がほぼ完形であることから、恥骨形状および恥骨下角の観察が可能で、女性の特徴が明瞭である。また、耳状面直下に明瞭な前耳状溝が観察できる。上顎骨は残存しないが、下顎骨が完存しており、大臼歯の5カ所の歯槽が閉鎖済みであることから、老年段階ではないかと推測される。ただし、残存する歯に咬耗はそれほど進行していない様子をみてとることができる。

また、この個体は各所に形質的な異常がみられる。下顎骨のI₂の歯槽が存在しないことから形成されていないとみられ、また、左のP₂が90度回転して萌出している点が挙げられる。さらに遊離歯の一つに歯種が判別できない程の形態異常を有するものが残存している。次に左の上腕骨遠位端及び橈骨・尺骨近位端に骨増殖が認められるものである。上腕骨滑車が骨増殖により若干の変形が観察されること、橈骨環状関節面が同様に骨増殖による変形、尺骨の滑車切痕及び橈切痕の大きな骨棘の形成が明瞭にみてとれる。右の手根骨の一部と第2中手骨・第3中手骨がそれぞれ癒合し一体化しており、また右の距骨と踵骨も同様に癒合して一体化している。左肘・右手首・右足首がそれぞれ関節炎等何らかの疾病により骨に異常を来したものと考えられる。

No. 2 については検出された未成人骨のうち、より年齢段階が高い個体を識別したものである。完存ではないものの下顎骨や椎骨が残存するほか、四肢骨が骨端は未癒合で脱落しているものの、骨幹は比較的良く残存している。椎骨は軸椎・頸椎・胸椎などで椎体と突起が癒合しており、下顎骨および上顎遊離歯などの残存状況から第1大臼歯萌出済み、第2大臼歯未萌出の段階であるとみられることから、小児段階であると考えられる。

No. 3 では下顎骨・四肢骨が部分的に残存している。下顎骨の歯槽を見ると乳臼歯が萌出中ないし未萌出であるとみられることから、乳幼児段階と判断している。

第3節 前田西前田原C丘陵の人骨出土状況および分析結果

(1) 13号墓

13号墓は覆土の堆積状況及び蔵骨器の設置状況から、時期の異なる2段階の床面が検出されており、そのいずれから人骨が検出されている。どちらの時期の人骨も床面直上から検出され、出土状況から両者とも一次葬の状態を残しているものと判断された。このうち3層直上から出土したものを一次葬-1、4層直上から出土したものを一次葬-2として以下に記載する。

○一次葬-1

検出時、下肢骨を中心に原位置を保っていると判断されたことから一次葬の状態であると考えられた一群の人骨であるが、残存部位はそれほどなく、上腕骨・大腿骨・脛骨・腓骨を中心とした一部のみが同定された。頭蓋骨はある程度、形態を保っており、眉弓及び乳様突起の形状から男性であると推定され、また下顎歯の咬耗状況などから、それほど年齢段階が高くないものと思われたことから、成年段階と推定した。

○一次葬-2

同定可能な部位はほとんど残存しておらず、上腕骨及び遊離して残存する一部の歯が認められるのみである。遊離歯はいずれも永久歯であるが、ほとんど咬耗がみられないことから、詳細な年齢段階は不明である。

○蔵骨器 1

人骨の残存状況は不良で、大半が破片あるいは細片で占めており、遊離歯と腸骨・坐骨・恥骨・腓骨がかろうじて残存している状況である。そのため詳細は不明であるが、遊離歯がいずれも咬耗がそれほど見られず、また第2小臼歯および第2大臼歯が未萌出ないし萌出中であるとみられることから小児段階程度であることは推測できる。

○蔵骨器 2

本蔵骨器は墓室奥壁際の棚上に蓋を乗せた状態で出土しており、やや傾斜していたものの概ね原位置を保った状態であると考えられ、蔵骨器内部にも土が流入せず、納骨時の状況が残存する資料であると考えられる。そこで、蔵骨器からの人骨の取り出しに際して納骨状況を確認してみたところ、左の大腿骨の骨頭が寛骨臼と関節したままの状況をみてとることができた。また、右の寛骨および仙骨、頸椎、胸椎、腰椎についても同様に関節したままの様子をみることもできた。この状況から鑑みるに、納骨時には未だ完全な骨化にいたっておらず、脊椎から下肢骨にかけて交連したままの状態で蔵骨器内へ納められたものと考えられる。

骨の残存状況は極めて高く、頭骨を除く全身の部位をほぼ完存する状態でみることができ。寛骨の恥骨形状、大坐骨切痕角などより女性に特有の形態を明瞭に残しており、耳状面直下には前耳状溝が観察される。年齢段階は、歯の咬耗・頭蓋癒合線の状況・恥骨結合面の形状などを総合的に勘案した結果、成年から熟年のいずれかの段階であろうと推測した。

また、胸椎9点の椎体腹縁ないし側縁に軽度の、腰椎1点の椎体側縁から腹縁にやや強度の骨棘形成が認められる。前田・経塚近世墓群において、胸椎に軽度ながら多数の骨棘形成がみられる人骨は比較的珍しい事例であると言えよう。

○蔵骨器 3

内部から未成人のものと思われる人骨が少数ながら検出された。頭蓋骨の一部や、上下の顎骨に加え、四肢骨が見られるが、いずれも残存状態がそれほど良くないことから、詳細な観察は困難である。その中であって顎骨の歯槽がおよび乳歯が残存しており、萌出状況から幼児に区分される年齢段階に比定されると推定できる。

(2) 26号墓

本遺構からは未成人の一次葬人骨が検出された。遺構の規模は小さく、棺箱1基のみが納められたであろう法量を示す。人骨は床面直上で検出され、概ね全身の骨が解剖学的原位置を保っていたことから一次葬人骨であると判断できる。頭位は墓室奥へ向け、膝を屈する形で埋納された様子を窺うことができる。

各部位を観察すると、椎骨の椎体関節面や四肢骨の骨端があらかた未癒合である状況から、未成人であることが窺われる。また、上下の顎骨に残存する歯の萌出状況をみると、第1大臼歯が萌出済みで、第2大臼歯が未萌出・歯冠形成中であることから、小児の年齢段階に区分することができよう。

第4節 まとめ

前田西前田原B丘陵の調査で出土した人骨は、18基の墓遺構において蔵骨器に納められた状態あるいは一次葬ないし遺構埋土内から得られたもので、遺構ごとに算出した被葬者数を合計すると、少なくとも30人と数えられる。また、前田西前田原C丘陵の調査で出土した人骨は、少なくとも8体分の人骨が得られ、そのなかで13号墓蔵骨器2・3に納められた人骨及び26号墓の一次葬人骨が比較的良好な残存状態で検出され、形質等に関する所見を得ることができる。

しかしながら、両調査区ともに全体を俯瞰すると移転により空墓となっている遺構や戦争時に壕として転用されていた遺構も多いことから、丘陵全体が墓域として営為されていた時期に、どの程度の人数が葬られたものかは想定しにくい。人骨が出土している遺構であっても墓室や墓庭などで散乱状態に至っている資料も多く、遺構に納められて以降の過程を想定することは困難である。

人骨に関して、西前田原地区や前原地区などは前田・経塚近世墓群の中でも経塚地区などと比べて出土数の面では僅少な地区であることが、窺われるようになってきた。これは各地域における遺構の使用時期や移転・廃棄あるいは埋没といった過程と関わる問題であり、人骨の出土状況にも大きく影響する点である。そのため形質的な観点からすると、本報告の中でも多くの観察所見等を得られた資料は、西前田原地区の葬制の実態を探るうえで有用性が期待されるものと言えよう。

〈引用・参考文献〉

- 浦添市教育委員会 2011 『前田・経塚近世墓群 2 首里大名地区—那覇広域都市計画道路事業 3・3・16 号国際センター線に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』 浦添市文化財調査研究報告書
- 浦添市教育委員会 2012 『前田・経塚近世墓群 3 前田真知堂 B 丘陵 (1)・前田真知堂 C 丘陵 (1)—都市計画街路国際センター線及び沢岬石嶺線工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』
- 浦添市教育委員会 2013 『前田・経塚近世墓群 4 経塚子の方原 A 丘陵 (1)—浦添南第一土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告書—』
- 江藤盛治編 1991 『人体計測法 2』 人類学講座別巻 1 雄山閣
- 小橋川剛ほか 2009 「沖縄県読谷村大当原貝塚出土人骨について」 『沖縄埋文研究』 紀要 6 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 谷畑美帆・鈴木隆雄 2004 『考古学のための古人骨調査マニュアル』 学生社
- 土肥直美・北條真子 1998 「那覇市銘苅古墓群 (B・E) 地区出土の人骨」 『銘苅古墓群 (I)—那覇新都心土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告 V—』 那覇市教育委員会 那覇市文化財調査報告書第 39 集
- 土肥直美・譜久嶺忠彦 1999 「那覇市銘苅古墓群南 (A・C・D) 地区出土の人骨」 『銘苅古墓群 (II)—那覇新都心土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告 VI—』 那覇市教育委員会 那覇市文化財調査報告書第 40 集
- 徳嶺里江ほか 2009 「沖縄県座間味村古座間味原シル地区砂丘地出土人骨について」 『沖縄埋文研究』 紀要 6 沖縄県立埋蔵文化財センター

譜久嶺忠彦・土肥直美・石田肇 2000「那覇市ナーチャー毛古墓群出土の人骨」『—那覇新都心土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告Ⅶ—』那覇市教育委員会 那覇市文化財調査報告書第 44 集

譜久嶺忠彦・土肥直美・石田肇・瑞慶覧朝盛・泉水奏・佐宗亜衣子・比嘉貴子 2001「ヤッチのガマ・カンジン原古墓群出土の人骨」『ヤッチのガマ カンジン原古墓群原古墓群—県営かんがい排水事業（カンジン地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—』沖縄県立埋蔵文化財センター

藤田尚編 2013『古病理学事典』同成社

山本美代子 1988「日本古人骨永久歯のエナメル質減形成」『人類学雑誌』96 日本人類学会

Knussman.R 1988 Martin/Knussman Anthropologie.Band1, Stuttgart, Gustav Fischer Yerlag

I.W.Cornwall 1964 Bones for the Archaeologist. Phoenix House LTD

D.R.Brothwell 1981 Digging up Bones. Cornell University Pres

E.SCHMID 1972 Atlas of Animal Bones For Prehistorians, Archaeologists and Quaternary Geologists. Elsevir Publishing Company

第 26-1 表 前田西前田原 B 丘陵・C 丘陵 出土人骨一覧表

丘陵名	墓 No.	蔵骨器 No.	人骨 No.	年齢	性別	出土部位	備考
B	2	墓室床面直上	1	成人	不明	側頭骨L、頭蓋骨破片、下顎骨R、肋骨破片、上腕骨L・R、橈骨R、尺骨R、第2中手骨R、第4中手骨R、大腿骨R、脛骨L、腓骨L・R、第1中足骨R、第5中足骨R、中手/中足骨(6)、指骨、遊離歯(4)	
B	5	墓室埋土	1	不明	不明	下顎骨R、四肢骨破片	
B	6	1	1	成人	不明	小菱形骨R、有頭骨L・R、月状骨L、第1基節骨R、基節骨、中節骨(4)、中手骨(2)、寛骨L/R、大腿骨L、距骨R、外側楔状骨L、中間楔状骨R、第1基節骨L・R、中手/中足骨(4)、指骨(3)、遊離歯(7)	
B	6	1	2	乳幼児	不明	遊離歯(9)	
B	6	2	1	成人	不明	椎骨、肩甲骨L、上腕骨L、月状骨R、第1基節骨R、基節骨、中節骨、膝蓋骨R、距骨L・R、第3中足骨L、中手/中足骨(2)、遊離歯(12)	
B	6	3	1	不明	不明	上腕骨L/R、基節骨(2)、基節骨、中節骨(2)、末節骨	
B	6	3	2	乳幼児	不明	遊離歯(9)	
B	13	左右棚直上	1	不明	不明	部位不明破片のみ	
B	17	墓室埋土	1	不明	不明	頭蓋骨破片、椎骨破片、肋骨破片、肩甲骨L・R、第4中手骨L、基節骨、膝蓋骨L、第4中足骨L	
B	20	墓室埋土	1	不明	不明	肋骨破片、中手骨(2)、	
B	21	墓室埋土	1	不明	不明	頸椎破片、椎骨、肩甲骨L、橈骨R、大腿骨R	骨幹径は小さい、女性？
B	27	墓庭埋土	—	不明	不明	寛骨L	墓庭のため個体数力ウント対象外
B	28	墓室埋土	1	不明	不明	四肢骨破片	
B	31	1	1	成人	不明	椎骨(5)、肋骨破片、上腕骨R、橈骨R、尺骨LR、中節骨、距骨R、内側楔状骨L、舟状骨L、中足骨、基節骨(2)、遊離歯	
B	31	1	2	未成人	不明	座骨R、膝蓋骨L/R、遊離歯(18)	
B	37	2	1	不明	不明	大腿骨L・R	
B	37	2	2	不明	不明	大腿骨R	
B	37	2	一括	—	—	上腕骨L、脛骨L、腓骨R	
B	37	3	1	成人	不明	上腕骨L・R、遊離歯(3)	
B	38	1	1	成人	F	椎骨(2)、肋骨破片、鎖骨L、尺骨L、舟状骨R、三角骨R、第3中手骨R、第1基節骨R、基節骨、末節骨、寛骨L・R、腓骨L/R、中間楔状骨、立方骨L、基節骨(2)、遊離歯	
B	38	棚上埋土	一括	—	—	上腕骨L・R、尺骨R、大腿骨L・R	
B	38	墓室埋土	一括	—	—	上腕骨R、大腿骨R	
B	40	一次葬	1	熟年～老年	M	頭蓋骨、下顎骨、環椎、頸椎、胸椎、腰椎、仙骨、椎骨(3)、肋骨破片、肩甲骨L・R、鎖骨L・R、上腕骨L・R、橈骨R、尺骨L・R、小菱形骨L、第1中手骨L・R、第2中手骨L、基節骨(2)、寛骨L・R、大腿骨L・R、膝蓋骨L、脛骨L・R、腓骨L・R、踵骨R、舟状骨L、第1中足骨L、第2中足骨R	
B	41	一次葬	1	老年	M	下顎骨、環椎、軸椎、頸椎(3)、胸椎(8)、腰椎(3)、仙骨、尾骨、胸骨、肋骨、肩甲骨L・R、鎖骨L・R、上腕骨L・R、橈骨L・R、尺骨L・R、大菱形骨L、小菱形骨L、有頭骨L・R、有鉤骨L・R、舟状骨L・R、月状骨L、三角骨L、豆状骨L、第1中手骨L・R、第2中手骨L・R、第3中手骨L・R、第4中手骨L・R、第5中手骨L・R、第1基節骨L・R、基節骨(8)、中節骨(2)、末節骨、寛骨L・R、大腿骨L・R、膝蓋骨R、脛骨L・R、腓骨L・R、踵骨L・R、距骨L・R、中間楔状骨L・R、内側楔状骨L・R、立方骨L・R、舟状骨L・R、第1中足骨L・R、第2中足骨L・R、第3中足骨L・R、第4中足骨L・R、第5中足骨L・R、第1基節骨L・R、基節骨(5)、中節骨	
B	41	墓口埋土	—	—	—	鎖骨R、橈骨L、脛骨L、腓骨R	
B	41	2番棚直上	一括	—	—	頭蓋骨破片、肋骨破片、有頭骨R、三角骨L、基節骨、中節骨、中手/中足骨、基節骨、末節骨	
B	41	3番棚直上	一括	—	—	破片のみ	
B	41	墓室右棚直上	—	—	—	椎骨(2)、肩甲骨R、末節骨、腓骨R、指骨(2)、遊離歯	
B	41	墓室左棚直上	—	—	—	上腕骨L、大腿骨R	
B	49	墓室埋土	1	成人	—	坐骨L、膝蓋骨R、脛骨L・R、腓骨L、踵骨L、距骨L、舟状骨R、第1中足骨L・R、第5中足骨R、第1基節骨R	下肢骨のみ残存
B	51	墓室埋土	1	成人	不明	基節骨(足)(3)、中節骨(足)、指骨、遊離歯(4)	
B	55	1	1	成人	不明	頭蓋骨、頸椎、椎骨、肋骨破片、上腕骨L・R、橈骨R、尺骨L、月状骨L、第1基節骨L/R、基節骨、中節骨、中手/中足骨、指骨、腸骨R、大腿骨L・R、膝蓋骨L・R、腓骨L/R、踵骨L、距骨L・R、外側楔状骨L・R、中間楔状骨L、立方骨L、舟状骨L/R、第2中足骨L、第4中足骨L、第5中足骨L・R、中節骨、遊離歯(22)	
B	56	一次葬	1	老年	F	頭蓋骨、下顎骨、環椎、軸椎、頸椎(5)、胸椎(12)、腰椎(5)、仙骨、尾骨、肋骨破片、肩甲骨L・R、鎖骨L・R、上腕骨L・R、橈骨L・R、尺骨L・R、大菱形骨L、小菱形骨R、有鉤骨L・R、舟状骨L・R、月状骨R、第1中手骨R、第2中手骨L、第3中手骨R(2)、第4中手骨L・R、第5中手骨L、第1基節骨L・R、基節骨(6)、中節骨(6)、末節骨(3)、中手骨、指骨(手)(5)、寛骨L・R、大腿骨L・R、膝蓋骨L・R、脛骨L・R、腓骨L・R、踵骨L・R、距骨L・R、外側楔状骨L・R、中間楔状骨L(2)・R、内側楔状骨L・R、立方骨L・R、舟状骨L・R、第1中足骨L・R、第2中足骨L・R、第3中足骨L・R、第4中足骨L・R、第5中足骨L・R、基節骨(5)、中節骨、末節骨、指骨	
B	56	1	1	老年	M	頭蓋骨、下顎骨、仙骨、胸骨丙、胸骨体、肩甲骨L・R、鎖骨L・R、上腕骨L・R、橈骨L・R、尺骨L・R、有頭骨L・R、月状骨R、第1中手骨L・R、第2中手骨L・R、第3中手骨L・R、第4中手骨L・R、第5中手骨L・R、寛骨L・R、大腿骨L・R、脛骨L・R、腓骨L・R、踵骨L・R、距骨R、立方骨R、舟状骨L、第5中足骨L・R	
B	56	1	2	成年	M	側頭骨L、頬骨R、後頭骨、上顎骨L、下顎骨、仙骨、胸骨体、肩甲骨L・R、鎖骨L・R、上腕骨L・R、橈骨L・R、尺骨L・R、有頭骨L、月状骨L、第1中手骨L・R、第2中手骨L・R、第3中手骨L・R、第4中手骨L、第5中手骨L・R、第5中足骨R、寛骨L・R、大腿骨L・R、脛骨L・R、腓骨L・R、踵骨R、距骨L・R、立方骨L、舟状骨L	

第 26-2 表 前田西前田原 B 丘陵・C 丘陵 出土人骨一覧表

丘陵名	墓 No.	蔵骨器 No.	人骨 No.	年齢	性別	出土部位	備考
B	56	1	3	乳幼児	不明	頭蓋骨破片、椎骨破片、橈骨R、脛骨L、	
B	56	1	一括	—	—	環椎、軸椎、頸椎、胸椎(16)、腰椎(7)、椎骨(2)、肋骨L(19)・(19)、大菱形骨R、舟状骨L・R、三角骨L、豆状骨R、基節骨(16)、中節骨(8)、末節骨(2)、膝蓋骨L・R、外側楔状骨L・R、中間楔状骨L・R、第1中足骨L・R、第2中足骨R、第3中足骨L・R、第4中足骨L・R、第1基節骨L・R、基節骨(8)、中節骨(2)、末節骨、中足骨L/R (2)、中手/中足骨L/R	No.1もしくはNo.2
B	56	2	1	成人	不明	頭蓋骨破片、下顎骨、仙骨、椎骨(3)、肋骨破片、橈骨R、有鉤骨R、月状骨L、第1基節骨L、基節骨(2)、末節骨、中手/中足骨L/R、寛骨L・R、大腿骨R、脛骨L・R、踵骨L、距骨L、外側楔状骨L・R、中間楔状骨L・R、舟状骨L、基節骨(2)、遊離歯(3)	
B	56	2	2	小児	不明	側頭骨L・R、下顎骨、肋骨破片、鎖骨L・R、上腕骨L・R、橈骨L・R、尺骨L・R、大腿骨L・R、脛骨R、腓骨L/R、遊離歯(11)	
B	56	3	1	熟年	F	側頭骨L・R、後頭骨、下顎骨、環椎、軸椎、頸椎(5)、胸椎(12)、腰椎(5)、仙骨、椎骨破片、胸骨、肋骨破片、肩甲骨L・R、鎖骨L・R、上腕骨L・R、橈骨L・R、尺骨L・R、大菱形骨L・R、小菱形骨L・R、有頭骨L・R、有鉤骨L・R、舟状骨L・R、月状骨R、三角骨R、豆状骨L/R、第1中手骨L・R、第2中手骨L・R、第3中手骨L・R、第4中手骨L・R、第5中手骨L・R、第1基節骨L・R、基節骨、中節骨(8)、末節骨、寛骨L・R、大腿骨L・R、膝蓋骨L・R、脛骨L・R、腓骨L・R、踵骨L・R、距骨L・R、外側楔状骨L・R、中間楔状骨L・R、内側楔状骨L・R、立方骨L・R、舟状骨L・R、第1中足骨L・R、第2中足骨L・R、第3中足骨L・R、第4中足骨L・R、第5中足骨L・R、第1基節骨L・R、基節骨(5)、末節骨、遊離歯	
B	56	3	2	小児	不明	上顎骨R、下顎骨、環椎、軸椎、頸椎(3)、胸椎、腰椎、仙椎(3)、椎骨(7)、肋骨破片、肩甲骨L・R、鎖骨L・R、上腕骨L・R、橈骨L・R、尺骨L・R、手根/足根骨L/R(8)、指骨(手/足)(6)、腸骨L・R、恥骨L・R、大腿骨L・R、脛骨L・R、腓骨L・R、踵骨R、距骨L、第1中足骨L・R、遊離歯(10)	
B	56	3	3	乳幼児	不明	側頭骨L・R、鎖骨L、上腕骨L・R、橈骨L・R、尺骨L・R、大腿骨L・R、脛骨L・R、腓骨L/R	
C	11	—	1	未成人	不明	頭蓋骨破片	
C	13	一次葬	1	成年	M	前頭骨、側頭骨L・R、後頭骨、下顎骨、肩甲骨L・R、上腕骨L・R、腸骨L/R (2)、大腿骨L・R、脛骨L・R、腓骨L・R、踵骨L・R、距骨L・R、第1中足骨L、四肢骨L/R、中手/中足骨L/R (6)	3層直上
C	13	一次葬	2	成人	不明	上腕骨、中節骨、遊離歯	4層直上
C	13	1	1	小児	不明	肋骨L (6)・R、腸骨L、坐骨L、恥骨L、腓骨L/R、遊離歯	
C	13	2	1	成年～熟年	F	前頭骨、頭頂骨L・R、舌骨、下顎骨、環椎、軸椎、頸椎(5)、胸椎(11)、腰椎(5)、尾椎、胸骨、肋骨L (11)・R (11)、肩甲骨L・R、鎖骨L・R、上腕骨L・R、橈骨L・R、尺骨L・R、大菱形骨L・R、小菱形骨L・R、有頭骨L・R、有鉤骨L・R、舟状骨L・R、月状骨R、三角骨L、豆状骨R、第1中手骨L・R、第2中手骨L・R、第3中手骨L・R、第4中手骨L・R、第5中手骨L・R、第1基節骨L・R、基節骨(8)、中節骨(8)、末節骨(5)、寛骨L・R、大腿骨L・R、膝蓋骨L・R、脛骨L・R、腓骨L・R、踵骨L・R、距骨L・R、外側楔状骨L・R、中間楔状骨L・R、内側楔状骨L・R、立方骨L・R、舟状骨L・R、第1中足骨L・R、第2中足骨L・R、第3中足骨L・R、第4中足骨L・R、第5中足骨L・R、第1基節骨L・R、基節骨(8)、末節骨	
C	13	3	1	幼児	不明	前頭骨、頭頂骨L・R、側頭骨L・R、頬骨R、上顎骨L・R、下顎骨、肋骨破片(5)、尺骨R、腸骨R、大腿骨L/R、脛骨L・R、長管骨L/R (4)	
C	15	—	1	未成人	不明	頭蓋骨破片	
C	26	一次葬	1	小児	不明	前頭骨、頭頂骨L・R、側頭骨L・R、上顎骨L・R、下顎骨、環椎、軸椎、頸椎(5)、胸椎(12)、腰椎(5)、仙椎(4)、尾椎、胸骨丙、肋骨L (12)・R (11)、肩甲骨L・R、鎖骨L・R、上腕骨L・R、橈骨L・R、尺骨L・R、寛骨L・R、大腿骨L・R、脛骨L・R、腓骨L・R、踵骨L・R、距骨L・R、第1中足骨L	

第 27 表 最少個体数 集計表

丘陵名	墓 No.	成人									未成人					年齢性別不明	合計	総計	
		成年			熟年～老年			年齢不明			小計	若年	小児	乳幼児	年齢段階不明				小計
		M	F	性別不明	M	F	性別不明	M	F	性別不明									
B 丘陵	2									1	1					0		1	30
	5										0					0	1	1	
	6			2							2			2		2	1	5	
	13										0					0	1	1	
	17										0					0	1	1	
	20										0					0	1	1	
	21										0					0	1	1	
	28										0					0	1	1	
	31									1	1			1		1		2	
	37									1	1					0	2	3	
	38								1		1					0		1	
	40				1						1					0		1	
	41				1						1					0		1	
	49										1	1				0		1	
	51										1	1				0		1	
55										1	1				0		1		
56	1				1	2					4		2	1		3		7	
C 丘陵	11										0				1	1		1	8
	13	1	1							1	3		1	1		2		5	
	15										0				1	1		1	
	26										0		1			1		1	

凡例) 歯種記号: 残存歯, ○: 歯槽開放, ×: 歯槽閉鎖, /: 歯槽破損,
△: 歯根のみ残存, (): 未萌出, []: 萌出中・閉鎖中,
網掛: 齲蝕歯, 空白: 欠失・未形成

第 28 表 上顎骨及び下顎骨の歯列残存状況

丘陵	墓No.	地点	人骨No.	残存状况															
				R								L							
B	56	一次葬	1	× × × × × × × × ×								× × × × × × × × ×							
B	56	1	1	× × × × P₂ × ○ / / / ○								/ / ○ ○ ○ [×] × [×] ×							
B	56	1	2	M₃ M₂ M₁ P₂ P₁ C I₂ I₁								I¹ I² C ○ P² M¹ M² I₁ I₂ C P₁ P₂ M₁ M₂							
B	56	2	1	M³ M² M¹ P² P¹ C I² I¹								I¹ I² C P¹ P² M¹ M² / M₃ M₂ M₁ P₂ P₁ C I₂ I₁ I₁ I₂ C P₁ P₂ / / /							
B	56	2	2	/ / m² m¹ / / /								○ c m₁ / / /							
B	56	3	1	× × × P₂ P₁ C I₁								○ ○ C P₁ P₂ × × M₃							
B	56	3	2	/ / (P²) (P¹) ○ ○ I¹ /								/ / (C) ○ ○ ○ (M₂)							
B	56	3	3									○ ○ ○ ○ ○ ○							
C	13	一次葬	1	M₃ M₂ M₁ P₂ × C ○ ○								△ I₂ C P₁ P₂ M¹ M₂ M₃							
C	13	2	1	× M₂ × P₂ P₁ C I₂ I₁								○ I₂ ○ P₁ P₂ × M₂ ×							
C	13	3	1	(M¹) [m²] m¹ [c] △ △								△ △ [c] m¹ [m²] (M¹) i₁ i₂ [c] ○ [m₂] (M₁)							
C	26	一次葬	1	(M³) (M²) M¹ (P²) P¹ C I² I¹								I¹ I² C P¹ (P²) M¹ (M²) (M³) (M₃) (M₂) M₁ [P₂] (P₁) C I₂ I₁ I₁ I₂ C (P₁) [P₂] M₁ (M₂) (M₃)							

第 29 表 齲蝕歯観察表

丘陵名	墓No.	蔵骨器No. ／ 出土地点	人骨No.	歯種	左右	位置	観察所見
C	26	一次葬	1	P ¹	L	歯冠	半分程度が齲蝕による消失
				M ₁	L	歯冠	大部分が齲蝕により消失
				M ¹	L	歯冠	頰側の半分ほどが齲蝕により消失

第 30 表 骨に見られる変異等の観察表

丘陵名	墓No.	蔵骨器No.	人骨No.	部位	左右	変異種別	観察所見
B	38	1	1	寛骨	L	前耳状溝	幅7～8mm、比較的浅い溝
B	40	一次葬	1	下顎骨	L	変形	関節突起の関節面が扁平な形状に変形
B	41	一次葬	1	腰椎	—	骨棘	椎体復縁にわずかな骨棘が形成
				腰椎	—	骨棘	椎体側縁にわずかな骨棘が形成
				胸椎	—	骨棘	比較的上位の胸椎、下面側の椎体復縁に骨棘形成
				胸椎	—	骨棘・骨増殖	上記の胸椎との関節面の椎体復縁に骨棘形成、下関節突起に骨増殖
				胸椎	—	骨棘	比較的下位の胸椎、上面側椎体側縁に骨棘形成
				胸椎	—	骨棘	最下に近い胸椎、椎体下面側の側縁に骨棘形成
				胸椎	—	骨棘	最も下位の胸椎、椎体上面側の側縁に骨棘形成
				腰椎	—	骨棘	下面側椎体復縁にわずかに骨棘形成
				腰椎	—	骨棘	上面側椎体復縁に骨棘形成
B	56	1	2	後頭骨	—	変形	大孔周辺が他に比べて著しく薄い
				大腿骨	R	骨増殖	骨幹全体の表面に多孔・縦線状痕
B	56	1	1or2	腰椎	—	変形	椎体に変形及び骨棘形成
B	56	2	1	上顎骨	L	異常萌出	P ¹ およびP ² が並列して反時計に90°回転して萌出
				腰椎	—	骨棘	椎体側縁にわずかに骨棘形成
				上腕骨	L	骨増殖	上腕骨滑車部分に骨増殖による変形
				橈骨	L	骨増殖	関節環状面が骨増殖により変形
				尺骨	L	骨増殖	滑車切痕・橈骨切痕が骨増殖により膨張
				第2中手骨	R	癒合	癒合して一体化
				第3中手骨	R		
				大菱形骨	R		
				小菱形骨	R		
				寛骨	LR	前耳状溝	幅約8.5mmで深い溝
				踵骨	R	癒合	癒合して一体化
				距骨	R		
				胸椎	—	骨棘	9点の胸椎の椎体腹縁ないし側縁に骨棘形成
				腰椎	—	骨棘	椎体腹縁から側縁にかけて骨棘形成
				基節骨(手)	R	骨棘	近位端に軽度の骨棘形成
				寛骨	LR	前耳状溝	幅5～8mm・深さ2～3mm・長3cm程度の溝状の痕跡
				距骨	L	骨増殖	距骨滑車の直後の位置にRに比べ著しく骨増殖

第 31 表 下顎犬歯に観察されるエナメル質減形成一覧表

丘陵名	墓No.	蔵骨器No.	人骨No.	歯種	LR	出現数	類型	歯冠最下端からの距離(mm)	ストレス受容推定年齢(歳)	備考
B	56	2	1	C	L	4	線状	3.0	4.5～5.0	右の犬歯及び左右の小臼歯にも出現
							線状	3.7	4.5～5.0	
							線状	4.0	4.0～4.5	
							線状	5.2	3.5～4.0	
B	56	1	2	C	L	2	線状	2.1	5.0～5.5	右の犬歯及び左右の小臼歯にも出現
							線状	3.9	4.0～4.5	
C	13	2	1	C	R		線状	計測不可	—	歯冠最下端のエナメル質が剥離しているため計測不可
							小窩状	計測不可	—	

※類型・計測・ストレス受容年齢推定は山本 1987 に従っている

第6章 脊椎動物遺体

前田西前田原 B 丘陵の調査区で検出された墓遺構の内、7 基から脊椎動物遺体が出土した。本章ではこれらの資料についての分析結果について示すとともに、特に着目すべき出土状況が窺われた 16 号墓および 56 号墓の様相について記載する。

第1節 資料について

(1) 出土および取り上げ状況

脊椎動物遺体は、前田西前田原 B 丘陵で検出された墓遺構の内、6・12・16・19・37・40・56 号墓から出土しており、墓室あるいは墓庭において覆土ないし床面を精査中に目視で出土を確認し、手で取り上げられた資料である。56 号墓以外の遺構については、出土地点・層序を記載の上一括して取り上げている。一方、56 号墓出土資料の一部は出土状況を作図の上、取り上げNo.を付して取り上げたものと、一括で取り上げたものとに区分される。

(2) 分析方法

上記資料について、現生標本との形態比較による種同定分析を行った。同定の対象としたものは部位同定が可能なものを基本とし、四肢骨骨幹破片や椎骨の椎体関節面が未癒合で脱落しているものなどについては対象外とした。なお、比較に用いた現生標本は筆者が所蔵する資料を用いた。

(3) 分析結果

分析の結果、鳥類および哺乳類 4 群が同定され、分類群・部位・残存状態・観察所見などについて一覧化した（第 32・33 表）。

鳥類は上腕骨及び橈骨が 16 号墓から各 1 点ずつ出土しているが、詳細な分類群は不明である。

哺乳類はネズミ科、ネコ、ブタ（もしくはイノシシ）、ヤギの 4 群を同定したほか、欠損・未癒合による脱落した端部で形態が不明瞭なものについては「哺乳類」として判断は保留した。

ネズミ科は下顎骨・寛骨・大腿骨が検出され、6・40 号墓から各最小個体数 1 が算定される。

ネコは四肢骨を中心に同定されており、12・40 号墓からそれぞれ個体数 1 ずつが数えられる。両遺構共に覆土中から出土していることから、墓遺構の使用段階との関係性は不明である。

イノシシ/ブタは、同定資料数のうち、最多を数える分類群である。16・19・56 号墓から出土しており、四肢骨を中心とするが、16 号墓からは上下の顎骨も出土している。当該資料は M₃ が未萌出であり、その他の四肢骨などについても大半の資料で骨端などが未癒合の個体である様子が窺える。形態的に明瞭なブタと判断できる資料はないものの、いずれも若齢の個体である点から、これらの個体が家畜であったものと推測される。

ヤギは四肢骨を中心に最小個体数 2 を数える。

第2節 前田西前田原B丘陵56号墓から出土した脊椎動物遺体

56号墓は柵を持たず比較的小規模な構造を有する掘込墓であるが、墓室内部からは原位置を保つ蔵骨器3基と一次葬人骨および副葬品が出土しており、前田西前田原B丘陵の調査区の中でも豊富な情報量を有する墓遺構である。蔵骨器が左右の壁面際に置かれ、中央に頭位を奥壁に、足を入口に置いた状態で一次葬人骨が検出され、一次葬人骨の頭蓋と奥壁の間に動物骨が床面直上から密集して検出された。前述の同定結果によりこれらは、イノシシ/ブタおよびヤギが混在して含まれることが分かる。出土状況を見ると、関節の交連状態は認められなかったため、個別の部位に分離した状態でまとめられ、置かれたものと考えられる。骨の一部にはカットマークや切断痕も観察されたため、いわゆる「食糧残滓」としての位置づけられる資料であると思われる。

前田・経塚近世墓群では、同様に墓室内から動物骨がまとまって出土した事例はこれまで確認されていない。そのため、これらが食糧残滓の単なる廃棄であるのか、あるいはそれ以外の何らかの意味を有するのかは検討が必要な事項と言えよう。

第3節 まとめ

前田・経塚近世墓群の調査では、しばしば墓室内や墓庭に構築されたピット内から動物の頭蓋骨が出土する事例が知られるが、四肢骨などの部位がまとめられて墓室内に置かれた56号墓の事例は、これらとは異なる意義を有するとみるべきであろう。同様の事例が存在するかどうか、あるいは今後の事例の追加に期待しつつ、考察すべき課題である。

p:近位端 ps:近位側骨幹 s:骨幹 sd:遠位側骨幹 d:遠位端
 ():端部未癒合脱落 < >:端部未癒合残存 []:未癒合で脱落した端部
 [歯種記号]:下線部→残存歯、記号のみ→脱落歯、×→歯槽閉鎖

第 32-1 表 西前田原 B 丘陵出土の脊椎動物遺体一覧

遺構 No.	地点	取上 No.	分類群	部位	左右	残存状態	所見
6	シルヒラシ直上	一括	ネズミ科	下顎骨	L	完存	
6	シルヒラシ直上	一括	ネズミ科	寛骨	L	恥骨欠損	
6	シルヒラシ直上	一括	ネズミ科	大腿骨	L	p ~ s	
6	シルヒラシ直上	一括	鳥類	上腕骨	R	完存	
6	シルヒラシ直上	一括	鳥類	橈骨	不明	完存	
12	墓室埋土	—	ネコ	上腕骨	R	(p) ~ d	近位端未癒合脱落
12	墓室埋土	—	ネコ	大腿骨	L	(p) ~ (d)	両端未癒合脱落
12	墓室埋土	—	ネコ	大腿骨	R	(p) ~ (d)	両端未癒合脱落
12	墓室埋土	—	哺乳類	尾椎	—	完存	ネコ?
16	墓室埋土左袖角	—	ブタ	上顎骨	L	[CP'm'm'm'M'M']	C萌出中、オス
16	墓室埋土左袖角	—	ブタ	上顎骨	R	[P'm'm'm'M'M']	M'萌出中
16	墓室埋土左袖角	—	ブタ	下顎骨	LR	L[I ₁ I ₂ I ₃ Cm ₁ m ₂ m ₃ M ₁ M ₂ (M ₃)] R[I ₁ I ₂ I ₃ Cm ₁ m ₂ m ₃ M ₁ M ₂ (M ₃)]	M ₃ 未萌出、オス
19	墓室埋土	—	ブタ	肩甲骨	L	関節窩〜くびれ部	
19	墓室埋土	—	ブタ	肩甲骨	R	関節窩〜くびれ部	
19	墓室埋土	—	ブタ	上腕骨	R	s	
19	墓室埋土	—	ブタ	寛骨	L	坐骨	腸骨との関節面未癒合
19	墓室埋土	—	ブタ	寛骨	R	坐骨	
19	墓室埋土	—	ブタ	寛骨	R	腸骨	
19	墓室埋土	—	ブタ	大腿骨	R	(p) ~ s	
19	墓室埋土	—	ブタ	脛骨	R	s	
19	墓室埋土	—	ブタ	椎骨	—	椎体14	椎体後関節面未癒合脱落
19	墓室埋土	—	ブタ	椎骨	—	棘突起及び関節突起、多数	集計対象外
19	墓室埋土	—	ブタ	肋骨	不明	破片多数	集計対象外
37	墓室奥棚直上	2	哺乳類	椎骨	—	棘突起	
40	墓室埋土	—	ネコ	前頭骨	L	眼窩周辺	
40	墓室埋土	—	ネコ	前頭骨	R	眼窩周辺	
40	墓室埋土	—	ネコ	下顎骨	L	[I ₁ I ₂ I ₃ CP ₁ P ₂ M ₁]	
40	墓室埋土	—	ネコ	上腕骨	L	<p> ~ s	近位端未癒合残存
40	墓室埋土	—	ネコ	上腕骨	R	(p) ~ d	近位端未癒合脱落
40	墓室埋土	—	ネコ	橈骨	R	p ~ (d)	遠位端未癒合脱落
40	墓室埋土	—	ネコ	尺骨	R	完存	
40	墓室埋土	—	ネコ	寛骨	L	完存	
40	墓室埋土	—	ネコ	寛骨	R	腸骨欠損	
40	墓室埋土	—	ネコ	大腿骨	L	(p) ~ s	
40	墓室埋土	—	ネコ	大腿骨	R	(p) ~ (d)	
40	墓室埋土	—	ネコ	脛骨	不明	s	
40	墓室埋土	—	ネコ	第3中足骨	L	完存	
40	墓室埋土	—	ネコ	踵骨	L	完存	
40	墓室埋土	—	ネコ	腰椎	—	椎体前半欠損	椎体後関節面未癒合脱落
40	墓室埋土	—	ネズミ科	大腿骨	L	p ~ s	
56	墓室奥壁周辺床面直上	39	ブタ	橈骨	R	[p]	近位端未癒合
56	墓室奥壁周辺床面直上	31	ブタ	尺骨	L	d	
56	墓室奥壁周辺床面直上	38	ブタ	尺骨	R	滑車切痕	イノシシ/ブタ?
56	墓室奥壁周辺床面直上	16	ブタ	尺骨	不明	d	
56	墓室奥壁周辺床面直上	42	ブタ	中手/中足骨	不明	[d]	遠位端未癒合、切断
56	墓室奥壁周辺床面直上	17	ブタ	基節骨	不明	(p) ~ d	
56	墓室奥壁周辺床面直上	43	ブタ	基節骨	不明	完存	
56	墓室内一括	—	ブタ	中節骨	不明	完存	
56	墓室内一括	—	ブタ	中節骨	不明	(p) ~ d	
56	墓室内一括	—	ヤギ	M(上顎)	不明	破片	
56	墓室内一括	—	ヤギ	I(下顎)	L	ほぼ完存	
56	墓室奥壁周辺床面直上	46	ヤギ	頸椎	—	おおむね残存	椎体後関節面未癒合
56	墓室床面直上	3	ヤギ	下顎骨	L	[m ₁ m ₂ m ₃]	
56	墓室内一括	75	ヤギ	肩甲骨	L	くびれ部〜肩甲棘基部〜外側縁	CM多数、くびれ部で切断
56	墓室内一括	71	ヤギ	上腕骨	L	d	

p:近位端 ps:近位側骨幹 s:骨幹 sd:遠位側骨幹 d:遠位端
 ():端部未癒合脱落 < >:端部未癒合残存 []:未癒合で脱落した端部
 [歯種記号]:下線部→残存歯、記号のみ→脱落歯、×→歯槽閉鎖

第 32-2 表 西前田原 B 丘陵出土の脊椎動物遺体一覧

遺構 No.	地点	取上 No.	分類群	部位	左右	残存状態	所見
56	墓室内一括	—	ヤギ	上腕骨	L	d	
56	墓室内一括	—	ヤギ	橈骨	L	s	
56	墓室内一括	—	ヤギ	尺骨	L	(肘頭)~s	
56	墓室奥壁周辺床面直上	14	ヤギ	寛骨	R	寛骨臼~坐骨+腸骨の一部	
56	墓室奥壁周辺床面直上	3	ヤギ	大腿骨	L	(p)	下記の56号墓室一括の資料と関節
56	墓室奥壁周辺床面直上	20	ヤギ	大腿骨	L	(p)	下記の56号墓室一括の資料と関節
56	墓室内一括	—	ヤギ	大腿骨	L	[p]	56号墓取上No.20と関節
56	墓室内一括	—	ヤギ	大腿骨	L	[p]	56号墓取上No.3と関節
56	墓室奥壁周辺床面直上	34	ヤギ	大腿骨	R	s~<d>	遠位端癒合中
56	墓室奥壁周辺床面直上	2	哺乳類	胸椎	—	おおむね残存	椎体関節面未癒合
56	墓室奥壁周辺床面直上	44	哺乳類	胸椎	—	おおむね残存	椎体前後関節面未癒合脱落
56	墓室内一括	—	哺乳類	椎骨	—	椎体	未癒合で脱落した椎体関節面
56	墓室内一括	—	哺乳類	椎骨	—	椎体	未癒合で脱落した椎体関節面
56	墓室奥壁周辺床面直上	5	哺乳類	椎骨	—	椎体	椎体前後関節面未癒合脱落
56	墓室奥壁周辺床面直上	5	哺乳類	椎骨	—	椎体	椎体前後関節面未癒合脱落
56	墓室奥壁周辺床面直上	5	哺乳類	椎骨	—	椎体	未癒合で脱落した関節面
56	墓室奥壁周辺床面直上	6	哺乳類	椎骨	—	破片	集計対象外
56	墓室奥壁周辺床面直上	11	哺乳類	椎骨	—	椎体	椎体前後関節面未癒合脱落
56	墓室奥壁周辺床面直上	12	哺乳類	椎骨	—	突起	頸椎?
56	墓室奥壁周辺床面直上	13	哺乳類	椎骨	—	突起	破片
56	墓室奥壁周辺床面直上	15	哺乳類	椎骨	—	突起	破片
56	墓室奥壁周辺床面直上	28	哺乳類	椎骨	—	突起	破片
56	墓室奥壁周辺床面直上	29	哺乳類	椎骨	—	棘突起	
56	墓室奥壁周辺床面直上	35	哺乳類	椎骨	—	椎体	未癒合で脱落した椎体関節面
56	墓室奥壁周辺床面直上	36	哺乳類	椎骨	—	椎体	未癒合で脱落した椎体関節面
56	墓室奥壁周辺床面直上	37	哺乳類	椎骨	—	椎体	未癒合で脱落した椎体関節面
56	墓室奥壁周辺床面直上	26	哺乳類	上腕骨	不明	[p]	未癒合で脱落した近位端
56	墓室内一括	—	哺乳類	上腕骨	L	(d)、破片	遠位端未癒合脱落
56	墓室奥壁周辺床面直上	24	哺乳類	腸骨	L	耳状面周辺	CMおよび切断
56	墓室奥壁周辺床面直上	25	哺乳類	腸骨	R	耳状面周辺	CM
56	墓室奥壁周辺床面直上	30	哺乳類	大腿骨	L	[d]	未癒合で脱落した遠位端、切断
56	墓室奥壁周辺床面直上	7	哺乳類	四肢骨	不明	破片	
56	墓室奥壁周辺床面直上	22	哺乳類	中節骨	不明	[p]	未癒合で脱落した近位端
56	墓室奥壁周辺床面直上	7	哺乳類	手根/足根骨	不明	半存	
56	墓室奥壁周辺床面直上	9	哺乳類	手根/足根骨	不明	おおむね残存	
56	墓室奥壁周辺床面直上	28	哺乳類	手根/足根骨	不明	完存	
56	墓室奥壁周辺床面直上	28	哺乳類	手根/足根骨	不明	完存	
56	墓室奥壁周辺床面直上	33	哺乳類	手根/足根骨	不明	完存	
56	墓室奥壁周辺床面直上	33	哺乳類	手根/足根骨	不明	完存	
56	墓室奥壁周辺床面直上	33	哺乳類	手根/足根骨	不明	完存	
56	墓室奥壁周辺床面直上	1	哺乳類	不明	不明	おおむね残存	膝蓋骨?
56	墓室奥壁周辺床面直上	4	哺乳類	不明	不明	破片	切断
56	墓室奥壁周辺床面直上	8	哺乳類	不明	不明	破片	微細破片
56	墓室奥壁周辺床面直上	10	哺乳類	不明	不明	破片	
56	墓室奥壁周辺床面直上	18	哺乳類	不明	不明	破片	CM
56	墓室奥壁周辺床面直上	19	哺乳類	不明	不明	破片	
56	墓室奥壁周辺床面直上	21	哺乳類	不明	不明	破片	指骨?、切断
56	墓室奥壁周辺床面直上	27	哺乳類	不明	不明	破片	
56	墓室奥壁周辺床面直上	32	哺乳類	不明	不明	破片	
56	墓室奥壁周辺床面直上	40	哺乳類	不明	不明	破片	微細破片
56	墓室奥壁周辺床面直上	41	哺乳類	不明	不明	破片	
56	墓室奥壁周辺床面直上	45	哺乳類	不明	不明	破片	
56	墓室内一括	—	哺乳類	肋骨	不明	p	
56	墓室奥壁周辺床面直上	23	哺乳類	肋骨	不明	破片	
56	墓室内一括	6	同定不可	不明	不明	破片	
56	墓室内一括	14	同定不可	不明	不明	破片	

第 33 表 脊椎動物遺体集計表

種別			NISP								MNI
分類群	部位	左右	6号墓	12号墓	16号墓	19号墓	37号墓	40号墓	56号墓	合計	
鳥類	上腕骨	R	1							2	1
	橈骨	不明	1								
ネズミ科	下顎骨	L	1							4	2
	寛骨	L	1								
	大腿骨	L	1					1			
ネコ	前頭骨	L						1		18	2
	前頭骨	R						1			
	下顎骨	L						1			
	腰椎	—						1			
	上腕骨	L						1			
	上腕骨	R		1				1			
	橈骨	R						1			
	尺骨	R						1			
	寛骨	L						1			
	寛骨	R						1			
	大腿骨	L		1				1			
	大腿骨	R		1				1			
	脛骨	不明						1			
	第3中足骨	L						1			
	踵骨	L						1			
ブタ	上顎骨	L			1					34	1
	上顎骨	R			1						
	下顎骨	LR			1						
	肩甲骨	L				1					
	肩甲骨	R				1					
	上腕骨	R				1					
	橈骨	R							1		
	尺骨	L							1		
		R							1		
		不明							1		
	寛骨	L				1					
		R				2					
	大腿骨	R				1					
	脛骨	R				1					
	椎骨(椎体)	—				14					
	中手/中足骨	不明							1		
	基節骨	不明							2		
	中節骨	不明							2		
ヤギ	M(上顎)	不明							1	15	2
	I(下顎)	L							1		
	頸椎	—							1		
	下顎骨	L							1		
	肩甲骨	L							1		
	上腕骨	L							2		
	橈骨	L							1		
	尺骨	L							1		
	寛骨	R							1		
	大腿骨	L							4		
哺乳類	大腿骨	R							1	46	—
	胸椎	—							2		
	尾椎	—		1							
	椎骨(突起)	—					1		5		
	椎骨(椎体)	—							9		
	肋骨	不明							2		
	上腕骨	L							1		
	上腕骨	不明							1		
	腸骨	L							1		
	腸骨	R							1		
	大腿骨	L							1		
	四肢骨	不明							1		
	中節骨	不明							1		
	手根/足根骨	不明							7		
同定不可	不明	不明							12		
	不明	不明							2	—	—
合計			5	4	3	22	1	16	70	119	8

第7章 総 括

ここまで、前田西前田原 B 丘陵と C 丘陵の調査成果を述べてきた。最後に、これらの成果から前田西前田原地区の墓の様相について、周辺地区の調査成果などを参照しつつ、その特徴について総括を行う。

1. 前田西前田原地区の墓域の展開について

前田西前田原 B 丘陵と C 丘陵の二つの丘陵の墓域の年代観としては、遺構の形状や出土遺物の型式などから考えて、おそらく 18 世紀中頃から後半には墓が造られはじめ、複数の墓がある墓域として機能していたと考えられる。この時期の遺構としては、墓室形状や出土遺物から前田西前田原 B 丘陵の 6 号墓や 42 号墓を比較的早い時期の遺構と想定した。ボージャー形の蔵骨器が出土している点からは、同じく前田西前田原 B 丘陵の 31 号墓や 41 号墓もそれに近い年代には機能していた可能性がある。

同丘陵のすぐ北側に位置する前田西前田原 A 丘陵の調査報告のなかで、4 号墓が遺物の出土がないなかで遺構形状が 2 類 b であることを根拠に、その形成年代について 17 世紀代まで遡る可能性が示された（浦添市教育委員会 2015）。しかし、今回遺物を伴って出土した前田西前田原 B 丘陵の 6 号墓や 42 号墓が同様のタイプ（2 類 b）で、18 世紀中頃から後半の遺構であると想定されることや、前田西前田原 A 丘陵の 28 号墓から検出された蔵骨器から「乾隆六拾年」（1795 年）の銘書が確認されていることを踏まえると、前田西前田原 A 丘陵の年代観についても 18 世紀中頃から後半の年代が妥当であると考えられる。以上をふまえると、概ねこの時期には、前田西前田原 A 丘陵から B 丘陵を含む前田西前田原地域に墓が展開し、墓域の形成が始まったと考えられる。

その後、前田西前田原 B 丘陵では、上記の墓に加えて主に丘陵斜面の中段において、墓室内に柵が造られる比較的定型的な墓が造られ、その後 19 世紀中頃から 20 世紀にかけて丘陵の裾部に 38 号墓や 51 号墓、55 号墓、56 号墓といったような小規模な墓が展開していく様相が想定される。前田西前田原 C 丘陵では、比較的大型の 7 号墓から 9 号墓の遺構の年代観については不明であるが、このような定型的な墓室を有する墓の周辺に不定形で小規模な墓が多数造られる傾向は、前田西前田原 B 丘陵と共通する。前田西前田原 C 丘陵の 13 号墓の遺物の年代観は 19 世紀の中頃以降であり、前田西前田原 B 丘陵の裾部に展開する小規模な墓の年代観と概ね一致する。これらのことから、前田西前田原 C 丘陵については、前田西前田原 A 丘陵や B 丘陵より少し時期が降る可能性があるものの、19 世紀以降については、同様の展開をみせるものと考えられる。

このような前田西前田原地区における墓域の年代観は、既往の調査成果と比較すると、経塚の南小島原 A 丘陵で 18 世紀初めの銘書が確認されていることや（浦添市教育委員会 2014）、前田真知堂 A 丘陵では 18 世紀前半頃から墓が造られ始めた可能性があること（浦添市教育委員会 2015）などと比較すると、若干造墓の開始時期が遅い可能性があるものの、18 世紀中頃から 19 世紀にかけて墓域が展開する様相は、前田真知堂地区の B・C 丘陵、経塚子の方原 A 丘陵の年代観と概ね共通する（浦添市教育委員会 2012、2013）。前田西前田原地区にはまだ未調査部分があることや、墓の移転などにより現地に遺物が残っていない部分も多いため、ここでは限定的な評価であることを付記しておく。

2. 墓の被葬者と地域性について

前田西前田原地区の墓の被葬者については、前田西前田原 B 丘陵の遺構から「浦添間切前田村」や「前田村」「字前田」といった銘書が複数確認されているため、同丘陵が近世期から近代にかけて前田集落の墓域として機能していたことや、そのうちの一部は戦後も使用が継続したことが判明した。また、蔵骨器の銘書が、所属する間切名もしくは村名を記載することや、屋号を記載することなどの特徴を有することから、これらの墓に葬られた人々は判明した限りでは概ね百姓身分であることが確認された。隣接する前田西前田原 C 丘陵についても、明確な銘書などの資料はないが墓の年代観や墓域の展開などから総合的に考えて、同様に前田村の墓域である可能性が高いと考えられる。

これまでに調査を行った経塚子の方原 A 丘陵や、前田真知堂 A 丘陵、経塚南小島原 A 丘陵では、百姓層と士族層の人々が混在した形で墓域を形成していたことが確認されており、その割合や造墓の前後関係についても、地区や丘陵によって多様な様相があったことが判明している（浦添市教育委員会 2013、2014、2015）。今回調査を行った前田西前田原 B 丘陵及び C 丘陵からは、士族層と思われる銘書は確認されておらず、前田村の百姓層の人々の墓域として機能していたと考えられる点で、これまでの首里士族と百姓が混在する墓域の様相とは異なる。このことから、前田・経塚近世墓群のなかでも地域ごとに分析を加えることで、墓の地域性や階層性による墓域の形成についてその特徴をより明確にできる可能性がある。前田西前田原地区の調査はまだ未完了であるため、今後の課題としたい。

3. 墓にみる葬制と「代用品」について

前田西前田原 B 丘陵と C 丘陵の中で、洗骨前の一次葬人骨 4 体について図示しつつ詳細な報告を行った。一次葬人骨が良好な状態で出土したのは、前田西前田原 B 丘陵の 41 号墓と 56 号墓、前田西前田原 C 丘陵の 13 号墓と 26 号墓である。それぞれの年代は明確には分からないものの、瓶や小杯、人形などの副葬品類がおおむね近代に流通したものであることから、戦前あるいは戦中・戦後すぐの時期に葬られたものである可能性がある。

その特徴としては、前田西前田原 B 丘陵の 41 号墓では磁器の瓶が副葬されているのに対し、それ以外の 3 体についてはガラス製の薬瓶が副葬されている点が挙げられる。近世から近代にかけての一次葬には、陶磁器の徳利や小杯が副葬されることが多いが、今回報告した 3 基の墓では、ガラス製の瓶（薬瓶）が本来の用途を違えて「代用品」として副葬されたと推測される。同様にガラス瓶を副葬した事例は、前田・経塚近世墓群の首里大名地区 22 号墓や、経塚子の方原 A 丘陵の 27 号墓などでも確認されていることから（浦添市教育委員会 2011、2013）、このような事例は個別的な要因ではなく、戦前および戦時中の経済統制下においてモノが自由に入手しづらいという時代性を一定程度反映したものであらうと考えられる。

ほかに、前田西前田原 C 丘陵の 26 号墓の一次葬人骨には棺箱として金属製の容器が使用されていることや、前田西前田原 B 丘陵の 37 号墓では蔵骨器として金属製の缶が使用されていることも、やはり「代用品」であると考えられ、戦時中や戦後における時代性を反映したものであらう

4. 戦跡としての前田西前田原地区

前田西前田原 B 丘陵と C 丘陵については、遺構や遺物の残存状況がよくない点において共通してい

る。これは墓の移転によるものと、沖縄戦による遺構の改築や、砲撃等による崩落が主な要因であると考えられる。

戦争の影響をみてとることができる特徴的な遺構としては、図示して報告を行った前田西前田原 B 丘陵の 4 号墓と 5 号墓が連結され避難壕として利用されたものが挙げられる。遺構内から第 7 図に示したような茶碗類や歯ブラシなどの日常雑器がまとまって出土していることから、この遺構が戦時中に壕として使用されたことは間違いない。前田西前田原 B 丘陵の 1 号、44 号、45 号遺構などについても壕としての痕跡がみられることや、同丘陵東側に位置する 19 号墓からも避難の際に持ち込まれたと考えられる碗や皿などの日常雑器が大量に出土していることから、同丘陵の一部だけではなくほぼ全域にわたって、避難壕としての利用が行われたと考えられる。

前田西前田原 C 丘陵においても、1 号、2 号、4 号、6 号、28 号遺構が壕と考えられること、12 号墓、21 号墓、22 号墓で戦争遺物が出土していることなど、丘陵のほぼ全域にわたって戦時中に改変された痕跡や戦争遺物が確認されたことから、前田西前田原 B 丘陵と同様の状況であったと推測される。

また、上記の遺構から出土した遺物の中で、特徴的な様相を示す事例として、前田西前田原 B 丘陵の 19 号墓の遺物を第 39 図に示した。器種組成は、碗や皿、湯飲みなどの食器類が主体で、なかには戦時統制経済下に流通した製品に付される統制番号が記された岐阜県の資料も確認された。図示したもの以外では貯蔵具であると考えられる沖縄産陶器の大型の壺や、大型の鉄製の鍋なども破片が出土している。このような戦時中の避難壕から出土する遺物の組成や特徴については、同丘陵の北側に位置する前田西前田原 A 丘陵でもほぼ同様の出土状態が確認されている（浦添市教育委員会 2015）。

浦添市史の第 5 巻に沖縄戦の米軍上陸直前に前田集落の南側の丘陵において住民が先祖の墓に避難した様子や、近くに日本軍の陣地があり軍民が一時期入り乱れて生活を送っていた様子についての聞き取り記録が収録されている。浦添村民のなかでも前田の住民は疎開に行きそびれたため、戦闘に巻き込まれてしまった方々が多いという（浦添市 1984）。前田西前田原地区で確認された遺構や遺物は、当時の墓に避難した人々の光景を想起させるものであるとともに、至るところでみられた砲弾痕や地形ごと崩落した様相は、浦添・前田で繰り広げられた地上戦の激しさの一端を物語るものであろう。

以上が、前田西前田原 B 丘陵と C 丘陵の主な調査成果である。今後、前田・経塚近世墓の調査成果を集約していく中で、今回の調査成果は比較資料としての価値を有するとともに、資料が少ない近世から近代にかけての墓制・葬制を明らかにしうる成果である。また、浦添・前田で繰り広げられた沖縄戦の実相の一端を示す事例でもある。これらの成果について多くの方に活用頂ければ幸いである。

〈引用・参考文献〉

浦添市 1984 『浦添市史 第 5 巻 資料編 4』戦争体験記録（上・下）

浦添市教育委員会 2011 『前田・経塚近世墓群 2 ー首里大名地区ー』

浦添市教育委員会 2012 『前田・経塚近世墓群 3 ー前田真知堂 B 丘陵（1）・前田真知堂 C 丘陵（1）』

浦添市教育委員会 2013 『前田・経塚近世墓群 4 ー経塚子の方原 A 丘陵（1）ー』

浦添市教育委員会 2014 『前田・経塚近世墓群 5 ー経塚南小島原 A 丘陵ー』

浦添市教育委員会 2015 『前田・経塚近世墓群 6 ー前田真知堂 A 丘陵（1）前田西上原 A 丘陵 前田西前田原 A 丘陵』

写真図版



前田西前田原B丘陵の南側斜面（下段右端が1号墓）



1号墓正面



1号墓墓室完掘状況



2号墓墓室人骨出土状況



3号墓墓室完掘状況



5号墓（左）・4号墓（右）正面



4号墓・5号墓連結部



4号墓・5号墓連結部遺物出土状況



4号墓墓室完掘状況



5号墓墓室完掘状況



6 号墓正面



6 号墓墓室内遺物出土狀況



6 号墓墓室内遺物出土狀況（近景）



7 号墓墓室完掘狀況



8 号墓墓室完掘狀況



9号墓墓室完掘状況



10号墓墓室完掘状況



11号墓墓室完掘状況



12号墓墓室完掘状況



13号墓（左奥）、14号墓（右奥）



13号墓墓室内完掘状況



14号墓正面



14号墓墓室右壁掘り抜き状況



15 号墓完掘状况



16 号墓墓室完掘状况



17 号墓正面



17 号墓墓室奥壁



18 号墓墓室完掘状况



19 号墓完掘状况



20 号墓完掘状况



21 号墓（中央）、22 号墓（左）、20 号墓（右）



22 号墓完掘状况



23 号墓完掘状况



24 号墓完掘状况



25 号墓完掘状况



26 号墓墓室完掘状况



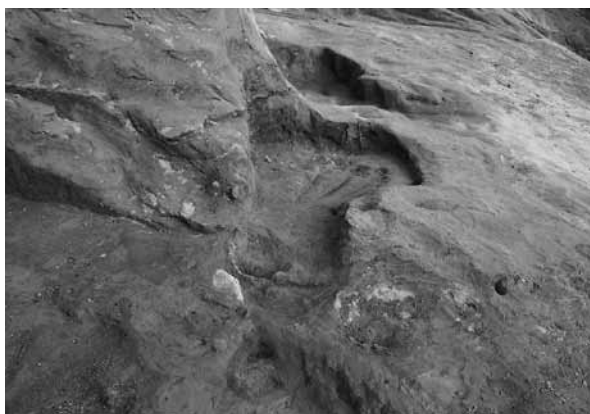
27 号墓墓室完掘状况



28 号墓完掘状况



29 号墓完掘状况



30 号墓完掘状況



31 号墓遺物検出状況



31 号墓遺物検出状況（近景）



32 号墓完掘状況



33 号墓完掘状況



34 号墓完掘状況



35 号墓完掘状況



36 号墓（左）、53 号墓（右）



36 号墓墓室内完掘状況



37 号墓正面



37 号墓墓室内遺物検出状況



37 号墓遺物検出状況（近景）



37 号墓墓庭入口周辺



38号墓完掘状況



38号墓墓室遺物検出状況



39号墓正面



39号墓墓室完掘状況



40号墓床面人骨出土状況



41号墓正面



41号墓墓室遺物検出状況



41号墓墓室人骨出土状況



41 号墓墓室内人骨出土状况（上層）



41 号墓墓室内人骨出土状况（下層）



42 号墓墓庭



42 号墓墓室内奥壁完掘状況



42 号墓墓庭土坑遺物検出状況



42 号墓脇墓 (52 号墓)



43 号墓完掘状況



44 号墓 (左)、45 号墓 (中央)、46 号墓 (右)



44 号遺構完掘状況



45 号遺構完掘状況



44号遺構・45号遺構連結部



44号遺構・45号遺構連結部壁面の灯り置き



46号墓墓室完掘状況



47号墓墓室完掘状況



48号墓墓室完掘状況



49号墓（中央）、左は41号墓



49号墓完掘状況



50号墓完掘状況



51 号墓正面



51 号墓墓室遺物検出状況



53 号墓墓室完掘状況



54 号墓完掘状況



55 号墓墓室遺物検出状況



56号墓人骨・遺物検出状況



56号墓人骨検出状況



57号墓・58号墓周辺



57号墓完掘状況



58号墓完掘状況



59号墓（左）、60号墓（右）完掘状況



59号墓・60号墓（下段）周辺



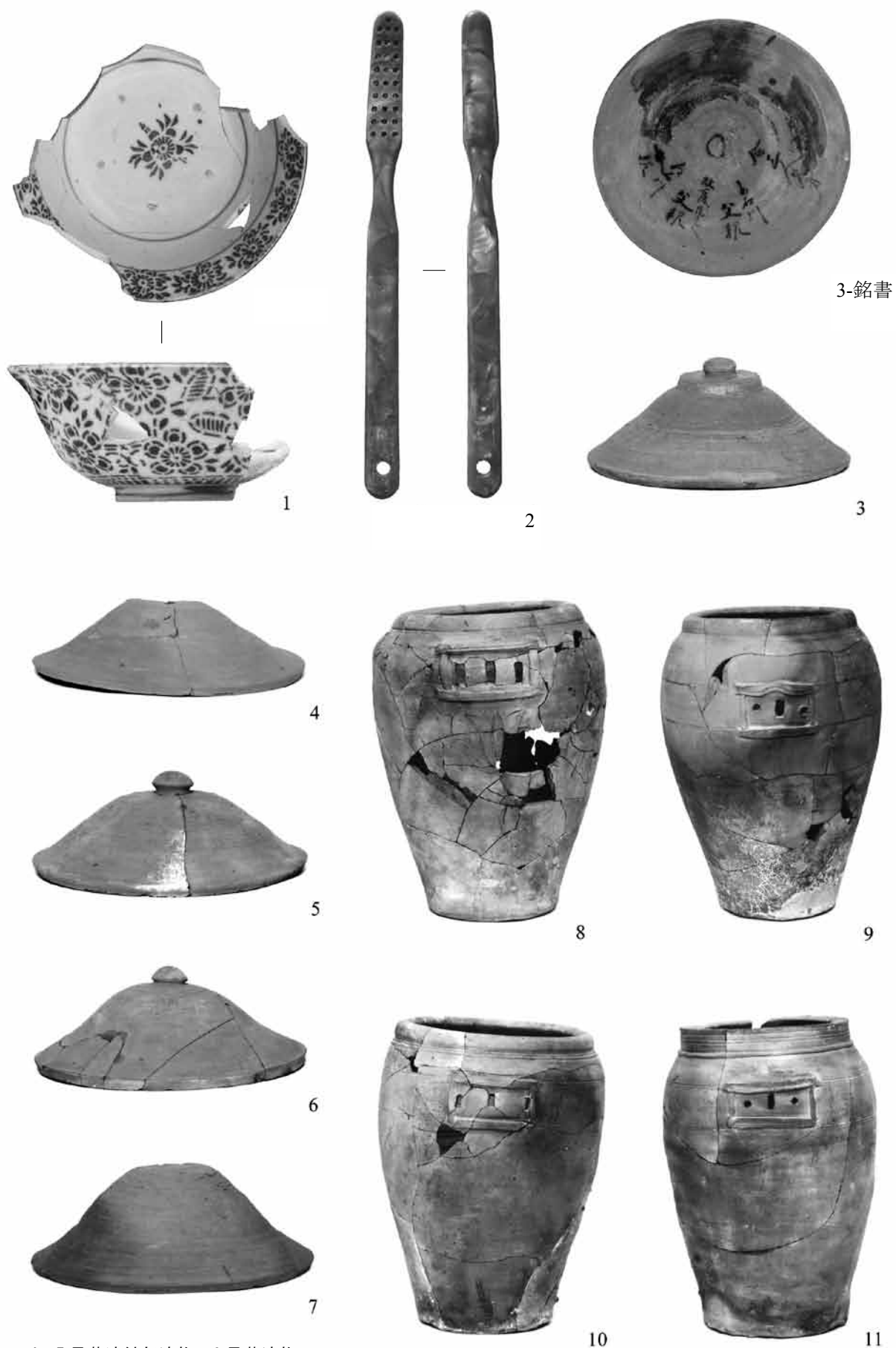
61号墓墓室



62号墓墓室

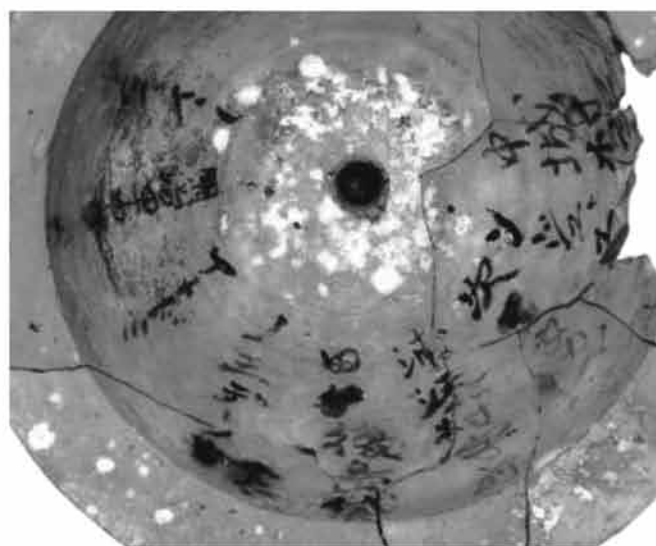
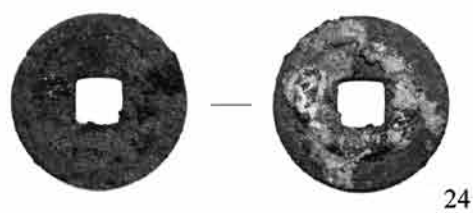


63号墓遺物集積状況



4・5号墓連結部遺物、6号墓遺物





38 号墓遺物 2、41 号墓遺物



32



33



36



37



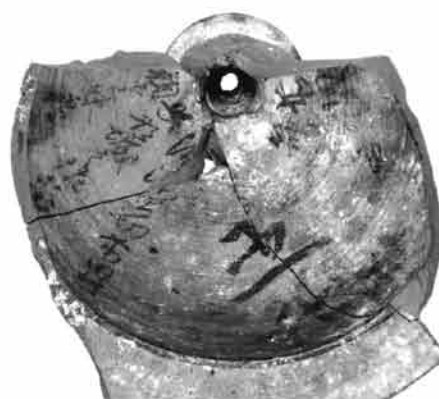
34



35



38



38-銘書



40



39



41

42号墓遺物、52号墓遺物



42



44



46



43



45



47



51 号墓遺物、55 号墓遺物

42-銘書



48



49



50



51



52-納骨状況



52



53



54



56

56号墓遺物



55



57



58



59



62



60



62-底部



63



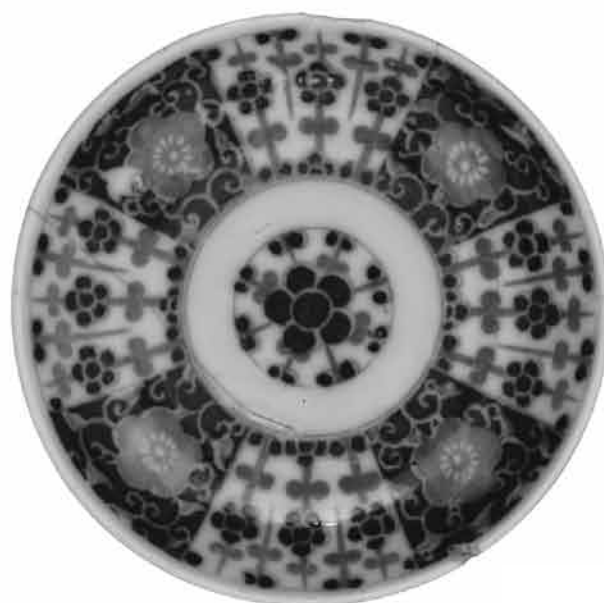
64



61



61-底部



65

2号墓遺物、19号墓遺物



20 号墓遺物、22 号墓遺物、24 号墓遺物、25 号墓遺物、27 号墓遺物、35 号墓遺物



西前田原 C 丘陵西側斜面



3 号墓完掘状況



5 号墓完掘状況



7 号墓完掘状況



7 号墓左袖部通路検出状況



8号墓完掘状況



8号墓墓室内完掘状況



9号墓完掘状況



9号墓墓室内完掘状況



10号墓完掘状況



11号墓完掘状況



12号墓完掘状況



12号墓脇墓1完掘状況



12号墓脇墓2号墓転用蔵骨器検出状況



13号墓完掘状況



13号墓蔵骨器検出状況



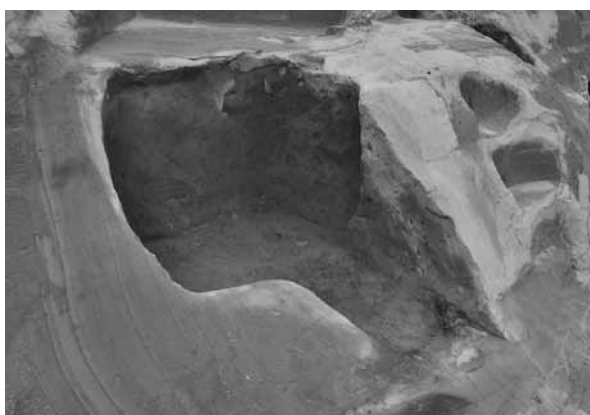
13号墓室内半掘状況



13号一次葬人骨-1 検出状況



13号一次葬人骨-2 検出状況



14号墓完掘状況



15号墓完掘状況



16号墓完掘状況



17号墓完掘状況



18 号墓完掘状况



19 号墓完掘状况



20 号墓完掘状况



21 号墓完掘状况



22 号墓完掘状况



23 号墓完掘状况



24 号墓完掘状况



25 号墓完掘状况



26 号墓一次葬人骨检出状况



26 号墓完掘状况



27 号墓完掘状况



29 号墓完掘状况



30 号墓完掘状况



78



79



81



82



83



80

13 号墓出土遺物 1



13 号墓出土遺物 2、8 号墓、9-10 号墓間、12 号墓脇墓 2 出土遺物



56 号墓 - 一次葬



56 号墓 - 蔵骨器 1-No. 1

前田西前田原 B 丘陵 56 号墓人骨

報告書抄録

ふりがな	まえだきょうづかきんせいぼぐん 8 まえだにしまえだばる B きゅうりょう・まえだにしまえだばる C きゅうりょう（1）								
書名	前田・経塚近世墓群 8 前田西前田原 B 丘陵・前田西前田原 C 丘陵（1）								
副書名	浦添南第一土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告書								
シリーズ名	浦添市文化財調査報告書								
編著者名	安斎 英介 瑞慶覧 長順 菅原 広史								
編集機関	浦添市教育委員会								
所在地	〒 901-2501 沖縄県浦添市安波茶一丁目 1 番 1 号 Tel：098-876-1234								
発行年月日	平成 29（2017）年 2 月 9 日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因	
まえだ きょうづか 前田・経塚 きんせい ぼぐん 近世墓群 まえだ にしまえだ ばる 前田西前田原 B 丘陵 まえだ にしまえだ ばる 前田西前田原 C 丘陵	おきなわけんうらそえ し まえだ 沖縄県浦添市前田 こ あざにしまえだ ばる 小字西前田原	47208	—	26° 14′ 31″	127° 43′ 44″	(平成 25 年度) 2013.10.28～ 2014.2.20	5,330m ²	記録保 存調査	
						(平成 27 年度) 2015.8.13～ 2015.12.28	1,405m ²		
	種別		主な年代		主な遺構		主な遺物		特記事項
	墓		近世～近代		B 丘陵：墓 63 基 C 丘陵：墓 27 基		蔵骨器、人骨、 副葬品		
要約	浦添市前田と経塚に所在する砂岩の丘陵地には、近世から近代にかけて 1,000 基を超える墓が造営されており、それらの遺跡を総称して前田・経塚近世墓群とよんでいる。本発掘調査では、字前田の西前田原 B 丘陵および西前田原 C 丘陵の一部の発掘調査を実施し、近世から近代にかけて造営されたと考えられる合計 90 基の墓を確認した。それらの墓からは、墓に葬られた人骨や蔵骨器、副葬品と思われる各種の遺物が出土した。本丘陵は、調査で得られた蔵骨器の型式や墨書の銘書などから、近世から近代にかけての遺構群であると考えられる。今回の調査成果は、文献資料が少ない近世・近代における琉球・沖縄の墓制・葬制を考える上で貴重な成果である。								

浦添市文化財調査報告書

前田・経塚近世墓群 8 前田西前田原 B 丘陵
前田西前田原 C 丘陵 (1)

浦添南第一土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告書

2017（平成 29）年 2 月 9 日発行

編集・発行 浦添市教育委員会

〒 901-2501 沖縄県浦添市安波茶一丁目 1 番 1 号

TEL：098-876-1234 FAX：098-878-1487

印刷・製本 株式会社 尚生堂

〒 901-2501 沖縄県浦添市安波茶一丁目 6 番 3 号

TEL：098-876-2232 FAX：098-876-2332

